

茨城県教育財団文化財調査報告第116集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

前田村遺跡C・D・E区
(上 卷)

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第116集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画 整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

まえだむら
前田村遺跡C・D・E区
(上 巻)

平成9年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



前田村遺跡遠景（南から）



前田村遺跡出土土器（D区）



前田村遺跡C・D・E区全景

序

茨城県は、周辺環境との調和を重視し、多様な住居ニーズに対応した住居環境を整備しつつ、新しいまちの形成を図るために、公共施設の整備改善と宅地の利用増進を進めております。

その一環として、「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業」を進めており、その予定地内に埋蔵文化財包蔵地である高野台遺跡、西ノ脇遺跡、前田村遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県と開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、平成4年4月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は、既に「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」として刊行しました。

本書は、平成5年度に調査を行った前田村遺跡の調査成果を取録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育・文化向上の一助として活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である茨城県より賜りました多大なる御協力に対し、厚くお礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、伊奈町教育委員会、谷和原村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただきました御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成9年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

- 1 本書は、平成5年度に茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施した茨城県筑波郡谷和原村大字田字八幡前871番ほかに所在する前田村遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 前田村遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事 長	磯田 勇 昌 橋本 勇 昌	昭和63年6月～平成7年3月 平成7年4月～	
副 理 事 長	角田 芳 夫 小林 秀 文 中島 弘 光 齋藤 住 郎	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～平成8年3月 平成7年4月～ 平成8年4月～	
専 務 理 事	中島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月	
常 務 理 事	一木 邦 彦 梅澤 秀 夫	平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
事 務 局 長	藤枝 宣 一 齋藤 紀 彦 小林 隆 郎	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋蔵文化財部長	安藏 幸 重 沼田 文 夫	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋蔵文化財部長代理	河野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 剱 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
	課 長	小 幡 弘 明	平成8年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	係 長	清 水 薫	平成8年4月～
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海老澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
	主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～
経 理 課	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～平成6年3月
	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎	平成7年4月～平成8年3月(平成5年4月～平成7年3月課長代理)
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
調 査 課	主 任	小 池 孝 孝	平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～平成8年3月
	主 事	柳 澤 松 雄	平成8年4月～
	調 査 課 長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月
	調 査 第 三 班 長	鈴 木 美 治	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	大 森 雅 之	平成5年4月～平成6年3月調査
	主 任 調 査 員	横 堀 孝 徳	平成5年4月～平成6年3月調査
整 理 課	調 査 員	新 井 聡	平成5年4月～平成6年3月調査
	課 長	山 本 静 男	平成7年4月～
	主 任 調 査 員	横 堀 孝 徳	平成7年4月～平成9年3月整理・執筆・編集

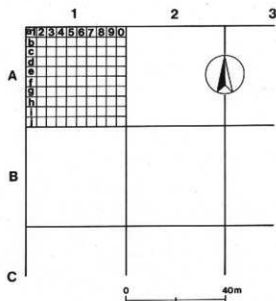
- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、人骨、獣骨及び貝の鑑定・分析については国立歴史民俗博物館助教授の西本豊弘氏にご指導をいただいた。
- 5 東北地方の縄文土器の実見にあたり、福島県文化センターの鈴木良一氏、松本茂氏、福島市振興会社の原充広氏、植村泰徳氏、高荒淳氏に便宜を図っていただいた。
- 6 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 7 遺跡の概略

ふりがな	いなやわらきまうりょうぶとくいてちかくせいりじぎょうちないまうぶんかざいちょうさほうくしよ						
書名	伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	前田村遺跡C・D・E区						
巻次	2						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第116集						
著者名	横堀 孝徳						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行年月日	1997(平成9)年3月25日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °	m ²	
まえだむらいせき	いなのわらきまうりょうぶとくいてちかくせいりじぎょうちないまうぶんかざいちょうさほうくしよ						
前田村遺跡	茨城県筑波郡谷和原 むらおほまがたあざむら 村大字田字八 1442 ばん 幡前871番ほか	08483	19	36° 0' 08"	140° 2' 15"	平成5年度 19930401~ 19940331	20,740m ² 伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
前田村遺跡	集落跡 墓跡	縄文時代 (中・後 ・晩期)	竪穴住居跡170軒 土坑831基	縄文土器、土偶、 石器、石製品、 獣骨、人骨、貝	標高22~23mの台地上 に位置し、縄文時代中 期から晩期にかけての 大集落を形成する。		
		中・近世	地下式墳7基 方形竪穴遺構9基 粘土張り遺構18基	土器、陶器、磁器、 石製品、古銭			
	不明	井戸3基、土坑15基 溝23条、不明4基					

凡 例

- 1 前田村遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系を原点とし、 $X = +500m$ $Y = +17,480m$ の交点を基準点として、東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定した。さらに、大調査区を東西・南北に各々10等分して、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区は、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A1区」、「B2区」と表記した。小調査区も同様に北から南へa, b, c…j, 西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、位置を表示する場合は大調査区と合わせて、「A1b1区」、「A2b3区」のように表記した。



- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

第1図 調査区呼称方法概念図

遺構	住居跡…S I	井戸…S E	土坑…S K	溝…S D	ピット…P	その他…S X
遺物	土器…P	土製品…D P	石器・石製品…Q	金属製品…M	拓本土器…T P	
土層	擾乱…K					

- 3 遺構・遺物の実測図中の表示は、次の通りである。



- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

- 遺跡の全体図は縮尺300分の1、堅穴住居跡や土坑、井戸は縮尺60分の1を基本にした。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = 1/\bigcirc$ と表示した。
- 「主軸方向」は、長軸を主軸とし、その主軸が磁北からみてどの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

(例 $N-10^{\circ}-E$, $N-10^{\circ}-W$)

- 土器の計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径(脚部径) E-高台高(脚部高)を示した。単位はcmである。

なお、()は現存値を、[]は推定値を示した。

また、備考の欄は、土器の残存率や実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

凡 例

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 遺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 D区の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 地下式竈	229
(3) 井戸	230
(4) 土坑	231
① 墓塚	231
② 埋設遺構	238
③ 形状及び出土遺物に特徴のある土坑	239
④ その他の土坑出土遺物	353
(5) 遺構外出土遺物	375

— 中 卷 —

2 C区の遺構と遺物	1
(1) 竪穴住居跡	1
(2) 地下式竈	156
(3) 土坑	160
① 竪穴状遺構	161
② 粘土張り遺構	164
③ 埋設遺構	176
④ 形状及び出土遺物に特徴のある土坑	177
⑤ その他の土坑出土遺物	222
(4) 溝	246

(5) 遺構外出土遺物	248
3 E区の遺構と遺物	263
(1) 堅穴住居跡	263
(2) 地下式墳	272
(3) 井戸	274
(4) 土坑	275
① 堅穴状遺構	276
② (長)方形土坑	280
③ 形状及び出土遺物に特徴のある土坑	284
④ その他の土坑出土遺物	292
(5) 溝	295
(6) 遺構外出土遺物	297
第4節 まとめ	298
付 章	
前田村遺跡出土の動物遺体について	303

— 下 巻 —

写真図版

挿 図 目 次

— 上 巻 —

第1図 調査区呼称方法概念図	第18図 第100号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	26	
第2図 前田村遺跡周辺遺跡分布図	5	第19図 第101号住居跡実測図	28
第3図 基本土層図	7	第20図 第101号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	29
第4図 前田村遺跡調査区設定図	8	第21図 第101号住居跡出土土製品実測図(2)	30
第5図 第95号住居跡実測図	10	第22図 第102号住居跡実測図	31
第6図 第95号住居跡出土遺物実測・拓影図	11	第23図 第102号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	32
第7図 第96・97号住居跡実測図	12	第24図 第102号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	33
第8図 第96号住居跡出土遺物実測図	13	第25図 第103号住居跡実測図	35
第9図 第97号住居跡出土遺物実測図	14	第26図 第103号住居跡出土遺物実測・拓影図	36
第10図 第98号住居跡実測図	15	第27図 第104号住居跡実測図	38
第11図 第98号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	17	第28図 第104号住居跡出土遺物実測・拓影図	38
第12図 第98号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	18	第29図 第105号住居跡実測図	39
第13図 第98号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	19	第30図 第105号住居跡出土遺物実測・拓影図	40
第14図 第99号住居跡実測図	21	第31図 第106A・111号住居跡実測図	42
第15図 第99号住居跡出土遺物実測・拓影図	22	第32図 第106A号住居跡出土遺物実測・拓影図	43
第16図 第100号住居跡実測図	24	第33図 第111号住居跡出土遺物実測・拓影図	45
第17図 第100号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	25	第34図 第106B・204・206・207・211号住居跡	

实测图	47	第72区	第170号住居跡出土遺物実測・拓影図.....100
第35区	第106B号住居跡出土遺物実測・拓影図 ...	第73区	第171号住居跡出土遺物実測・拓影図.....102
第36区	第204号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第74区	第172・174・175号住居跡実測図.....104
第37区	第204号住居跡出土石製品実測図(2).....	第75区	第172号住居跡出土遺物実測・拓影図.....105
第38区	第206号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第76区	第174号住居跡出土遺物実測・拓影図.....106
第39区	第207号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第77区	第175号住居跡出土遺物実測・拓影図.....107
第40区	第207号住居跡出土石製品実測図(2).....	第78区	第176・181号住居跡実測図
第41区	第211号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第79区	第176号住居跡出土遺物実測・拓影図.....109
第42区	第107号住居跡実測図.....	第80区	第181号住居跡出土遺物実測・拓影図.....110
第43区	第107号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第81区	第178号住居跡実測図.....
第44区	第107号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	第82区	第178号住居跡出土遺物実測・拓影図.....113
第45区	第107号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)...	第83区	第179号住居跡実測図.....
第46区	第107号住居跡出土石製品実測図(4).....	第84区	第179号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...
第47区	第108号住居跡実測図.....	第85区	第179号住居跡出土石製品実測図(2).....
第48区	第108号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第86区	第180・182号住居跡実測図.....
第49区	第108号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	第87区	第180号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...
第50区	第108号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)...	第88区	第180号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...
第51区	第108号住居跡出土石製品実測図(4).....	第89区	第182号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第52区	第109号住居跡実測図.....	第90区	第183号住居跡実測図.....
第53区	第109号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第91区	第183号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第54区	第110号住居跡実測図.....	第92区	第185号住居跡実測図.....
第55区	第110号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第93区	第185号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第56区	第110号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	第94区	第186・201号住居跡実測図
第57区	第115号住居跡実測図.....	第95区	第186号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...
第58区	第115号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第96区	第186号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...
第59区	第116A・116B号住居跡実測図.....	第97区	第187号住居跡実測図.....
第60区	第116A号住居跡出土遺物実測・拓影図 ...	第98区	第187号住居跡出土遺物実測図(1).....
第61区	第116B号住居跡出土遺物実測・拓影図 ...	第99区	第187号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...
第62区	第117号住居跡実測図.....	第100区	第188号住居跡実測図.....
第63区	第117号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)...	第101区	第188号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第64区	第117号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)...	第102区	第189号住居跡実測図.....
第65区	第137号住居跡実測図.....	第103区	第189号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第66区	第137号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第104区	第190・230A・230B号住居跡実測図.....
第67区	第168号住居跡実測図.....	第105区	第190号住居跡出土遺物実測・拓影図.....
第68区	第168号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第106区	第230A号住居跡出土遺物実測図
第69区	第169号住居跡実測図.....	第107区	第230B号住居跡出土遺物実測・拓影図 ...
第70区	第169号住居跡出土遺物実測・拓影図.....	第108区	第191号住居跡実測図.....
第71区	第170・171・173号住居跡実測図.....	第109区	第191号住居跡出土遺物実測・拓影図.....

第110图	第192、193号住居跡実測図	147	第148图	第218号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~193	
第111图	第192号住居跡出土遺物実測、拓影図	148	第149图	第218号住居跡出土遺物実測、拓影図(2)~194	
第112图	第193号住居跡出土遺物実測、拓影図	149	第150图	第218号住居跡出土遺物実測、拓影図(3)~195	
第113图	第194号住居跡実測図	150	第151图	第231号住居跡実測図	197
第114图	第194号住居跡出土遺物実測、拓影図	150	第152图	第231号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~198	
第115图	第195号住居跡実測図	151	第153图	第231号住居跡出土遺物実測、拓影図(2)~199	
第116图	第195号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~152		第154图	第231号住居跡出土遺物実測、拓影図(3)~200	
第117图	第195号住居跡出土遺物実測、拓影図(2)~153		第155图	第232号住居跡実測図	203
第118图	第196号住居跡実測図	154	第156图	第232号住居跡出土遺物実測、拓影図	204
第119图	第196号住居跡出土遺物実測図	155	第157图	第233号住居跡実測図	206
第120图	第197号住居跡実測図	156	第158图	第233号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~207	
第121图	第199号住居跡実測図	158	第159图	第233号住居跡出土遺物実測、拓影図(2)~208	
第122图	第199号住居跡出土遺物実測、拓影図	159	第160图	第234号住居跡実測図	210
第123图	第200号住居跡実測図	161	第161图	第234号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~211	
第124图	第200号住居跡出土遺物実測、拓影図	162	第162图	第234号住居跡出土石製品実測図(2)~212	
第125图	第202号住居跡実測図	164	第163图	第235A号住居跡実測図	213
第126图	第202号住居跡出土遺物実測、拓影図	166	第164图	第235A号住居跡出土遺物実測、拓影図	215
第127图	第203号住居跡実測図	168	第165图	第235B号住居跡実測図	216
第128图	第203号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~169		第166图	第236号住居跡実測図	217
第129图	第203号住居跡出土遺物実測、拓影図(2)~170		第167图	第236号住居跡出土遺物実測、拓影図	217
第130图	第205号住居跡実測図	172	第168图	第237、239号住居跡実測図	218
第131图	第205号住居跡出土遺物実測、拓影図	173	第169图	第237号住居跡出土遺物実測、拓影図	219
第132图	第208号住居跡実測図	175	第170图	第239号住居跡出土遺物実測、拓影図	221
第133图	第208号住居跡出土遺物実測、拓影図	176	第171图	第238号住居跡実測図	222
第134图	第210号住居跡実測図	177	第172图	第238号住居跡出土遺物実測、拓影図	223
第135图	第210号住居跡出土遺物実測、拓影図	178	第173图	第1号地下式竈実測図	229
第136图	第212号住居跡実測図	179	第174图	第1号井戸実測図	230
第137图	第212号住居跡出土遺物実測、拓影図	180	第175图	墓塚(SR-767·785·837·841·842·858·884) 実測図	236
第138图	第213号住居跡実測図	182	第176图	墓塚出土遺物実測、拓影図	237
第139图	第213号住居跡出土遺物実測、拓影図(1)~183		第177图	埋設遺構実測図	238
第140图	第213号住居跡出土石製品実測図(2)~184		第178图	埋設遺構出土遺物実測図	238
第141图	第215号住居跡実測図	186	第179图	第253·257·291·324·325号土坑実測図	262
第142图	第215号住居跡出土遺物実測、拓影図	186	第180图	第294·496·503·504·716号土坑実測図	263
第143图	第216号住居跡実測図	187	第181图	第171·720·721·722·723·724·732·753· 766号土坑実測図	264
第144图	第216号住居跡出土遺物実測、拓影図	188	第182图	第728·729·734A·734B·820·821号土坑 実測図	265
第145图	第217、219号住居跡実測図	189			
第146图	第217号住居跡出土遺物実測、拓影図	190			
第147图	第218号住居跡実測図	192			

第183图	第733·735·736·738号土坑实测图·····266	第210图	第1145·1146·1153·1157号土坑实测图·····293
第184图	第739·740·742·745·755·826号土坑 实测图·····267	第211图	第257·291(1)号土坑出土遗物实测· 拓影图·····294
第185图	第760~764·768·769·775号土坑实测图···268	第212图	第291(2)·294号土坑出土遗物实测· 拓影图·····295
第186图	第773·776·777·778·779号土坑实测图·····269	第213图	第325(1)号土坑出土遗物实测·拓影图·····296
第187图	第780·781·783·786·787号土坑实测图·····270	第214图	第325(2)·503号土坑出土遗物实测· 拓影图·····297
第188图	第788·789·790·791·792号土坑实测图·····271	第215图	第716·717·721·723·728·729号土坑 出土遗物实测·拓影图·····298
第189图	第793~797·808号土坑实测图·····272	第216图	第732·734A·734B号土坑出土遗物 实测·拓影图·····299
第190图	第801·834·838·845·847~850号土坑 实测图·····273	第217图	第739·740·745·755号土坑出土遗物 实测·拓影图·····300
第191图	第807·810·812·814·816号土坑实测图·····274	第218图	第760~762·764号土坑出土遗物实测· 拓影图·····301
第192图	第817·822~825·827·828·830号土坑 实测图·····275	第219图	第766·768(1)号土坑出土遗物实测· 拓影图·····302
第193图	第852~854·861号土坑实测图·····276	第220图	第768(2)·769·773·775·776·777·778号 土坑出土遗物实测·拓影图·····303
第194图	第855·856·859·869·900号土坑实测图·····277	第221图	第781号土坑出土遗物实测·拓影图(1)·····304
第195图	第864·871·875·881·883号土坑实测图·····278	第222图	第781号土坑出土遗物实测·拓影图(2)·····305
第196图	第886·935·938·943·944·946号土坑 实测图·····279	第223图	第788·789·790(1)号土坑出土遗物实测· 拓影图·····306
第197图	第947·949~952·954号土坑实测图·····280	第224图	第790(2)·794·796号土坑出土遗物实测· 拓影图·····307
第198图	第953·956·957·960·1045号土坑实测图···281	第225图	第801·808·817·821·822号土坑出土遗物 实测·拓影图·····308
第199图	第1044·1046·1049·1050·1052号土坑 实测图·····282	第226图	第823~826号土坑出土遗物实测· 拓影图·····309
第200图	第1047·1051·1080号土坑实测图·····283	第227图	第827·828·830·834号土坑出土遗物 实测·拓影图·····310
第201图	第1048·1049·1104·1105·1108·1141· 1150·1155号土坑实测图·····284	第228图	第834·845·847·852(1)号土坑出土遗物 实测·拓影图·····311
第202图	第1054·1056·1117·1136号土坑实测图·····285	第229图	第852号土坑出土遗物实测·拓影图·····312
第203图	第1058·1059·1060·1061·1062·1063号 土坑实测图·····286	第230图	第854·859·875·881号土坑出土遗物 实测·拓影图·····313
第204图	第1065·1066·1067·1081·1082号土坑 实测图·····287	第231图	第886·900·938·943·946·947号土坑
第205图	第1069·1093·1094·1113·1114·1151号 土坑实测图·····288		
第206图	第1071·1085·1090·1092号土坑实测图·····289		
第207图	第1091·1099·1100·1101·1109·1111· 1112号土坑实测图·····290		
第208图	第1110·1124·1128·1130·1131·1138号 土坑实测图·····291		
第209图	第1139·1143·1144·1156号土坑实测图·····292		

	出土遺物実測・拓影図	314		実測・拓影図	334
第232図	第949(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	315	第232図	第1130(2)・1131号土坑出土遺物実測・拓影図	335
第233図	第949(2)・950・951号土坑出土遺物実測・拓影図	316	第233図	第1136・1139号土坑出土遺物実測・拓影図	336
第234図	第952・956号土坑出土遺物実測・拓影図	317	第234図	第1141・1143～1146・1151号土坑出土遺物実測・拓影図	337
第235図	第957・960(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	318	第235図	第1153・1157号土坑出土遺物実測・拓影図	338
第236図	第960(2)・1044・1046号土坑出土遺物実測・拓影図	319	第236図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(1)	355
第237図	第1047・1050号土坑出土遺物実測・拓影図	320	第237図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(2)	356
第238図	第1051・1052・1056(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	321	第238図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(3)	357
第239図	第1056(2)・1059号土坑出土遺物実測・拓影図	322	第239図	その他の土坑出土石製品実測図(4)	358
第240図	第1060・1061号土坑出土遺物実測・拓影図	323	第240図	その他の土坑出土石製品実測図(5)	359
第241図	第1062・1063号土坑出土遺物実測・拓影図	324	第241図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(6)	360
第242図	第1065・1066(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	325	第242図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(7)	361
第243図	第1066(2)・1067A・1067B・1069(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	326	第243図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(8)	362
第244図	第1069(2)・1080(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	327	第244図	その他の土坑出土遺物実測・拓影図(9)	363
第245図	第1080(2)・1090号土坑出土遺物実測・拓影図	328	第245図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)	378
第246図	第1091・1092(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	329	第246図	遺構外出土遺物実測・拓影図(2)	379
第247図	第1092(2)号土坑出土遺物実測・拓影図	330	第247図	遺構外出土遺物実測・拓影図(3)	380
第248図	第1099・1104・1108号土坑出土遺物実測・拓影図	331	第248図	遺構外出土遺物実測・拓影図(4)	381
第249図	第1109～1112・1114号土坑出土遺物実測・拓影図	332	第249図	遺構外出土遺物実測・拓影図(5)	382
第250図	第1117号土坑出土遺物実測・拓影図	333	第250図	遺構外出土遺物実測・拓影図(6)	383
第251図	第1124・1128・1130(1)号土坑出土遺物実測・拓影図	334	第251図	遺構外出土遺物実測・拓影図(7)	383
			第252図	遺構外出土遺物実測・拓影図(8)	384
			第253図	遺構外出土石製品実測図(9)	385
			第254図	遺構外出土石製品実測図(10)	386
			第255図	遺構外出土遺物実測・拓影図(11)	387
			第256図	遺構外出土遺物実測・拓影図(12)	388
			第257図	遺構外出土遺物実測・拓影図(13)	389
			第258図	遺構外出土遺物実測・拓影図(14)	390
			第259図	遺構外出土遺物実測・拓影図(15)	391
			第260図	遺構外出土遺物実測・拓影図(16)	392
			第261図	遺構外出土遺物実測・拓影図(17)	393
			第262図	遺構外出土遺物実測・拓影図(18)	394
			第263図	遺構外出土遺物実測・拓影図(19)	395
			第264図	遺構外出土遺物実測・拓影図(20)	396

表 目 次

— 上 卷 —

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表	6
表2 前田村遺跡D区住居跡一覧表	226
表3 前田村遺跡D区土坑一覧表	367



- 瓦葺一棟形山形地蔵堂跡 Ⅰ号
- 瓦葺一棟形山形地蔵堂跡 Ⅱ号
- 瓦葺一棟形山形地蔵堂跡 Ⅲ号

雪の前田村遺跡D区



作業風景（掘り込み）



作業風景（実測）

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

伊奈、谷和原丘陵部地区の土地利用は、常磐新線による伊奈町、谷和原村の玄関口として都市性の高い街を計画的に整備するために、駅を中心とした商業・業務機能や住宅地及び誘致施設などを中心として計画された。

この事業に先立ち、茨城県常磐新線整備推進課は、茨城県教育委員会（以下、「県教育委員会」とする。）に、伊奈・谷和原丘陵部特定地区面整理事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し県教育委員会は、伊奈町教育委員会、谷和原村教育委員会と埋蔵文化財所在の有無およびその取り扱いについて協議した。その結果、伊奈町には高野台遺跡が、谷和原村には西ノ脇遺跡、前田村遺跡が所在することを確認し、県教育委員会は常磐新線整備推進課に開発地域内に埋蔵文化財の包蔵地が所在することを回答した。平成3年11月、常磐新線整備推進課は、県教育委員会と伊奈、谷和原丘陵部地区内における埋蔵文化財包蔵地の範囲の確認及びその取り扱いについて協議を重ねた結果、記録保存の措置を講ずることとし、県教育委員会は平成3年度末に事務手続きが常磐新線整備推進課から移った土浦土木事務所に対し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成4年度からは、伊奈・谷和原丘陵部特定地区面整理事業の取り扱いについては、土浦土木事務所から今回の開発のため組織された茨城県南都市建設事務所に移行された。

茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成4年4月1日から前田村遺跡の発掘調査を開始した。平成4年度にA区とB区の調査を終了し、平成5年度はC区とD区及びE区の発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

前田村遺跡C・D・E区の発掘調査は、平成5年4月1日から平成6年3月31日までの1年間にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

4月9日より調査のための諸準備を行った。同日、茨城県南都市建設事務所面整理課、谷和原村役場都市整備課、茨城県教育財団の三者で今後の調査について打ち合わせを行った。その結果、まず可能な区域から調査に着手し、作づけされている畑等は収穫が終わった後に調査することを確認した。

また、現地において、委託者立ち会いのうえて調査区域の境界確認を行った。

12日より作業員を投入し、遺跡内の県有地の伐開作業、グリッドによる試掘を開始した。E区の県有地については、4分の1まで試掘を進めたが、遺構が確認できなかったため、19日に調査を終了した。

下旬からは、C区の入力による表土除去に着手した。

5月4月に引き続き、C区の入力による表土除去を行いながら、表土除去終了箇所の堅穴住居跡、土坑の調査を開始した。C区の遺物集地点は、ベルトを十字に組んで掘り下げ、土層を見ながら床面、壁等の確認を行った。

12日より、C区の表土除去、遺構調査と並行して、D区県有地の重機による表土除去を開始した。20日に終了した後、引き続きD区の遺構確認作業も行った。

6月 前月に引き続き、C区の遺構調査、D区の遺構確認作業を行った。

D区の遺構確認作業は、黒色土中のトレンチャーによる擾乱の溝を掘りながら、床面、壁等を確認しようとしたが、はっきりせず難行した。

11日より、D区の竪穴住居跡、土坑の調査を開始した。

7月 前月に引き続き、C・D区の竪穴住居跡、土坑の調査を行った。中旬より、遺構調査と並行して、C・D・E区の未調査部分の試掘を開始した。

遺構調査は、月末までに、竪穴住居跡54軒、土坑176基まで進んだ。30日に、C区東側果有地の全景写真を撮影した。

8月 C・D区の遺構調査を継続した。中旬以降、遺構調査と並行しながら、重機による第二期表土除去を開始した。C区から着手し、下旬には遺構調査を中断し、作業員全員で遺構確認作業を行った。31日には、C区の遺構確認状況を撮影した。C区で、新たに竪穴住居跡41軒、土坑151基、溝6条を検出した。

9月 重機による表土除去は、D区に移った。D区の表土除去は中旬に完了し、続いてE区の表土除去に着手し、22日にすべて終了した。

表土除去と並行し、初旬よりC・D区の遺構調査も再開した。D区第一期表土除去部分の遺構調査は17日に終了し、完掘写真を撮影した。D区については、写真撮影後、一部の作業員のみで補足調査を行い、他はC区の遺構調査を開始した。

10月 C区の竪穴住居跡、土坑、溝の調査を継続した。下旬には、今後の調査の見通しをたてるため、1軒の竪穴住居跡にかかる調査日数を調べることにし、サンプルとして他の住居跡と重複していないD区の137号住居跡の調査に着手した。

月末には、累計で竪穴住居跡90軒、土坑317基、溝2条の調査を終了した。

11月 C区の調査を中心に行った。D区137号住居跡は、土坑4基と重複していたが10日に調査を終了した。

C区の掘り込みは本月末にはほぼ終了し、実測作業員を残し、掘り込みの主力をD区に投入した。

12月 D区の竪穴住居跡、土坑の調査を継続した。並行してC区の実測を行い、中旬に終了した。C区では、竪穴住居跡84軒、土坑437基、溝8条、地下式竈4基を調査した。竪穴住居跡は、すべて縄文時代のものであった。遺構を清掃し、C区全景の写真を撮影した。

1月 5日より、D区の遺構調査を開始した。中旬からは、D区と並行してE区の竪穴住居跡、土坑の調査も開始した。何度かの降雪があり、進捗状況に支障をきたした。

2月 前月に引き続き、D区、E区の調査を行った。E区の調査は月末に終了し、竪穴住居跡4軒、土坑106基、溝15条、地下式竈2基、井戸2基を調査した。

3月 D区の調査も補足調査を残すだけとなり、2日に委託者に対して報告会を行い、5日には現地説明会を実施した。下旬に遺構内の清掃を行い、24日に遺跡の航空写真撮影を行った。D区で調査した遺構は、竪穴住居跡82軒、土坑330基、地下式竈1基、井戸1基であった。

航空写真撮影後、遺跡内の危険箇所の安全対策を行い、26日に現地の調査を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

前田村遺跡C・D・E区は、茨城県筑波郡谷和原村大字田字八幡前871番ほかに所在する。

谷和原村は、茨城県の南西部に位置し、北部は海ほ道市、つくば市に、南部は守谷町、伊奈町に接している。地形は、栃木県から本県にかけて南流する鬼怒川と、これに平行して南流する小貝川によって造られた沖積低地と、北東側から続く筑波、稲敷台地及び西側の猿島、北相馬台地の一部から成り立っている。この台地の標高は、南東部が26～29mで、北西部はやや低い。台地面はいずれも北西から南東方向に流れる小野川・東谷田川・西谷田川とその支谷の浸食が進み、下流部には牛久沼をはじめ多くの沼沢池があつて灌漑水源となり、その一部は干拓して水田化されている。谷和原村の大部分は沖積低地であり、この低地は鬼怒川水路の幾多の変遷と、造盆地運動の作用と考えられている。

なお、鬼怒川は江戸時代以前に北相馬台地の北端の小絹地先で東流し、小貝川と合流していたため洪水の原因となっていたが、江戸時代初期に治水事業が行われ、猿島、北相馬台地の一部を開削し小貝川と分流させたことにより、当遺跡の北部で大きく南西に曲がりながら流下し、利根川に注ぎ込むようになった。

筑波、稲敷台地の地層は、貝化石を産する見和層（成田層）を基盤層として、その上に砂まじりのロームから、クロスラミナの顕著な砂ないし砂礫層である竜ヶ崎砂礫層へ漸移する。そして、その上層は所によってさまざまに変化するが、総じてローム層下に火山灰質粘土層である常総粘土層がみられる。その上は褐色の開東ローム層におおわれており、ローム層中の下位に厚さ10～20cmの黄色軽石層が観察される。

前田村遺跡C・D・E区は、小貝川流域に広がる水田を南西方に見下ろす洪積台地の端にあたる。遺跡の北と南には、谷津が西側から入り込み、谷津に挟まれた平坦な台地上に位置している。標高はC・D区が21～23m、E区が南側の谷津に接し、標高19～21mで主に畑地と平地林で形成されている。近年では、ゴルフ場や工場の進出がめざましく、宅地化の波が伊奈町や谷和原村周辺地区に押し寄せている。

当遺跡の所在する台地縁辺部には、田村貝塚をはじめ、18か所の地点に縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が確認されている。このうち、7か所の遺跡では発掘調査が実施されているので、遺跡の性格は明らかになっている。

参考文献

- 茨城県 『茨城県史 市町村編Ⅱ』 1975年3月
- 茨城県 『土地分類基本調査 龍ヶ崎』 1975年12月
- 海ほ道市史編さん委員会 『海ほ道市史 上巻』 1983年3月
- 蜂須 紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1991年7月

第2節 歴史的環境

前田村遺跡の周辺に所在する遺跡を、谷和原村を中心として時代毎に記載し、歴史の変遷について述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては、当教育財団が調査した高野台遺跡(21)、筒戸A・B遺跡(17・18)がある。高野台遺跡からは旧石器の集中地点が2か所確認され、筒戸A・B遺跡ではチャート、黒色流紋岩製のナイフ形石器2点や黒曜石の剥片などが出土している。前田村遺跡B区(1)からも安山岩製の尖頭器やメノウの剥片などが出土している。

縄文時代の遺跡は、早期から晩期まで確認されている。早期の遺跡としては、洞坂畑遺跡(11)、西下宿遺跡(16)がある。西下宿遺跡は、縄文時代早期の田戸式から茅山式期の土器片を主として出土した。前期の遺跡は、関山式期の田村貝塚(4)や浅間山貝塚(13)が知られているだけであったが、平成6年度の当財団の調査で、高野台遺跡からも前期の遺構が確認された。中期になると遺跡の数は増加し、前田村遺跡をはじめ大谷津A遺跡(14)、大谷津B遺跡(15)、筒戸A・B遺跡がある。大谷津A遺跡は、中期の阿玉台～加曾利E式期の集落跡である。大谷津B遺跡は、加曾利EⅡ～Ⅳ式期の集落跡である。また、大谷津B遺跡の南側に隣接する筒戸A・B遺跡もほぼ同時期の集落跡である。これらの4遺跡は、いずれも谷津に沿った台地上の平坦地に所在している。前田村遺跡は、縄文時代中期から晩期(加曾利EⅢ～安行Ⅲa式期)にかけての大集落跡である。これらの住居跡は、遺跡の北側に入り込む谷津に沿い、南側の窪地を中心として、台地上の平坦地に馬蹄形状に所在しており、前田村遺跡の立地条件も、前述した4遺跡と同じくしている。

弥生時代の遺跡は、現在のところ村内では確認されていない。隣接するつくば市谷田部には熊の山遺跡、高山遺跡、境松遺跡、伊奈町には掘井新田遺跡などの後期の遺跡がある。

古墳時代の遺跡は、西ノ脇遺跡(2)をはじめ並木古墳(3)、福岡南古墳群(5)、東楡戸古墳(7)、茶畑古墳(12)などが、台地丘陵部で確認されている。平成4年度に当財団が調査した西ノ脇遺跡は、東楡戸古墳に隣接しており、时期的にも古墳時代後期(鬼高式期)で、同じ頃と考えられることから、両者の関係を示唆している。また、平成6年度に調査した前田村遺跡F区からも、古墳時代後期の住居跡が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡は、村中で報告例は少なく、大谷津A遺跡や筒戸A・B遺跡から数軒の竪穴住居跡が確認されているにすぎない。新たに、平成6年度調査の前田村遺跡F区から、奈良・平安時代の住居跡が数軒確認されており、ここに当時期の集落が存在したことがうかがわれる。

中・近世の遺跡は、筒戸城跡(10)が確認されている。また、前田村遺跡では中世の五輪塔や、中世から近世の粘土を貼った墓塚が多数確認されている。さらに、当遺跡のC・D・E・F区から中世の地下式塚や方形竪穴遺構が確認されている。特に、平成6年度に調査したD区の南側低地からF区にかけては、中央の墓塚を囲むように、北西から南にかけ、弧を描くように地下式塚が配置されており、墓域であったことをうかがわせる。当遺跡付近には、古くから田村の北部にあった田村城(20)と呼ばれる城(現在の城山運動公園)と関連した古屋敷が八幡神社前にあったとの伝承があり、これらと墓地との関係が考えられる。また、西ノ脇遺跡からも、遺跡中央部から北部にかけて中世の地下式塚7基が確認されているので、当時墓域として利用されていたと考えられる。

※ 本文中の()内の番号は、表1・第2図中の該当番号と同じである。



第2図 前田村遺跡周辺遺跡分布図

注・参考文献

- (1) 洞坂畑遺跡発掘調査会 『洞坂畑遺跡』 1979年
- (2) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 大谷津B遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告書』 第18集 1981年3月
- (3) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 筒戸A・B遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告書』 第24集 1984年3月
- (4) 茨城県教育財団 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 大谷津A遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告書』 第28集 1985年3月
- (5) 茨城県教育財団 「常磐自動車関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 東筒戸古墳」 『茨城県教育財団文化財調査報告書Ⅳ』 1981年3月
- (6) 茨城県教育財団 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 西ノ脇遺跡 前田村遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告』 第87集 1994年3月
- (7) 『茨城県地名大辞典』 角川書店 1983年12月
- (8) 橋 泉嶺 『筑波郡郷土史』 賢美閣 1979年12月

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺跡名	遺跡の時代						図中 番号	遺跡名	遺跡の時代					
		旧	縄	弥	古	奈 平	中 近			旧	縄	弥	古	奈 平	中 近
1	前田村遺跡	○	○		○	○	○	12	茶畑遺跡				○		
2	西ノ脇遺跡		○		○	○		13	浅間山貝塚		○				
3	並木古墳				○			14	大谷津A遺跡		○		○	○	
4	田村貝塚		○					15	大谷津B遺跡		○				
5	福岡南古墳群				○			16	西下宿遺跡		○				
6	下長沼貝塚		○					17	筒戸A遺跡	○	○			○	
7	東筒戸古墳				○			18	筒戸B遺跡	○	○			○	
8	鹿島神社遺跡		○					19	豊岡A遺跡		○				
9	小張貝塚		○					20	田村城跡						○
10	筒戸城跡						○	21	高野台遺跡	○	○				
11	洞坂畑遺跡		○				○								

第3章 遺跡

第1節 遺跡の概要

前田村遺跡は、総面積約130,000㎡の規模をもち、筑波郡谷和原村の西部、筑波、稲敷台地の西端の標高22.0～23.0mの台地上に所在し、現況は畑地と山林である。

当遺跡は、これまでの調査の過程で、便宜上A～F区に分けられている（第4図）。これは、道路等の現状と発掘年度の順に従い、呼称してきたものである。したがって、平成4年度の調査区をA・B区、平成5年度の調査区をC・D・E区、平成6年度調査区をF区としてきた。調査区の規模は、C区が東西約192m、南北約116m、面積8,839㎡、D区が東西約160m、南北約150m、面積14,947㎡、E区が東西約90m、南北約120m、面積は5,293㎡である。

なお、D区については平成5年度に6,608㎡を調査し、残り8,339㎡については平成6年度に調査した。

当遺跡の今回の調査区は、縄文時代中期から晩期にかけての集落跡及び中・近世の墓地跡の複合遺跡である。調査した遺構は、竪穴住居跡170軒、土坑873基、溝23条、地下式墳7基、井戸3基などである。

縄文時代の遺構は調査全域にわたって確認されているが、D区及びC区において密度が濃くなっている。C区では、中央部を中心に、縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居跡や土坑が重複している。D区では、中央の窪地を囲むように、縄文時代中期から晩期にかけての竪穴住居跡や土坑が確認された。特に、縄文時代後・晩期の竪穴住居跡の下層に中期の竪穴住居跡が確認されるなど、C区よりさらに重複が激しい。

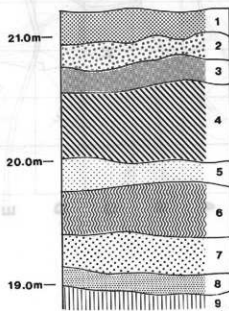
中・近世の遺構は、C区の東側及びE区において確認されている。主な遺構は、地下式墳、方形竪穴遺構、粘土張遺構などである。

遺物は、遺物収納コンテナに524箱程出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器、土偶、装身具、石器、石製品、人骨、獣骨などが出土している。中・近世の遺物は、内耳土器、土師質土器、陶磁器、煙管、古銭などが出土しているが量は少ない。

第2節 基本層序

前田村遺跡D区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った（第3図）。

上層から順に、第1層は、暗褐色の耕作土で、厚さは40～50cmである。第2層は、ソフトローム層への漸移層で、厚さ10～20cmの褐色土である。ローム小ブロックを少量、焼土小ブロック、焼土粒子、炭化粒子を極少量含み、締まりがある。第3層は、厚さ10～30cm明褐色土のソフトローム層で、ローム小・中ブロックを少量含み、締まりがあり、粘性は弱い。第4層は、40～70cmの暗褐色土で、ローム中ブロック多量、ローム小・中ブロックを少量含み、粘性、締まりともに強い。いわゆるブラックバンドとよばれる層である。第5・6層は



第3図 基本土層図

ともにハードローム層である。第5層は、20-25cmの明褐色土で、ローム小・中ブロックを少量含み、粘性、締まりともに強い。第6層は、35-55cmの明褐色土で、中・下層に灰黄褐色の粘土が少量含まれ、粘性、締まりともに強い。第7層は、厚さ30cm程の明黄褐色土で、灰黄色の粘土を多量に含んでいる。また、黄褐色の鉄分を含んだ斑点が中量みられ、粘性が強く、やや締まりがある。第8層は、厚さ20cm弱のふい黄褐色土の粘土層である。粘性、締まりともに極めて強い。第9層は、黄灰色土の粘土層である。厚さ20cm以上であるが、未掘のため本来の厚さは不明である。粘性、締まりともに極めて強い。

遺構は、表土下40-50cmの第2層上面から確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 D区の遺構と遺物

D区は、当遺跡の中央部やや東側に位置している。D区の北側にC区、東側にA・B・G区、南側にE・F区、西側にH・I区がある。遺跡の北と南に谷津が入り込んでいることは前述したが、D区は南側の谷津に向かい、緩やかに傾斜している。

平成5年度調査のD区北西部分6,608㎡からは、竪穴住居跡82軒、地下式竈1基、井戸1基、土坑330基を検出した。

なお、D区の遺構番号はC区からの続きとなるため、住居跡は第95号から、土坑は250号からとなる。

(1) 竪穴住居跡

第95号住居跡 (第5図)

位置 調査区の北西部、C15c区。

重複関係 本跡は、北西側部分で第257号土坑を、南東側部分で第253号土坑を掘り込んでいる。北東壁は第292号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 東壁と西壁の立ち上がりはとらえられなかったが、長径(6.55)m、短径5.32mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-67°-W]

壁 北壁と南壁が残存しており、壁高7-14cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 11か所。P1-P4、P7-P9、P11は壁内際を回るように位置し、壘柱穴と思われる。P1、P4は径55-60cmの円形で、深さ58-74cmと規模が大きく、他の壘柱穴は径28-45cmの円形、深さ20-37cmである。

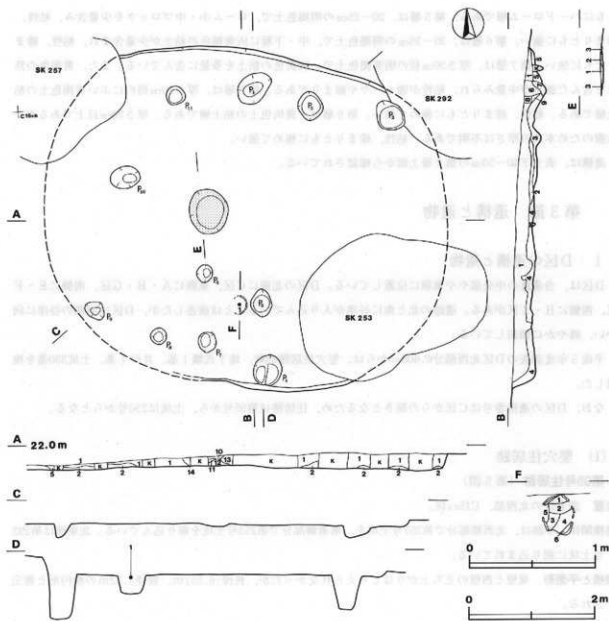
P5、P6、P10は性格不明である。他は覆土の攪乱が甚だしく確認できなかった。

炉 中央からやや西寄りに付設されている。長径70cm、短径60cmの楕円形で、床を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉内覆土に焼土ブロック・焼土粒子を含むが、炉床は硬くない。

伊土層解説

- 1 赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土大ブロック・焼土中ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 2 にふい赤褐色 焼土小ブロック中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 3 にふい赤褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量

埋設土器 本跡の南部床面から埋設土器が出土している。出土状況は、口縁部を上位にし、底面から約15度の角度をもって斜位に埋設されている。西側部分に攪乱のトレンチャーが入り、土器の残存率は30%である。



第5図 第95号住居跡実測図

掘り方も大部分がトレンチャーにかかっており、平面形は不明であるが、40cmほど掘り込まれた後土器を埋設している。土器の中から遺物等は出土していない。

埋設土器土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量

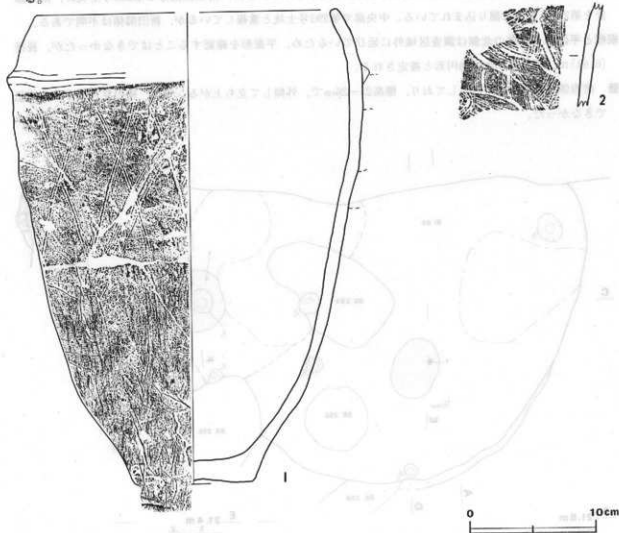
覆土 上層に暗褐色土、下層に褐色土主体の自然堆積である。土層10-14は炉の上層の覆土で、焼土が含まれている。また、土層6-9は後世のビット状の掘り込みである。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子極少量、ソフトローム土少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子極少量、ソフトローム土少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・ソフトローム土中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子極少量
 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量
 7 明褐色 ローム小ブロック・ソフトローム土中量、炭化粒子極少量
 8 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 9 にぶい褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 10 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化物極少量
 11 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
 12 赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック極少量
 13 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
 14 にぶい赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量

遺物 覆土中から縄文土器片が極少量出土している。器形のわかる土器は1以外はなく、他はすべて細片である。



第6図 第95号住居跡出土遺物実測・拓影図

第95号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第6図	深鉢形土器	A 23.6	底部から口縁部にかけての破片。上げ底で、やや彎曲しながら立ち上がり、頸部から内傾し口縁部に至る。頸部は無文で、胴部との境に粘土層による隆帯を設け、隆帯から胴部上半に袋状把手が付けられている。隆帯から胴部下半は、斜格子状に3-5本単位の条線が施されている。	砂粒・頁石・雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	P1 P2付近床面 (後期初瀬か)
	縄文土器	B 37.5			
		C 9.4			

第6図2は縄文土器片の拓影図である。沈線で文様を描いた後、櫛歯状施工具で短い条線を曲線的に施している。後期称名寺式に比定される土器である。

所見 本跡は、東壁と西壁は立ち上がりの確認できなかったが、北側と南側に残存している壁及び床質から規模及び平面形を推定した。床上出土の遺物はなかったが、時期は埋設土器から判断して、縄文時代中期末から後期初頭と思われる。

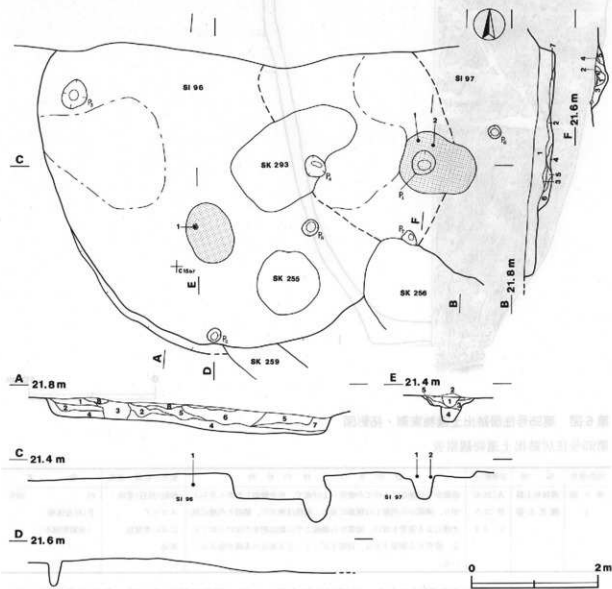
第96号住居跡 (第7図)

位置 調査区の北西端部、C15a区。

重複関係 本跡は、東側部分が第97号住居跡を掘り込んでいる。また、南東側部分を第255号土坑に、南側部分を第259号土坑に掘り込まれている。中央部で第293号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡の北側は調査区域外に延びているため、平面形を確認することはできなかったが、長径〔6.64〕m、短径4.70mの楕円形と推定される。

壁 南西側部分が僅かに残存しており、壁高25～26cmで、外傾して立ち上がる。他は、壁の立ち上がりを確認できなかった。



第7図 第96・97号住居跡実測図

床 全体に平坦で、踏み固められており、特に西側と中央部東側が著しく硬化している。炉から北側にかけて貼り床となっている。

ピット 5か所。P₁～P₃は径20～30cmの円形で、深さ36～65cm。規模及び配列から主柱穴と考えられる。

P₄は長径41cm、短径29cmの楕円形で、深さ71cm、P₅は径25cmの円形、深さ12cmで、両方とも性格は不明である。

炉 中央部や南西寄りに付設されている。長径98cm、短径72cmの楕円形で、北側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。埋設土器の周辺部分の炉床は、火熱で赤く焼け、硬化している。

炉土層解説

- | | | |
|---|--------|--|
| 1 | 赤褐色 | 焼土粒子・焼土小ブロック多量、焼土中ブロック中量 |
| 2 | 赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック極少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量 |
| 4 | にぶい赤褐色 | 焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量 |
| 5 | 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量 |

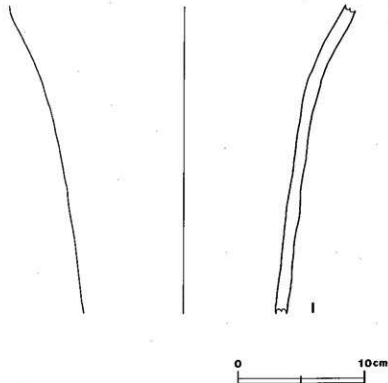
覆土 8層からなる。自然堆積の様相だが、土層3は後世の掘り込みである。

土層解説

- | | | |
|---|--------|---|
| 1 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック極少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量 |
| 4 | にぶい赤褐色 | ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック極少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量 |
| 8 | 暗褐色 | 耕作土 |

遺物 覆土中から縄文土器が極少量出土しているが、細片のみで器形が判断できるものはない。1の深鉢は炉体土器で、本跡の時期を決定するものである。

所見 本跡の壁は、南西側で僅かに残存しているだけであり、北側は調査区域外に延びているため、規模及び平面形は主柱穴の配列と床質から推定した。時期は、炉体土器から判断して縄文時代中期加曾利E式期と思われるが、器面に文様が施されていないため細かい時期特定は困難である。



第8図 第96号住居跡出土遺物実測図

第96号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第8図	浅鉢形土器	B(24.6)	胴部片。直立気味に立ち上がり、上部で僅かに外傾する。胴部は無文である。	石英・長石・砂粒	P2 25%
1	縄文土器			にぶい褐色 普通	炉内 (加曾利Eか)

第97号住居跡(第7図)

位置 調査区の北西端部, C15a区。

重複関係 本跡は、西側部分を第96号住居跡と第293号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡の北側半分は調査区域外に延びており、東側から南側は覆乱のため、規模及び平面形は不明である。

床 炉から北側にかけては貼り床で、黒色土が硬く締まっている。南側は、ローム土でやや高くなっている。

床面は、第96号住居跡の床面よりやや低い。

ピット 2か所。P₆は径22cmの円形で、深さ12cm、P₇は長径24cmの楕円形で、深さ24cm。いずれも性格は不明である。

炉 長径124cm、短径94cmの楕円形で、床を12cm掘りくぼめた地床炉である。中央部分が第96号住居跡の柱穴に掘り込まれている。

伊土層解剖

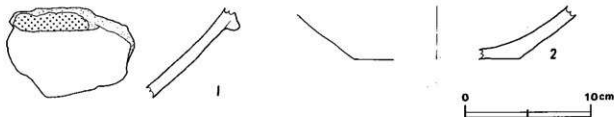
- 1 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック・ローム中ブロック極少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック中量、焼土中ブロック・ローム大ブロック極少量
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム大ブロック極少量
- 4 にぶい褐色 ローム中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量

覆土 土層1が本跡の覆土で、暗褐色土の自然堆積である。土層2~7は貼り床の部分である。

土層解剖

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量、細かい形を均一に含む
- 2 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 4 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子極少量
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 6 にぶい褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 覆土中から縄文土器の細片が少量出土している。いずれも破片で、器形の判断できるものはない。1、2はいずれも浅鉢で、炉から出土している。



第9図 第97号住居跡出土遺物実測図

第97号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第9図	浅鉢形土器	B(7.1)	胴部片。胴部は外傾して直線的に立ち上がる。胴部と頸部の間に隆帯を設け、頸部は直立気味に立ち上がると思われる。隆帯は赤彩され、胴部は横位の磨きが施されている。	砂粒・長石	P3 5%
1	縄文土器			にぶい赤褐色 普通	炉内 (加曾利E)
2	浅鉢形土器	B(4.2)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、外傾して立ち上がる。胴部下半は無文で、内・外面ナデが施されている。	砂粒・雲母・長石	P4 5%
	縄文土器	C(13.1)		にぶい褐色 普通	炉内 (加曾利E)

所見 本跡の壁は、西側部分が第96号住居跡に削平され、東側から南側が擾乱を受けていることから立ち上がりを確認できないため、規模、平面形及び長径方向等不明である。時期は、坑内の出土遺物から縄文時代中期加曾利E式期である。

第98号住居跡 (第10図)

位置 調査区の北西部、C15e区。

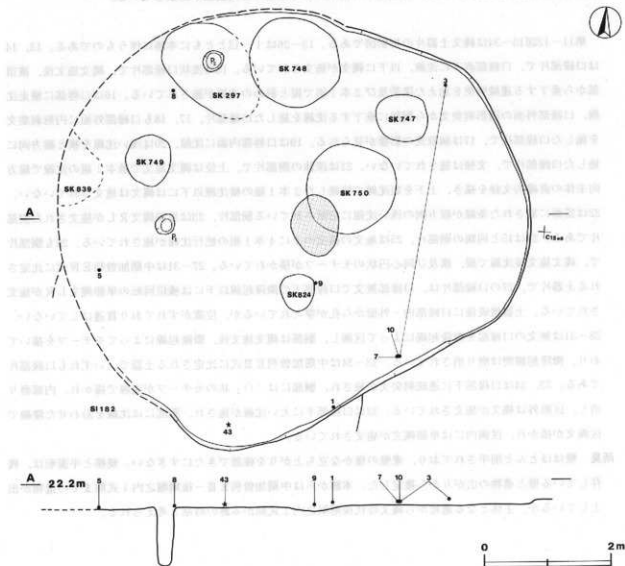
重複関係 本跡は、中央部やや南側部分を第824号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。また、南側部分で第182号住居跡、西側部分で第839号土坑、本跡内で第297号、747～750号土坑と重複しているが、いずれも本跡の床下で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡の西側部分は削平されているが、長径(7.52)m、短径6.93mの楕円形と推定される。

長径方向 (N-47°-E)

壁 東側で僅かに立ち上がりを確認できた。

床 平坦で、暗褐色土の床であるが、踏み固められた面は見られない。



第10図 第98号住居跡実測図

ピット 2か所。P₁は径36cmの円形で、深さ92cm、P₂は径38cmの円形で、深さ145cm。主柱穴かどうかは不明である。

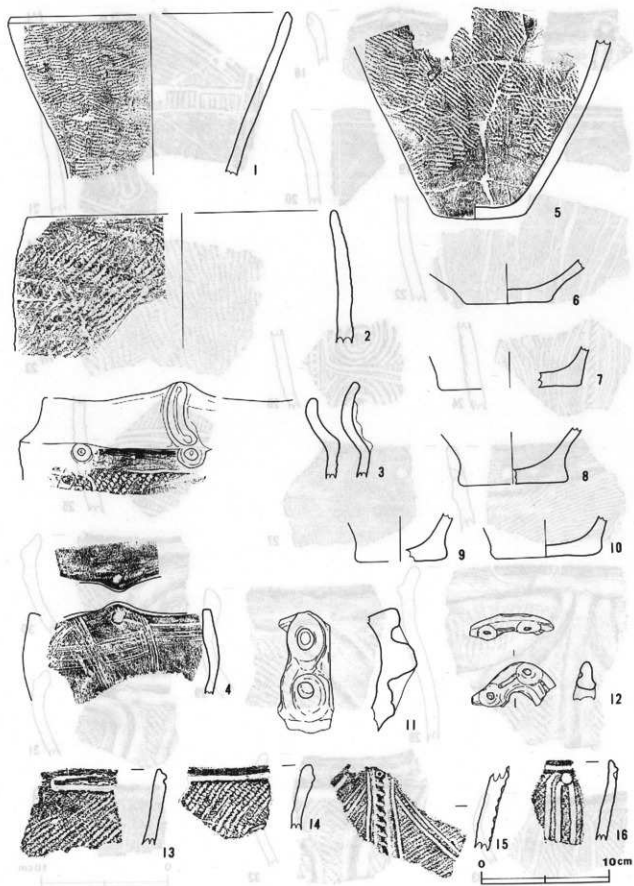
炉 ほは中央に付設されている。長径96cm、短径77cmの楕円形である。覆土は薄く、焼土小ブロック、焼土粒子を少量含む。

覆土 暗褐色土が薄く堆積しているが、堆積状況は確認できなかった。

遺物 本跡の全面から、多量の縄文土器が出土している。縄文時代後期の土器片に混じって縄文時代中期のものも多いが、重複している第297、747～750号土坑が縄文時代中期の遺構なので、それらとの関連も考えられる。1の深鉢形土器は南壁際覆土中から横位の状態で、3の口縁部片は南東壁際と北東壁際覆土中から出土している。南東壁際覆土中からは7、10の底部片も出土している。5の深鉢形土器の底部から胴部下半にかけての破片は、南西壁際床上から正位の状態で出土している。8の底部片も正位の状態で北西部床上から出土している。20の口縁部片は東壁際覆土中から、21の胴部片は北部床上から出土している。24の胴部片は西部床上から、22の胴部片は南東壁際覆土中から出土している。覆土中から35～37の土製円板が出土しているが、本跡に伴うものではなく、流れ込みであると思われる。38の打製石斧、39の磨製石斧、40～42の磨石は覆土中から出土している。また、南壁寄りの覆土中からは43の骨角製品が出土している。

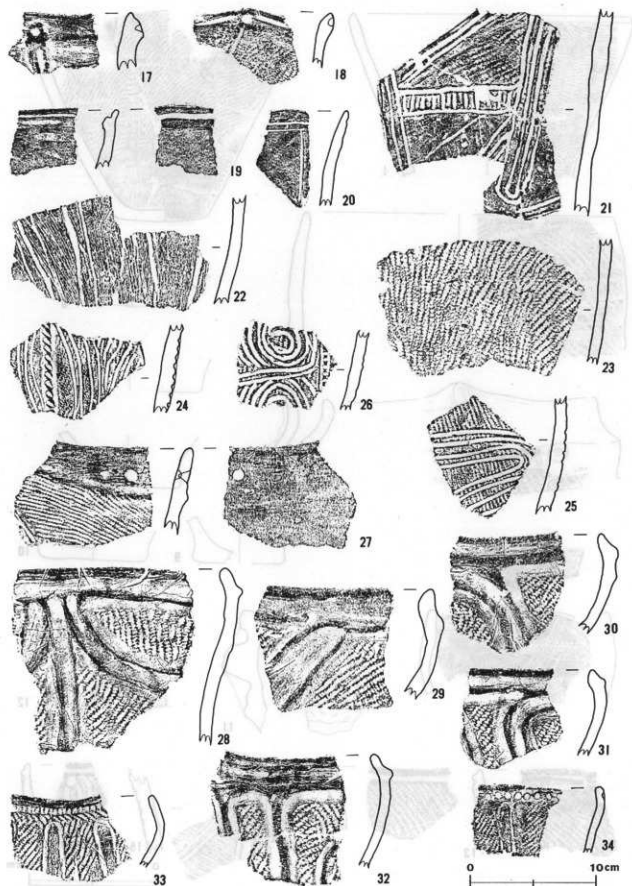
第11～12図13～34は縄文土器片の拓影図である。13～26は1～12とともに本跡に伴うものである。13、14は口縁部片で、口縁部直下に沈線、以下に縄文が施文されている。15は波状口縁部片で、縄文施文後、波頂部から垂下する連続刺突を加えた帯帯及び2本1組で縦と斜めの沈線が施されている。16は口唇部に横走沈線、口縁部外面の円形刺突文から胴部に垂下する沈線を施した口縁部片、17、18も口縁部外面に円形刺突文を施した口縁部片で、17は網取式の影響が見られる。19は口唇部内面に沈線、20は浅い沈線を横と縦方向に施した口縁部片で、文様は施されていない。21は深鉢の胴部片で、上位は縄文地文で数本1組の沈線で縦方向主体の直線文様を描き、上下を短沈線で接続した2本1組の横沈線以下には縄文は施文されていない。22は器面に施された条線が縦方向の浅い沈線に切断されている胴部片、23は単筋縄文R Lが施文された胴部片である。24は15と同様の胴部片、25は地文の縄文の上に4本1組の蛇行沈線が施されている。26も胴部片で、縄文施文後沈線で縦、横及び同心円状のモチーフが描かれている。27～31は中期加曾利E IV式に比定される土器片で、27の口縁部片は、口縁部無文で口縁部下の微隆起線以下には横位回転の単筋縄文L Rが施文されている。土器焼成後に口縁部内・外面から孔が穿たれているが、位置がずれており貫通はしていない。28～31は無文の口縁部を微隆起線によって区画し、胴部は縄文施文後、微隆起線によってモチーフを描いており、微隆起線間は磨り消されている。33～34は中期加曾利E III式に比定される土器で、いずれも口縁部片である。33、34は口縁部下に連続刺突文が施され、胴部には「∩」状のモチーフが沈線で描かれ、内部磨り消し、区画外は縄文が施文されている。32は口縁部下に太い沈線が施され、胴部には沈線を沿わせた條線で区画文が描かれ、区画内には単筋縄文が施文されている。

所見 壁はほとんど削平されており、東壁の僅かな立ち上がりを確認できたにすぎない。規模と平面形は、残存している壁と遺物の広がりから推定した。本跡からは中期加曾利E III～後期堀之内I式期までの遺物が出土しているが、主体となる遺物から縄文時代後期堀之内I式期が本跡の時期と考えられる。



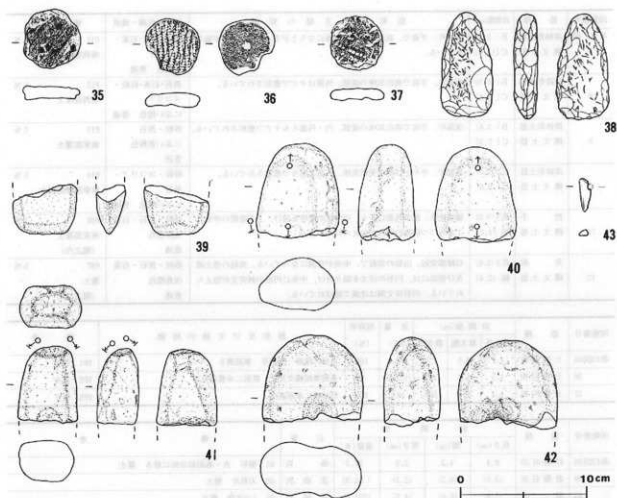
第11图 第98号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)

国史館・東京府立歴史民俗資料館蔵 2007.10



第12图 第98号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)

17 国海林・縄文前土山製器分中60号 器11号



第13図 第98号住居跡出土遺物実測図(3)

第98号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
第 11 図 1	深鉢形土器	A (22.6)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部から口縁部にかけ、直線的に外傾しながら立ち上がる。口唇部は外傾ぎ状で、胴部は無加飾文が横位回転で施文されている。	砂粒 にぶい棕色	P5 南東部覆土
	縄文土器	B (13.6)			
2	深鉢形土器	A (34.2)	口縁部片。やや内傾気味に口縁部に至る。内面はナズにより壁形、外面は縄文が弱状構成に充填されている。	石英・長石・砂粒 棕色 普通	P6 南東部覆土
	縄文土器	B (10.6)			
3	深鉢形土器	A (21.8)	口縁部片。胴部で断面し、口縁部は内傾した後に外反する波状口縁である。口縁部は無文で、波頂部から胴部は中央に沈線を植した「C」字状の隆帯で結ばれている。胴部と胴部の境には、刺突を植した円形浮文が貼り付けられ、その下を沈線が走っている。沈線以下には半距L&Rの縄文が横位回転で充填され、円形浮文の下には沈線で支線が描かれている。	スコリア・砂粒 にぶい棕色 普通	P7 南東部覆土 (堀之内1)
	縄文土器	B (7.7)			
4	小形深鉢形土器	A (14.3)	口縁部片。やや内傾しながら立ち上がる。小波状口縁を呈し、波頂部内・外面に円形の刺突が施されている。口縁部以下は数本から10本単位の条線を横走させ、その後数本単位の条線を口唇部から胴部にかけて折行させている。	砂粒・長石・石英 黒灰色 普通	P8 南西部覆土 (堀之内小)
	縄文土器	B (6.8)			
5	深鉢形土器	B (14.2)	底部から胴部下平にかけての破片。やや丸みを帯びた底部で、胴部は僅かに内傾しながら開く。無飾の縄文を横回転で充填し、底部から胴部にかけて3~7cm磨り消されている。	砂粒・スコリア 灰白色 普通	P9 南西部断面 (堀之内)
	縄文土器	C 7.2			
6	深鉢形土器	B (3.2)	底部片。平底。最下層でやや屈曲気味に外傾して立ち上がる。内・外面とも磨きが施されている。	砂粒・長石 にぶい棕色 普通	P10 南西部覆土
	縄文土器	C 6.6			

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第11回 7	深鉢形土器 縄文土器	B(3.2) C(11.0)	底部片。平底で、底部から直立気味に立ち上がる。外面に磨きが施されている。	砂粒・長石・石英・スクリア 灰褐色 普通	P11 5% 南西部覆土
8	深鉢形土器 縄文土器	B(4.3) C(8.4)	底部片。平底で突出気味の底部。外面はナデで整形されている。	長石・石英・砂粒・スクリア にぶい褐色 普通	P12 5% 北西部床上
9	深鉢形土器 縄文土器	B(3.6) C(7.3)	底部片。平底で突出気味の底部。内・外面ともナデで整形されている。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P13 5% 南東部覆土
10	深鉢形土器 縄文土器	B(3.0) C 8.8	底部片。やや上げ底で突出気味。外面は削りで整形されている。	砂粒・スクリア・長石 にぶい褐色 普通	P14 5% 南東部壘形覆土
11	把 手 縄文土器	長さ(9.8) 幅(4.3)	楕状把手。把手外面に「8」の字状の縞帯を設け、上下隆部の中央に1か所づつ円形の凹みが増えられている。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P86 5% 南東部覆土 (堀之内)
12	突 起 縄文土器	長さ(5.6) 幅(2.4)	口縁部突起。山形の突起で、中央が空洞になっている。突起の頂上部及び裾部には、円形の浮文を貼り付け、中央に円形の刺突文が増えられている。円形浮文間は沈線で結ばれている。	砂粒・長石・石英 浅黄褐色 普通	P87 5% 覆土 (堀之内)

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		長さ	最大幅	最大厚				
第13回35	土製円板	4.7	4.5	1.2	21.1	100	表面に隆線一部残存 裏面磨き	DP1 覆土
36	土製円板	4.5	4.3	1.2	(22.6)	80	表面磨面縄文及L 裏面に未貫通孔	DP2 覆土
37	土製円板	4.4	4.1	0.9	18.2	100	部分的に単線縄文	DP3 覆土

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第13回38	打製石斧	8.4	4.2	2.0	97.2	砂 岩	Q1 梨形 表・裏面部分的に磨き 覆土
39	磨製石斧	(3.9)	(5.2)	(2.3)	(52.9)	花 崗 岩	Q3 刃部片 覆土
40	磨 石	(7.6)	(6.6)	(4.5)	(324.6)	花 崗 岩	Q4 1/2欠損 覆土
41	磨 石	(6.0)	(4.8)	(3.2)	(142.5)	安 山 岩	Q5 1/2欠損 西石炭用 覆土
42	磨 石	(7.0)	7.9	4.4	(398.2)	流 紋 岩	Q6 1/2欠損 西石炭用 覆土

図版番号	器 種	計 測 値			備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第13回43	垂れ織り	(2.7)	(0.9)	(0.5)	(0.5)	B1 骨角器(ホオゾロザム動物) 有孔 欠損品 南東部覆土

第99号住居跡(第14回)

位置 調査区の西部、C15g区。

重複関係 本跡は、南側部分を第117号住居跡に掘り込まれている。東側部分で第183号住居跡、第802号及び803号土坑と重複しているが、本跡の床下で確認されており、本跡の方が新しい。

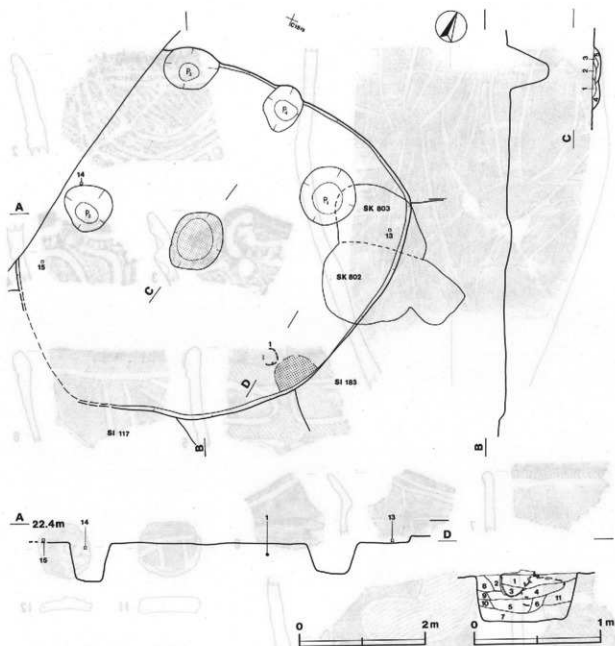
規模と平面形 本跡の西側は、擾乱のため確認できない部分があったが、長径5.97m、短径(5.08)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-51°-E]

壁 北側から東側にかけて残存しており、壁高8-10cmで、外傾して立ち上がる。西側は擾乱のため立ち上がりが確認できなかった。

床 平坦で、暗褐色土の床であるが、踏み固められた面は見られない。

ピット 4か所。P₁は径90cmの円形で、深さ52cm、P₂は長径78cmの卵形で、深さ64cm、P₃は長径78cm、短径70cmの楕円形で、深さ59cm、P₄は長径78cm、短径57cmの楕円形で、深さ76cm。これらは、規模及び配列



第14図 第99号住居跡実測図

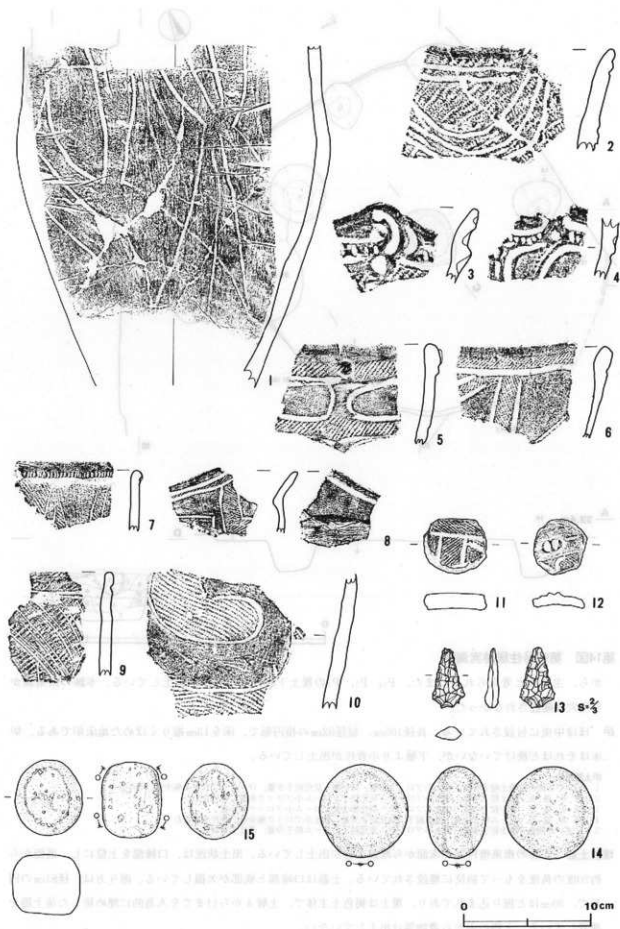
から、支柱穴と考えられる。また、P₁、P₂、P₄の覆土下層より小骨片が出土している。本跡の南東側から柱穴は確認されなかった。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径105cm、短径82cmの楕円形で、床を13cm掘りくぼめた地床炉である。炉床はそれほど焼けていないが、下層より小骨片が出土している。

炉土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量、骨片含む
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量、骨片含む
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量、ローム小ブロック極少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量、骨片少量含む
- 5 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、骨片少量含む

埋設土器 本跡の南東壁付近の床面から埋設土器が出土している。出土状況は、口縁部を上位にし、底面から約20度の角度をもって斜位に埋設されている。土器は口縁部と底部が欠損している。掘り方は、径81cmの円形で、30cmほど掘り込まれており、覆土は褐色土主体で、土層4から11までを人為的に埋め戻した後土器を埋設している。土器の中から遺物等は出土していない。



第15图 第99号住居跡出土遺物実測・拓影图

埋設土器土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極少量
 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量
 5 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 6 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 7 明褐色 ローム粒子多量、炭化粒子極少量
 8 褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
 9 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
 10 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量
 11 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量

覆土 残存している覆土は薄く、暗褐色土の単一層である。

遺物 炉から東側部分の床上及び覆土中から縄文時代後期全般にわたる土器片が出土している。1の埋設土器は南東壁付近の床面から正位の状態で、2は炉内から、3は東壁際覆土下層、4は東壁寄り床面から出土している。13の石鏃は北西壁際床面から、14の磨石はP₂から、15の磨石は南西壁際床面から出土している。11, 12は覆土上層から出土しているが、流れ込みと思われる。

第99号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(27.4)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がり、上位にくびれを持つ。浅い沈線で縦長の「J」字状の区画を描き、内部には細かい列点が施されている。胴部下半は磨かれており、列点は施されていない。	砂粒・スコリア・灰石 暗赤褐色 普通	P15 40% 南東部床下 埋設土器 (特名寺2)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第15図11	土製円板	4.3	5.0	1.4	36.8	100	口縁部片利用 沈線区画の縄文帯	DP4 覆土
12	土製円板	4.4	4.2	1.2	14.4	100	隆起帯刻文帯上にブタ鼻状粘着	DP5 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第15図13	石鏃	(2.4)	1.3	0.6	(1.2)	チャート	Q7 凸部有基座 先端部及び基部欠損 北東部床面
14	磨石	7.3	7.1	4.8	252.1	安山岩	Q8 P ₂ 内
15	磨石	6.0	5.3	4.8	220.0	安山岩	Q9 磨石兼用 南西部床面

第15図2～10は縄文土器片の拓影図である。2は深鉢形土器の口縁部で、口縁部外面に2本の横走沈線、胴部に3本組の沈線で曲線の文様を描き、地文に縄文が施文されている。3は波状を呈する口縁部片で、波頂部に「C」字状の沈線が描かれ、上下に刺突文、口縁部下の隆線以下には縄文施文、4も口縁部片で沈線で曲線のモチーフが描かれている。2～4は後期堀之内1式に比定される土器で、1とともに本跡に伴うものと思われる。5, 6は晩期安行Ⅲa式に比定される口縁部片で、口縁部に縄文帯が施文されている。7は後期安行Ⅱ式に比定される口縁部片で、口縁部に隆起帯刻文、口縁部以下に細い縦方向の沈線を施し、部分的に縄文が施文されている。8は後期加曾利B2式の波状を呈する口縁部片で、口縁部内・外面に沈線が施され、沈線区画の文様帯以外は丁寧な磨き、9は後期堀之内2式期に比定される口縁部片で、縄文施文後斜行沈線が描かれている。10の胴部片は沈線で曲線の文様の区画文を描き、区画内を磨り消し、区画外に縄文が施文されており、中期末から後期初頭にかけての過渡期の土器片と思われる。

所見 本跡の西側は攪乱を受けて遺構が確認できず、確認できた東側部分から西側部分を想定して規模及び平面形を推定した。遺物は後期特名寺式～晩期安行Ⅲa式期に渡り出土しているが、新しい遺物は第117号住居跡との関連も考えられる。時期は、炉及び埋設土器から縄文時代後期特名寺2式期～堀之内1式期にかけてと思われる。

第100号住居跡 (第16図)

位置 調査区の西部, C15g7区。

重複関係 本跡は, 南東側部分を第291号土坑に掘り込まれている。中央より西側部分で第183号住居跡, 南側部分で第801号, 850号土坑とそれぞれ重複しているが, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径6.29m, 短径5.52mの楕円形である。

長径方向 N-85°-E

壁 壁高5-12cmで, 外傾して立ち上がる。

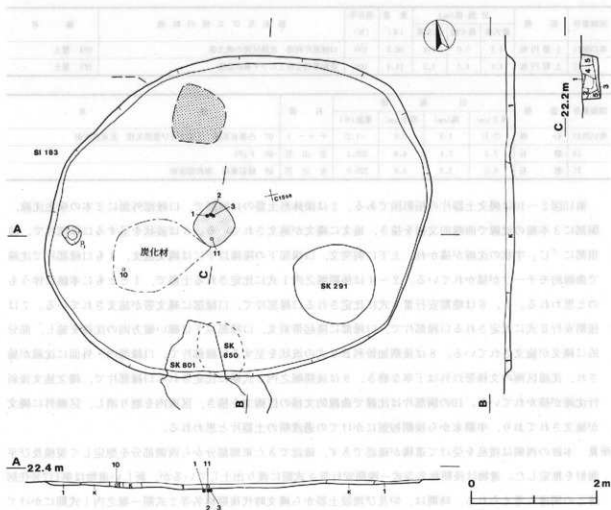
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。炉の西側は, 炭化材が多量に散在している。

ピット 径30cmの円形で, 深さは38cmである。

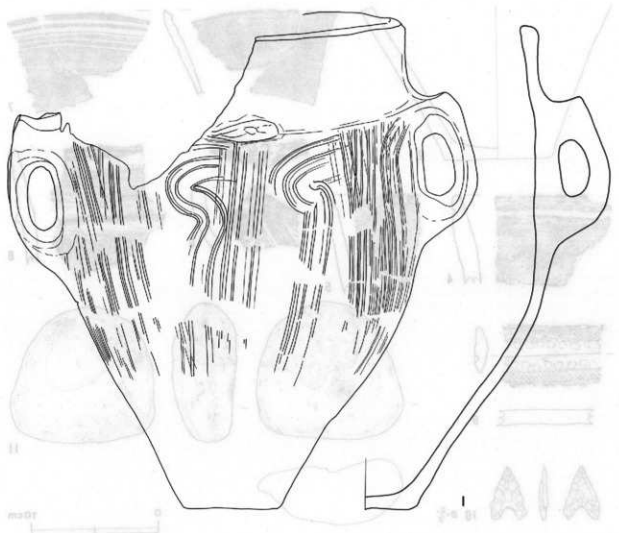
炉 中央部よりやや東側に付設されている。掘り込み部は軸長58-60cmの隅丸方形で, 中央部に横状把手のついた深鉢形土器を, 南側には深鉢形土器の破片を二重に埋設した土器埋設炉である。床面を29cmほど掘り下げてから人為的に埋め戻した後埋設されており, 中央の土器は口縁部を上位にし, 底面から約20度の角度をもって斜位の状態で確認されている。土器の内部の土は, 焼土小ブロック・焼土粒子を多量に含んでいる。

伊土層解説

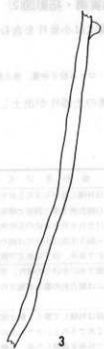
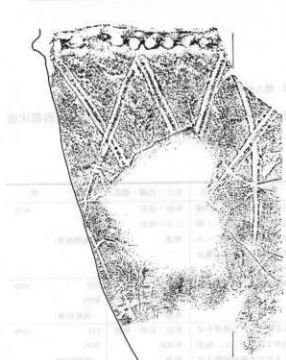
- 1 濃い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・橙色の粘土粒子多量, 炭化材中量
- 2 褐色 炭化物・ローム粒子中量, 焼土粒子・焼土小ブロック少量, 焼土中ブロック極少量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック, ローム小ブロック少量, 炭化粒子極少量
- 4 褐色 ローム小ブロック, ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子, ローム中ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化粒子極少量



第16図 第100号住居跡実測図

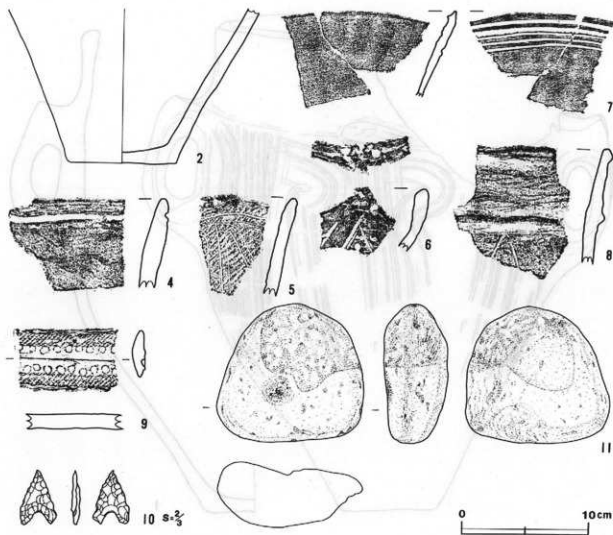


0



0 10cm

第17図 第100号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第18図 第100号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

覆土 1層からなる。北壁寄りの覆土は小骨片を含む。

土層解説

1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック極少量

遺物 覆土中から縄文時代後期前葉の土器片が出土している。炉内から1～3の土器と11の凹石、南西部床面から10の石鏃が出土している。

第100号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	深鉢形土器	A (27.5)	平底。胴部は外傾しながら立ち上がり、胴部中央からは直立して口縁部に至る。口縁部無文帯と胴部文様帯を微隆起線によって区画し、微隆起線にはそれぞれ2単位の舌状突起と楕状把手が付けられている。微隆起線から胴下半部にかけては陶の手状や真つでに垂下する集合条線が描かれており、以下は無文で削りが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P16 炉内 (後期前葉)
	縄文土器	B 38.6			
		C 7.6			
第18図 2	深鉢形土器	B (12.5)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して直線的に開く。胴部には腹方向の書きが施されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P17 炉内 (後期前葉)
	縄文土器	C 8.7			
第17図 3	深鉢形土器	B (26.7)	胴部片。胴部は外傾して開く。胴上部に粘土紐を貼り付けた隆帯を高めし、棒状工具でその上にやや大きめの四角刺突を加えている。隆帯以下は削りで外面を調整した後、半截竹管による平行沈線が斜格子状に施文されている。	長石・石英・砂粒 赤褐色 普通	P18 炉内 (後期前葉)
	縄文土器				

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第18図10	石 織	2.1	1.5	0.4	0.8	チャート	Q10 巴高無蓋蓋 西部床面
11	四 石	11.1	11.9	5.3	760.7	砂 岩	Q11 窯付帯 室内

第18図4～9は縄文土器片の拓影図である。4～6は本跡に伴うと思われる後期掘之内式の口縁部片で、4は口縁部下に横走沈線、5は波状口縁で、縄文施文後細い沈線で文様を描いている。掘之内2式と思われる。6も波状口縁で波頂部突起に刺突文、外面に斜行沈線が見られる。7は後期加曾利B1式の鉢形土器の口縁部で、口縁部内面に数本の沈線と1本の隆線が巡らされ、内・外面とも磨きで整形されている。8の口縁部片は後期前葉と思われ、口縁部無文帯の下に微隆起線が施され、以下に斜行沈線が施されている。9は中央の微隆起線に沿って連続の円形刺突文、さらに外側に縄文帯が施された板状の土器片で、中期末から後期初頭にかけての吊り手形土器の吊り手の可能性が考えられる。

所見 縄文時代後期前葉の遺物が出土しているが、主体となる遺物及び知体土器から縄文時代後期掘之内式期が本跡の時期と考えられる。

第101号住居跡（第19図）

位置 調査区の西部、C15g区。

重複関係 本跡は、西部部分を第290号、767号土坑に掘り込まれている。北側部分で第782号、866号土坑と、北東側部分で第187号住居跡、第786号土坑と、南側部分で第780号土坑と、南西側から西側にかけて第771号、766号、791号及び792号土坑とそれぞれ重複しているが、本跡の床面より下層で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 上部攪乱のため平面形をとらえられなかったが、支柱穴の配列から長径(6.68)m、短径(5.92)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-44°-W]

床 暗褐色土の床で、平坦である。踏み固められた面は見られない。

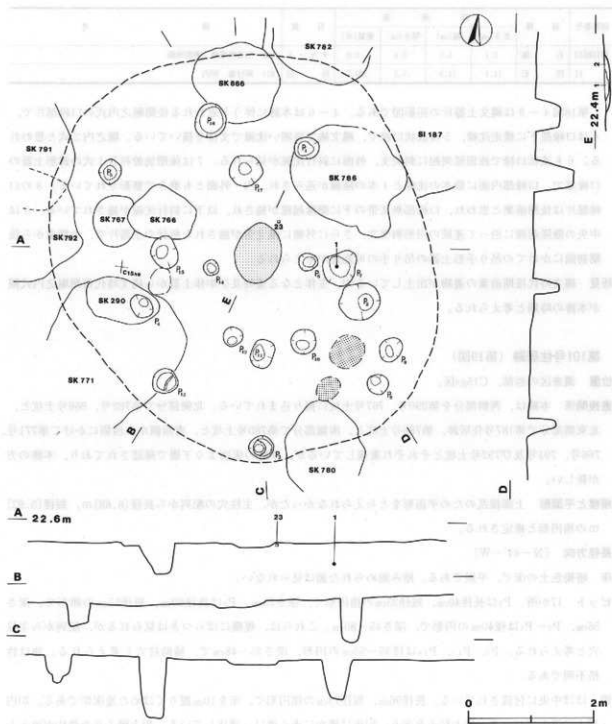
ピット 17か所。P₁は長径40cm、短径35cmの楕円形で、深さ73cm、P₂は長径60cm、短径55cmの卵形で、深さ56cm、P₃～P₅は径40cmの円形で、深さ45～80cm。これらは、規模にばらつきは見られるが、配列から支柱穴と考えられる。P₉、P₁₃、P₁₄は径35～55cmの円形、深さ35～48cmで、補助柱穴と考えられる。他は性格不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径96cm、短径75cmの楕円形で、床を10cm掘りくぼめた地床炉である。炉内覆土に焼土ブロック、焼土粒子を含み、炉床は僅かに赤く焼け、硬化している。炉上層より小骨片が出土している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量、小骨片少量含む
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量、ローム粒子少量

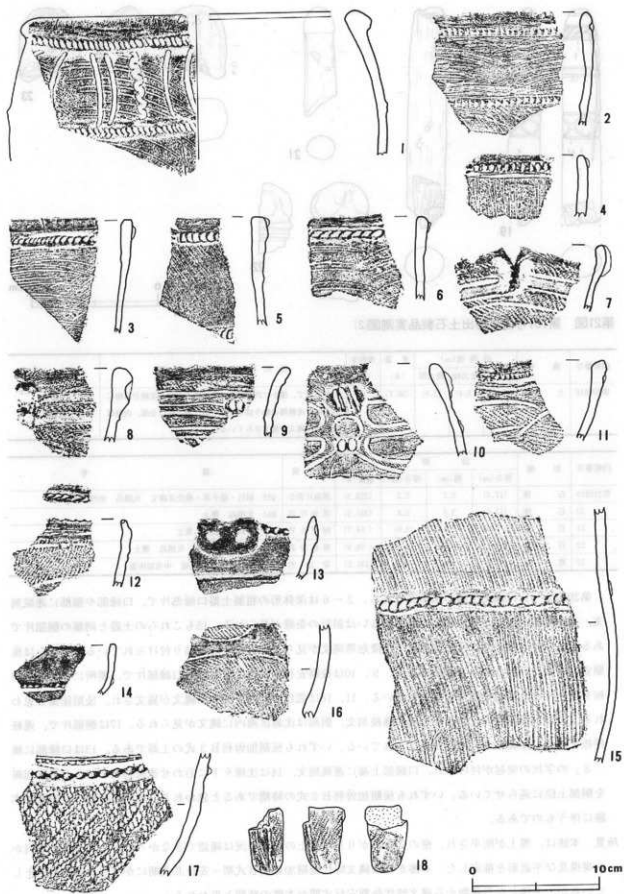
遺物 覆土中及びピット内より縄文時代後期の土器片と土製品及び石製品が出土している。1の深鉢形粗製土器はP₇から横位の状態で、15はP₁内、16はP₁付近から出土している。18の土偶の足はP₂覆土中から、23は炉北側床面から出土している。19の石棒は南西部覆土から、他の石棒も覆土中からの出土である。また、これらの遺物の他、獣骨片も覆土中から出土している。



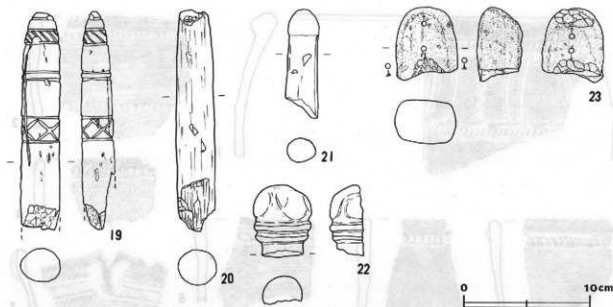
第19図 第101号住居跡実測図

第101号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図	深鉢形土器	A (25.2)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部から内傾して口縁部に至る。	砂粒・雲母・スコリア	P19 5%
1	縄文土器	B (11.5)	口縁部起厚面及び胴部文様帯との境目2段に隆起帯刺文が施し付けられている。隆起帯側は、右下がりの粗い弧線状の条線文を施した後、ループ状波線及び2本1組の弧状波線によって上下が隔ばれている。胴部には斜行する条線文が粗く施されているが、器面への食い込みは浅い。	ふよい褐色 普通	P+置土 (安行Ⅱ)



第20图 第101号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第21図 第101号住居跡出土石製品実測図(2)

図録番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第20図18	土 器	(5.2)	(3.4)	(2.8)	(38.7)	10	右足部分で、僅かに内彎する。垂下する2本の沈線が外側に僅かれ、沈線間は磨り消されている。前・後は全面、内側は部分的に縄文が施文されている。	BPG P; 覆土 砂粒 灰褐色 (後期後半)

図録番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第21図19	石 棒	(17.4)	3.2	2.7	(223.3)	黒色片岩か	Q13 斜行・格子状・横状沈線文 欠損品 両西部覆土
20	石 棒	(17.6)	3.2	2.8	(255.3)	黒色片岩	Q14 欠損品 覆土
21	石 棒	(8.6)	(2.6)	(2.0)	(54.7)	緑泥片岩	Q15 右端 欠損品 覆土
22	石 棒	(5.7)	(4.6)	(2.2)	(76.9)	黒色片岩	Q16 右端 文様彫刻 欠損品 覆土
23	磨 石	(5.9)	4.9	3.6	(131.5)	安山岩	Q17 敷石兼用 1/2欠損 中央部床面

第20図2～17は縄文土器の拓影図である。2～6は深鉢形の粗製土器口縁部片で、口縁部や頸部に連続刻文、連続刺突文が施され、胴部には縦あるいは斜行の条線が見られる。15もこれらの土器と同類の胴部片である。7、8の口縁部片は口縁部以下に隆起帯縄文が見られ、瘤状突起が貼り付けられている。これらは後期安行Ⅰ式に比定される土器群である。9、10は後期安行Ⅱ期に比定される口縁部片で、要所にフタ鼻状突起を貼り付けた隆起帯縄文が施されている。11、16は弧状の沈線区画内に縄文が施文され、後期後葉と思われる。12は口縁部片で、口縁部上端に連続刻文、胴部は沈線区画内に縄文が見られる。17は胴部片で、連続押捺を加えた隆線以下に縄文が施文されている。いずれも後期加曾利B3式の土器である。13は口縁部に横「8」の字状の突起が付けられ、口縁部上端に連続刻文、14は沈線を下に沿わせ連続刻文を加えた微隆起線を胴部上位に巡らせている。いずれも後期加曾利B2式の時期であると思われる。後期安行期の土器群が本跡に伴うものである。

所見 本跡は、覆土が削平され、壁の立ち上がり及び覆土の堆積状況は確認できなかったが、ピットの配列から規模及び平面形を推定した。本跡からは縄文時代後期加曾利B式期～安行Ⅱ式期にかけての遺物が出土しているが、主体となる遺物から縄文時代後期安行式期が本跡の時期と思われる。

第102号住居跡（第22図）

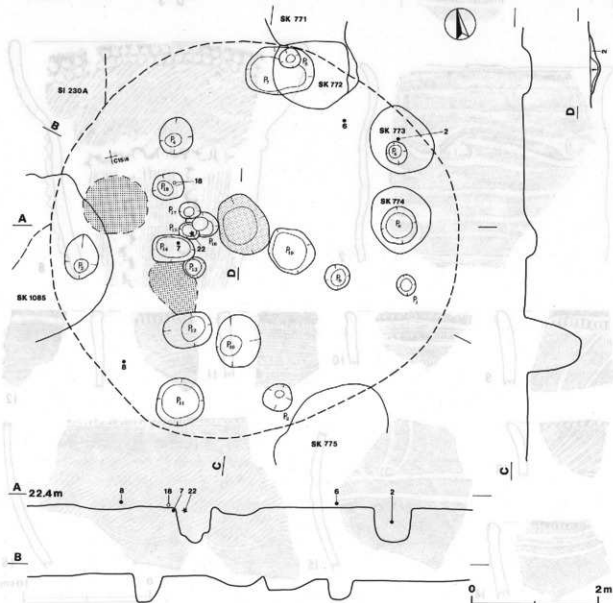
位置 調査区の西部，C15is区。

重複関係 本跡は，西側部分で第230A号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。また，東側部分で第772～774号土坑と，南側部分で第775号土坑と，西側部分で第1085号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

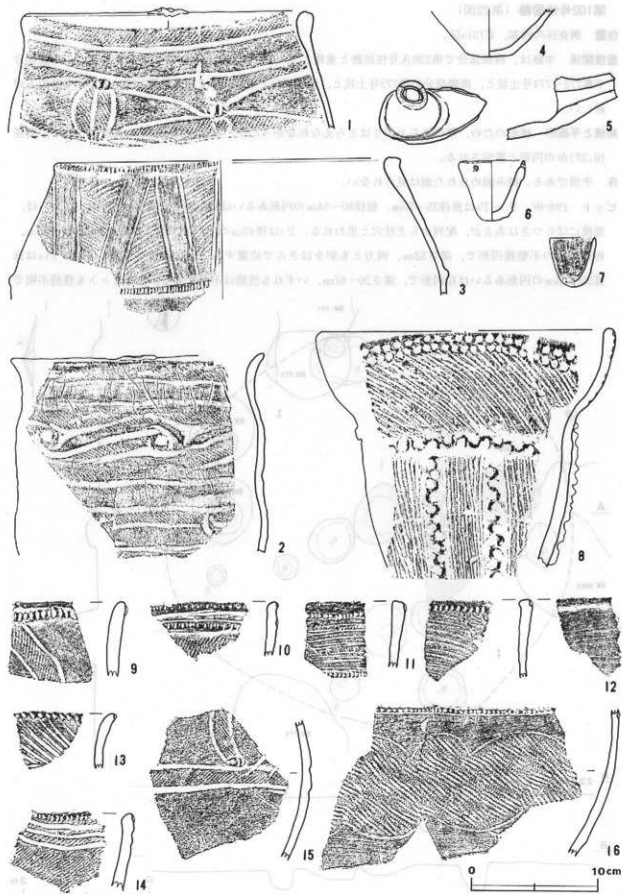
規模と平面形 攪乱のため，壁の立ち上がりはとらえられなかったが，支柱穴の配列から長径(6.54)m，短径(6.37)mの円形と推定される。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 19か所。P₁～P₉は長径35～75cm，短径30～54cmの円形あるいは楕円形で，深さ40～80cm。これらは，規模にばらつきはあるが，配列から支柱穴と思われる。P₉は径40cmの円形で，深さ37cm，P₁₁は長径50cm，短径42cmの不整楕円形で，深さ52cm，両方とも炉をはさんで位置する。炉に近接するP₉，P₁₃～P₁₅は長径30～73cmの円形あるいは楕円形で，深さ20～67cm，いずれも性格は不明である。他のピットも性格不明で

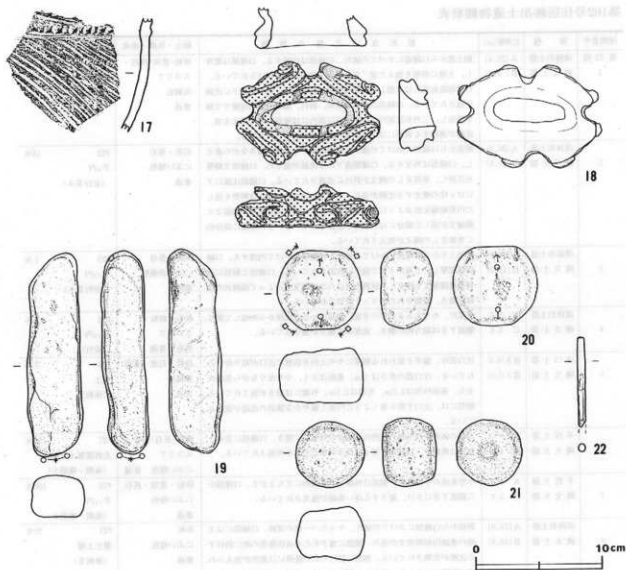


第22図 第102号住居跡実測図



第23图 第102号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)

筑前国筑紫郡志賀町志賀 3033号



第24図 第102号住居跡出土遺物実測・拓影図2)

ある。

炉はほぼ中央に付設されている。長径98cm、短径80cmの楕円形で、床を15cm掘りくぼめた地床炉である。覆土は焼土粒子を多量に含み、炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。炉の東側2か所に薄い焼土の広がりが見られるが、床は焼けてなく、炉ではない。

伊土層解説

- 1 明赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック中量、炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、小骨片少量含む
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、ソフトローム中量、炭化粒子極少量

遺物 覆土が削平されているため薄く、ピット内を主として縄文時代後期から晩期の土器片が出土している。

1, 3の深鉢形土器と19の磨石はP₁₃内から、2の深鉢形土器と20の磨石はP₁₄内から、4の底部片はP₁₅内から、6の手捏土器が北西部床面近くから正位の状態、7の手捏土器はP₁₄内から、16はP₁₂とP₁₃内から出土している。8の深鉢形土器は南西部覆土から出土しているが、流れ込みと思われる。5の注口土器も覆土中からの出土である。18の異形土製品はP₁₅内から、22の骨角器はP₁₅内から出土している。21はP₁内から出土している。また、鹿の角片や骨片及び他の獣骨と一緒に人の頭蓋骨片も出土している。

第102号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考			
第 23 図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(22.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内傾する。口縁部は肥厚し、上端に押痕を加えた逆「W」字の小突起が貼り付けられている。口縁部最起帯には単筋L R縄文充填で斜行平行文、縄文帯直下に沈線が施されている。口縁部以下には横波、斜行、弧状、縦の沈線で文様を構成し、三角形区画内及び半月状区画内には単筋L Rの縄文充填、沈線が連続する要素にはブツ鼻状の帯が貼り付けられている。	砂粒・雲母・長石・スコリア 灰褐色 普通	P20 P ₁₁ 内 (安行Ⅱa)			
		B(9.4)						
2	深鉢形土器 縄文土器	A(20.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに曲線を描きながら直立し、口縁部は外反する。口縁部直下には沈線が施され、口縁部沈線以下には4段の横走する沈線が走り、1段と2段の沈線間には列突を施した円形始端を結ぶように横帯弧線による入り組み文を施し、弧線文と弧線文が重なった部分には三叉文が配置されている。その隙間に部分的に単筋L Rの縄文が施されている。	石英・長石 にぶい褐色 普通	P22 P ₁₁ 内 (安行Ⅱa)			
		B(15.8)						
3	深鉢形土器 縄文土器	A(27.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部にかけて内傾する。口縁部は肥厚し、上端がナゲで扁平に作出されている。口縁部と胴部に隆起帯連続刻文を施し、区画内にはハケ状施文具によって縦線状の文様を描き、隠されたスリットで切られている。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P23 P ₁₁ 内 (安行Ⅱa)			
		B(11.0)						
4	深鉢形土器 縄文土器	B(3.7)	底部片。やや丸みをおびた平底。胴部は小さな突起から外傾して開く。胴部下は縦方向の溝き、底部にも溝きが施されている。	長石・砂粒・スコリア 黒色 普通	P25 P ₁₁ 内 (安行)			
		C 3.4						
5	注 門 土 器 縄文土器	長さ(9.0)	注口部片。偏平と思われる胴部にやや上向き状態に注口が取り付けられている。注口部の長さは5cm。蓋部は太く、やや反りながら先端に立る。蓋部外径は4.0cm、先端は2.1cm、外面には溝きが施されている。胴部には、注門を取り巻くように円形と縦やかな弧状の沈線が施されている。	砂粒・石英・雲母 黒褐色 普通	P26 覆土上 (後期)			
		高さ(5.0)						
6	手 捏 土 器 縄文土器	A 5.0	小形の鉢形手捏土器。凸凹の底部から外傾して開く。口縁部に至る。管形は短縮で、口縁部に径4mmほどの穿孔が1か所施されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P27 北西部置土層 (後期-晩期)			
		B 4.8						
7	手 捏 土 器 縄文土器	C 1.9	小形丸底の手捏土器。胴部は外傾して直線的に立ち上がる。口縁部から胴部下半にかけ、垂下する浅い条線が施されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	P28 P ₁₁ 内 (後期-晩期)			
		A 3.5						
8	深鉢形土器 縄文土器	B 3.9	胴部から口縁部にかけての破片。キャリバー状の深鉢。口縁部には2段の連続円形刺突文が走り、胴部に施された小波状隆起帯の間に斜行する沈線が充填されている。胴部に設けられた隆起帯には刺突が加えられ、波が強調されている。胴部から胴部にかけて同様の隆起帯を垂下させ、隆起帯間には縦方向の沈線が充填されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P21 覆土上層 (朝利Ⅱ)			
		A(23.8)						
第24図18	異形土製品	最大長	計測値(cm)	重量(g)	現存率(%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考	
		最大幅						
		11.3	8.2	(3.5)	(184.7)	60?	上部欠損のため器形は不明だが、台部と思われる。楕円形土の土製品で、長径と短径の端部が削り込まれ凹部を呈し、中央に楕円形の孔を有する。削り込みによる突内部分には沈線と縦線が三叉文、曲線文が描かれ、削り込み部分に施した沈線が結ばれている。上部への立ち上がり部分には沈線を加えた孔が施され、直下に三叉文が彫刻されている。外面が赤彩されている。	DP7 P ₁₁ 内 砂粒・長石・石英・バミス・スコリア 黒褐色 (安行Ⅱa)

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)				重量(g)	石 質	備 考		
		長さ	幅	厚さ	重量					
第24図19	磨 石	16.2	4.3	3.4	360.2	流 紋 岩	Q18 P ₁₁ 内			
		20	6.3	6.6	4.1			284.2	流 紋 岩	Q19 敷石専用 P ₁₁ 内
		21	5.2	5.5	4.3			156.2	安 山 岩	Q20 P ₁₁ 内

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)				重量(g)	石 質	備 考
		長さ	幅	厚さ	重量			
第24図22	骨 針	(7.1)	0.7	0.6	(2.8)	B2 骨角器(鹿)	欠損品 P ₁₁ 内	

第23-24図9-17は縄文土器片の拓影図である。9と15はいずれも晩期安行Ⅲa式に比定される深鉢形土器の破片で、縄文充填の斜行平行文、15は縄文充填で胴部中に帯縄文、上段に月状文で連結部に貼瘤が見られる。10は口縁部以下2段に刻文帯を巡らし、以下に縄文充填、11-13は口縁部に連続刻文、以下に粗い斜行あるいは横の条線文、17も同類の胴部片で、頸部に巡る刻文帯の上下に斜行条線が見られる。16は頸部に沈線区画の刻文帯、以下胴部下半に入り組み弧線文を描き、区画内に縄文充填。これらは後期安行Ⅰ式に比定される土器群である。14は波状口縁で、単節縄文R.L施文後、口縁部に連続刻文、以下に3段の沈線を施している。後期加曾利B3式に比定される土器片と思われる。

所見 本跡は、覆土がほとんど削平され、堆積状況と壁の立ち上がりを確認できなかったが、ピットの配列と遺物の広がりから規模と平面形を推定した。縄文時代後期安行Ⅰ式期と縄文時代晩期安行Ⅲa式期の土器が大半を占めるが、時期は縄文時代晩期安行Ⅲa式期と思われる。

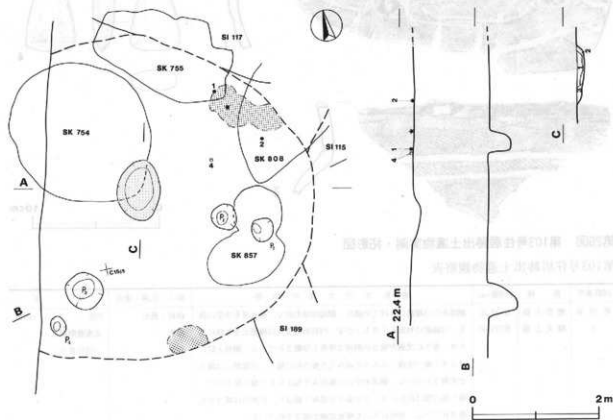
第103号住居跡 (第25図)

位置 調査区の西部、C15is区。

重複関係 本跡は、北側部分で第754号、755号土坑と、南東側部分で第189号住居跡、第857号土坑と重複しているが、いずれも本跡の床下で確認されており、本跡の方が新しい。また、東側部分で第115号住居跡、第808号土坑と重複している。115号住居跡より本跡の方が新しいが、第808号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡の西部は、復乱のため確認できなかったが、長径(5.17)m、短径(4.30)mの楕円形と推定される。

長径方向 (N-73°-W)



第25図 103号住居跡実測図

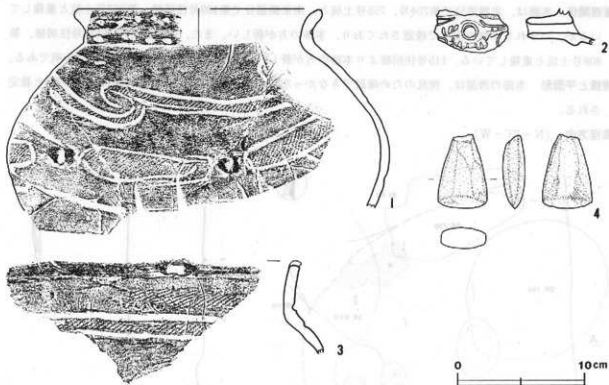
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。
 ピット 4か所。P₁は長径45cm、短径40cmの卵形で、深さ37cm、P₂は径36cmの不整形円で、深さ75cm、P₃は径61cmの円形で、深さ47cm、P₄は長径32cm、短径24cmの楕円形で、深さ37cm。これらは、主柱穴の可能性も考えられるが、柱穴ととらえておきたい。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径97cm、短径69cmの楕円形で、床を12cm掘りくぼめた地床炉である。覆土は赤褐色土であるが、炉床はそれほど硬化していない。北西部に焼土の広がりが見られるが炉ではない。

伊土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、小骨片少量含む
- 2 に近い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、小骨片少量含む

遺物 本跡の床面と削平のため薄くなってしまった覆土中から縄文時代後期以降の土器片が出土している。細片が多く、器形のわかるものは少ない。1の甕形土器は北西部に広がる焼土の床面から横位の状態で、2の注口土器は東部床面から、4の磨製石斧は炉の北西部床面から出土している。これらの遺物に混じり、北西部の焼土の中から獣骨片が8点出土している。



第26図 第103号住居跡出土遺物実測・拓影図

第103号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	甕形土器 縄文土器	A(19.0) B(15.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は楕形状で、最大径を中位に持ち、口縁部は外反して立ち上がる。円形刺突文を口縁部上下2段に流らせ、直下に沈線が描かれ胴部文様帯と分離されている。胴部上位には2本1組の沈線による入り重み文を横方向に施し、沈線間には縄文が充填されている。胴部中位には総線のみが加えられた面を貼り付け、筒と筒の間は向かい合うやや扁平な弧線で結ばれ、区画内は縄文が充填されている。中位以下にも縦走沈線が施文されている。	砂粒・灰石 褐色 青濁	F25 北東環状溝上 (安行Ⅲb)

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 26 図 2	注口土器 縄文土器	長さ(5.3) 高さ(3.0)	注口部片。注口の基部は外徑1.9cm、先端が1.6cmで、ほぼ水平に胴部に取り付けられている。基部の下には中央が凹む鋭利な突起が貼り付けられ、基部中央からは胴部に落ちるとされる扇面三角形の隆帯が施されている。	灰石・砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	F90 10% 東條野床上 (安行Ⅲa-Ⅲb)

図版番号	器 種	計 測 値			石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第26図4	磨製石斧	(5.8)	3.9	1.7	(57.6)	石灰岩 021 定角式 一部欠損 中央部琢磨

第26図3は甕形土器口縁部片の拓影図である。口縁部に部分的に縄文を施文し、口縁部下には沈線が2段施され、区画内は縄文充填、口唇部に中央が凹む小突起が貼り付けられている。晩期安行Ⅲb式に比定される土器である。

所見 本跡の西側は擾乱のため確認できず、東側の覆土もほとんど削平されていたため、壁の立ち上がりや覆土の堆積状況は不明である。本跡の規模と平面形は、炉を中心とした遺物の広がりから推定した。時期は、出土遺物から縄文時代晩期安行Ⅲb式期と思われる。

第104号住居跡 (第27図)

位置 調査区の西部、D15c4区。

重複関係 本跡は、北東側部分を第294号、296号土坑に、南東側部分を第295号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡の西側は、擾乱のため遺構を確認できなかったが、長径7.68m、短径(7.40)mの円形と推定される。

壁 東側で僅かに残存している。壁高5～7cmで、外傾して立ち上がる。

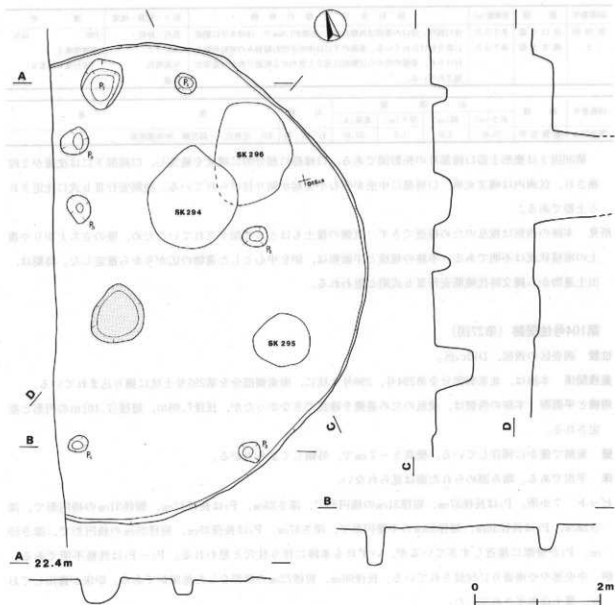
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 7か所。P₁は長径37cm、短径31cmの楕円形で、深さ23cm、P₂は長径42cm、短径31cmの楕円形で、深さ28cm、P₃は長径36cm、短径33cmの不整形円で、深さ37cm、P₄は長径35cm、短径25cmの楕円形で、深さ59cm。P₂が壁際に接近しすぎているが、いずれも本跡に伴う柱穴と思われる。P₅～P₇は性格不明である。

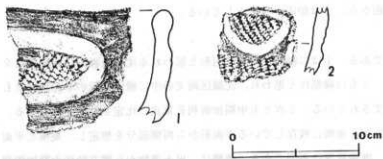
炉 中央部やや南寄りに付設されている。長径96cm、短径72cmの卵形をした地床炉である。炉床が露出しており、覆土は削平されていた。

遺物 炉東側の床面及び覆土中から縄文土器片が少量出土している。細片が大半で、器形のわかるものはほとんど出土していない。1は炉東側の床面から、2は炉内から出土している。

第28図1、2は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、楕円形と思われる沈線区画内に複節縄文を施文して口縁部文様帯を構成している。2も口縁部片と思われ、沈線区画文の中に横位回転の単節縄文RLを施し、胴部にも縦位回転の縄文が施文されている。2点とも中期加曾利EⅢ式に比定される土器である。所見 本跡の西側部分が確認できなかったが、東側に残存している平面形から西側部分を想定し、規模と平面形を推定した。覆土は削平されて薄く、堆積状況は不明である。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。



第27図 第104号住居跡実測図



第28図 第104号住居跡出土遺物実測・拓影図

第105号住居跡（第29図）

位置 調査区の西部，D15a区。

重複関係 本跡は，北側部分で第194号住居跡と，南側部分で第743号，840号及び846号土坑と，西側部分で第191号住居跡，第809号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。



第29図 第105号住居跡実測図

規模と平面形 西側は、祝乱のため遺構を確認できなかったが、長径(6.30)m、短径5.04mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-80°-W]

壁 東側で壁が残っており、壁高8-13cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 全体に平坦である。南部と東部に、緩やかな落ち込みが見られる。踏み固められた面は見られない。

ビット 11か所。P₁-P₇は径24-46cm、深さ25-41cm (P₂のみ84cm)で、配列から主柱穴と思われる。P₈(長径55cm、短径34cmの卵形で、深さ68cm)、P₉(長径42cm、短径33cmの不整楕円形で、深さ46cm)、P₁₀(長径39cm、短径30cmの楕円形で、深さ56cm)は、炉を囲むように位置している。P₁₁は径39cm、深さ44cmで、P₁の近くに位置している。いずれも性格は不明である。

炉 中央部やや西側に付設されている。長径88cm, 短径55cmの楕円形で, 床を18cm掘りくぼめた地床炉である。

覆土は焼土小ブロック, 焼土粒子を含み, 炉床は火熱を受け, 赤変硬化している。

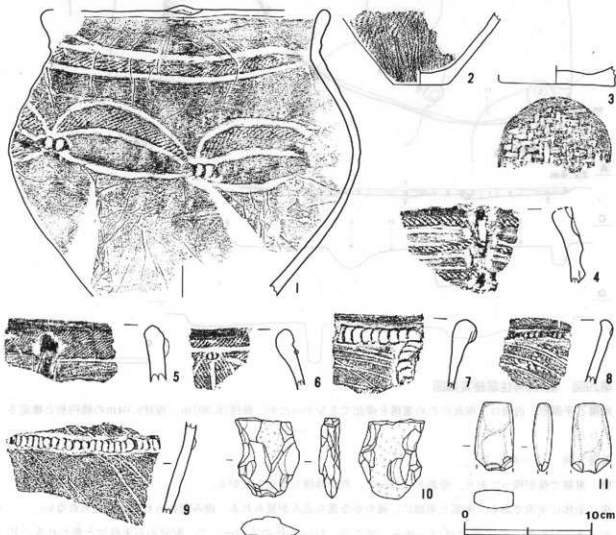
伊土層解説

- 10 赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム粒子少量, 炭化粒子極少量
- 11 に近い赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
- 12 に近い赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック少量, 炭化粒子極少量
- 13 に近い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック極少量
- 14 に近い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量

覆土 自然堆積である。土層8, 9は本跡より古いピット状の掘り込みである。土層5~7は, 本跡より新しいピット状の掘り込みである。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子極少量, 小骨片少量含む
- 2 褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 に近い褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子極少量
- 4 に近い褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック極少量, 小骨片極少量含む
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極少量, 小骨片極少量含む
- 7 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 8 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック極少量
- 9 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量



第30図 第105号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 東壁寄り及び南東部の床面と覆土中から集中的に遺物が出土している。ほとんどが細片で, 器形の判断できるものは極少量である。遺物が集中している南東部の床面から2が逆位の状態で, また5もほぼ同じ位

置から出土している。4は南東壁際床面からの出土である。他に11の磨製石斧は南西部覆土中、10の打製石斧も覆土中からの出土である。

第105号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成		備考
第30図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(22.9)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内摩して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部上端に粘土貼り付けの小突起を有し、内面磨き、外縁横ナデによる整形が施されている。口縁部直下に沈線区画の縄文帯を巡らし、磨大径を持つ胴部中位を挟み、下向きの弧線を2本、対応してやや上向き弧線を1本連続して描き、上段の区画内には縄文が施文されている。弧線は縦刷みを持つ胎帯で連続されている。	砂粒・長石・雲母・スコリア ぶい・褐色 普通	P178 南東部床面 (安行Ⅲb)	40%
		B(22.8)				
2	深鉢形土器 縄文土器	B(5.7)	底部から胴下部にかけての破片。平底で、胴部は外縁して開く。胴部に厚削し及縄文が縦位回転で施文されているが、底部から4cmほどは縦方向の磨きが施されている。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P176 覆土 (安行)	10%
		C 4.4				
3	深鉢形土器 縄文土器	B(1.6)	底部片。平底で、中央に厚みを待つ。底部側面は磨きが施され、底部には磨代痕が残されている。	砂粒・雲母・長石 黒褐色 普通	P177 中央部覆土 (加曾利Bか)	5%
		C 9.2				

図版番号	器種	計測値				石質	備	考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第30図10	打製石斧	(6.3)	(5.2)	1.8	(59.4)	砂 岩	Q87 欠損品	覆土
11	磨製石斧	(5.5)	3.1	1.5	(45.5)	緑泥片 岩	Q88 定内式 刃部欠損	南西壁際覆土

第30図4～9は縄文土器片の拓影図である。4～8は口縁部片、9は胴部片である。4は口縁部以下に3段の縄文帯が見られ、隙間は沈線の区画文で内部磨り消し、縦区画の沈線は刺突状で深い。区画の境界に小突起が付けられ、1、2段間は刺突状の沈線で結ばれている。5も口縁部縄文帯の下に内部磨り消しの沈線による区画文、縄文帯上には小突起を有する。6は口縁部の沈線直下に付けられたブク鼻状胎帯から胴部に沈線が派生し、口縁部及び胴部に部分的に縄文が施文されている。3点とも晩期安行Ⅲa式前後の範疇か。7は口縁部に粘土紐貼り付けの刻文帯、9は胴上部に刻文帯が見られる。後期安行式に比定される土器と思われる。8は口唇部外面に連続刻文、以下胴部には縄文施文後粗い斜行沈線が施され、内面磨き、後期加曾利B式に含まれる土器と思われる。

所見 本跡は、東側に残っている遺構の形状と炉を中心として西側の部分を想定し、規模と平面形を推定した。遺物は後期加曾利B式期～晩期安行Ⅲa式期までのものが混在しており、時期の特定は困難であるが、縄文時代晩期安行Ⅲa式期前後が本跡の時期と思われる。

第106A号住居跡(第31図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C16f3区。

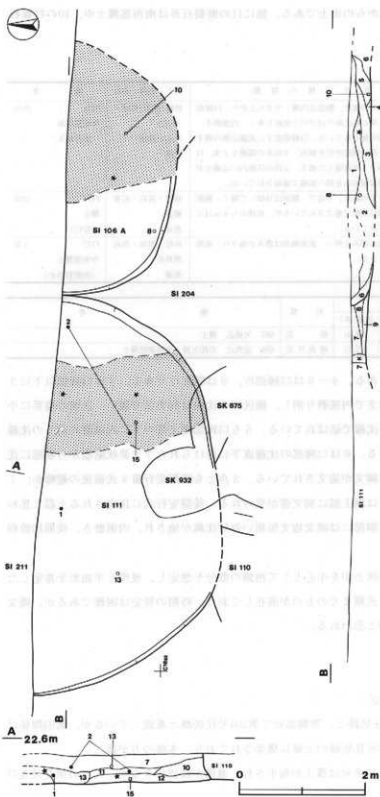
重複関係 本跡は、北側部分で第106B号住居跡と、南側部分で第204号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、本跡は第206号、207号住居跡の上層に構築されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 東西径(4.11)m。本跡の北側半分は覆土が削平され、遺構が確認できなかったため南北径及び平面形は不明である。

壁 南側から西側にかけて残存している。壁高33～38cmで、外傾して立ち上がる。東側は立ち上がりか確認できなかった。

床 全体に柔らかく、平坦である。

覆土 8層からなり、自然堆積の様相を示している。焼土粒子を含む層が、西部に広がっている。



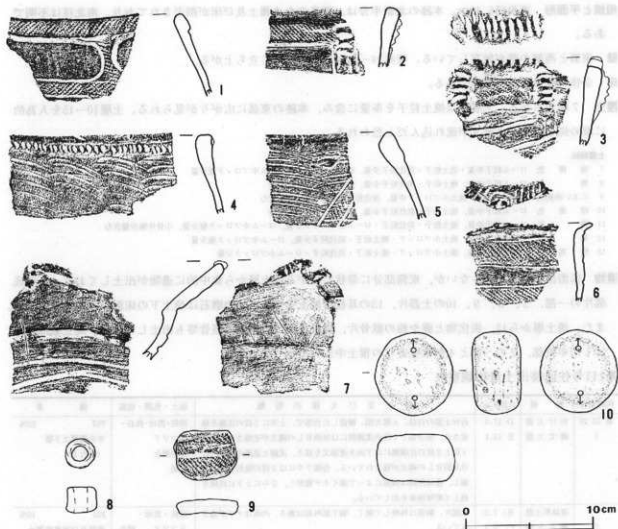
- 土層解説
- 1 黄褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化材料少量
 - 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック少量、小骨片極少量含む
 - 3 桃褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量、小骨片極少量含む
 - 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、小骨片少量含む
 - 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量、小骨片少量含む
 - 6 暗褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量

遺物 覆土中から縄文時代後期から晩期にかけての土器片が出土している。細片が多く、器形の判別できるものは少量である。本跡の南部覆土から1, 2, 6が, 3は中央部の焼土層の中から出土している。8の耳栓は南西壁際覆土から出土している。他に, 9の土製円板, 10の磨石が覆土中から出土している。焼土層からは鹿角や獣骨片も8点出土している。

第32図 1-7は縄文土器片の拓影図である。1-3は深鉢形土器の口縁部片で, 1, 2は口縁部縄文帯の下に沈線区画の枠状文が見られる。3は口縁部上端と外面に刻みを加えた貼輪。沈線区画内に部分的に縄文が施文されている。4, 5は粗製土器の口縁部片で, 4は口縁部に連続刻文, 5は口縁部下に糸線

第31図 第106A・111号住居跡実測図

区画内は縄文が施文されている。7は浅鉢形土器の波状を呈する口縁部片で, 波頂部に突起が設けられ, 頸部以下には沈線で横方向主体のモチーフが描かれている。6は小形の深鉢形土器で, 外反する口縁部内側に刻みと小突起が施されている。胴部には沈線区画の縄文帯が施文されている。これらは晩期安行Ⅲ a-Ⅲ b式に比定される土器である。



第32図 第106A号住居跡出土遺物実測・拓影図

第106A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第32図 8	耳 検	2.0	2.3	1.3	9.5	100	有孔の耳検で内径1.3cm 無文	B98 南西壁塗覆土
9	土製円板	3.9	5.0	1.2	28.0	100	口縁部片利用 辻線及び単筋縄文R.L	B19 覆土

図版番号	器 種	計 測 値			石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)		
第32図10	磨 石	6.6	6.2	3.8	213.3	安山岩 Q22 南東部断面

所見 本跡は、北側部分が確認できず、東側部分も壁の立ち上がり不明瞭のため、規模及び平面形は不明である。本跡からは、竈、ピット等は確認されなかった。本跡から出土している遺物は後期加曾利B3式期～安行Ⅲb式期にかけてのものが混在しているが、縄文時代晩期前葉が本跡の時期と思われる。

第111号住居跡 (第31図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C16f区に位置する。

重複関係 北側部分で第211号、第106B号住居跡と、南側部分で第110号と重複しているが、新旧関係は不明である。南側部分で204号住居跡、第875号、932号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 東西径6.40m。本跡の北側半分は、攪乱のため覆土及び床が削平されており、南北径は不明である。

壁 東側と西側の壁が残存している。壁高24~44cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体に軟らかく、平坦である。

覆土 7層からなる。土層11は焼土粒子を多量に含み、本跡の東部に広がりが見られる。土層10~15を人為的に埋め戻した後、土層9が流れ込んだと思われる。

土層解説

- 7 珪 雫 色 ローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量
- 8 珪 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 9 に近い赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 10 珪 雫 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック極少量
- 11 珪 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量、小骨片極少量含む
- 12 珪 雫 色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 13 珪 雫 色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 床面出土の遺物は少ないが、東側部分に帯状に広がる焼土層から集中的に遺物が出土しており、2の底部片の一部、3、8、9、10の土器片、13の耳栓は焼土中から、15の磨石は焼土下の床面から出土している。また、焼土層からは、炭化物と鹿や他の獣骨片、焼骨片及び大型鳥の脛骨等も出土している。焼土層以外では1が中央部、2の一部と4が東壁寄りの覆土中から出土している。

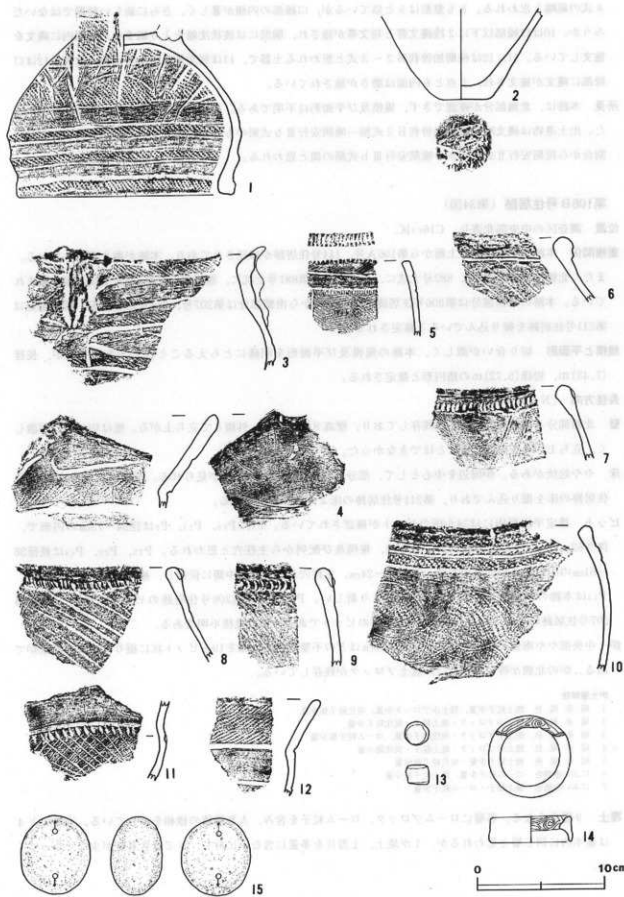
第111号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第33図 1	台付土器	D 17.0	台付土器の台部。上部欠損。彎曲した台部で、上半に2段の沈線を描き、下半に1段の沈線には単線Rの縄文が充填されている。1段と2段の沈線間には下向き逆風文を描き、沈線と風線の区画内には単線Rの縄文が施されている。台部下半には3段の隆起帯縄文を施し、隆起帯間には指輪によって深くナデ整形し、さらに上下に沈線を描いて肥厚効果を出している。	砂粒・雲母・長石・スコリア 暗赤褐色 普通	P57 60% 中央部覆土下層 (安行Ⅰ)
	縄文土器	E 13.1			
2	深鉢形土器	B (7.2)	底部片。胴部は外傾して開く。胴下部外面は磨り、内面はナデが施されている。	砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通	P31 10% 東部及び海東部覆土 (安行)
	縄文土器	C 3.5			

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第33図13 14	耳栓	1.9	1.8	1.6	5.8	100	細文 内環形で、内径(4.7)cm。沈線で溝状の単位文が描かれ、これが3~4単位配置されて沈線で結ばれていると思われる。	DP22 南西部覆土 DP23 覆土 砂粒・長石灰 褐色 普通 (晩期前葉)
	耳飾り	(6.2)	-	2.0	(10.5)	25		

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第33図15	磨石	6.3	5.6	4.2	196.3	安山岩	040 南部床面

第33図3~12は縄文土器片の拓影図である。3は波状口縁で、口縁部以下に帯縄文、波底部で刻みを加えた縦長貼輪で連結され、口縁部には突起が付けられている。4も波状口縁で、口縁部は頸部で外傾し、波頂部に突起、以下に沈線で鈎状のモチーフを描き、沈線以下には部分的に縄文が施文されている。5は口縁部上端と2段目沈線に刻み、口縁部外面には斜行の、胴部には偏平な「V」字状の細密沈線がそれぞれ施文されている。3点とも晩期安行Ⅲb式に比定される土器である。6~9は粗製土器の口縁部で、6は浅い斜行沈線を粗く施文し、口縁部下を巡る沈線に文様が切られている。7は口縁部に爪形の刻文、以下に斜行平行沈線を施文し、区画内に縄文施文、9も口縁部に爪形の刻文が施され、いずれも後期安行Ⅱ式~晩期安行Ⅲ



第33图 第111号住居跡出土遺物実測・拓影图

a式の範疇と思われる。8も整形は9と似ているが、口縁部の内傾が著しく、さらに新しい時期ではないだろうか。10は口縁部以下に2段縄文帯と刻文帯が施され、胴部には波状沈線を入り組ませ、区画内に縄文を施している。11, 12は後期加曾利B 2-3式と思われる土器で、11は刻文帯以下に格子状の沈線、12は口縁部に縄文が施され、2点とも内面は磨きが施されている。

所見 本跡は、北側部分が確認できず、規模及び平面形は不明である。また、炉及び柱穴等も確認されなかった。出土遺物は縄文時代後期加曾利B 2式期～晚期安行Ⅲ b式期のものが混在しているが、時期は出土量の割合から後期安行Ⅱ式期末から晚期安行Ⅲ b式期の間と思われる。

第106B号住居跡（第34図）

位置 調査区の中央部北寄り、C16e区。

重複関係 本跡の南側部分の上面から第106A号、111号住居跡が確認されており、本跡が掘り込まれている。

また、北側部分を第880号、882号土坑に、南側部分を第881号土坑に、西側部分を第933号土坑に掘り込まれている。本跡の東側部分は第206号住居跡を、南東側から南側部分は第207号、204号住居跡を、西側部分は第211号住居跡を掘り込んでいると推定される。

規模と平面形 切り合いが激しく、本跡の規模及び平面形を明確にとらえることはできなかったが、長径[7.43]m、短径[5.72]mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-36°-E]

壁 北側部分と西側部分に僅かに残存しており、築高8-16cmで、外傾して立ち上がる。他は切り合いが激しく、立ち上がりを確認することはできなかった。

床 やや起伏がある。炉周辺を中心として、部分的に踏み固められた面が見られる。西側部分の床は第211号住居跡の床を掘り込んでおり、第211号住居跡の床より低くなっている。

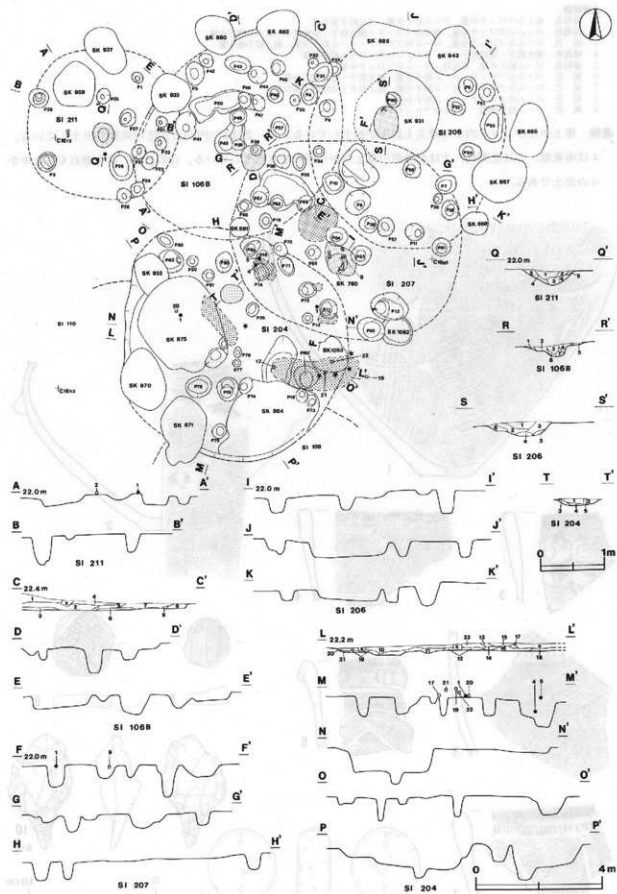
ピット 推定平面形内には34か所のピットが確認されている。P₄、P₆、P₂₃、P₈は径54-73cmの円形で、深さ62-70cm（P₂₃は45cm）。これらは、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₂₅、P₂₁、P₄₁は長径36-61cmの円形あるいは楕円形で、深さ15-24cm、主柱穴と主柱穴の中間に位置し、補助柱穴と思われる。P₃₃は本跡の炉を掘り込んでおり、本跡より新しい。P₉、P₂₄は第206号住居跡のピット、P₁₅、P₃₄は第207号住居跡のピット、P₂は第211号住居跡のピットである。他は性格不明である。

炉 中央部やや南側に付設されている。径75cmほどの不整形円形で、床を19cmピット状に掘りくぼめた地床炉である。炉の北側が特に赤く焼け、焼土ブロックが残存している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭土小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子極少量
- 4 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・炭化物少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子少量・炭化粒子極少量
- 6 に近い赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 7 に近い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

覆土 9層からなる。各層にロームブロック、ローム粒子を含み、人為堆積の様相を示している。土層1と4は基本的に同じ層と思われるが、1が焼土、土器片を多量に含むのに対し、4では含有量が少なくなっている。



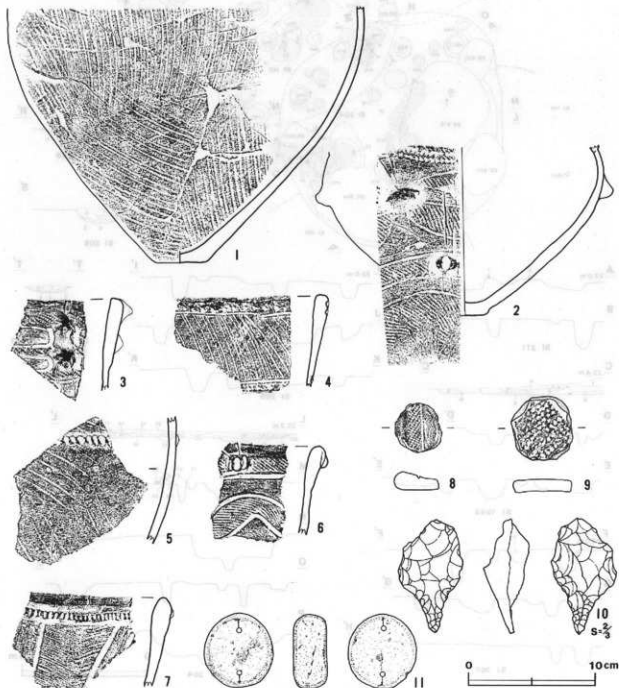
第34图 第106B·204·206·207·211号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小アブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム小アブロック中量、焼土小アブロック・炭化粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小アブロック中量、ローム中アブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 4 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小アブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小アブロック中量
- 6 暗褐色 ローム小アブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム小アブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 8 暗褐色 ローム中アブロック・ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中アブロック少量

遺物 覆土中及びピット内から縄文土器片が出土している。1, 2はP₃₇内から正位の状態出土している。

4は南東部, 5は北東部, 7は北西部の覆土中からそれぞれ出土している。10の石錘, 11の磨石も覆土中からの出土である。



第35図 第106B号住居跡出土遺物実測・拓影図

第106B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第35図 1	深鉢形土器	B(20.3)	底部から胴部にかけての破片。小形で平底、胴下部は外傾して圓さ、中位で内彎しながら直上に立ち上がる。胴中位の文様はハケ状施文具による垂下する集合条線、下部は右が下りに斜行する集合条線が施文されている。条線の器面への食い込みは浅い。	砂粒・長石 黒色 普通	P32 P31内 (安行I)
	縄文土器	C 3.9			
2	深鉢形土器	B(13.3)	底部から胴部にかけての破片。小形の平底で突出欠頂。胴下半は外傾して圓さ、中位で内彎する。胴部にくびれをもつ器形と思われ、くびれ部に斜突による2段の刻文帯が施されている。胴中位には沈線間隙り消し無文帯を挟んで向かい合う連続円弧文を描き、区隔内は厚距R Lの縄文充填。円弧文は貼り瘤で連続されている。胴下半には沈線間縄文帯を巡らし、縦刻みを加えた瘤を施り付け、瘤間隔にも縦刻みが付加されている。胴下部は沈線以下に縄文を充填し、最下部は磨り消されている。	長石・石英・砂粒・スコリア 褐色 普通	P33 P31内 (安行I)
	縄文土器	C 3.7			

図版番号	器種	計測値(cm)			現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考	
		最大長	最大幅	最大厚				
第35図8	土製円板	4.0	3.7	1.5	19.2	100	口縁部片利用 沈線区画の口縁部縁起帯縄文残存	DP10 覆土
9	土製円板	5.1	4.7	1.0	27.7	100	表面に縄文 摩滅が著しい	DP11 覆土

図版番号	器種	計測値				重量(g)	石質	備考
		長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第35図10	石 鏝	4.5	2.6	1.8	11.0	チャート	Q23 覆土	
11	磨 石	5.9	5.5	2.8	120.0	安山岩	Q47 歳石兼用 覆土	

第35図3～7は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部以下3段の隆起帯縄文が瘤状突起で連結されている。4は口縁部と頸部に施された平行沈線間に連続刺突文が見られる口縁部片、5は頸部を巡る隆起帯刻文が見られ、いずれも後期安行I式に比定される粗製土器である。6は口縁部肥厚面に縄文施文後のブタ鼻状貼瘤、以下曲線的な沈線区画内に縄文が施文され、7は口縁部隆起帯刻文の弧状条線を沈線区画の磨消帯が切断している。2点とも後期安行II式の時期と思われる。

所見 本跡は、重複により壁の遺存状態が悪いので、支柱穴の配列と床質から規模及び平面形を推定した。遺物の出土量は多くないが、その中で縄文時代後期安行I式期の土器の割合が多いことから、時期は当該期と思われる。

第204号住居跡 (第34図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16g3区。

重複関係 本跡は、北側部分が第106A号、106B号及び111号住居跡に、南側部分から西側部分にかけては第108号、110号住居跡に掘り込まれている。本跡の北東側部分で第207号住居跡と、南側部分から西側部分にかけて第1053号、864号、871号、870号、875号及び932号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡は、壁の立ち上がりをとらえられない部分が多く、平面形を明確に把握できなかったが、長径(7.08)m、短径(6.40)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-31°-W]

壁 南東壁と南西壁の一部が残存している。壁高10cmほどで、緩く外傾して立ち上がる。他は切り合いが激しく、立ち上がりを確認することができなかった。

床 ほぼ平坦である。中央部を中心として、踏み固められた面が広がっている。

ピット 推定平面形内に、24か所のピットが確認されている。P₁₃～P₁₈、Prs、P₂₀は長径38～52cmの円形で、深さ68～86cm。これらは、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₁₃、P₁₄は第207号住居跡のピットである。他は性格不明である。

炉 推定平面形内の北側に付設されている。長径76cm、短径58cmの楕円形で、床を皿状に9cm掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子極少量
- 5 灰赤色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子極少量

覆土 13層からなる。各層とも堆積状況が不自然であり、人為堆積の様相である。また、本跡内の北側の覆土上層には、焼土を部分的に含む地点が4か所、中央から東側にかけては、炭化材、炭化物を含む層が帯状に広がっている。これらの層には骨片も含まれている。

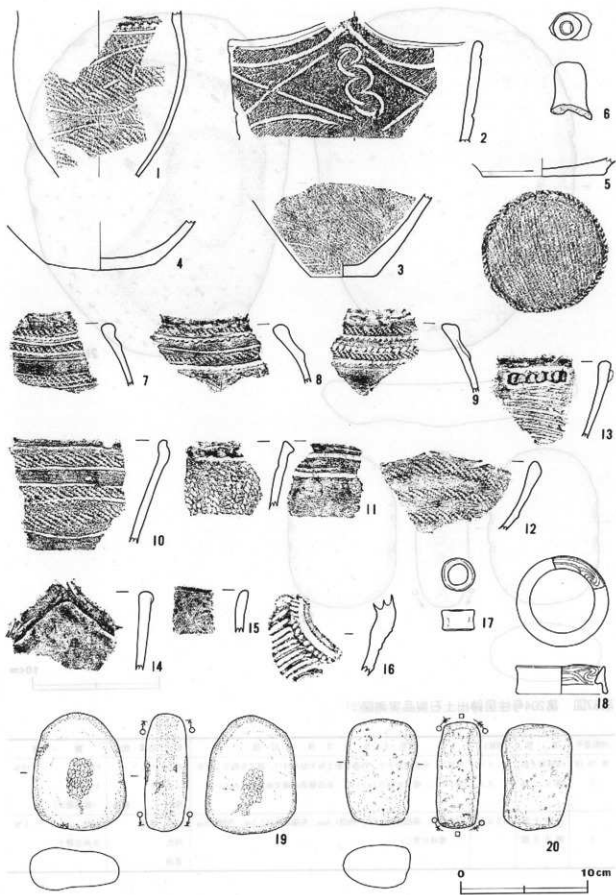
土層解説

- 10 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、小骨片少量含む
- 11 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、小骨片極少量含む
- 12 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子極少量
- 13 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、小骨片極少量含む
- 14 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量、小骨片中量含む
- 15 褐色 ローム粒子多量、炭化物・ローム中ブロック少量、焼土粒子極少量
- 16 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量、炭化材極少量、小骨片少量含む
- 17 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量、小骨片少量含む
- 18 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 19 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 20 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 21 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 22 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量

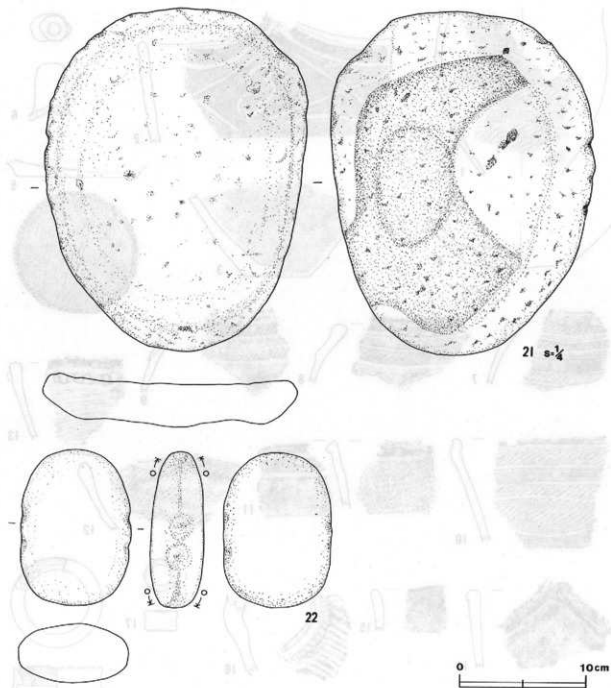
遺物 床面及び覆土中から多量の遺物が出土している。1は西部床面から、4は北部の焼土中から、5の底部はP₁内から、17の耳栓、21の石皿及び22の磨石は東部の炭化材を含む層から出土している。また、炭化材の層からは獣骨片も出土している。他に2の口縁部片、4の底部片、18の耳飾りも出土しているが流れ込みと思われる。

第204号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36回 1	深鉢形土器	B(13.3)	胴部片。内湾しながら立ち上がり、胴部上位で僅かにくびれを持つ器形と思われる。くびれ部に沈線間刻文が遺らされている。以下に上向き、下向きの連続弧線状文を描き、区画内に単筋Lの縄文を施文し、区画外は磨り消し、胴下半を斜走する沈線で区画し、以下に単筋Lの縄文が充填されている。	砂粒・スコリア	P127 30% 西部床面 (加賀野B3一併併)
	縄文土器			にぶい褐色 普通	
2	深鉢形土器	A(20.2)	胴上半から波状の口縁部にかけての破片。口縁部は単筋Lの縄文を施文した後、口縁部に平行する波状の沈線が施されている。胴上部は波頂部下に縦の入り眼を弧線文を描き、区画内は縄文充填。波頂部間には沈線で「X」字状のモチーフを描き、部分的に縄文が施文されている。	砂粒・霰母・長石	P121 5% 覆土上層 (砲山2)
	縄文土器	B(8.2)		暗赤褐色 普通	
3	深鉢形土器	B(6.5)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下部に右下がりの斜行条線が横く施文されている。	砂粒・霰母・長石・スコリア	P122 10% 北東部覆土
	縄文土器	C 5.1		にぶい褐色 普通	(後期後半)
4	浅鉢形土器	B(3.3)	底部片。底部は丸みを帯び、胴部は外傾する。内・外面ともナアにより整形されている。	砂粒・霰母・長石	P124 10% 北部覆土下層
	縄文土器	C 8.9		明赤褐色 普通	(後期後半)



第36图 第204号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第37図 第204号住居跡出土土製品実測図(2)

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考	
第36図 5	浅鉢形土器 縄文土器	B(1.3) C 9.9	底部片。底部内面ナデ、外面は粘土板を貼り付け、縄文を施文した後削り出し、磨きが施されている。底部断面に縄文面が残されている。	砂粒・パミス・スコリア 棕色 普通	F125 P14内 (後期後半)	10%
6	注口土器 縄文土器	長さ(4.5)	注口部片。基部外径1.7cm、内径1.4cm、先端部外径2.2cm、内径1.0cmで、厚減が著しい。	砂粒・雲母 棕色 普通	F126 北西部覆土	5%

国庫番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	砂形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第36図17	耳飾り	2.6	—	1.7	6.1	100	小形の環形耳飾で、内径1.6cm。文様は施されていない。	DP35 中央部覆土 砂粒・長石 におい覆土色 (後期後室か)
18	耳飾り	[7.2]	—	2.1	(8.7)	20	有文有環環形で、内径(5.1)cm。入り組み文を沈線で抜き、4単位程配されると思われる。単位文間には3本の横位沈線で接続されている。	DP35 覆土 砂粒・長石 黒褐色 普通 (晩期前室)

国庫番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第36図19	磨石	9.3	7.4	3.4	381.1	砂岩	Q69 磨石兼用 灰・黒面に僅かな内み 覆土
20	磨石	8.4	5.7	3.5	268.9	安山岩	Q68 磨石兼用 北西部覆土
第37図21	石皿	36.8	27.8	5.7	6300.0	安山岩	Q66 葉付蓋 東部覆土
22	磨石	12.3	8.7	4.7	741.6	安山岩	Q67 側面に2個1個の凹み1対 東部覆土

第36図7～16は縄文土器口縁部片の拓影図である。7～9は瓢形土器の内傾する口縁部片で、口縁部から別突状の連続刻文を沿わせた隆起帯縄文を巡らせ、内面は磨きが施されている。10は口縁部が直線的、胴部がやや弧状の沈線区画内に縄文を施文し、隙間は磨きが施されている。11は粗製土器で、口縁部外面は押捺を加えた紐線文が貼り付けられ、内面は上下2本の沈線、胴部地文に粗い縄文が施されている。12は波状口縁で、3段の縄文帯が見られる。13は口縁部に押捺を加えた紐線文を貼り付け、以下横位の条線を施文、14は波状口縁波頂部片で無文である。15は口縁部から斜格子文が沈線で施文されている。これらは後期加曾利B3式に比定される土器である。16は中期の波状口縁波頂部片で、口縁部に刻み、以下に沈線が施されている。

所見 本跡は、他の遺構との重複が激しいため、北側及び東側の壁の立ち上がりが確認できなかった。主柱穴の配列と床質から規模及び平面形を推定した。覆土から縄文時代中期から晩期にかけての土器が出土しているが、主体となる遺物から縄文時代後期加曾利B3式期が本跡の時期と考えられる。

第206号住居跡(第34図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16f区。

重複関係 本跡は、南側部分が第106A号、207号住居跡に、西側部分が第106B号住居跡に、北側部分が第885号、943号土坑に、東側部分が第867号、868号土坑に掘り込まれている。また、本跡の北側部分で第931号土坑と重複しているが、本跡の床下から確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 他の遺構との切り合いが激しく、明確な壁の立ち上げをとらえることはできなかったが、長径(6.95)m、短径(6.22)mの楕円形と推定される。

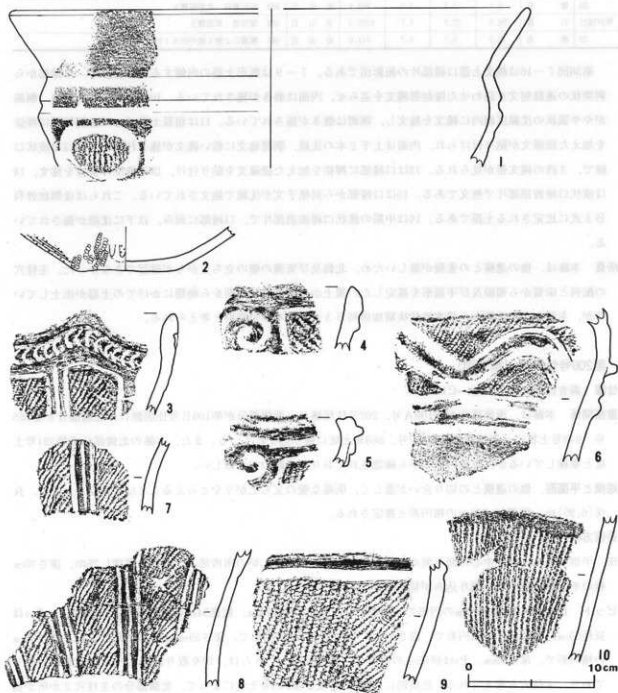
長径方向 (N-12°-E)

床 平坦である。炉を中心に踏み固められた面が広がっている。炉の南西部に、後世の長径1.25m、深さ20cm程の不定形の緩やかな掘り込みが見られる。

ピット 18か所。P₁は径62cmの円形で、深さ83cm、P₂は長径74cm、短径54cmの楕円形で、深さ96cm、P₃は長径63cm、短径56cmの楕円形で、深さ61cm、P₄は径62cmの円形で、深さ59cm、P₅は長径75cm、短径63cmの楕円形で、深さ59cm、P₆は径55cmの円形で、深さ35cm。これらは、炉を取り囲むように等間隔に位置しており、主柱穴と考えられる。位置的に、第885号及び第943号土坑によって、北側部分の主柱穴2か所が掘り込まれていると考えられる。P₁、P₁₁、P₆、P₃は径36～78cmの円形あるいは楕円形で、深さ44～60

cm。規模にばらつきはあるが、支柱穴間に位置し、補助的な性格のピットと思われる。P₅₁、P₇、P₅₂も位置的にはずれるが、同性格のピットと思われる。P₅₃は第207号住居跡のピットである。他は性格不明である。

炉 中央部やや西側に付設されている。長径103cm、短径79cmの楕円形で、床を11cm掘りくぼめ、北側に土器片を設置した土器片囲い炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。炉土層4～6はほぼ一連の層である。



第38図 第206号住居出土遺物実測・拓影図

炉土層解説

- 1 におい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子極少量
- 2 におい赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック中量
- 3 赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 4 におい赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量
- 5 におい赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量
- 6 におい赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量

遺物 炉内及び覆土中から遺物が出土している。3, 7, 8は土器片囲い炉から出土し、同一個体の可能性がある。他は覆土中からの出土である。また、獣骨片3点も覆土中から出土している。

第206号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	鉢形土器	A(40.8)	鉢形土器の胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部は内彎し、口縁部は外傾して立ち上がる。口縁部無文帯。胴上部に沈線、隆線で凹形及び楕円形の枠状文を構成し、区画内には複線と思われる縄文が施文されているが、摩滅が著しい。	砂粒	P133 10% 覆土 (加曾利EⅢ)
	縄文土器	B(12.6)		におい橙色 普通	
2	浅鉢形土器	B(3.7)	底部片。底磨削り出しによる調整のため、部分的に上げ底気味。胴部は外傾して高く、胴部には3本1組の沈線が胴下半まで垂下し、沈線間は磨り消されている。磨消帯間は単筋縄文しRが施文されている。内面及び底部は磨かれ、外側の磨消帯及び内面は赤彩されている。	砂粒・灰石	P134 10% 北西部覆土 (加曾利EⅢ)
	縄文土器	C 7.8		灰褐色 普通	

第38図3～10は縄文土器片の拓影図である。3は波状口縁部片で、口縁部下に連続爪形文が廻り、胴部には単筋縄文施文の後3本の平行沈線が垂下し、沈線間は磨り消されている。7, 8の胴部片も同様の文様が見られる。4は口縁部片で、沈線による枠状文及び渦巻文が見られ、区画内には縄文が施文されている。これらは中期加曾利EⅢ式の土器と思われる。5も口縁部片であるが、口唇部下の沈線、隆線による渦巻文等前述の土器よりは古い段階に位置づけられると思われる。6は頸部から口縁部にかけての破片で、口縁部には縄文地文の上に浅い沈線を沿わせた隆線が波状に描かれ、頸部は無文である。加曾利EⅠ式に比定される土器である。9は沈線以下に単筋の縄文施文、施文の際の回転の変換部が見られる。10は摺糸文が地文として施されている。

所見 壁の立ち上がりを確認することができなかったため、主柱穴の配列から規模及び平面形を推定した。本跡からは縄文時代中期加曾利EⅠ～Ⅲ式期までの遺物が出土しているが、時期は炉体土器である縄文時代中期加曾利EⅢ式期と思われる。

第207号住居跡(第34図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16f4区。

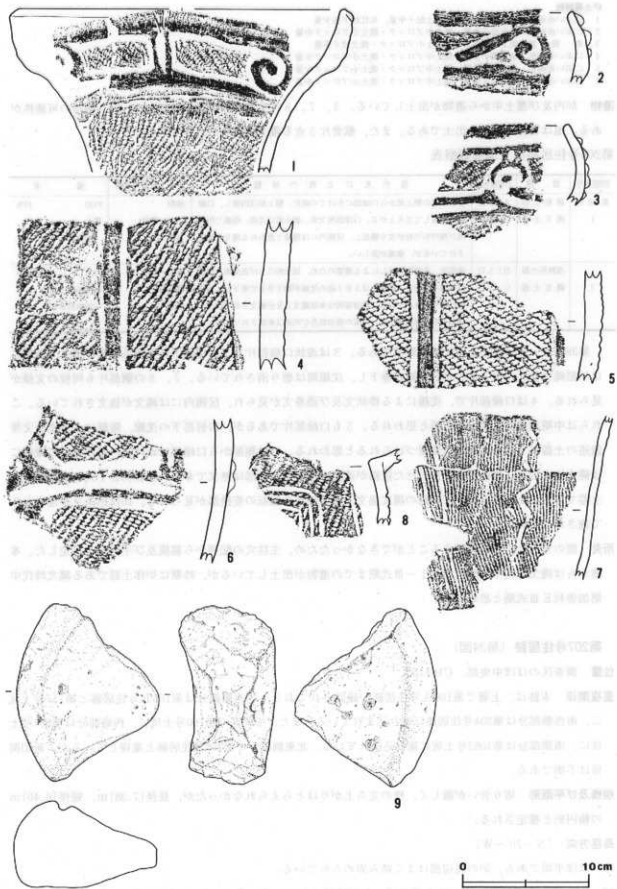
重複関係 本跡は、上層で第106A号住居跡が確認されており、北西側部分は第106B号住居跡と第757号土坑に、南西側部分は第204号住居跡に掘り込まれている。また、中央部で第760号土坑に、西側部分は第881号土坑に、南側部分は第1062号土坑に掘り込まれている。北東側部分で第206号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模及び平面形 切り合いが激しく、壁の立ち上がりはとらえられなかったが、長径(7.38)m、短径(6.40)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-70°-W]

床 ほぼ平坦である。炉の周辺部はよく踏み固められている。

ビット 推定平面形内には、31か所のビットが確認されている。P₅₅, P₆₁, P₁₂~P₁₅, P₅₆は径39~64cmのほぼ円形で、深さ42~70cm。これらは、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₅₅, P₅₆は第106B号住

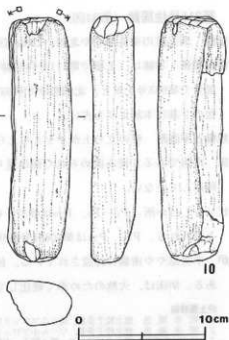


第39图 第207号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

居跡のビット。P55, P11, P57, P58, P8, P10, P34は第206号住居跡のビット。P16, P17は第204号住居跡のビットである。他は性格不明である。

炉 中央部やや南側に付設されている。長径134cm, 短径88cm, 不整形円形の石囲い炉である。火熱を受け、赤く硬化した灰床が露出している。中央部は、ビット状の第760号土坑に掘り抜かれている。炉に近接した北西側に、焼土が楕円形状(長径136cm, 短径114cm)に薄く堆積しているが、炉ではない。

遺物 灰、床面及び覆土中から遺物が出土している。1は南部床面から、7は炉内から、4-6は南西壁寄りの覆土中から出土している。9の石皿は石囲い炉の炉体土器である。他に鹿の角片が覆土中から出土している。



第40図 第207号住居跡出土石製品実測図(2)

第207号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第39図 1	漆黒形土器 縄文土器	A(27.2) B(13.1)	胴部から口縁部にかけての破片。キャリバー状をしている。口縁部文様帯は隆線と沈線で胴部文様帯と区画され、上下の隆線は縦の平行する隆線と渦巻文で連結されている。区画内には単筋縄文R Lが縦位回転で施文されている。口縁部文様帯と胴部文様帯間に幅の狭い磨消帯を置き、以下単筋縄文R Lが縦位回転で施文されている。	砂粒・長石・パミス 褐色 普通	F135 10% 南部床面 (加曾利E II)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第39図9	石皿	(14.0)	(11.2)	7.0	(980.3)	安山岩	070 凹石兼用 欠損品 炉内
第40図10	鹿石	19.6	5.2	3.5	611.0	黒色片岩	071 覆土

第39図2-7は縄文土器片の拓影図である。2, 3は口縁部片で、沈線に沿った隆線で渦巻文及び区画文が描かれ、区画内は縄文が施文されている。3は渦巻文の上に隆線による円形文が見られる。4-6は胴部片で、地文の単筋縄文R Lの上に沈線区画の磨消帯が垂下し、4は胴部地文の縄文の上に、沈線に沿った隆線により文様が描かれている。これらの土器は中期加曾利E II式に比定される土器であるが、4, 5は沈線間がやや幅広く、加曾利E III式の手法が見える。7は胴部燃系地文の上に平行沈線及び鋭歯状沈線が施され、8は縄文地文で、直角に折れる3本平行沈線が描かれている。2点とも加曾利E I式に含まれる土器と思われる。

所見 本跡の規模及び平面形は、主柱穴の配列から推定した。残存している覆土が薄く、堆積状態の詳細は不明だが、部分的に焼土を含んでいることから人為堆積の可能性が考えられる。本跡からは縄文時代中期加曾利E I~II式期にかけての遺物が出土しているが、加曾利E II式期のものが多いことから、当該期と思われる。

第211号住居跡 (第34図)

位置 調査区の中央部やや北側, C16e2区。

重複関係 本跡は, 上層で第111号住居跡が確認され, 東側部分は第106B号住居跡に掘り込まれている。東側部分で第933号土坑と, 北側部分で第937号, 959号土坑と重複している。959号土坑との新旧関係は不明だが, 他の2基は本跡よりも古い。

規模と平面形 壁の立ち上がりをとらえられなかったが, 長径(5.05)m, 短径(4.90)mの円形と推定される。床 平坦である。踏み固められた面は見られない。東側部分の床は, 第106B号住居跡に掘り込まれており, 残存していない。

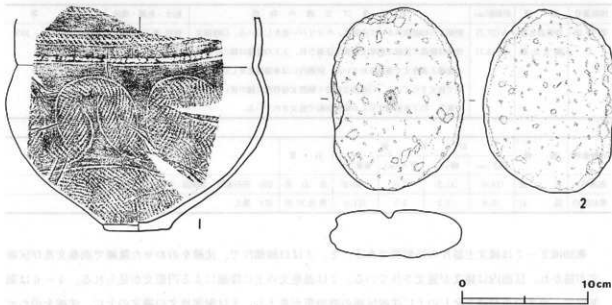
ピット 12か所。P₁~P₃, P₂₁は径37~64cmの円形で, 深さ29~36cm。これらは, 規模及び配列から主柱穴と思われる。P₂₁, P₂₂は第106B号住居跡のピットである。他は性格不明である。

炉 中央部やや南側に付設されている。長径78cm, 短径68cmの楕円形で, 床を21cmほど掘りくぼめた地床炉である。如床は, 火熱のため赤く硬化している。

炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量, 灰中量含む
- 2 明赤褐色 焼土粒子多量, ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量, 灰少量含む
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・火熱を受けたローム中ブロック中量, 炭化粒子少量
- 4 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量, ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量

遺物 床面及び覆土中から極少量の遺物が出土している。1は如南側の床面から正位の状態で, 2の敷石は南西部覆土中から出土している。



第41図 第211号住居跡出土遺物実測・拓影図

第211号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 I	甌形土器 縄文土器	B (17.0) C 5.3	口縁部欠損。底部はやや突出気味で, くびれ部に狭い平行波線を巡らす。沈線間には連続刺突文が施されている。くびれの上には何段かの帯縄文を有し, 下部には上向き弧線文と下向き弧線文を相互にその中間で組み合わせ, 区画内には単筋縄文が充満されている。以下底部までは沈線以下に単筋縄文を施し, 最下部から底部は帯が施されている。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P137 60% 如南側床面 (曹谷)

図版番号	部 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第41図2	煎 石	14.6	10.6	3.8	697.7	安 山 岩	072 南西部覆土

所見 本跡の規模と平面形は、床と支柱穴の配列から推定した。出土遺物は極少量であるが、1が床上出土ということから、時期は縄文時代後期曾谷式期であると思われる。

第107号住居跡 (第42図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16gs区。

重複関係 本跡は、北東側部分で第212号住居跡、第938号土坑と、南側部分で第325号土坑と重複している。

第212号住居跡、第938号土坑より本跡の方が新しいが、第325号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形 覆土と壁の判断が難しく、壁の立ち上がりは確認できなかったが、長径(8.33)m、短径(6.52)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-45°-E]

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 26か所。P₁~P₄は長径64~86cm、短径50~70cmの円形あるいは楕円形で、深さ64~70cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P₆、P₇、P₁₂、P₁₃、P₁₅、P₁₆、P₂₄は径50~84cmの円形あるいは楕円形で、深さ23~58cm。規模及び形状にばらつきは見られるが、本跡に伴う補助柱穴と思われる。他のピットは性格不明である

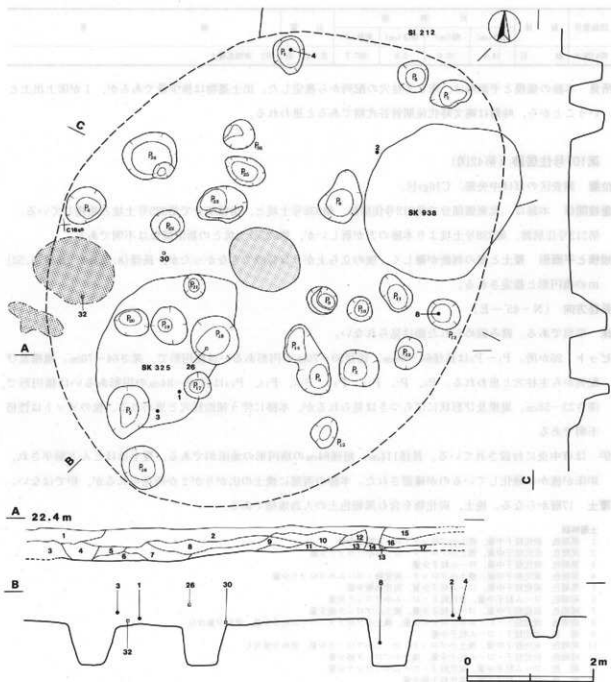
炉 ほぼ中央に付設されている。長径114cm、短径84cmの楕円形の地床炉である。覆土はほとんど削平され、炉床が僅かに硬化しているのが確認された。本跡の西部に焼土の広がりがあるが2か所見られるが、炉ではない。

覆土 17層からなる。焼土、炭化物を含む黒褐色土の人為堆積である。

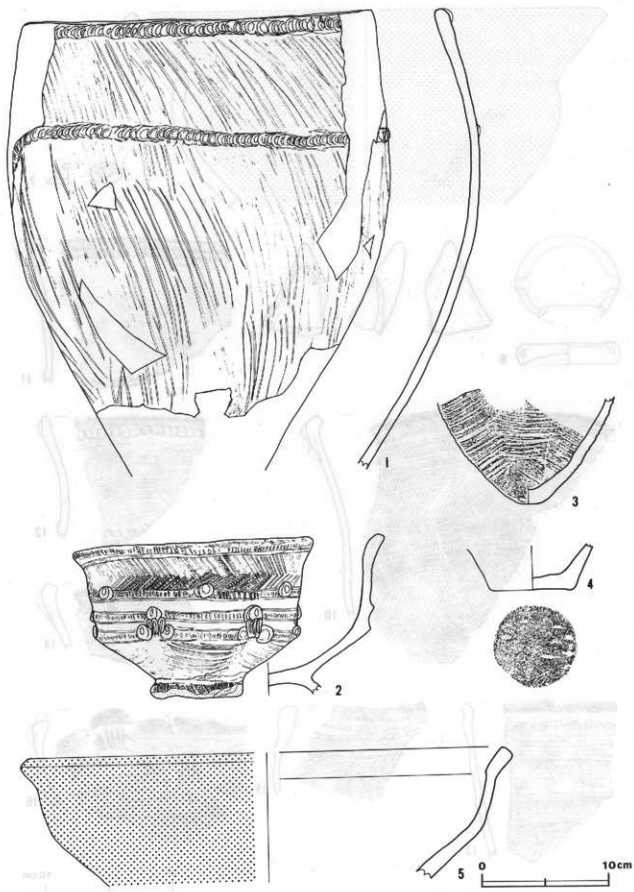
土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
- 5 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量、炭化物極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量、骨片少量含む
- 9 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 10 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック少量、骨粉少量含む
- 11 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 12 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 13 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極少量
- 14 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
- 15 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 16 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 17 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量

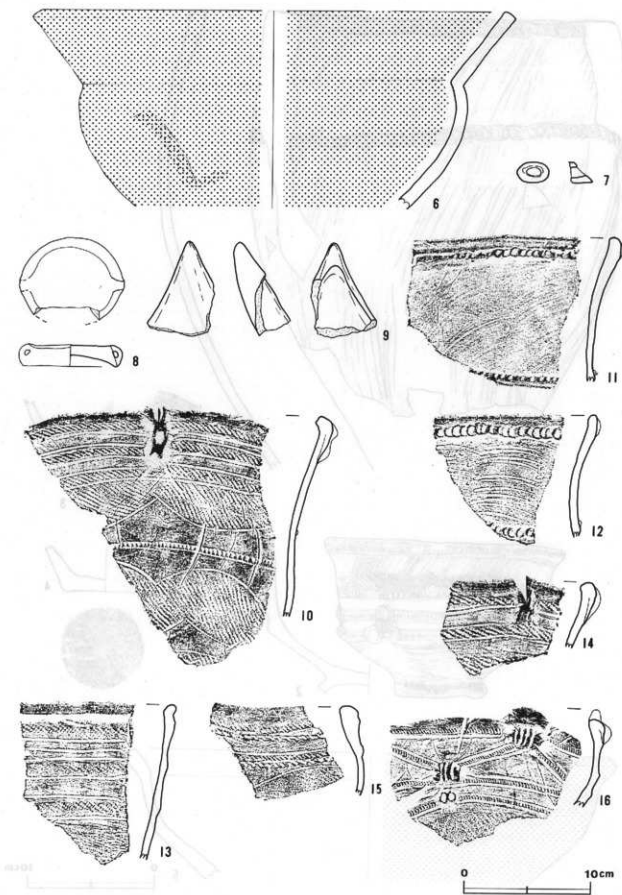
遺物 覆土中から多量の縄文土器片が出土している。遺物は中期加曾利E式期から晩期安行Ⅲa式期にわたり、大半は後期安行式期のものである。南西部覆土の中層から3の底部片が正位の状態、他に1は覆土下層から、12、14は覆土中層から、19、20及び21は覆土上層から出土している。炉南西部の覆土中層から11、13が、17、22は性格不明のP₂₀上層から出土している。16、26の磨製石斧も性格不明のP₁₅上層から出土している。炉の北西部覆土下層からは2が横位の状態で出土している。8の蓋と10の深鉢形土器破片はP₁₂内から、4の底部片はP₁上層から出土している。他に23の土偶、24の土製円板、25の打製石斧、27の石棒、28、29の磨石が覆土中から出土している。5、6の縄文時代中期の浅鉢形土器はトレンチャーによる攪乱のための混入と思われる。この他、鹿、猪等の獣骨片、大型鳥類の骨片等6点も覆土中から出土している。



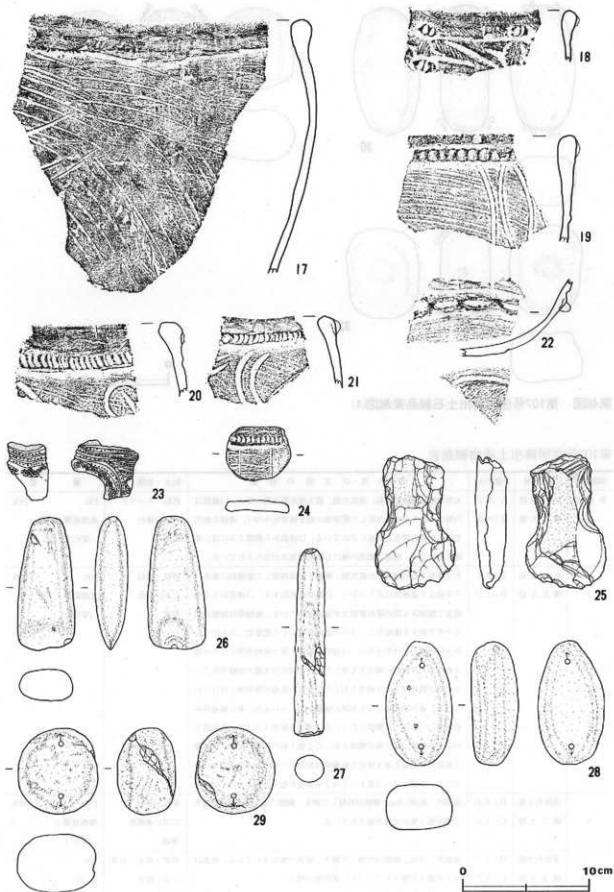
第42图 第107号住居跡実測図



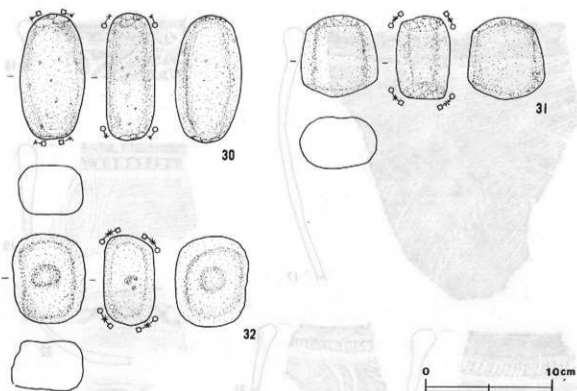
第43图 第107号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第44图 第107号住居跡出土遺物実測・拓影(2)



第45图 第107号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第46図 第107号住居跡出土土製品実測図(4)

第107号住居跡出土遺物観察表

採取番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 43 図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 28.0 B (26.6)	大形の粗製深鉢形土器。底部欠損。最大径を胴上部に持つ。口縁部は内傾し、折り返して作出した肥厚面に粘土粒を貼り付け、連続爪形文を施した隆起帯刺文が巡らされている。口縁部から胴部下半に浅い条線を斜行させ、胴部と頸部の境にも隆起帯刺文が巡らされている。	砂粒・スコリア にふい橙色 普通	P54 70% 南西部覆土下層 (安行Ⅰ～Ⅱ)
2	台鉢形土器 縄文土器	A 19.4 B (12.1)	台鉢形土器の鉢部。台部欠損。胴部下半は外傾して直線的に閉き、中央部より直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部から中央部まで縦割み4段の隆起帯刺文が巡らされている。隆起帯は指頭によるナデで粘土を隆起化し、さらに沈線を巡らして肥厚化したもので、粘土粒の貼り付けではない。口縁部隆起帯と第2隆起帯間にはやや幅を持たせ、区画内に縄文を充填した後、矢羽状の沈線が加飾されている。第2隆起帯上には刺突を加えた6単位の胎瘤が等間隔に付けられている。第3隆起帯上にも同様の胎瘤が加えられるが、第2隆起帯の胎瘤間にくるよう構成されている。第4隆起帯上には第3隆起帯と対応する位置に幅1割分間隔をおいた2個1組の胎瘤が付けられ、第3隆起帯の胎瘤と第4隆起帯胎瘤間には刺突状の短い3本沈線で結ばれている。胴部下半には僅かに上向き条線が施されている。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P59 50% 北西部覆土下層 (安行Ⅰ)
3	深鉢形土器 縄文土器	B (8.4) C 1.8	底部片。直径1.8cm。胴部は外傾して閉き、胴部にはやや上向きで僅かに弧を描く集合沈線が施されている。	砂粒・長石 にふい赤褐色 普通	P55 10% 南西部覆土 (安行Ⅰ)
4	深鉢形土器 縄文土器	B (3.5) C 6.7	底部片。平底。胴部は外傾して閉き、磨きで曇形されている。底部は削り残磨きが施されているが、網代痕が見える。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P56 5% P1内 (安行)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 5	浅鉢形土器 縄文土器	A (37.7)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、外反して口縁部に至る。口縁部は外側ぎ状で、口唇部外面に稜を持つ。内・外面とも丁寧な磨きによって整形され、外面は赤彩されている。	砂粒・スコリア・ 長石・石英 にぶい褐色 普通	P37 覆土 (加曾利E)
		B (10.3)			
第44図 6	浅鉢形土器 縄文土器	A (36.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎しながら立ち上がり、胴部で「く」の字状に外反して口縁部に至る。口縁部は外側ぎ状で、口唇部外面に稜を持つ。丁寧な磨きによる整形後、内・外面とも赤彩。特に胴部下半は下向き連続弧文に重複して未磨りし、モチーフが強調されている。	長石・砂粒 赤褐色 普通	P38 覆土 (加曾利E)
		B (15.8)			
7	注口土器 縄文土器	長さ(1.7)	注口部片。基部外径2.2cm、内径1.2cm。破片で摩滅が著しく、詳細は不明。	砂粒 浅黄褐色 普通	P40 南東部覆土
		高さ A 8.2 B 1.8	円形で、外形の断面は台形。厚さは中央が薄く、緩やかな弧を描く。断面に2対の把手が付けられている。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P41 P11覆土 (堀之内)
9	突起状把手 縄文土器	長さ 7.5	山形の突起状の把手と思われる。先端が楕円形で、内・外面とも磨きが施されている。	長石・砂粒 隔灰色 普通	P42 覆土 (加曾利B)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第45図23	土 甕	(4.7)	(5.3)	(3.2)	(42.6)	15	みみずく土甕の左肩部分で、脇から胴部に隆起帯縄文帯が施され、内部には刺突を加えた沈線で直線的あるいは曲線的な文様が描かれている。	DP12 覆土 斜紋・スコリア 紫褐色 普通 (後期遺骨・縄文前期)
24	土製円板	4.3	5.1	1.0	25.6	100	口縁部片利用 表面に隆起帯刺文及び条線	DP13 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第45図25	打製石斧	(10.6)	5.5	2.6	(199.1)	緑泥片岩 Q24 分銅形 一部欠損 覆土	
26	磨製石斧	10.6	4.5	2.5	(220.7)	緑泥片岩 Q25 定角式 一部欠損 中央部覆土	
27	石 棒	(14.7)	2.3	2.1	(157.2)	緑泥片岩 Q26 欠損品 覆土	
28	磨 石	9.7	5.3	3.8	298.7	流 紋 岩 Q27 覆土	
29	磨 石	6.8	6.3	4.6	248.9	安 山 岩 Q28 覆土	
第46図30	磨 石	10.1	5.2	3.9	333.2	安 山 岩 Q29 礫石兼用 西部床用	
31	磨 石	6.5	6.1	4.2	253.7	安 山 岩 Q30 礫石兼用 覆土	
32	磨 石	7.1	5.7	4.0	(286.4)	安 山 岩 Q31 礫石兼用 西部床用	

第44～45図10～22は縄文土器片の拓影図である。10は深鉢形土器の胴部から口縁部にかけての破片で、胴部中位に巡らされた連続刺突文の上位に1文様帯、下位に2文様帯を施している。1文様帯は口縁部以下3段の隆起帯縄文、区画内縄文施文の下向き連続弧文、要所に縦長貼瘤が付され、2文様帯は上向き、下向きの入り組み連続弧文、区画内に縄文が施文されている。11、12は粗製土器の口縁部片で、口縁部に連続押捺の粘土紐が貼り付けられている。13は口縁部下から胴上部まで沈線に沿った縄文帯が3段施され、15は口縁部以下2段の縄文帯の下に連続刻文が沿い、胴部には弧状沈線区画内に縄文が施文されている。14も口縁部以下2段の縄文帯が施され、縦長の貼瘤で連結されている。これらは後期行式I式に比定される土器群で、本跡に伴うものである。16は鉢形土器で、口縁部以下に刻文帯を3段、1段と2段間は斜めの刻文帯で連結し、連結部に横長貼瘤、3段目刻文帯上にもブタ鼻状貼瘤、胴部下位は縄文施文で口縁部に突起が貼り付けられている。19は口縁部貼り付けの粘土紐上に押捺が加えられ、頭部の上向き条線を「()」状の沈線が切っている。

る。2点とも後期安行Ⅱ式に比定される土器である。17は甕形土器の破片で、口縁部に粘土紐貼り付け、胴部に粗い条線が見られる。18は口縁部以下2段のブタ鼻状貼増間に三叉文が配されている。22は鉢形土器の胴部片で、上位に削り込みにより凸凹を作出した隆帯が巡り、底部には縄文が施文されている。いずれも晩期安行Ⅲa式に比定される土器である。20、21は口縁部に爪形の連続刻文を加えた粘土紐が貼り付けられ、粗い上向き弧状の条線を20が曲線的な、21が月状文の沈線が切っており、晩期安行Ⅲa式土器の影響がうかがわれる。

所見 本跡の覆土の主体は黒褐色土であり、締まりも遺構外の黒褐色土と酷似しており、壁の立ち上がりは確認できなかった。支柱穴の配列及び遺物の広がりから規模及び平面形を推定した。時期は、主体となる遺物から縄文時代後期安行Ⅰ式期と思われる。

第108号住居跡（第47図）

位置 調査区のはば中央部、C16i3区に位置する。

重複関係 本跡は、西側部分が第202号住居跡、第845号土坑、北側部分が第204号住居跡、第864号、871号土坑とそれぞれ重複しているが、いずれも本跡より古い。また、西側から北側にかけて第109号、110号住居跡と重複している。110号住居跡より本跡の方が新しいが、109号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径7.80m、短径7.55mの円形である。

壁 壁高10～15cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉を中心として、壁際近くまでよく踏み固められていて硬い。炉の北側から西側にかけて、薄い炭化材の広がりが見られる。

ピット 13か所。規模にはばらつきはあるが、配列から判断してP₁（長径46cm、短径30cmの楕円形で、深さ123cm）、P₂（径66cmの円形で、深さ149cm）、P₃（径46cmの円形で、深さ72cm）、P₇（長径83cm、短径41cm、の長楕円形で、深さ62cm）、P₁₀（長径44cm、短径33cmの楕円形で、深さ43cm）は支柱穴であると思われる。支柱穴間に位置するP₄（長径72cm、短径48cmの楕円形で、深さ62cm）、P₅（長径82cm、短径40cmの長楕円形で、深さ59cm）、P₆（長径47cm、短径38cmの楕円形で、深さ33cm）、P₉（長径56cm、短径39cmの楕円形で、深さ61cm）は補助柱穴と思われる。P₃、P₁₁、P₁₂は、炉を囲むように位置しているが、性格は不明である。P₁₃は大形で径150cmの円形、中にピットを2か所有し、深さは62cmである。他のピットと覆土が同質で、中から住居跡と同時期の遺物が出土している。住居に伴うかどうかの判断は難しいが、貯蔵穴として利用されたのではないと思われる。

P₁₃土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム中ブロック極少量、小骨片少量含む
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子中量、焼土中ブロック極少量、小骨片少量含む
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量、小骨片少量含む
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量、炭化物少量、小骨片少量含む
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子極少量、小骨片少量含む
- 6 褐色 ローム小ブロック多量、焼土粒子・炭化物少量、小骨片極少量含む
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量、小骨片極少量含む
- 8 褐色 ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子極少量、小骨片極少量含む
- 9 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量
- 10 褐色 ローム中ブロック中量、炭化粒子極少量

炉 中央部やや南側に付設されている。長径88cm、短径80cmのやや楕円形で、床を14cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱によって赤く焼け、硬化している。炉の西側にも、長径137cm、短径105cmの不整楕円形の焼土痕が見られる。底面は火熱を受けて硬化しており、焼土が14～20cmほど堆積しているが、床は平坦で、掘りくぼめた痕跡もなく炉ではないと思われる。炉、焼土痕とも覆土中に小骨片を少量含んでいる。

伊土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、小骨片少量含む
- 2 赤褐色 焼土小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子少量、小骨片極少量含む
- 3 明赤褐色 焼土ブロック内にソフトローム少量含む、炭化粒子極少量、硬化している
- 4 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、炭化物極少量
- 5 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 6 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック中量
- 7 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

焼土覆土層解説

- 1 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、小骨片少量含む
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 3 赤褐色 焼土小ブロック多量、ローム粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量、小骨片極少量含む
- 4 明赤褐色 焼土ブロック内にソフトローム少量含む、炭化粒子極少量、硬化している
- 5 暗赤褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量

覆土 5層からなる。暗褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 2 赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量、焼土粒子少量、小骨片少量含む
- 4 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 覆土中から縄文時代後期から晩期にかけての多量の土器片及び石製品が出土している。特に炉から東側に遺物の量が集中しており、これらの遺物に混じり、焼角片、焼骨片等の獣骨も出土している。1の台付鉢は北東壁際覆土中から正位の状態出土しており、付近から22も出土している。2の異形台付土器は南壁際床面から横位の状態出土している。3の異形台付鉢形土器は北東壁際寄りの覆土中から横位の状態出土し、付近から12の底部片も出土しているが流れ込みと思われる。10の台部及び4の小形壺形土器は北壁寄りの覆土中から、また付近から5の底部片も出土している。東壁寄りの覆土中から8の底部片と54の砥石が、床面から5L、52の磨石が出土している。北東部覆土中から11の注口部が横位の状態、東部覆土中から48の土製円板が出土している。炉東側の床面から50の石棒が出土している。45、46の土偶、47の耳飾りも覆土中から出土している。

第108号住居跡出土遺物観察表

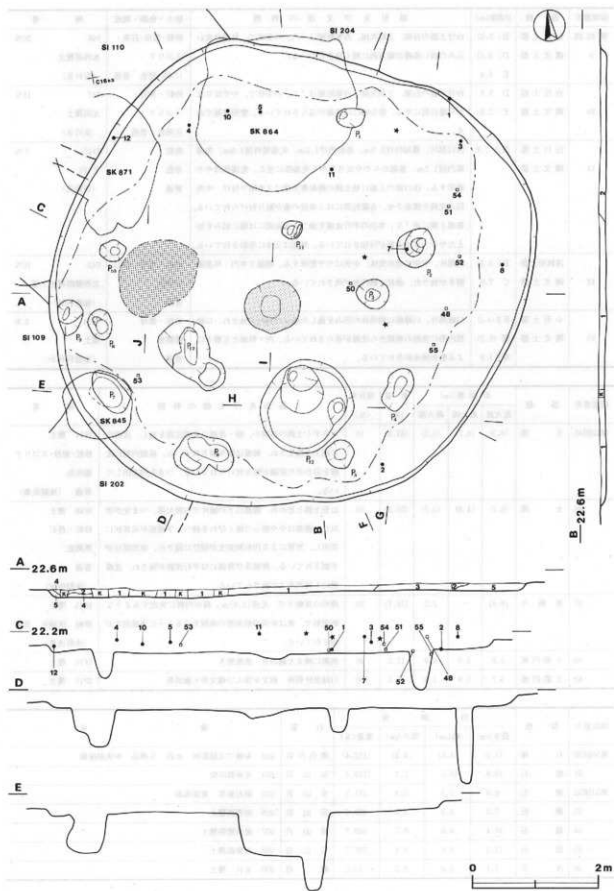
加取番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第48図 1	台付土器	A(23.8)	台付鉢形土器の鉢部。台部欠損。台部との接合部から内壁して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部は折り返して、直下に沈線を加えて	砂粒・赤母・スコリア にぶい赤褐色 普通	R45 北東壁際覆土 (図中B)
	縄文土器	B(18.5)	壁厚を強調し、半部R1の縄文を充填する隆起帯縄文。口縁部上端に		
		E(3.4)	縦割みを加えた2部1組の突起が4単位貼り付けられている。口縁部以下には幅の狭い隆起帯縄文を2段に貼り付け、上下に沈線を加えているが、厚みは少ない。口縁部縄文帯と口縁部下の縄文帯間は、口唇部の突起と対応する窓枠状の区画を沈線で隔し、区画内は沈線が横走されている。横割みを施した縦長の帯を口唇部突起と対応する口縁部から口縁部下の縄文帯に貼り付けて、上下の隆起帯縄文が連続される。下の隆起帯縄文の上下は磨きが施され、鉢部下半から台部にかけては半部R1の縄文を縦回転に充填。文様帯の上端に1本、部分的に2本の沈線を横走させて、上部の無文帯との境界としている。台部との連結部は無文で、ナデにより彫形されている。		

図版番号	部 種	計測値(m)	形 状 及 び 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
2	具形台付土器 縄文土器	A 3.5	内彎する台部と、同じく内彎する胴部からなる。頂部は径3.5cmほどの円孔となっており、刻みを付加した隆起帯刻文で縁取られ、外側に沈線が施されている。頂部の円孔の下に、外側に沈線を加えた隆起帯刻文で縁取られた径4.3cmほどの円孔が4単位配され、頂部の円孔と瘤状の突起で連結されている。瘤と瘤の間には、2個1組、1個1単の穿孔が対応して2単位づつ加えられている。4単位の円孔間のやや下平から、隆起帯刻文を上、右下、左下の3方向に走らせ、3本の連結部は舌状突起状に強調されている。隆起帯刻文は沈線で区画され、4つの円孔の最低部とはやや縦長の瘤で連結されている。胴部下半には上下に沈線を加えた隆起帯刻文が直上の隆起帯刻文に平行して波状に横走し、隆起帯刻文間は磨り削られている。胴部下半の隆起帯刻文と台部との接合部分間には矢羽状の沈線が充填されている。台部と胴部の接合部分、上下に沈線を加えた隆起帯刻文が高らされている。台部中央部にも隆起帯刻文と沈線で縁取られた円孔が4単位配され、円孔間は舌状の基瘤で連結されている。基瘤により台部の文様帯が2分され、上半は矢羽状の沈線、下半は横沈線が施され、下半下部は無文となっている。突出した底部の底には、2本沈線で区画され、区画内に縦刻みを加えた弧状の文様が4単位並べられている。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P48 95%
		B 14.3			
		D 7.9			
		E 4.6			
3	期台御形土器 縄文土器	A(8.8)	台部欠損。胴部は要所で屈曲しながら外傾して立ち上がる。口縁部以下4段の隆起帯刻文を設け、文様帯が区画されている。肥厚した口縁部上端及び外側に縦刻みの刻文を施し、上端の中央は沈線を高らせ刻文を切断、外面は直下に沈線を横走させ肥厚が強調されている。2段と3段の隆起帯刻文帯は、上下に沈線を加えて隆起させ、肥厚効果を出し、隆起帯間には左下がりの沈線が充填されている。第2段隆起帯は、緩やかな上向きの弧を4単位並べると思われ、弧の最低部には径0.8cmほどの孔を穿ち、第3段隆起帯にも対応して孔が施されている。この2個1組の孔は器面に4単位施されるものと認められ、その中間には第2段隆起帯の波頂部と第3段隆起帯を連結する種円形の孔が施されている。孔の間隔は刻みを施して縁取りし、直下には第3段隆起帯と第4段隆起帯を結び、縦に刻みを施した突起が貼り付けられている。この種円形の孔と突起は前後に2単位配されると認められ、対応する左右にも孔を穿った突起が加えられているが、欠損しており詳細は不明である。第4段目の隆起帯刻文も上下に沈線を加え、胴部下半の屈曲部が強調されている。胴部下半と台部接合部間には縦方向の沈線が充填されている。	長石・砂粒 暗褐色 普通	P49 30%
		B(5.4)			
4	小形器形土器 縄文土器	B(6.3)	胴部片。胴部は内彎し、胴部で直交気味に立ちあがる。胴部と底部の境に粘土粒を貼り付けた隆起帯が施されている。隆起帯の上端及び中央には横走沈線が施され、隆起帯上には横刻みを加えた瘤が貼り付けられている。胴部最大径のやや上には2本の平行沈線が横走され、上半から胴部にかけては丁寧な磨きで整形されている。	砂粒・長石 褐色 普通	P50 30%
5	深鉢形土器 縄文土器	B(4.4)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。右下がりに斜行する浅い沈線が縦く施されている。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P44 10%
		C 4.4			
6	深鉢形土器 縄文土器	B(6.0)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下平に横方向の溝が施され、底部に磨代痕が残されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P88 15%
		C 5.0			
7	深鉢形土器 縄文土器	B(3.9)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。外面磨りによる整形が施されている。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	P89 5%
		C 3.7			
8	鉢形土器 縄文土器	B(3.3)	底部片。平底でやや突出気味。胴部は緩く外傾して、やや内彎気味に開く。胴下部は右下がりに斜行する条線を施し、底部側面周面に縦の刻みが施されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P90 10%
		C 5.0			

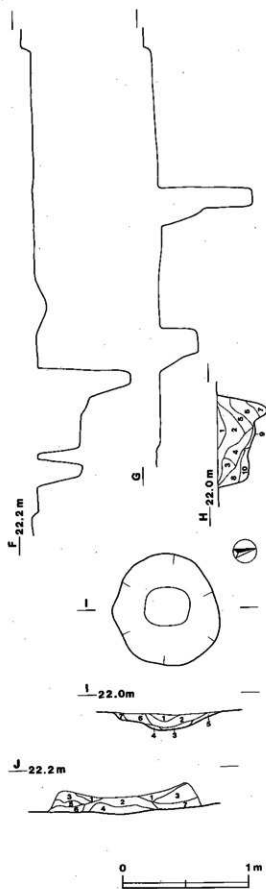
図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 48 図 9	台付土器	B (5.6)	台付土器の台部。上部欠損。台部前面は「八」の字状で、外面は浅い込みの浅い条線が縦方向に細く施されている。	砂粒・雲母・石英・スコリア にぶい褐色 普通	P46 20% 北西部覆土 (安行Ⅱ)
	縄文土器	D (9.4)			
		E 4.4			
10	台付土器	D 5.8	台付土器の台部。上部欠損。台部前面は「八」の字状で、やや反りながら接合部に至る。接合部には沈線が施されている。壺形は雄である。	砂粒・長石・スコリア 灰褐色 普通	P47 15% 北部覆土 (安行Ⅱ)
	縄文土器	E (2.9)			
11	注口土器	長さ 7.8	注口部片。基部外径3.0cm、基部内径1.2cm、先端部外径1.6cm、先端部内径1.2cm。基部からやや反りながら先端部に至る。先端部はやや肥厚する。注口部の上面に粘土粒の隆起帯を横に2本貼り付け、中央部は沈線を横走させ、各隆起帯には3単位の瘤が隔り付けられている。基部上面に逆「V」字状の平行沈線を施し、連絡部には横に割みを加えたやや大きめの瘤が付加されている。外面は全体に赤彩されている。	砂粒 赤色 普通	P115 5% P・内 (新地式)
	縄文土器				
12	漆鉢形土器	B (5.3)	底部片。平底で突出気味。中央はやや肥厚する。胴部下内・外面横磨きが施され、底部に網代直が残されている。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P43 10% 北西懸崖覆土層 (加曽利Ⅱ)
	縄文土器	C 7.6			
13	小形土器	長さ(4.2)	口縁部片。口縁部に刺突状の凹みを施した瘤状の突起が施され、口縁部内面に突起の両端から沈線が返らされている。内・外面とも磨きによる整形後赤彩されている。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P114 5% 覆土 (加曽利Ⅱ)
	縄文土器	幅(5.2) 厚さ1.9			

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現 存 率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第50図45	土 偶	(6.3)	(4.7)	(3.3)	(83.2)	10	みみずく土偶の右脚か。前・後面に沈線区画を施し、区画内に縄文が施文され、側面は磨り削られている。前面内面に沈線に沿った隆起帯が貼り付けられている。つま先が突出している。	DP14 覆土 砂粒・雲母・スコリア 褐色 普通 (後期後葉)
46	土 偶	(6.7)	(4.8)	(3.7)	(70.2)	30	山形土偶と思われ、腹部以下の破片で右側欠損。つま先が突出し、腰部はやや張った後くびれを持つ。下腹部が双耳状に突出し、竹管による円形刺突文が縦位に施され、突出部分が半割されている。脚部及び背面には平行沈線が施され、沈線間にも同刺突文が施されている。	DP48 覆土 砂粒・長石 黒褐色 普通 (後期中葉)
47	耳 飾り	(6.8)	—	2.2	(15.7)	20	環形の耳飾りで、孔径(2.8)cm。肩が内側に突出するような断面形で、表は中央の磨消帯の両側を巡るように連続刺突文が施されている。	DP15 覆土 砂粒 灰褐色 普通 (後期後葉)
48	土製円板	3.8	3.9	0.9	17.3	95	表面に縄文と磨消帯 裏面磨き	DP16 覆土
49	土製円板	3.7	3.9	1.3	17.6	100	口縁部片利用 刺文を挟んで縄文帯と磨消帯	DP17 覆土

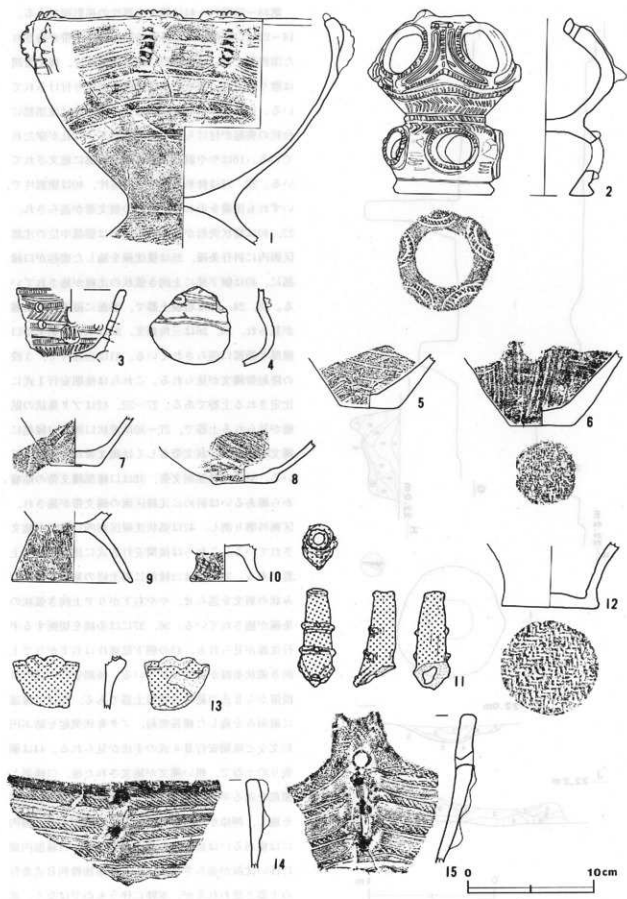
図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)		
第50図50	石 棒	(5.1)	(4.5)	(4.2)	(132.4)	黒色片岩	Q33 有頭で文様彫刻 赤彩 欠損品 中央部床面
51	磨 石	10.8	10.5	7.3	1219.4	安 山 岩	Q34 北東部床面
第51図92	磨 石	6.0	5.3	3.5	171.5	安 山 岩	Q35 敷石兼用 東部床面
53	磨 石	7.2	5.3	3.0	169.3	安 山 岩	Q36 南西部覆土
54	磨 石	10.4	9.0	6.7	829.7	安 山 岩	Q37 南西懸崖覆土
55	磨 石	13.3	4.6	3.4	235.5	安 山 岩	Q38 南東部覆土
56	浮 石	7.1	3.0	2.2	10.3	軽 石	Q39 有孔 覆土



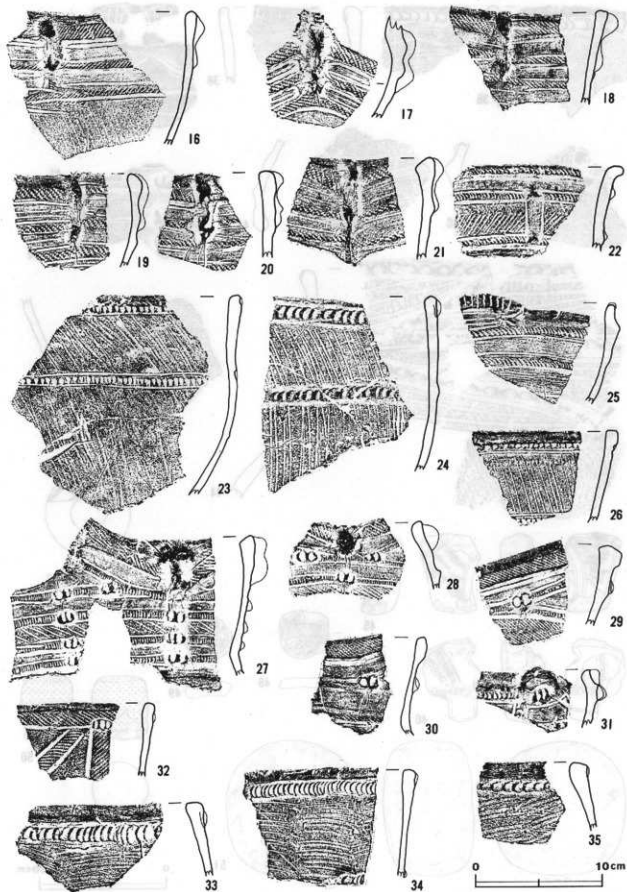
第47图 第108号住居跡実測图



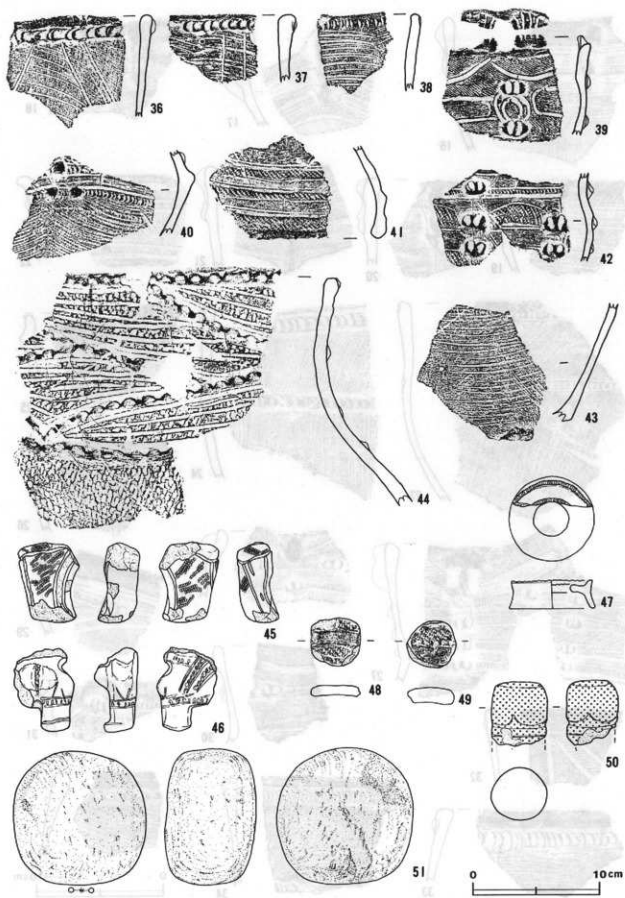
第48～50図14～44は縄文土器片の拓影図である。14～21は口縁部以下に多段の隆起帯縄文帯が施された深鉢形土器（17は鉢形）の口縁部片で、縄文帯間は磨り消され、要所に瘤状の突起が貼り付けられている。15, 17, 21は波状口縁で、15, 17は波頂部に台状の突起が付けられ、15の突起下には孔が穿たれている。16はやや斜行する条線が胴部に施文されている。22, 25は鉢形土器の口縁部片、40は胴部片で、いずれも沈線を沿せた爪形の刻文帯が巡らされ、22, 40は瘤状突起が見られる。22は胴部中位の沈線区画内に斜行条線、25は横沈線を施した突起が口縁部に、40は胴下部に上向き弧状の沈線が施されている。23, 24, 26は粗製土器で、器面に縦方向の条線が見られ、23, 26は三角刻文、24は爪形の刻文が口縁部と頸部に巡らされている。41は台部片で、3段の隆起帯縄文が見られる。これらは後期安行Ⅰ式に比定される土器である。27～32, 42はブタ鼻状の貼瘤が見られる土器で、27～30は波状口縁の口縁部に縄文帯、以下に刻文帯もしくは縄文帯が巡らされている。31は口縁部刻文帯、32は口縁部縄文帯の貼瘤から縦あるいは斜めに沈線区画の縄文帯が施され、区画外磨り消し、42は弧状沈線区画内に縄文が施文されている。これらは後期安行Ⅱ式に比定される土器である。33～37は口縁部に粘土紐の刻文、38は刻み状の刻文を巡らせ、やや右下がりで上向き弧状の条線が施されている。36, 37には条線を切断する平行沈線が見られる。43の胴下部破片は右下がりの上向き弧状条線が施文されている。後期安行Ⅰ式の新段階からⅡ式の範疇の粗製土器である。39は口縁部に縦刻みを施した横長突起、ブタ鼻状突起を結ぶ円形文など晩期安行Ⅲa式の手法が見られる。44は胴張りの土器で、粗い縄文が施文された後、口縁部と頸部を巡る平行の隆線、上下の隆線間にも斜行隆線を施し、押捺が加えられている。隆線による区画内には横あるいは斜行する沈線が施され、口縁部内側に浅い沈線が巡らされている。後期加曾利B式並行の土器と思われるが、本誌に伴うものではなく、流れ込みと思われる。



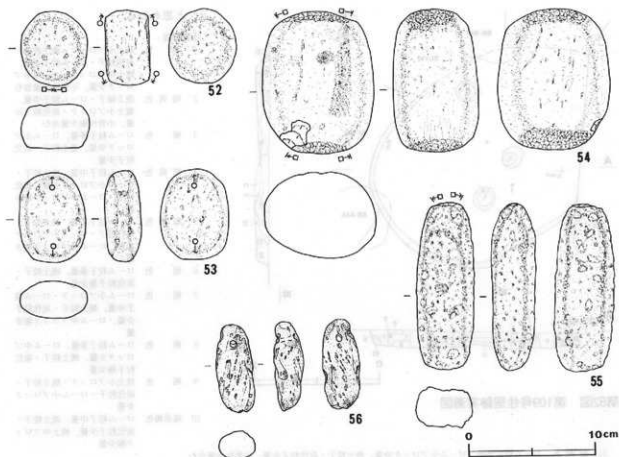
第48图 第108号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第49图 第108号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第50图 第108号住居跡出土遺物実測・拓影图(3)



第51図 第108号住居跡出土石製品実測図(4)

所見 本跡の覆土からは、縄文時代後期加曽利B式期から晩期安行Ⅲa式期までの遺物が出土しているが、主体となる遺物が縄文時代後期安行Ⅰ～Ⅱ式期に比定されるものが多く、本跡の時期と思われる。

第109号住居跡 (第52図)

位置 調査区の中央部、C16区。

重複関係 本跡は、東側部分で第108号住居跡と、北側部分で第110号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。本跡の床面より下層で第202号住居跡、第837号、883号、及び845号土坑が確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡の西側は攪乱のため遺構は確認できなかったが、長径[3.70]m、短径2.95mの楕円形と推定される。

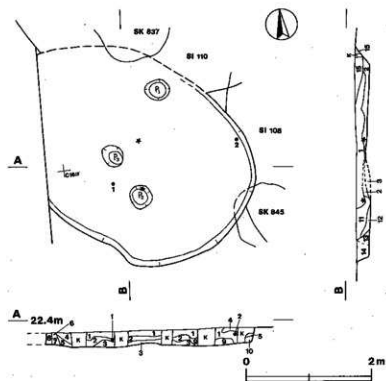
長径方向 [N-53°-W]

壁 南側半分が確認できた。壁高20～30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。他の部分は切り合いが激しく、不明である。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所。いずれも径32～41cmの円形あるいは楕円形で、深さ23～35cm。P₁は北壁寄り、P₂は南壁寄りに位置し、どちらも支柱穴と考えられる。P₃は中央部やや南寄りにあり、性格は不明である。

覆土 15層からなる。中央部分の覆土である土層1～3は自然堆積と思われるが、壁寄りの他の層は人為堆積



第52図 第109号住居跡実測図

と思われる。

土層解説

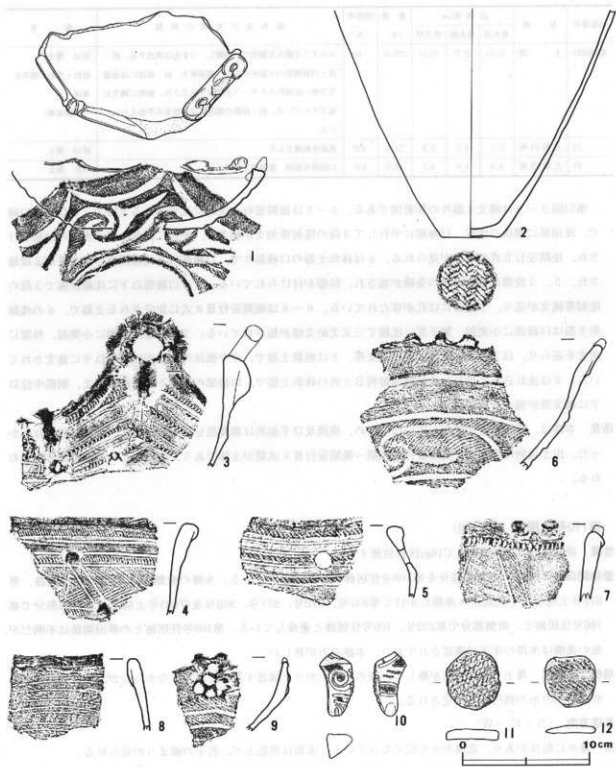
- 1 黒色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子中量、焼土中ブロック・ローム中ブロック少量、小骨片少量含む
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量、小骨片極少量含む
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量
- 6 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 8 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 9 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 10 暗赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック極少量

- 11 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 12 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、小骨片少量含む
- 13 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子少量
- 14 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 15 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量

遺物 床面からの出土は極少量だが、覆土中層から縄文時代後期から晩期安行式期にかけての遺物が出土している。細片が多く、器形の判別できるものは出土量に比較して少ない。南部覆土下層から1の浅鉢形土器が横位の状態で、付近から5が出土している。2の深鉢形土器は東壁際覆土中から正位の状態、3は南東壁寄り、4は東部覆土中から出土している。他に10の土偶脚部、11、12の土製円板が覆土中から出土している。この他、獣骨片3点が中央部覆土中から出土している。

第109号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	片断径(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第53図	浅鉢形土器	A (20.0)	底部は平底で、胴部は内彎しながら外傾し口縁部に至る。小波状の口縁部は肥厚し、指痕によるナゲ歯状が施され、口唇部内側に横を持つ。波頂部の両側に放射線を施し、頂部が強調されている。口縁部内面に、3箇1線の歯状突起を持つ横長の突帯が2単位貼り付けられている。口縁部の外面には波状に対応して沈線による弧線を施し、区画内に草筋R Lの縄文が斜行平行文で充填されている。口縁部下沈線と底部側面の沈線間を胴部文様帯として区画し、区画内には入り組み文と三式文をセットとした文様が施されている。その隙間に胴部下半を中心として部分的に縄文が施文されている。	砂粒・長石・石英・スコリア	P52 40% 南部覆土下層 (安行Ⅱa)
	縄文土器	B 5.0 C (10.3)		灰褐色 普通	
2	深鉢形土器	B (18.2)	底部から胴部にかけての破片。平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部下半方向の割りで整形され、底部に割代が残されている。	砂粒・長石	P51 30% 東壁際覆土 (安行)
	縄文土器	C 4.6		灰褐色 普通	



第53图 第104号住居跡出土遺物実測・拓影図

図取番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第53図10	土 偶	(5.1)	(2.7)	(2.1)	(20.0)	10	みみずく土偶の左脚部で、内彎し、つま先は突出する。前・後・内側面の3面からなり、側面無文。前・後面には渦巻及び短い直線的なモチーフが沈線で施文され、腹面に縄文が施文されている。前・後面の接縫には、横溝が加えられている。	DP18 覆土 砂粒・長石 褐色 普通 (晩期前葉)
11	土製円板	5.1	4.3	0.9	21.0	100	表面単線縄文LR	DP19 覆土
12	土製円板	4.0	4.0	0.7	16.9	100	口縁部片有用 虚線帯及び縄文帯	DP20 覆土

第53図3～9は縄文土器片の拓影図である。3～5は後期安行I式期に比定される土器で、3は波状口縁で、波頂部に環状の突起、口縁部に平行して3段の隆起帯刻文が施され、要所に縦長とブタ鼻状の貼瘤が付され、後期安行II式の手法が見られる。4は鉢形土器の口縁部片で、口縁部以下沈線区画の刻文帯が3段施され、2、3段間には矢羽状の条線が施され、貼瘤が付付けられている。5は口縁部以下に沈線区画で3段の隆起帯縄文が巡り、2段目には孔が穿たれている。6～9は晩期安行III A式に比定される土器で、6の浅鉢形土器は口縁部に小突起、胴下部に沈線で三叉文的文様が施されている。7は口縁部上端に小突起、外面に刻文を巡らせ、以下に沈線区画の斜行縄文帯、8は粗製土器で、やや弧状の条線が口縁部以下に施文されている。9は流れ込みと思われる後期加曾利B3式の鉢形土器で、口縁部の突起下に凹形刺突文、胴部中位以下に縄文帯が施されている。

所見 本跡は、西側部分が残存していないため、規模及び平面形は東側部分から推定した。炉は確認されなかった。出土遺物は縄文時代後期安行I式期～晩期安行III A式期が主体であり、時期もこの範囲であると思われる。

第110号住居跡 (第54図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16g₂区に位置する。

重複関係 本跡は、南東側部分を第108号住居跡に掘り込まれている。本跡の東側部分で第204号住居跡、第875号土坑と、中央部から南側にかけて第837号、870号、871号、853号及び883号土坑と、北西側部分で第186号住居跡と、南側部分で第202号、109号住居跡と重複している。第109号住居跡との新旧関係は不明だが、他の遺構は本跡の床下で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 覆土と壁の判別が難しく、壁の立ち上がりを確認することはできなかったが、長径(7.32)m、短径(6.50)mの楕円形と推定される。

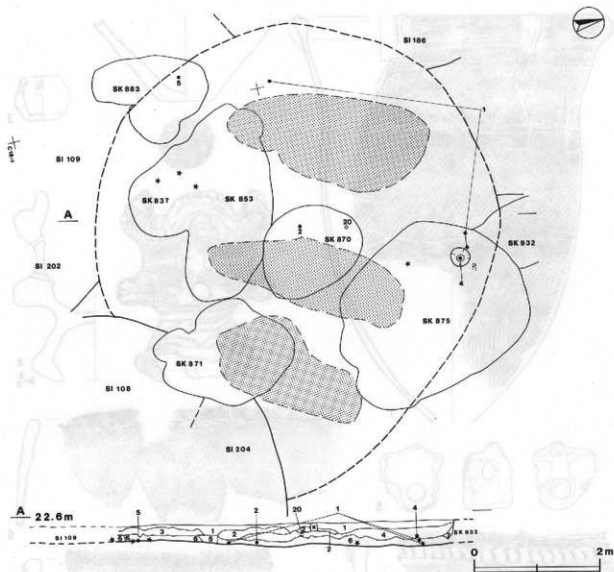
長径方向 [N-47°-W]

床 僅かに起伏があり、北側がやや低くなっている。床面は黒色土で、若干の締まりが見られる。

ピット 径32cmの円形で、深さ46cm。推定平面形内の北側に位置している。

炉 炉は確認できなかったが、焼土の広がり西側、中央部、東側の3か所に見られる。西側の焼土痕は長径316cm、短径141cmの不整長楕円形、中央部の焼土痕が長径326cm、短径106cmの長楕円形、東側が長径226cmの不定形で、いずれも厚さ8～15cmで、覆土中層に堆積している。小骨片を少量含んでいる。

覆土 7層からなる。土層2は焼土痕で、人為堆積である。

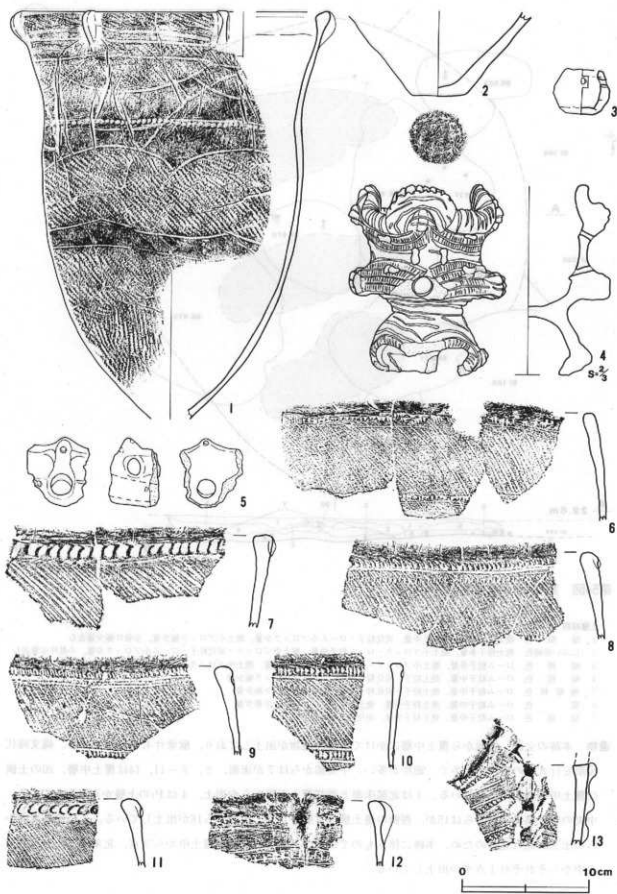


第54図 第110号住居跡実測図

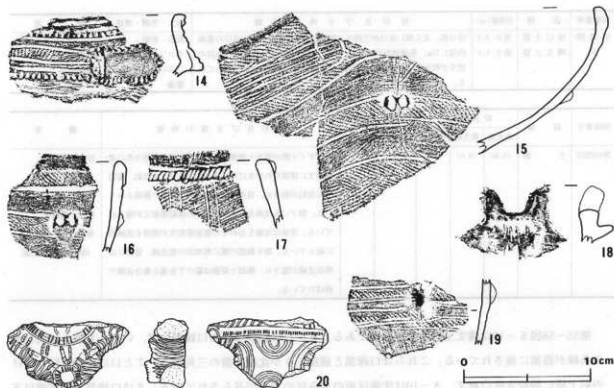
土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量、小骨片極少量含む
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量、小骨片少量含む
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック・ローム中ブロック極少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 5 極暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量

遺物 本跡の全面、床面から覆土中層にかけて多量の遺物が出土しており、獣骨片も含まれている。縄文時代後期安行式期の遺物が大半で、細片が多い。中央部からは7が床面、2、8～11、14は覆土中層、20の土偶は覆土中層から出土している。1は北部床面と西部覆土下層からの出土、4はP₁の上層から出土している。中央の焼土痕の下層からは15が、西側の焼土痕の下層から19、床面から16が出土している。5は掘乱溝内からの出土で流れ込みのため、本跡に伴うものではない。獣骨は南西部覆土中から3点、北東部と北西部の覆土中からそれぞれ1点ずつ出土している。



第55图 第110号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第56図 第110号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第110号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第 55 図 1	深鉢形土器	A (24.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部と頸部の境界にくびれを持ち、口縁部はやや内傾し厚化する。磨り消しの無文帯を挟んで口縁部及び口縁部以下に2段の隆起帯織文を有し、腹長の尾端でそれがつながれている。下段の隆起帯下には下向き弧線を連続して描き、区間内は光地織文が施されている。くびれ部分に沈線網状文が走り、以下は沈線による上向き、下向き連続弧線内に織文充填。胴部下半は沈線を横断した後織文充填。下部は縦方向の溝が施されている。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P53 30% 西部遺土下層及び 北部床面 (安行1)
	縄文土器	B (32.5)			
2	深鉢形土器	B (5.3)	底部分。平底で、胴部は外傾して深く、胴下部縦方向の溝き。調整時の削りで摩滅している部分が見られるが、底部に削代痕が残されている。	長石・砂粒 ふいい褐色 普通	P54 10% 中央部遺土下層 (安行)
	縄文土器	C 4.3			
3	手捏土器	A 2.8	碗形の手捏土器。平底で、胴部は内傾しながら立ち上がる。胴上部穿孔、胴中央部及び胴下部に輪轆み痕が見られる。	砂粒・スコリア ふいい褐色 普通	P56 60% 覆土
	縄文土器	B 3.5			
		C 2.0			
4	異形台付土器	A 6.5	異形小形台付土器で、台部と胴部からなる。台部は内傾し、胴部は外傾して開いた後胴部下半で屈曲して内傾し、中央部からやや外反気味に立ち上がる。口縁部はやや波状を呈し、波頂部に上端から内面に縦筋、外面に横筋を加えた山形の突起を有し、更に横筋を加えたやや腹長の瘤が貼り付けられている。突起間の口縁部肥厚部には縦筋のみが施されている。胴下部には屈曲部を一層する突起を設け、口縁部と突起間には沈線彫刻文を上段2段にはやや上向きの弧状、下部4段にはやや下向きの弧状に並らせている。波頂部の下には角状工具で横に2回連続刺突の3個1組上下1対の穿孔を2単位、同工具による縦に2回刺突の2個1組の穿孔を2単位施されている。胴下部の突起部にも波頂部に対応し、穿孔3か所の下には横筋のみを施した貼輪2個、貼輪間は横沈線と連続し、穿孔2か所の下には円孔を穿つ。突起と台部接合部は接合部を取り巻くように沈線が並らされている。台部は下部に沈線と組みで縁取られた楕円形の孔を4単位配し、平行して下向き弧線が施されている。波頂部に対応する台部貼輪間には縦筋のみ、横筋のみを交互に貼り付けている。底筋は中央が円孔となっており、筋目を加えた削文帯で縁取られていると思われる。	砂粒 褐色 普通	P55 85% P; 覆土上層 (安行ⅡA)
	縄文土器	B 5.5			
		D 2.5			
		E 3.1			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 5	注口土器 縄文土器	長さ 3.4 高さ 5.5	注口部、太く短い注口が上向きに胴部に付くと思われる。注口の基部内径1.7cm、先端部外径2.1cm、内径1.4cm。先端部と口縁部に弦状の把手が取り付けられ、把手内面及び外面に凹部の刺突が入れられている。	長石・砂粒・スコリア にぶい黄褐色 普通	F91 10% 窪痕溝内 (堀之内)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第56図20	土 甕	(5.6)	(9.6)	(3.3)	(129.1)	25	みみずく土甕の肩から腹部にかけての破片。腹部中央に連続刻文に縁取られ中央に凹みを有するボタン状突起、胸部にも突起が施され、肩から腹部は隆起帯刻文で接続されている。頸下にも沈線に沿わせた弧状の隆起帯刻文が施されている。背面は沈線に沿わせた隆起帯刻文が両肩を直線的に結んでいる。頸と胸部の間に側突状の短沈線、背面には弧状沈線が施され、腹部と背面は脇の下を通る集合沈線で結ばれている。	D621 中央部覆土 砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通 (後期後葉-後期前葉)

第55-56図6-19は縄文土器片の拓影図である。6-11は粗製土器の口縁部片で、いずれも僅かに斜行する条線が器面に施されている。これらは口縁部と頸部に6が沈線区画の三角刻文、7と11は口縁部貼り付けの粘土紐に押捺気味の刻文、8-10は沈線区画の刻み状の刻文が巡らされている。8は口縁部下の沈線以下にも刻文が見られる。12は口縁部以下2段の刻文を結ぶ縦長貼瘤、13の波状を呈する口縁部片は口縁部に平行する隆起帯縄文とそれを結ぶ貼瘤、波頂部下には孔が穿たれている。19にも隆起帯縄文を結ぶ貼瘤が見られる。18は波状口縁波頂部突起片で、山形の突起下に舌状の突起が外面に付けられている。これらは後期安行I式に比定される土器である。14は浅鉢形土器の口縁部片と思われるが、口縁部下と頸部隆帯上に刻文が巡り、間に沈線で横長の弧状区画文が描かれ、区画内縄文施文、頸部隆帯には回りに刻文を施し、中央が凹む突起が付けられている。やはり後期安行I式の範疇である。15は浅鉢形土器の口縁部片、16は深鉢形土器の口縁部片で、2点とも波状を呈し、沈線区画の縄文帯が横に巡らされ、ブク鼻状貼瘤が付けられている。17は粗製土器の口縁部片で、口縁部刻文帯下に施された区画内磨り消しの平行沈線に斜行条線が切られている。これらは後期安行II式に比定される土器である。

所見 本跡は、壁の立ち上がりを確認することはできなかったが、床の締まりの範囲と遺物の広がりから、規模と平面形を推定した。出土遺物は後期安行I-II式期が大半であるが、I式期に比定される土器の割合が高く、本跡の時期も縄文時代後期安行I式期と考えられる。

第115号住居跡 (第57図)

位置 調査区のやや西部、C15区。

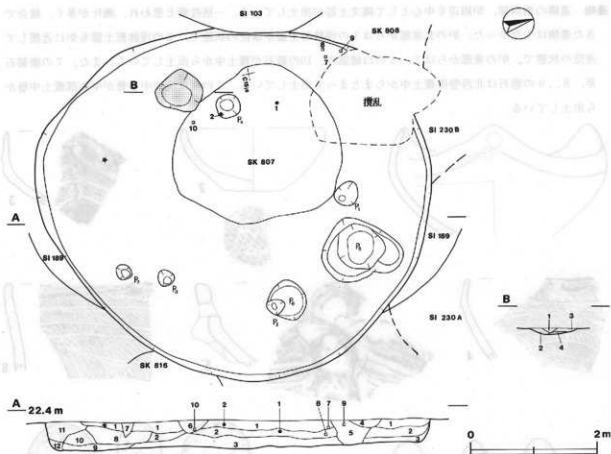
重複関係 本跡は、北側部分で第230A号、230B号住居跡及び第808号土坑と、南東側部分で第768号土坑と、南側部分で第194号住居跡、第816号土坑と、西側部分で第103号住居跡と、また、中央部で第189号住居跡、第807号土坑と重複しているが、本跡が最も新しい。

規模と平面形 長径6.37m、短径5.62mの楕円形である。

長径方向 N-25°-E

壁 壁高27-45cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 はほぼ平坦であるが、中央部がややくぼんでいる。踏み固められた面は見られない。



第57図 第115号住居跡実測図

ピット 7か所。P₁～P₄は長径27～42cmの円形あるいは不整形円形で、深さ32～44cm。P₄がやや炉に近すぎるが、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₂は径26cmの円形で、深さ20cm。P₃に近接し、補助柱穴の可能性がある。P₅、P₆は性格不明である。

炉 西壁やや南寄りに近接して付設されている。長軸76cm、短軸70cmの不整形台形で、床を10cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は僅かに硬化している。

炉土層解説

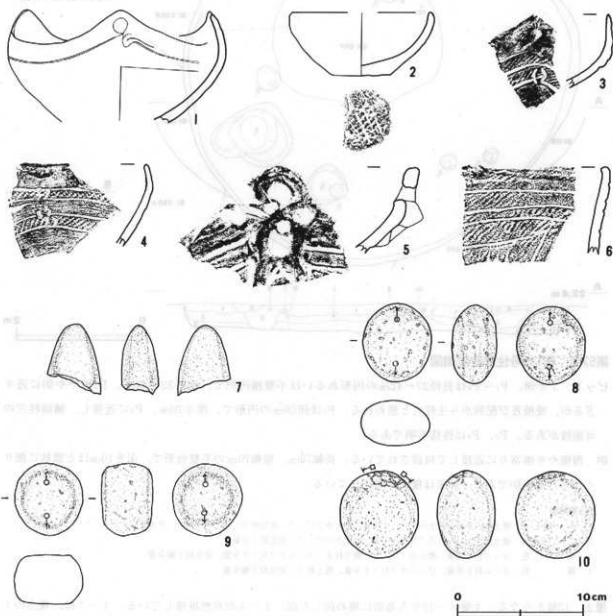
- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量

覆土 12層からなる。土層8～12を人為的に埋め戻した後、1～3が自然堆積している。4～7は、覆土の上からの新しい掘り込みである。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量
- 5 黒褐色 ローム粒子無状に多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・ローム中ブロック極少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量、小骨片極少量含む
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 10 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 11 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 12 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 遺構の南西部、炉周辺を中心として縄文土器が出土している。一括投棄と思われる、細片が多く、接合で
きた遺物は少なかった。炉の北東部からは1の浅鉢形土器が横位の状態で、2の浅鉢形土器も炉に近接して
逆位の状態で、炉の東部からは3、4の口縁部片、10の敲石が覆土中から出土している。また、7の磨製石
斧、8、9の磨石は北西壁際覆土中からまとめて出土している。この他に鹿の手足骨が中央部覆土中層か
ら出土している。



第58図 第115号住居跡出土遺物実測・拓影図

第115号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58回	鉢形土器	A [16.0]	底部欠損。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部は3単位の波状口縁で、波頂部外面に上下1対の円形文を有する。口縁部下には口縁部削り出しにより、口唇部に平行し円形文につながる線を付す。内・外面とも丁寧な磨きが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	F58 50% 西部覆土 (加竹有B)
1	縄文土器	B (9.0)			
2	鉢形土器	A [11.0]	碗形の鉢。平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。内・外面削りにより整形されているが、作りは雑である。底部に副代痕が残されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	F59 40% 西部覆土 (加竹有B)
	縄文土器	B 5.0 C 4.6			

図録番号	器種	計測値				材質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第58図7	磨製石斧	(5.4)	(4.3)	2.9	(82.2)	四稜石	Q41 刀部欠損 北西壁階覆土
8	磨石	6.2	5.4	3.7	173.7	安山石	Q42 北西壁階覆土
9	磨石	5.6	5.5	4.0	187.6	花崗石	Q43 北西壁階覆土
10	磨石	6.9	6.2	4.8	200.0	安山石	Q44 中央部階土

第58図3～6は縄文土器片の拓影図である。3, 4は後期加曾利B式期に比定される浅鉢形土器で、平行沈線区画の縄文帯上に「い」字状文が見られ、内・外面丁寧な磨きが施されている。5, 6は後期堀之内式に比定される土器で、5は波状口縁で波頂部に突起と刺突文、6は縄文施文後細い沈線で文様が直線的に描かれている。5は1式、6は2式と思われる。

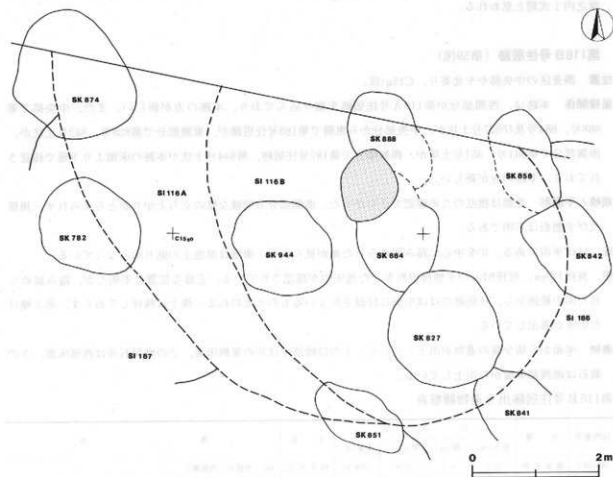
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期加曾利B式期と思われる。

第116A号住居跡(第59図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C15go区。

重複関係 本跡は、東側部分を第116B号住居跡に掘り込まれている。西側部分で第187号住居跡、第782号及び874号土坑と重複しているが、いずれも本跡の床より下層で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 北側は攪乱のため確認できなかった。また、東側部分もほとんど第116B号住居跡に掘り込まれ

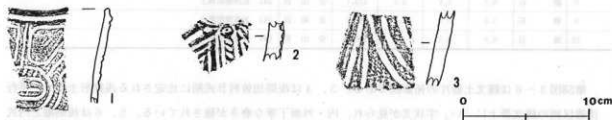


第59図 第116A・116B号住居跡実測図

ており、規模及び平面形は不明である。

床 平坦で、やや踏み固められた面が見られる。第116B号住居跡の床面より僅かに高い。

遺物 縄文土器が極少量出土しているが、ほとんどが細片である。



第60図 第116A住居跡出土遺物実測・拓影図

第60図1～3は縄文土器片の拓影図である。1は口唇部外面に沈線、胴部は縄文地文で2～3本単位の沈線で直線と曲線を連結させるような文様を描いている。2は波状口線の波頂部片で、口唇部上端に沈線、波頂部から連続刻みを施した隆線が胴部に垂下し、隆線上端に刺突文、隆線の両側は隆線と口縁部に沿って複数の平行沈線が地文されている。3は胴部片で、縄文地文上に僅かに曲線を描いて垂下する沈線が2～3本単位の描かれている。

所見 本跡の覆土はほとんど削平され、壁の立ち上がりが確認できなかった。また、北側は攪乱、中央部は第116B号住居跡に掘り込まれており、炉、ピットも確認できなかった。西側部分は、床質及び遺物の広がりから想定した。出土遺物は少ないが、出土量の割合と第116B号住居跡との重複関係から、時期は縄文時代後期堀之内1式期と思われる。

第116B号住居跡 (第59図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C15g区。

重複関係 本跡は、西側部分が第116A号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。また、中央部で第888号、884号及び827号土坑が、中央部から東側で第186号住居跡が、東側部分で第858号、842号土坑が、南側部分で第841号、851号土坑が、西側部分で第187号住居跡、第944号土坑が本跡の床面より下層で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 北側は攪乱のため確認できなかった。南側部分も明確な壁の立ち上がりがとらえられず、規模及び平面形は不明である。

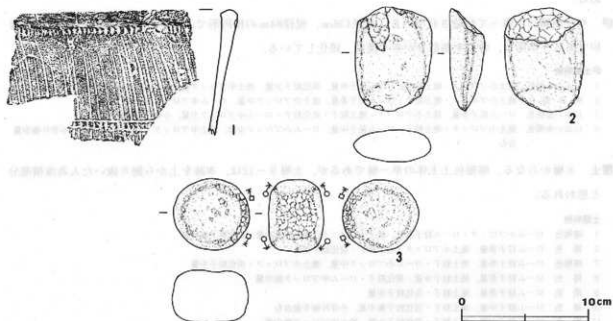
床 はほぼ平坦である。炉を中心に踏み固められた面が見られる。南側は黒色土の貼り床となっている。

炉 長径117cm、短径94cmの不整形円形をした地床炉が確認されている。正確な位置は不明だが、踏み締められた床の範囲から、住居跡のほぼ中央に付設されているものと思われる。覆土は残存しておらず、赤く焼けた炉床が露出している。

遺物 床面から極少量の遺物が出土している。1の口縁部片は炉の東側床面、2の磨製石斧は西部床面、3の敲石は南西部床面から出土している。

第116B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値			材質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第61図2	磨製石斧	(8.2)	6.1	(2.8)	(109.8)	緑泥片岩 Q45 欠損品 西部覆土
3	敲石	6.7	6.1	4.3	184.0	安山岩 Q16 礫石兼用 南西部覆土



第61図 第116B号住居跡出土遺物実測・拓影図

第61図1は縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、口縁部以下に2段の刻文帯が施され、下段は沈線区画、口縁部から胴部に僅かに斜行する条線が粗く施文されている。

所見 本跡の北側は擾乱のためほとんど削平されており、規模及び平面形を明確にとらえることが困難であった。南側部分は、炉を中心として残存している床から推定した。時期は、出土遺物が極少量で断定はできないが、縄文時代後期安行I式期と思われる。

第117号住居跡（第62図）

位置 調査区の西部、C15hs区。

重複関係 本跡は、南側部分を第755号、808号土坑に、中央部南側部分を第1093号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。本跡の北側部分は、第99号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。また、本跡の東側部分で第230A号、230B号住居跡、第1086号、1089号土坑と、南側部分で第189号住居跡と、中央部西側部分で第1094号、1095号土坑と重複しているが、本跡はこれらの遺構の上に構築されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡の西側部分は擾乱のため確認できなかったが、長径(8.54)m、短径(6.73)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-58°-W]

壁 南側で僅かに一部分残存している。残存部の壁高は16cmで、外傾して立ち上がる。他は立ち上がりを確認することはできなかった。

床 暗褐色土の床で、起伏がある。中央部分から炉周辺を中心に、若干踏み固められた面が見られる。

ピット 5か所。P₁は径44cmの円形で、深さ46cm、P₂は長径44cm、短径32cmの楕円形で、深さ37cm。推定平面形の壁際に位置することから、本跡に伴うピットと考えられる。P₂はP₁の南側に近接し、長径82cm、短径56cmの不整楕円形で、深さ21cm。性格は不明である。P₃(長径34cm、短径30cmの卵形で、深さ33cm)、P₄(長径44cm、短径34cmの不整楕円形で、深さ46cm)は遺構の中央部に位置しているが、やはり性格は不明で

ある。

炉 やや南側に片寄って付設されている。長径136cm、短径84cmの楕円形で、床を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。加床は、特に北側部分が赤く焼け、硬化している。

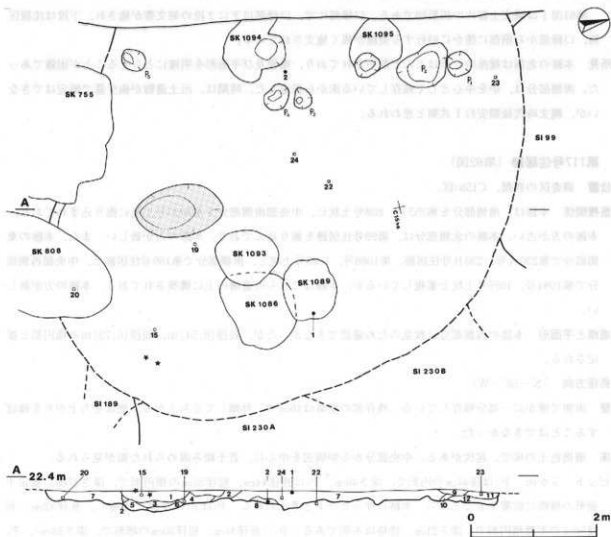
炉土層解説

- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土中ブロック極少量、小骨片極少量含む
- 4 明赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子多量、焼土中ブロック中量、ローム中ブロック極少量
- 5 にぶい赤褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック少量、小骨片極少量含む
- 6 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土中ブロック・炭化粒子極少量、小骨片極少量含む

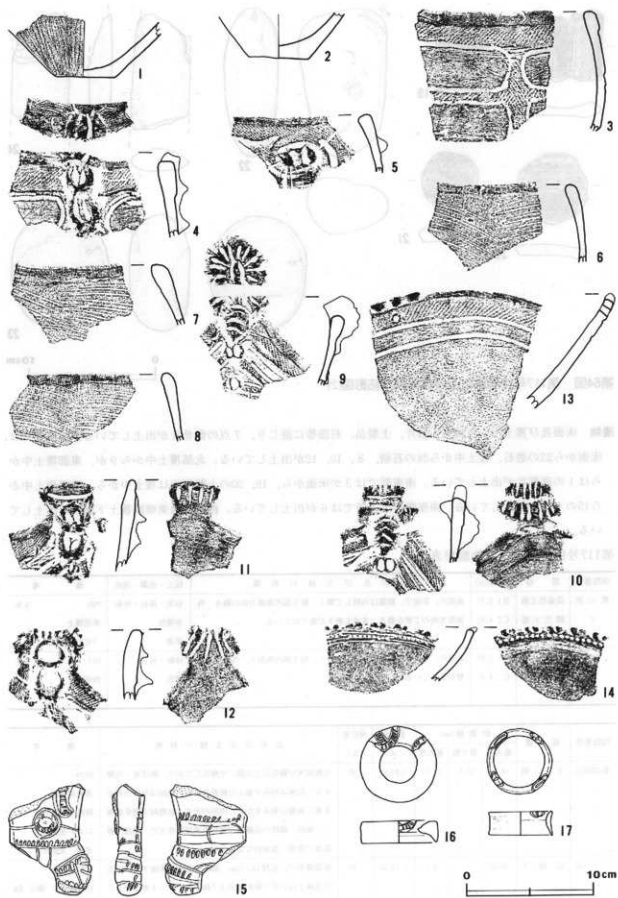
覆土 8層からなる。暗褐色土主体の単一層であるが、土層9～12は、本跡を上から掘り抜いた人為堆積部分と思われる。

土層解説

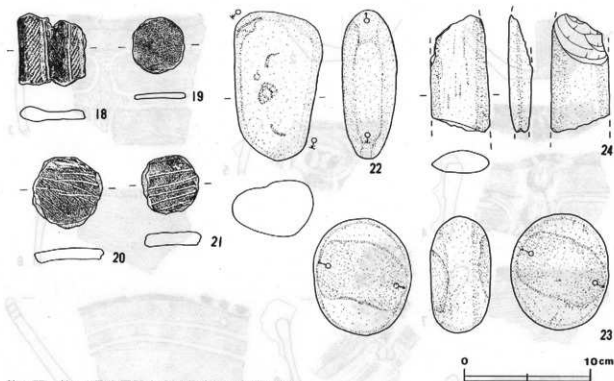
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土中ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子極少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック極少量
- 9 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、小骨片極少量含む
- 11 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック極少量
- 12 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量



第62図 第117号住居跡実測図



第63图 第117号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第64図 第117号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

遺物 床面及び覆土中から縄文土器片、土製品、石器等に混じり、7点の獣骨片が出土している。中央部では、床面から22の磨石、覆土中から24の石剣、8, 10, 12が出土している。北部覆土中から9が、東部覆土中からは1の底部片が出土している。南東部では3が床面から、19, 20の土製円板は覆土中から、壁際覆土中から15の土偶が出土している。南壁際覆土下層では6が出土している。獣骨は南東壁際覆土下層から出土している。

第117号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第63図 1	深鉢形土器	B(4.5)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下部内面縦方向の磨き、外面縦方向の丁寧な磨き、底部も磨きが施されている。	石英・長石・砂粒 赤褐色 普通	P60 5% 東部覆土 (安行)
	縄文土器	C(4.6)			
2	深鉢形土器	B(3.6)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下部内面削り、外面磨きで磨きされている。	砂粒・長石 褐色 普通	P61 5% 西部覆土 (安行)
	縄文土器	C 4.6			

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第63図15	土 偶	(8.8)	(6.5)	(2.5)	(110.0)	50	右脚部及び胸部以上欠損。平板化しており、脚は短く内彎する。乳房は刻みを加えた縦長の突起。腹部は中央に凹みを有し表面に刻みを加えた円形のボタン状突起で髭を表現し、横位、縦位の沈線及び横位の連続斜突で、胴部、脚部及び背面に直線的な文様が施されている。	DP24 南東部覆土 砂粒・長石・スコリア にぶい黄褐色 普通(後期か)
16	耳 飾り	(6.0)	-	1.7	(13.0)	20	有頸壘形で、孔径[3.0]cm。弧線に直線が連続する単位文が沈線に沿った降起帯別文で描かれ、3-4単位配されると思われる。	DP25 覆土 褐色(灰)土 褐色 艶 (後期後葉)

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大径	最大幅	最大厚				
第63図17	耳 飾 器	5.0	—	1.8	16.0	100	碗形耳飾で、内径4.0cm。沈線区画の突起状の文様を4単位有し、楕円形で中央に縦刻みを持つ文様と扁平な長楕円形で横部みを持つ文様が向かい合うように交互に配されている。	DP91 覆土 パミス・葉形 褐色 普通 (浅緑黄-晩期前期)
第64図18	土製片鉢	6.0	5.4	1.2	31.7	100	口縁部片利用 表面に隆起帯縄文帯に沈線区画の磨消帯	DP26 覆土
19	土製円板	4.5	4.1	0.5	10.6	100	表面に擦痕僅かに残存	DP27 覆土
20	土製円板	5.7	5.5	1.1	26.9	100	表面で糸線交錯	DP28 覆土
21	土製円板	4.5	4.5	1.1	29.4	100	表面に浅い縦沈線	DP29 覆土

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第64図22	磨 石	11.9	7.0	4.4	951.0	砂 岩	Q48 中央部覆土
23	磨 石	9.2	7.8	4.9	538.6	流 紋 岩	Q49 北部覆土
24	石 硯	(9.4)	4.7	1.7	(114.2)	緑泥片岩	Q50 欠損品 中央部覆土

第63図3～14は縄文土器片の拓影図である。3～5は深鉢形土器の口縁部で、3、4は沈線で長方形の枠状文様が描かれ、区画内磨り消し、口縁部と区画外は縄文が施文されている。4は口縁部突起下に縦長のブタ鼻状貼瘤が付けられている。5は口縁部下に設けられた貼瘤の周囲に三叉文の文様が見られる。6～8は粗製土器の口縁部で、口縁部以下下向き弧状の沈線が施文されている。9～12は波状口縁波頂部の破片で、波頂部に突起、口縁部に平行する隆起帯が波頂部下の貼瘤で連結されている。13、14は浅鉢形土器の口縁部片で、13は口縁部に縄文帯以下2段の沈線、口縁部上端に小突起が見られ、突起下に孔が穿たれている。14は口縁部内・外面に連続判突文、口縁部上端に小突起が連続で付けられている。

所見 壁の立ち上がりは不明瞭だったが、床面の広がりから東側部分を推定した。また、西側部分が残存していないため、東側部分から規模及び平面形を想定した。時期は、出土遺物から縄文時代晩期安行Ⅲa式期である。

第137号住居跡 (第65図)

位置 調査区の北東部、C16c区。

重複関係 本跡は、東側部分を第504号土坑に、南側部分を第502号土坑に掘り込まれている。また、本跡の東側部分は第503号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径6.38m、短径5.53mの楕円形である。

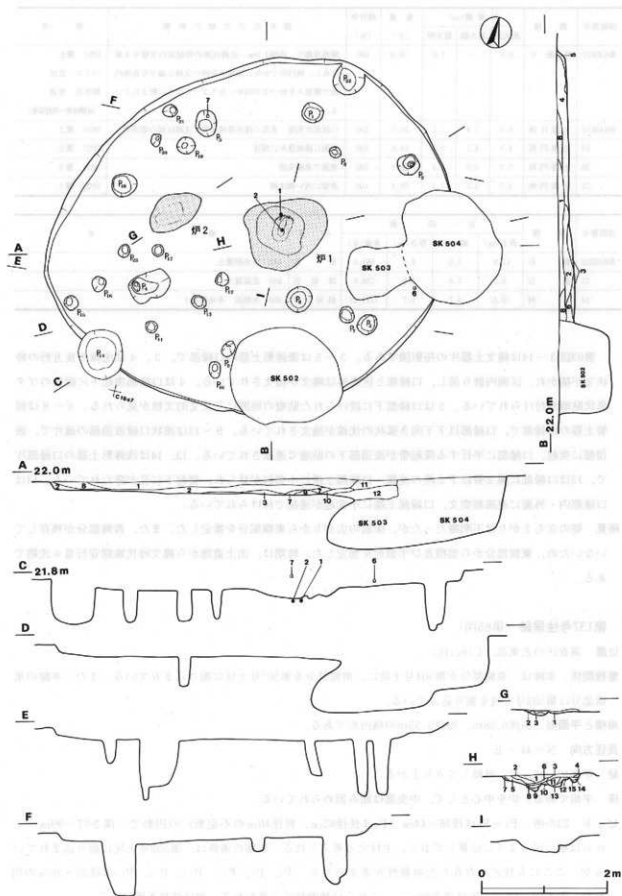
長径方向 N-44°-E

壁 壁高12～17cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉を中心として、中央部は踏み固められている。

ピット 23か所。P₁～P₅は径36～44cm (P₄は長径65cm、短径40cmの不定形)の円形で、深さ77～99cm。これらは壁に沿うように位置しており、支柱穴と考えられる。本跡の南側は、第502号土坑に掘り込まれているが、ここにも支柱穴が存在した可能性が考えられる。P₆、P₇、P₁₀、P₁₁、P₁₃、P₁₉は径20～30cmの円形で、深さ22～63cm (P₇は深さ88cm)。これらは補助支柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉 2か所。炉1は本跡のほぼ中央に付設されている。長径140cm、短径121cmの不定形で、北側に土器片を散



第65图 第137号住居跡実測图

置した土器片囲い炉である。掘り込みは最低部で28cmほど、長径の断面は傾斜の緩い「V」字状で、炉床は凸凹で火熱で赤く焼け、硬化している。炉2は西壁寄りに付設されている。長径91cm、短径55cmの楕円形で、床を8cm掘りくぼめた地床炉である。炉1と比較して、掘り込みも浅く、炉床もそれほど焼けていない。

炉1土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、炭化物極少量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 8 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 9 赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 10 にぶい赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 11 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土大ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 12 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子極少量
- 13 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子極少量
- 14 褐色 ローム中ブロック中量、焼土中ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 15 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子極少量

炉2土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック中量、炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量

覆土 12層からなる。中央部に土層3、9、7が薄くブロック状に堆積しているが、他は壁際から流れ込むように堆積しており、自然堆積である。

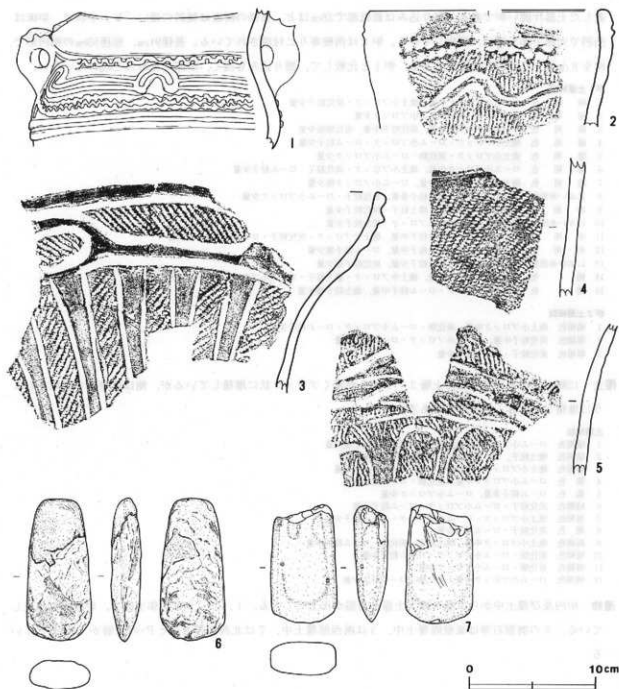
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化物少量、焼土粒子極少量
- 2 暗褐色 焼土粒子、ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 8 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化物・ローム粒子少量
- 10 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 11 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック中量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量

遺物 炉内及び覆土中から少量の縄文土器と石器が出土している。1、2、5は炉体土器で、炉内から出土している。6の磨製石斧は東壁際覆土中、3は南西部覆土中、7は北西部覆土中とP₇の上層から出土している。

第137号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66面 1	深鉢形土器	A 16.5	胴上半から口縁部にかけての破片。胴上半は胴部から内傾し、口縁部は短く直立する。口縁部に2対の環状把手を有する。無文の口縁部下に沈線を高めし、胴上部文様帯と区画されている。胴上部文様帯は、沈線を伴う隆帯を平行に2本1組で中位、下位に高めし、上下の隆帯は、把手付近で曲線や三角形のモチーフを強く連続し、正面の中心には「V」字状の隆帯が左右を結んでいる。口縁部には、交互斜突による連続「コ」字文、隆帯による区画内には交互斜突による幅歯状文が加飾されている。	砂粒・雲母・長石・スコリア 褐色 普通	P62 炉内 (中鉢)
	縄文土器	B (11.3)			
2	深鉢形土器	A (18.6)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は僅かに内傾する。口縁部直下に2段の沈線を高らし、沈線内に「C」字状の連続斜突が加えられている。胴部は無彫りの縄文を横帯で施文し、横走する2本の平行沈線沈線で文様が切断されている。	砂粒 褐色 普通	P63 炉内 (加納利E型)
	縄文土器	B (9.4)			



第66図 第137号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器種	計測値				石質	備	考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(R)			
第66図6	磨製石斧	11.3	5.2	2.4	207.2	緑泥片岩	051 定角式 風化が著しい 東部南礫土	
7	磨製石斧	(9.4)	5.2	2.7	(238.2)	緑泥片岩	052 定角式 北部礫土	

第66図3-5は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部片で、口縁部に楕円形状の区画文、胴部に磨り消しの懸垂文が施され、口縁部区画内と胴部磨消帯間には単節縄文RLが施文されている。4は胴部片で、単節縄文RLが施文され、5は胴部に「冂」状のモチーフが描かれている。中期加曾利EⅡ式に比定される土器である。

所見 本跡の炉からは縄文時代中期中・晩期の土器も炉体土器として使用されているが、廃棄遺物の再利用と考えられ、他の炉内出土土器及び覆土中からの出土遺物から、時期は縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第168号住居跡(第67図)

位置 調査区の北西部、

C15e区。

重複関係 本跡は、北壁の一部を第724号土坑に、南壁の一部を第759号土坑に、床は第725号、726号、727号及び758号土坑に掘り込まれている。南側部分で第196号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径5.16m、短径3.48mの楕円形である。

長径方向 N-50°-W

壁 北壁と南壁の一部が土坑に掘り込まれているが、他は残存している。壁高8~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが、南側に向かいやや傾斜している。踏み固められた面は見られない。

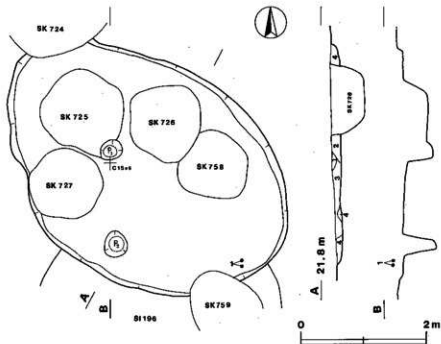
ピット 2か所。P₁は長径36cm、短径30cmの楕円形で、深さ39cm、P₂は長径42cm、短径36cmの卵形で、深さ61cm。数も少なく、位置も規則性がなく、主柱穴かどうかは不明である。

覆土 4層からなる。壁際はローム粒子を多量に含む褐色土、中央部は暗褐色土の覆土である。土層1~3は基本的に同質の覆土であり、自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック・ローム小ブロック極少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック少量

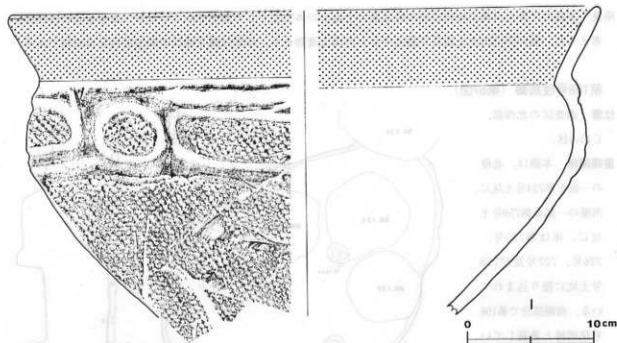
遺物 本跡の床面及び覆土中から縄文土器が少量出土している。細片が多く、器形の判別できるものは1のみで、南東壁際床面から出土している。



第67図 第168号住居跡実測図

第168号住居跡出土遺物観察表

図録番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図	浅鉢形土器	A(46.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は短曲して外反する。口縁部はナデで無文である。胴部地文に縦線・横文R・L・Rを横波状回転で施す。胴上部には縦線と比喩で円形及び長楕円形の区画を施した文様帯が構成されている。内面及び口縁部外面に赤彩の区画が見られる。	砂粒・スコリア 明黄褐色 普通	P64 20% 青東壁際床面 (加曾利EⅢ)
1	縄文土器	B(24.5)			



第68図 第168号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡から炉跡は確認されなかった。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第169号住居跡 (第69図)

位置 調査区の北西部端、C15c区。

重複関係 本跡は、南側部分を第724号土坑に掘り込まれている。中央部北側部分で第717号土坑と、南側部分で第723号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 覆土と壁の判断が難しく、平面形を明確にとらえられなかったが、長径(7.50)m、短径(6.04)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-52°-W]

壁 南壁の一部が残存しており、壁高11cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。他は掘り込みの段階では確認することはできなかった。

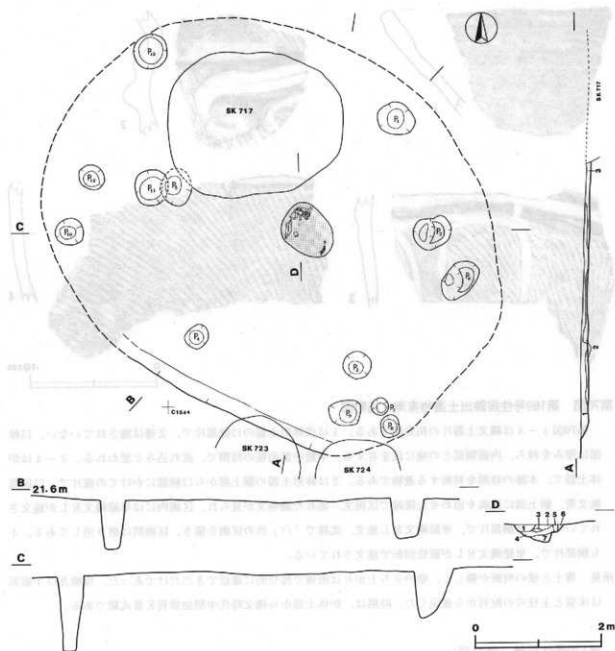
床 平坦である。炉周辺を中心に、中央部は踏み固められている。

ピット 13か所。P₁~P₅は長径41~64cmの円形あるいは楕円形で、深さ57~82cm。これらは炉からの距離、配列から主柱穴と思われる。位置的に、第717号土坑によって主柱穴が1か所掘り抜かれているものと思われる。他は性格不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径93cm、短径70cmの卵形で、床を20cmほど掘りくぼめ、北西側と南東側を土器片と石で囲んだ土器片石囲い炉である。炉土層4が炉床で、火熱で赤く焼け、硬化している。土層7はローム土の地山だが、火熱をおび、硬くなっている。

炉土層解説

- | | | |
|---|------|-----------------------------------|
| 1 | 赤褐色 | 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量 |
| 2 | 赤褐色 | 焼土小ブロック中量、焼土中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 |
| 3 | 赤褐色 | 焼土小ブロック中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量 |
| 4 | 明赤褐色 | 焼土大ブロック・焼土中ブロック多量 |
| 5 | 明赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 |
| 6 | 褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子極少量 |
| 7 | 褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック多量 |

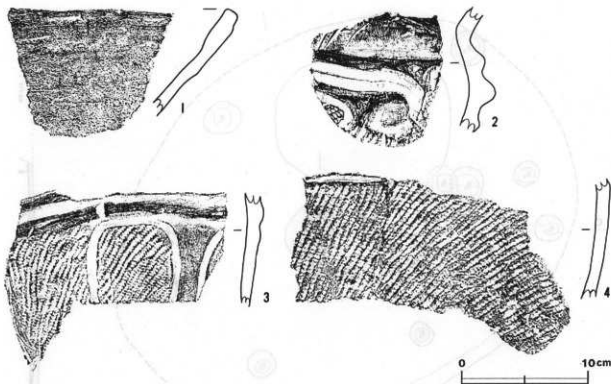


第69図 第169号住居跡実測図

覆土 3層からなるが、含有物も大差のないほぼ一連の層で、自然堆積と思われる。

- 土層解説
- 1 褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 - 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
 - 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物 炉及び覆土中から遺物が極少量出土している。炉を挟むように2と4は北西側、3は南西側床面から出土している。



第70図 第169号住居跡出土遺物実測・拓影図

第70図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は浅鉢形土器の口縁部片で、文様は施されていない。口縁部は厚みを持ち、内面胴部との境に段を有する。中期中葉前後の時期で、流れ込みと思われる。2～4は炉体土器で、本跡の時期を判断する遺物である。2は鉢形土器の胴上部から口縁部にかけての破片で、口縁部無文帯、胴上部に沈線に沿せた隆線で区画文、崩れた渦巻文が見られ、区画内には単節縄文RLが施文されている。3は胴部片で、単節縄文RL地文、沈線で「U」状の区画を描き、区画間は磨り消してある。4も胴部片で、単節縄文RLが縦位回転で施文されている。

所見 覆土と壁の判断が難しく、壁の立ち上がりは南側で部分的に確認できただけであった。規模及び平面形は床質と支柱穴の配列から推定した。時期は、炉体土器から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第170号住居跡 (第71図)

位置 調査区の北西部、C15e2区。

重複関係 本跡は、南側部分で第171号、173号住居跡を掘り込んでいる。

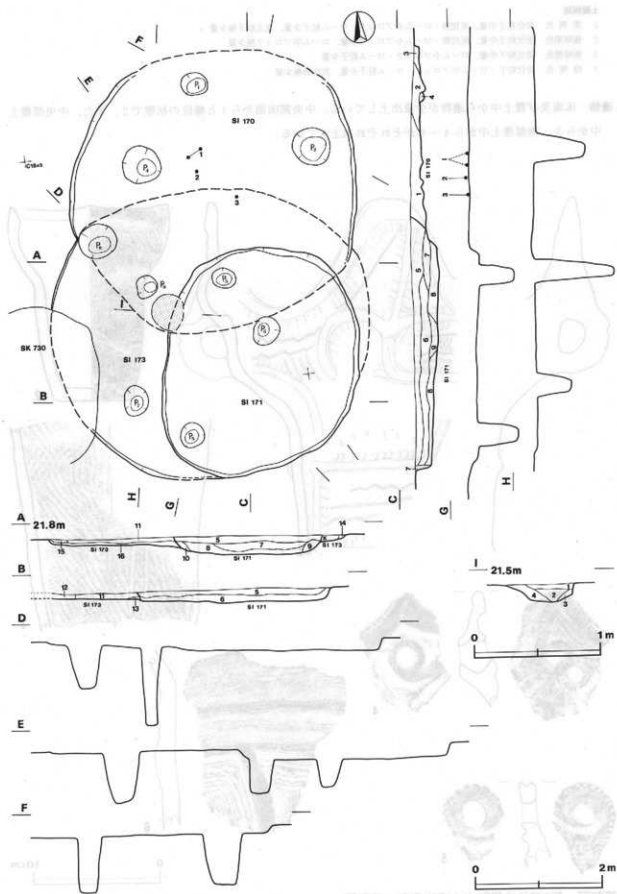
規模と平面形 長径(4.56)m、短径(4.55)mの円形と推定される。

壁 東壁と西壁が残存しており、壁高4～13cmで、外傾して立ち上がる。北壁は削平され、南壁は確認できなかった。

床 平坦である。僅かだが、中央部に踏み固められた面が見られる。

ピット 4か所。P1～P4は長径38～60cmの円形あるいは楕円形で、深さ73～91cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P5は長径36cm、短径32cmの不定形で、深さ128cm。配列及び深さ等から本跡に伴うピットという可能性は少ない。P5は第173号住居跡のピットである。

覆土 4層からなる。土層2・3は基本的に同質の覆土で、自然堆積と思われる。

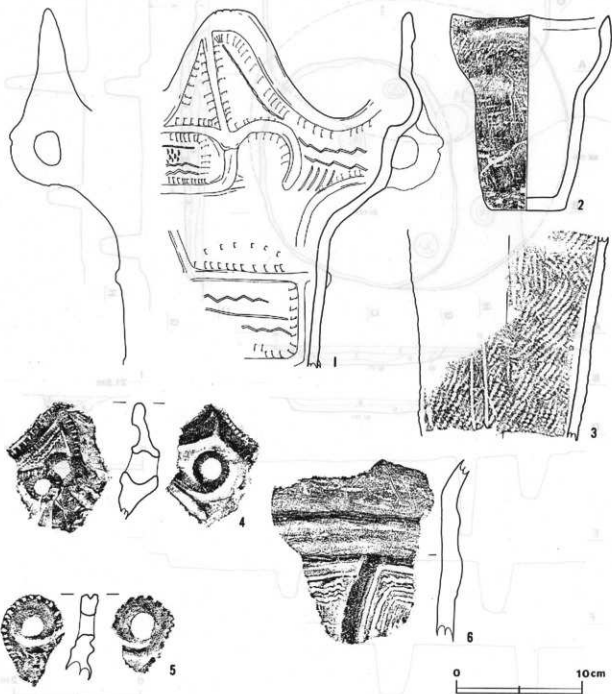


第71图 第170·171·173号住居跡实测图

土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子極少量
- 2 極暗褐色 炭化粒子中量, 炭化物・ローム小ブロック少量, ローム中ブロック極少量
- 3 極暗褐色 炭化粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量, 炭化物極少量

遺物 床面及び覆土中から遺物が少量出土している。中央部床面から1と横位の状態で2, また, 中央部覆土中から3, 南部覆土中から4~6がそれぞれ出土している。



第72図 第170号住居跡出土遺物実測・拓影図

国史館蔵書(式)・111・次1冊 221頁

第170号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	漆林形土器 縄文土器	A(29.0) B(28.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は僅かに外傾しながら立ち上がり、胴部で大きく外傾した後垂直に立ち上がる。山形把手を有する波状口縁で、把手上端から垂下する隆帯及び側位に下がる隆帯が、把手下部を切断する隆帯と連絡し、三角形の区画内には隆帯に沿って幅広い結節沈線文、内部には押し引き沈線文が施されている。胴部上端には把手下の隆帯と環状把手状に連絡する隆帯を貼り付け、隆帯に沿って幅広い結節沈線文、内部に平行する波状沈線や押し引き沈線文が施されている。胴部には無文帯で、胴部以下にはクランク状に連絡する隆帯を貼り付け、区画内には同様の文様が施文されている。	灰帯・灰石・砂粒 暗褐色 普通	P65 20% 中央部覆土層 (阿玉台III)
2	小形漆林形土器 縄文土器	A(12.4) B 15.5 C 6.0	平底で、胴部は僅かに外傾して立ち上がり、胴部で大きく外傾した後やや内傾しながら直立気味にやや波状の口縁部に至る。口縁部は内側が波状で、内・外面に稜を持つ。半周縄文L Rを併せ回転で施文した後磨り滑しており、痕跡のみ認められる。	灰帯・砂粒 赤褐色 普通	P67 70% 中央部覆土下層 (阿玉台IV)
3	漆林形土器 縄文土器	B(16.4)	胴部片。やや外傾して直線的に立ち上がる。半周縄文R Lを縦位回転、部分的に横位回転で施文し、2本の沈線によって区画された狭い直線の磨り滑りが施されている。	灰石・スコリア 明赤褐色 普通	P66 10% 中央部覆土上層 (加曽利E II)

第72図4～6は縄文土器片の拓影図である。4、5は把手片で、4は隆帯で縁取られた孔を有し、隆帯の隙間にバン先状の結節沈線文及び小波状沈線が施されている。5は環状の把手で、隆帯に刻みが施されている。6の胴部片は隆帯による区画内に沈線で直線及び小波状等のモチーフが描かれている。これらは中期中葉の範疇に含まれる土器であると思われる。

所見 本跡の北壁と南壁は確認できなかったが、東壁、西壁、主柱穴及び土層の立ち上がりから規模と平面形を推定した。本跡内で炉は確認されなかった。出土遺物は少量で、しかも縄文時代中期阿玉台III式期～加曽利E II式期までの遺物が混在しており、時期特定は困難である。中期阿玉台IV式期から加曽利E I式期の範疇と考えておきたい。

第171号住居跡(第71図)

位置 調査区の北西部、C15e4区。

重複関係 本跡は、北側部分の上部を第170号住居跡に掘り込まれている。また、本跡は、第173号住居跡の南東側部分を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径3.87m、短径3.14mの楕円形である。

長径方向 N-33°-E

壁 壁高17～22cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。中央部に僅かな踏み固められた面が見られる。

ピット 住居跡内には3か所のピットがあるが、P₁は第170号住居跡、P₂は第173号住居跡のピットである。

P₂は径40cmの円形で、深さ67cm。規模的には第173号住居跡のP₂とほぼ同じだが、位置的に第173号住居跡の柱穴としては不自然であり、他にピットがないため本跡のピットという判断にはやや無理があると思われる。

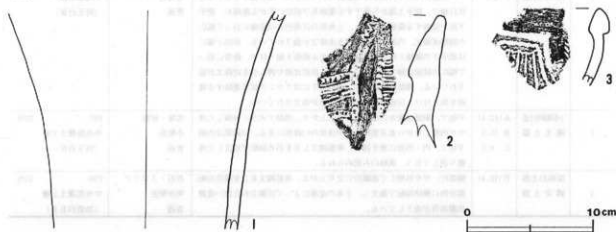
覆土 土層5～10が本跡の覆土で、6層からなる。不自然な様相の人為堆積である。

土層解説

- 5 黒褐色 炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・ローム粒子極少量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量

- 8 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
 9 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量, 炭化物極少量
 10 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック極少量

遺物 北部覆土中から縄文土器片が少量出土している。1～3も北部の覆土から出土している。



第73図 第171号住居跡出土遺物実測・拓影図

第171号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目録値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(17.4)	胴部片, 外傾して立ち上がる。外面は無文で, 磨きが施されている。	長石・スコリア・雲母 濃い赤褐色 普通	P08 20% 北東部覆土 (中期)

第73図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2は波状口縁波頂部片で, 隆帯による区画に沿って結節沈線文, 内部は半截竹管による平行沈線が施文されている。3も隆帯に沿う結節沈線文が2列, 内部に直線的沈線及び小波状沈線が施文されている。

所見 本跡内から炉跡は確認されなかった。時期は, 出土遺物から縄文時代中期中葉前後であると思われる。

第173号住居跡 (第71図)

位置 調査区の北西部, C15e2区。

重複関係 本跡は, 北側部分を第170号住居跡に, 東側部分を第171号住居跡に, 西側部分を第730号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡の北側から南東側部分にかけての平面形が不明瞭であるが, 長径(5.08)m, 短径(4.60)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-68°-E]

壁 北西壁と南西壁が僅かに残存している。壁高4cmほどで, 外傾して立ち上がる。

床 中央部より東側と西壁寄りの床が掘り込まれているが, 西側が部分的に残存している。残存部はほぼ平坦で, 踏み固められた面は見られない。

ピット 推定平面形内には6か所のピットが確認されている。P₅は長径45cm, 短径40cmの卵形で, 深さ67cm, P₇は長径48cm, 短径38cmの楕円形で, 深さ60cm, P₈は長径59cm, 短径53cmの楕円形で, 深さ72cm。これらのピットは, 炉からの距離及び規模から主柱穴と考えられる。P₅は第170号住居跡のピット。P₅, P₈は性格不明である。

炉 中央からやや西寄りに付設されている。炉の東側部分は第171号住居跡に掘り込まれているが, 長径(62)cm,

短径[52]cmの楕円形と推定され、床を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・ローム中ブロック極少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック中量、焼土中ブロック少量、炭化粒子・ローム中ブロック極少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
- 4 褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土中ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子極少量

覆土 6層からなる。各層とも褐色土の一連の層であり、自然堆積である。

土層解説

- 11 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 12 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 13 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子極少量
- 14 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 15 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 16 褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム中ブロック極少量

遺物 本跡から遺物は出土していない。

所見 本跡は、北側部分から南東部分が掘り込まれて残存していないため、規模及び平面形は北西壁と南西壁の残存状況から推定した。時期は、出土遺物がないため、第170号、171号住居跡との重複関係から推定すると、時期は縄文時代中期中葉以前と思われる。

第172号住居跡（第74図）

位置 調査区の西部、C15g1区。

重複関係 本跡は、南側部分で第175号住居跡を掘り込んでいる。また、北東側部分で第734A号土坑と、北西側部分で820号、821号土坑と、南側部分で第852号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 壁の立ち上がりは部分的にしかとえられなかったが、長径[4.85]m、短径[4.40]mの不整形と推定される。

壁 東壁の一部が残存している。壁高10cmほどで、外傾して立ち上がる。他は立ち上がりを確認することはできなかった。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

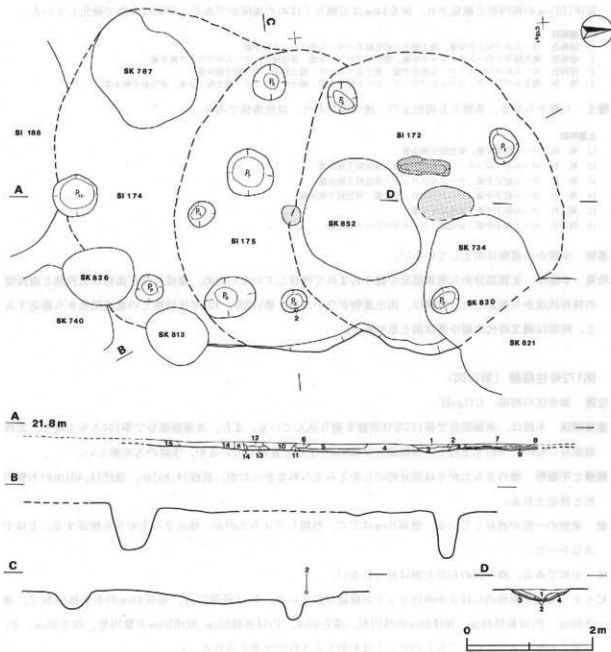
ピット 推定平面形内には3か所のピットが確認されている。P₁は長径57cm、短径43cmの不整形楕円形で、深さ80cm、P₂は長径44cm、短径38cmの楕円形、深さ30cm、P₃は長径55cm、短径50cm不整形形、深さ35cm。P₁の深さが他と異なるが、これらのピットは配列から支柱穴と考えられる。

炉 はほぼ中央に付設されている。東側部分は擾乱のため確認できなかったが、残存している西側部分から、長径96cm、短径[54]cm、床を17cmほど皿状に掘りくぼめた、楕円形状と推定される地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。炉の西側に近接して、長径84cm、短径23cmの長楕円形の焼土痕が見られる。溝状に掘り込んでいるが、床は焼けてなく、炉ではないと思われる。この焼土痕の上層より、獣骨が出土している。

炉土層解説

- 1 明赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 に近い赤褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 3 に近い赤褐色 ローム粒子多量、焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量

覆土 9層からなる。土層1～3は炉土層の覆土であり、他の層と分層してあるが、全体に同質で自然堆積である。

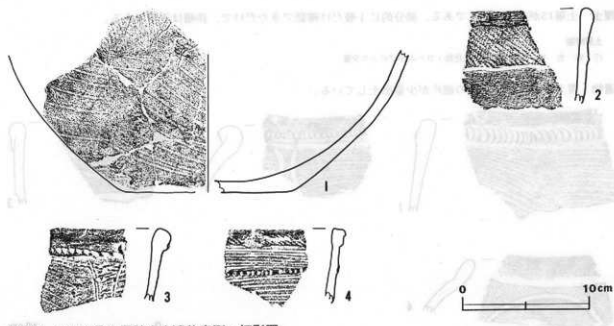


第74図 第172・174・175号住居跡実測図

土層解説

- 1 極暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 極暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量
- 6 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、炭化物極少量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 覆土中から縄文土器片が少量出土している。1～4はいずれも覆土中からの出土である。この他に、獣の焼骨片が3点覆土中から出土している。



第75図 第172号住居跡出土遺物実測・拓影図

第172号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	浅鉢形土器 縄文土器	B(11.4) C(13.0)	底部から胴部にかけての破片。平底で、胴部は内唇しなげ外傾する。右下がりの斜行条線が粗く施されている。条線の器面への食い込みは浅い。	砂粒・長石・スコリア にふい殻色 普通	P99 覆土 15%

第75図2～4は縄文土器片の拓影図である。いずれも口縁部片で、2は口縁部以下に幅広の縄文帯が施され、縄文帯以下に沈線が施文されている。3は口縁部に三角刻文が巡され、以下の下向き弧状の条線を「U」状の沈線が切り、区画内にも三角文が縦位に施されている。4は口縁部に隆起帯縄文、胴部上位に隆起帯刻文を施したもので、隙間には浅い沈線が横方向に施文されている。3点とも後期安行式の範疇に含まれる土器である。

所見 本跡の壁は、東側で部分的に残存しているだけで、全体を明確にとらえることはできなかった。規模及び平面形は残存している壁と支柱穴の配列から推定した。時期は、出土遺物及び重複関係から縄文時代後期安行Ⅱ式期と思われる。

第174号住居跡(第74図)

位置 調査区の西部、C15h1区。

重複関係 本跡は、北側部分を第175号住居跡に掘り込まれている。また、南東側部分で第813号、826号土坑と、南側部分で第188号住居跡と、南西側部分で第787号土坑と重複している。第188号住居跡より本跡の方が新しいが、他との新旧関係は不明である。

規模と平面形 北側部分が残存しておらず、南側部分の立ち上がりも確認できず、規模及び平面形は不明である。

壁 東壁の一部が残存しており、壁高4cmほどで、外傾して立ち上がる。
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

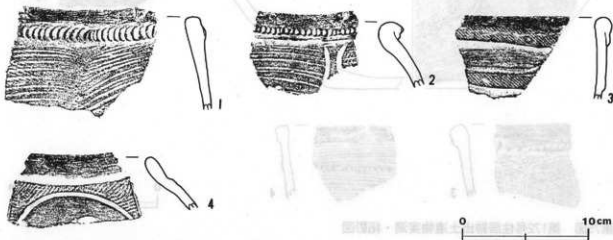
ピット 2か所。P9は長径48cm、短径45cmの不整円形で、深さ17cm、P10は径70cmほどの円形で、深さ15cm。北側半分は第175号住居跡に掘り込まれており、確認できなかった。

覆土 土層15が本跡の覆土である。部分的に1層だけ確認できただけで、詳細は不明である。

土層解説

15 褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量

遺物 覆土中から縄文土器の細片が少量出土している。



第76図 第174号住居跡出土遺物実測・拓影図

第76図1～4は縄文土器口縁部片の拓影図である。1は口縁部肥厚面に薄い粘土柱による隆起帯刻文を貼り付け、以下に左下がり弧状の条線が施文されている。2は折り返しにより口縁部肥厚面を作出し、隆起帯刻文貼り付け、以下横位の条線文が「U」状の沈線に切断されている。3は2段の隆起帯刻文が口縁部から施文されている。これらは後期安行Ⅱ式の範疇である。4は口縁部無文帯、胴上部に下向き弧状の沈線が施され、区画外縄文施文、区画内及び口縁部及び内面には磨きが施されている。後期加曾利B 2式に比定される土器と思われる。

所見 本跡は、北側が第175号住居跡に掘り込まれており、全体像をとらえることは困難であった。時期は、出土遺物から縄文時代後期安行Ⅱ式期と思われる。

第175号住居跡 (第74図)

位置 調査区の西部、C15h1区。

重複関係 本跡は、北側部分を第172号住居跡に掘り込まれ、南側部分は第174号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形 北側部分は掘り込まれているが、南側部分の状況から、長径(4.75)m、短径(4.00)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-75°-W]

壁 東壁が一部残っている。壁高10cmほどで、外傾して立ち上がる。他は確認できなかった。

床 中央部が僅かにくぼんでいる。踏み固められた面は見られない。

ピット 5か所。P₃は長径45cm、短径34cmの楕円形で、深さ46cm、P₁は長径44cm、短径40cmの楕円形で、深さ33cm、P₄は、長径57cm、短径50cmの楕円形で、深さ28cm。これらは、規模及び配列から主柱穴と考えられる。北側は掘り込まれており、本跡に係るピットは確認されてない。Pr、Paは主柱穴より大形で、性格は不明である。

炉 中央部に付設されている。第172号住居跡床面の直下から確認されており、覆土は削平され、赤く焼けた炉床の痕跡だけが認められた。

覆土 5層からなる。褐色土、暗褐色土が混在しており、人為堆積の様相を示している。

土層解説

- 10 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 11 褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 12 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 13 褐色 ローム粒子中量、炭化物極少量
- 14 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 床面及び覆土中から極少量の遺物が出土している。いずれも細片で、器形の判断できるものは少ない。

2の垂飾はP₃直上からの出土である。この他に獣骨片が覆土中から3点出土している。



第77図 第175号住居跡出土遺物実測・拓影図

第175号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	許 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第77図2	埴土製縁部片	4.3	2.4	1.8	29.9	ヒスイ	Q53 有孔 裏面有溝 P ₃ 床面

第77図1は縄文土器口縁部片の拓影図である。波状口縁を呈し、口縁部にやや幅広、胴上部に細い沈線区画の隆起帯縄文を施し、胴部の縄文帯はボタン状の貼窟で連結されている。縄文時代後期安行Ⅱ式に比定される土器である。

所見 本跡は、壁の立ち上がりが東側の一部分しか確認できなかったので、南側部分は主柱穴の配列及び土層の立ち上がりから推定した。出土遺物は極少量で、しかも細片ばかりのため時期を特定するのは困難であるが、縄文時代後期安行式期と考えておきたい。

第176号住居跡 (第78図)

位置 調査区の西部、C15h3区。

重複関係 本跡は、北側部分を第181号住居跡に掘り込まれている。

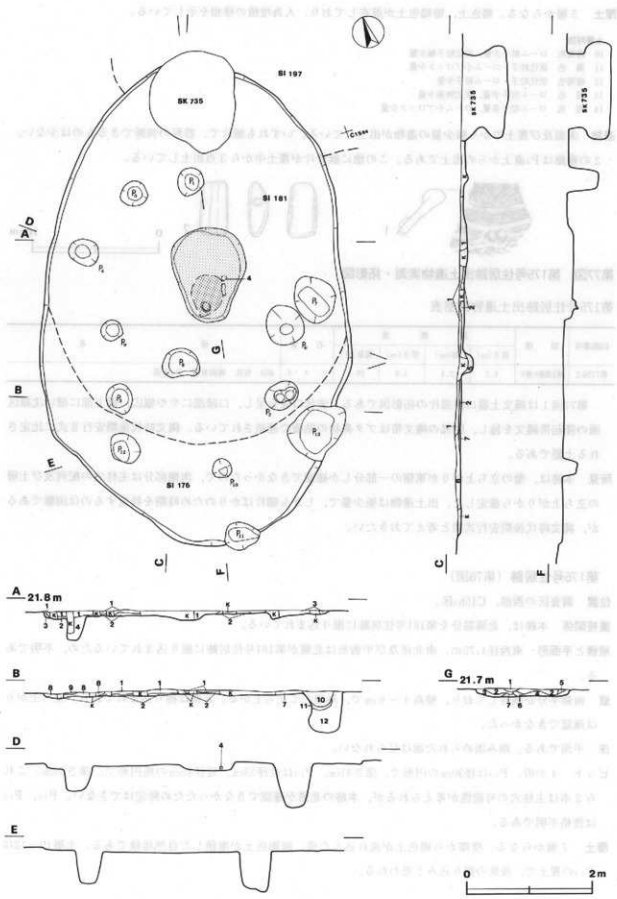
規模と平面形 東西径4.75m、南北径及び平面形は北側が第181号住居跡に掘り込まれているため、不明である。

壁 南側半分が残存しており、壁高4～6cmで、外傾して立ち上がる。北側は掘り込まれており、立ち上がりは確認できなかった。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 4か所。P₁₀は径30cmの円形で、深さ31cm、P₁₂は長径53cm、短径45cmの楕円形で、深さ53cm。これら2本は主柱穴の可能性が考えられるが、本跡の北側が確認できなかったため断定はできない。P₁₁、P₁₃は性格不明である。

覆土 7層からなる。壁際から褐色土が流れ込んだ後、暗褐色土が堆積した自然堆積である。土層10～12はP₁₃の覆土で、後世の掘り込みと思われる。

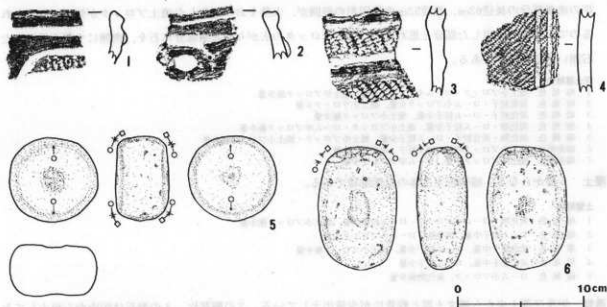


第78図 第176・181号住居跡実測図

土層解説

- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子極少量
- 9 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 10 黒褐色 炭化粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量、小骨片少量含む
- 11 黒褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック少量
- 12 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量

遺物 床面出土の遺物はなく、5、6の磨石や少量の縄文土器の細片及び鹿の踵骨が覆土中から出土している。



第79図 第176号住居跡出土遺物実測・拓影図

第176号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第79図 5	磨 石	6.7	7.0	4.2	318.7	安山岩	Q54 鹿石家用 覆土
6	磨 石	9.7	6.2	4.1	402.6	流紋岩	Q55 鹿石家用 覆土

第79図1～4は縄文土器片の拓影図である。1、2は沈線に沿わせた隆帯による区画文や曲線の文様で口縁部文様帯を構成し、1は区画内に縄文が施文されている。3も口縁部の破片で、単節縄文R Lを地文にし、隆線により口縁部が区画されている。4は単節縄文R Lが地文で、平行沈線が胴部を垂下している。
 所見 本跡は、北側部分が第181号住居跡に掘り込まれているため、規模、平面形及び炉等不明な点が多い。出土遺物から、縄文時代中期加曾利E I～II式期にかけての時期と思われる。

第181号住居跡 (第78図)

位置 調査区の西部、C15g区。

重複関係 本跡は、南側部分で第176号住居跡を掘り込んでいる。また、北側部分で第197号住居跡、第735号土坑と重複している。第735号土坑との切り合い部分が攪乱のため土層断面からは判断できないが、本跡の方が新しいと思われる。第197号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径(6.08)m、短径4.62mの楕円形と推定される。

長径方向 N-13°-E

壁 壁高4~6cmで、外傾して立ち上がる。南側部分と北側の一部の立ち上がりが確認できなかった。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 9か所。P₁~P₄は、長径46~55cmの円形あるいは楕円形で、深さ40~59cm。P₁がやや壁から離れているが、炉の中心部からの距離、配列及び規模等から支柱穴と考えられる。P₃は径43cmの円形で、深さ23cm、P₄は径34cmの円形で、深さ29cm。これら2本は、補助支柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉 中央部やや南側に付設されている。掘り方は、長径153cm、短径115cmの楕円形で、深さ12cmほどであるが、炉の南側部分の長径62cm、短径52cmの楕円形の範囲が、火熱をおび硬化した焼土ブロックが炉床に認められるので、実際に使用した部分と思われる。焼土ブロックの広がり北東部分に石を、南側に土器を埋設した石囲い土器埋設炉である。

炉土層解説

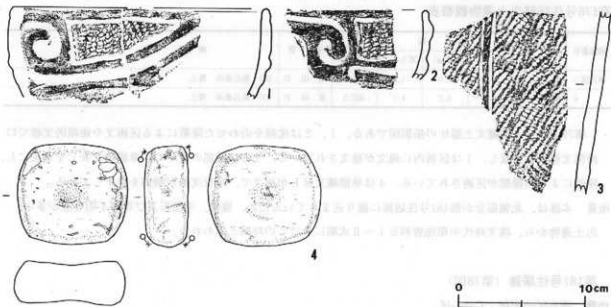
- 1 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック少量、焼土中ブロック極少量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム少量、焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量
- 5 暗褐色 炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土小ブロック極少量
- 6 暗赤褐色 焼土中ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土中ブロック中量、ローム中ブロック少量

覆土 5層からなる。暗褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック、炭化物極少量

遺物 炉及び覆土中から縄文土器と獣骨片が少量出土している。3の胴部片、4の磨石は炉内から出土しており、炉体である。1、2は東部覆土中からの出土である。



第80図 第181号住居跡出土遺物実測・拓影図

第181号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図	深鉢形土器	A(70.0)	直立する口縁部片。沈線と隆線で横長の三角形や溝状の区画を構成し、三角形の区画内は単純縦文Rが縦位あるいは斜め回転で施文されている。	砂粒・雲母・長石 赤色	P79 東部覆土 (加賀利E目)
1	縄文土器	B(7.2)			

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第80図4	磨 石	8.0	8.8	3.4	473.4	流紋岩	058 表・裏面中央に凹み 炉内

第80図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2は口縁部片で、沈線、隆線で渦巻文及び区画文を描き、区画内には縄文が施文されている。3は胴部片で、単節縄文RLが縦回転で施文され、さらに幅の狭い平行沈線が縦方向に施文され、沈線間は磨り消されている。

所見 本跡は、南側部分の壁の立ち上がり不明であったが、土層の切り合い及び主柱穴の配列から南側部分を推定した。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅡ式期である。

第178号住居跡(第81図)

位置 調査区の西部, C15j区。

重複関係 本跡は、東側部分を第738号、739号土坑に、南側部分を第741号、814号土坑に、北側部分を第795号、829号土坑に掘り込まれている。南西側部分で第179号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 壁の立ち上がりを確認できなかったが、長さ(6.58)m、短径(6.40)mの円形と推定される。

床 平坦である。僅かに踏み固められている。

ピット 10か所。P₁~P₃, P₄, P₅は、径30~59cmの円形で、深さ21~53cm。これらは、規模にばらつきはあるが、配列から主柱穴と思われる。P₆(径28cmほどの円形で、深さ16cm)、P₇(径35cmの円形で、深さ35cm)は補助柱穴と考えられる。炉の西側に位置するP₁₀は長径44cm、短径36cmの楕円形で、深さ130cm、南側壁寄りに位置するP₈は長径76cm、短径54cmの楕円形で、深さ57cm。両方とも性格は不明である。

炉 中央部や北側に付設されている。径105cmほどの円形で、床を32cmほど掘りくぼめた地床炉である。覆土は焼土を少量含んでいるだけで、炉床もそれほど硬化していない。炉の西側に焼土の堆積地点があり、床上10cmほどの高さに堆積している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土中ブロック・ローム小ブロック極少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物少量、焼土中ブロック極少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土中ブロック・焼土粒子極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、焼土中ブロック・焼土小ブロック少量

焼土裏土層解説

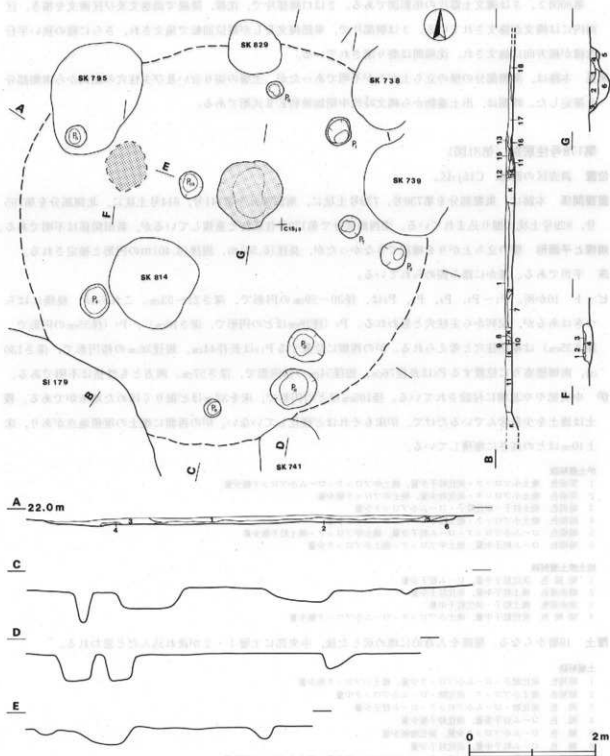
- 1 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子中量
- 4 暗褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック極少量

覆土 18層からなる。壁際を人為的に埋め戻した後、中央部に土層1・2が流れ込んだと思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子極少量
- 5 褐色 ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 7 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 11 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 12 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 13 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物極少量

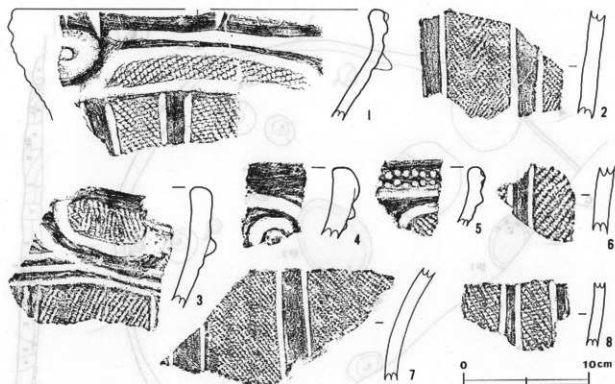
- 14 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量
- 15 暗褐色 ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量
- 16 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子極少量
- 17 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 18 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物極少量



第81図 第178号住居跡実測図

遺物 覆土中から縄文土器片が出土している。床面出土の遺物はなく、すべて覆土中からの出土で細片が多い。

- 1, 2, 6は東部覆土中から, 3は北東部覆土中からの出土である。



第82図 第178号住居跡出土遺物実測・拓影図

第178号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	深鉢形土器 縄文土器	A(29.6) B(9.0)	内附する口縁部片。口縁部文様帯は単節縄文L Rを縦位回転で施した後、上段の沈線と隆線、下段の沈線、それを結ぶ楕円形状の隆線で区画されている。楕円区画内は磨り消した後、渦状の微隆起線が加飾されている。胴部文様帯は縦位回転の単節縄文L Rを地文とし、2本の沈線で区画された磨消帯を垂下している。	灰石・砂粒 明赤褐色 普通	F70 東部質土 (加曾利EⅢ)

第82図2～8は縄文土器片の拓影図である。3～5は口縁部片で、3は口縁部に沈線を沿わせた隆線で楕円形の区画を施し、区画内及び胴部には単節縄文が施文されている。4は渦状の文様、5は口縁部に円形刺突文が2段巡らされている。2、6～8は胴部片で、沈線区画の磨消帯が垂下され、区画外には単節縄文が施文されている。

所見 本跡は、壁の立ち上がりが明確にとらえられなかったため、主柱穴の配列及び床質から規模及び平面形を推定した。土器の主体となっているのが縄文時代中期加曾利EⅢ式期のものなので、本跡の時期もこの範疇と思われる。

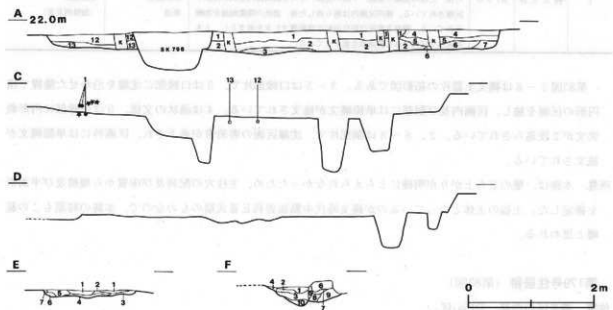
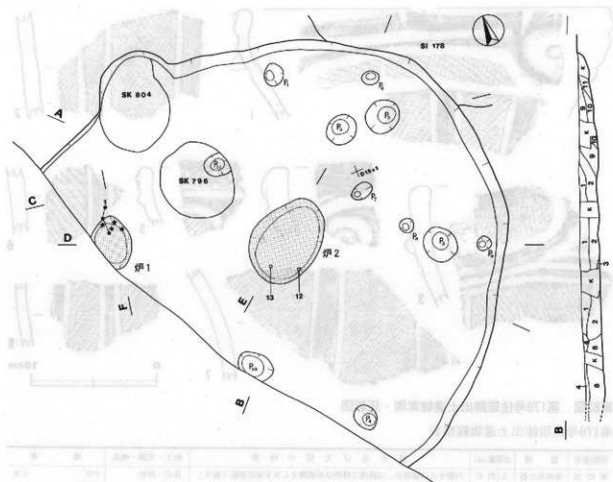
第179号住居跡(第83図)

位置 調査区の西部、D15a1区。

重複関係 本跡は、北側部分を第796号、804号土坑に掘り込まれている。また、北東側部分で第178号住居跡と接しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡の南西側部分は、調査区域外に延びているため全体をとらえられなかったが、長径(7.85)m、短径7.52mの円形と推定される。

床 平坦である。中央部に踏み固められた面が見られる。



第83図 第179号住居跡実測図

壁 壁高17~23cmで、外傾して立ち上がる。

ピット 11か所。P₁~P₄は、径36~55cmの円形で、深さ55~62cm。これらは、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₅、P₉は径26cmの円形で、深さ32~45cm。補助柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉 2か所。炉1はほぼ中央に付設されている。長径145cm、短径104cmの楕円形で、床を13cmほど掘りくぼめ、

南側を石で囲んだ石囲い炉である。炉床の中央部分は火熱で赤く焼け、硬化している。炉2は本跡の北西側に付設されている。長径[88]cm、短径[64]cmの楕円形と推定される地床炉である。炉2の土層2・3は焼土がブロック状に硬化しており、2度使用した可能性がある。また、土層6から多量の土器、鹿角が出土している。

炉1土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、焼土中ブロック極少量
- 4 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量

炉2土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子少量、炭化粒子極少量、灰多量含む
- 2 赤褐色 焼土ブロック多量
- 3 明褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、灰多量含む
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量、灰少量含む
- 6 暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・炭化材少量、焼土小ブロック極少量、鹿角・小骨片含む
- 7 暗褐色 焼土粒子多量、炭化粒子中量、焼土小ブロック少量
- 8 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子少量
- 9 褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
- 10 赤褐色 焼土ブロック多量

覆土 13層からなる。暗褐色土主体の人為堆積である。

土層解説

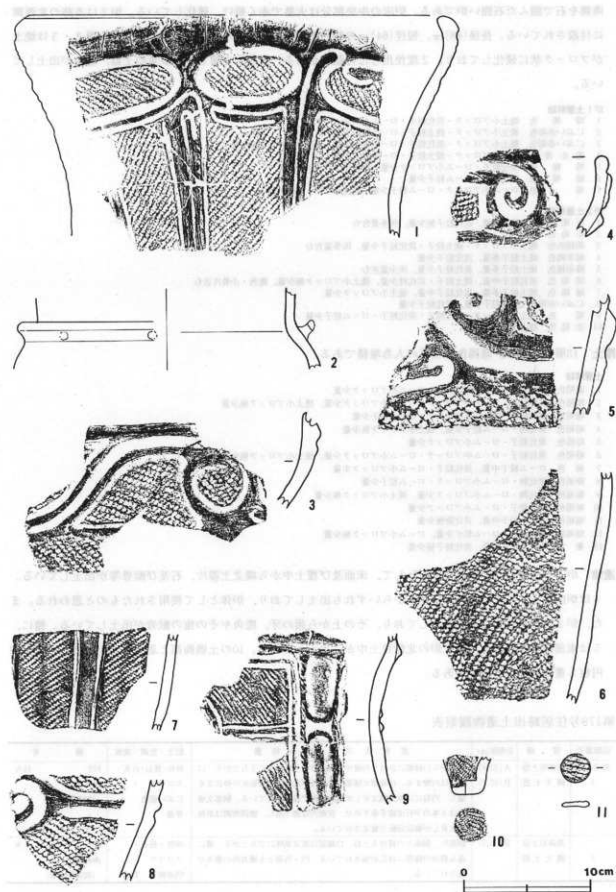
- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 7 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 10 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物極少量
- 12 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 13 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極少量

遺物 炉1、2及びその周辺を中心として、床面及び覆土中から縄文土器片、石及び獣骨等が出土している。

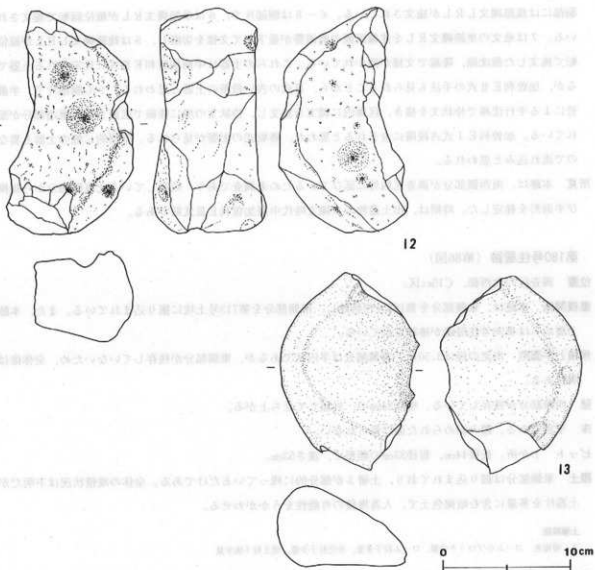
4は炉内から、12、13の石皿は炉床からいずれも出土しており、炉体として使用されたものと思われる。また、炉2の炉床からは1が出土しており、その上から猪の牙、鹿角やその他の獣骨が出土している。他に、5は東部覆土下層から、6は炉の北側覆土中から出土している。10の土偶脚部と思われる土製品と11の土製円板も覆土中からの出土である。

第179号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	深鉢形土器 縄文土器	A [32.6] B [17.7]	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はやや外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。口縁部文様帯を縁飾及び沈線で楕円形状の枠状文を施し、内部には単距縄文R Lが横位回転で施文されている。胴部文様帯は3本の平行沈線を垂下させ、区画内は磨り出し、磨消帯間には単距縄文R Lが縦位回転で施文されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P72 15% 炉2内 (加藤利E III)
2	深鉢形土器 縄文土器	B [6.5]	胴部片。胴張りや突起土器。口縁部は直立気味に立ち上がる。横に走る帯状の磨消帯には孔が施されている。内・外距とも横方向の磨きが施されている。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P73 5% 南側覆土 (加藤利E III)



第84图 第179号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第85図 第179号住居跡出土石製品実測図(2)

図版番号	器種	計測値(cm)				重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚	最大径				
第84図10	土 偶	(3.0)	(3.8)	(3.7)	(6.8)	10	中空の土偶脚部と思われる。前面に単節縄文LRが施文され、側面及び背面は磨り消されている。底部にも縄文が施文されている。ミニチュア土器底部の可能性もある。	BP30 P.14 砂粒 にぶい褐色 普通 (後期少)	
11	土製円板	2.3	2.3	0.5	2.5	100	小形 表面に単節縄文LR	BP31 覆土	

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第85図12	石 皿	(17.9)	(10.0)	9.0	(1169.0)	安山岩 Q56 巴石兼用 欠損品 炉内	
13	石 皿	(15.7)	(11.0)	6.4	(804.6)	安山岩 Q57 欠損品 炉内	

第84図3～9は縄文土器の拓影図である。3、4は口縁部片で、3は沈線を沿わせた隆線で棒状文が描かれ、区画内及び胴部に複節縄文を施文し、4は沈線を沿わせた隆線で渦巻文、区画内に単節縄文が施文されている。5は胴から口縁部にかけての破片で、口縁部に曲線的なモチーフが沈線を沿わせた隆線で描かれ、

胴部には複節縄文LRLが施文されている。6～8は胴部片で、6は単節縄文R Lが縦位回転で施文されている。7は地文の単節縄文R Lを沈線区画の磨消帯が垂下して文様が切断し、8は複節縄文LRLが縦位回転で施文した後沈線、隆線で文様が描かれている。これらの土器は中期加曾利EⅢ式に比定される土器であるが、加曾利EⅡ式の手法も見られることから、Ⅲ式の古い段階の土器と思われる。9も胴部片で、半載竹管による平行沈線で枠状文を描き、区画内に縄文を施文し、枠状文の境に隆線で区画された磨消帯が配されている。加曾利EⅠ式古段階に含まれると思われる、勝坂式の影響が見られる。時期的に他の土器と異なるので流れ込みと思われる。

所見 本跡は、南西側部分が調査区域外に延びているため未調査であり、残存している北東側部分から規模及び平面形を推定した。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第180号住居跡 (第86図)

位置 調査区の西北部、C15e区。

重複関係 本跡は、東側部分を第182号住居跡に、南側部分を第713号土坑に掘り込まれている。また、本跡の上層からは第98号住居跡が確認されている。

規模と平面形 南北の径は3.50m。西側部分は半円状であるが、東側部分が残存していないため、全体像は不明である。

壁 西側部分が残存している。壁高24cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 1か所。長径44cm、短径33cmの卵形で、深さ53cm。

覆土 東側部分は掘り込まれており、土層3が部分的に残っているだけである。全体の堆積状況は不明だが、土器片を多量に含む暗褐色土で、人為堆積の可能性をうかがわせる。

土層解説

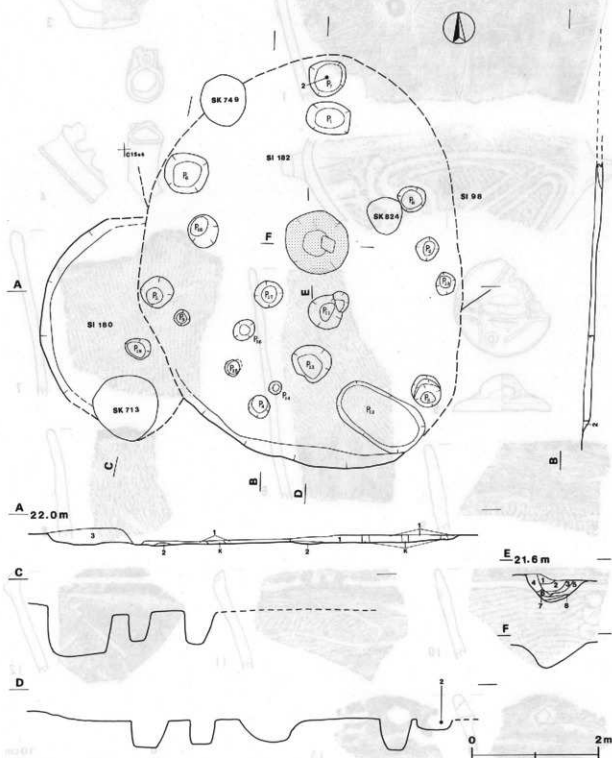
3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒少量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量

遺物 覆土中から縄文土器が出土している。1は南西部覆土中から正位の状態、2は西部覆土中から逆位の状態出土している。4の注口部片、5の蓋も覆土中からの出土である。

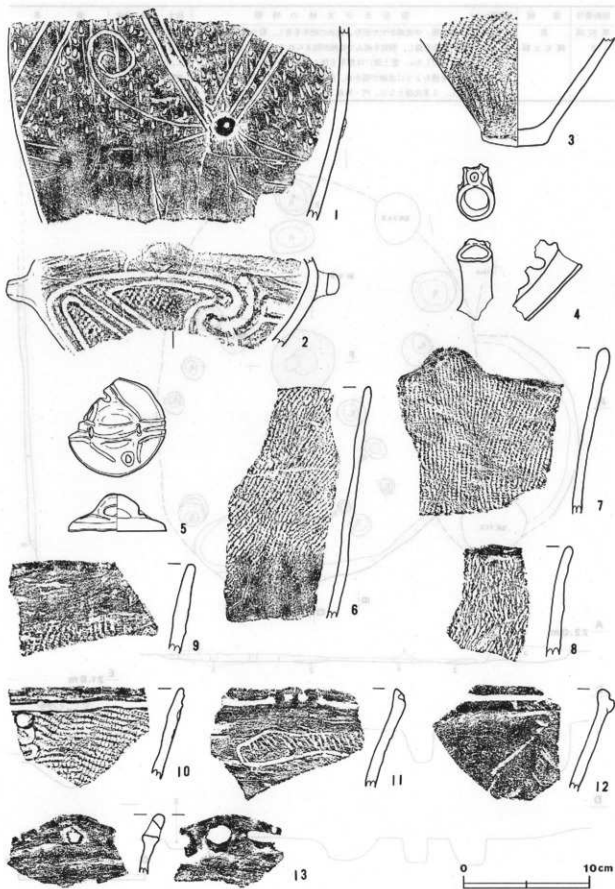
第180号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼度	備考
第87図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(15.5)	やや内彎する胴部片。上部には文様が施され、下部は磨り消されている。文様帯と磨消部の境に、中央に刺突を施した円形文を貼り付け、斜行する平行沈線、渦状沈線が連続している。沈線間は無文。区画外には斜点文が施されている。	石英・長石・砂粒 灰青褐色 普通	P75 10% 南西部覆土 (姓名寺2)
2	深鉢形土器 縄文土器	B(7.1)	内彎する胴部片。口縁部と胴部の境に無文の磨消帯を貼り付け、腹に孔を持つ突起、上下に刺突文及び中央に沈線を施した逆「C」字状の隆線をそれぞれ2単位ずつ有すると思われる。隆線以下は、突起下に2本磨消帯が垂下し、側は磨り消し。他は磨消帯に沿って沈線を施し、内部には斜行あるいは曲線の沈線を描き、幅広い区画内には複節縄文LRLが施文されている。	長石・砂粒・ スコリア にぶい橙褐色 普通	P76 5% 西部覆土 (姓名寺2一帯之内)
3	深鉢形土器 縄文土器	B(8.5) C 5.3	底部から胴下部にかけての破片。やや丸みを帯びた底部で、胴部は外傾して開く。胴外側には単節縄文R Lが縦位回転で施文され、胴裏下部は磨り消した後縦方向の磨きで彫形されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P74 10% 覆土 (後期前部)
4	注口土器 縄文土器	長さ(6.2)	注口部片。先端部外径2.2cm、内径2.0cm。先端部及び中位から胴部と連続する把手が取り付けられ、先端部把手には刺突が加えられている。注口部外面は磨きが施されている。	砂粒 にぶい橙褐色 普通	P77 5% 南部覆土 (堀之内か)

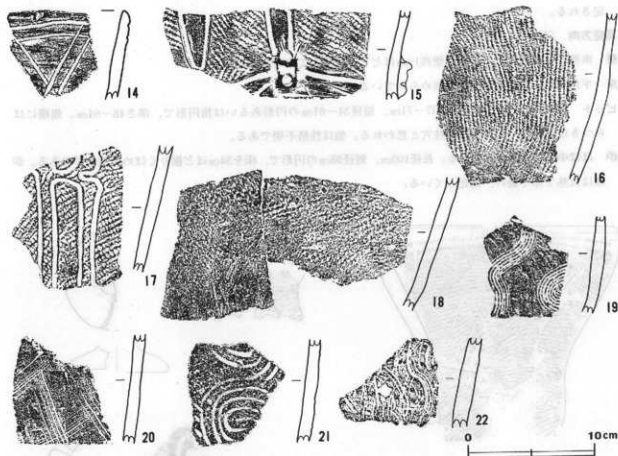
図版番号	器種	対径(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第87回 5	蓋 縄文土器	A 7.6 B 3.0	一部欠損。中央部がやや凹む。隆伏の把手を有し、取り付け部に2単位の刺突を施し、刺突を結んで沈線が加えられている。把手の長さ4.0cm、高さ1.9cm。蓋上面には把手を挟んで1対の穿孔が施され、孔と把手を囲むように沈線が描かれ、把手の延長上は刺突を結ぶ沈線と合流し、3本沈線となる。内・外面とも磨きが施されている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい青色 普通	P76 覆土 (堀之内)	80%



第86図 第180・182号住居跡実測図



第87图 第180号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第88図 第180号住居跡出土遺物実測・拓影図

第87～88図6～22は縄文土器片の拓影図である。6～8は深鉢形土器の口縁部片で、口縁部以下に縄文が粗く施文されている。6の胴下部は無文、7の口縁部には舌状の突起が見られる。9は口縁部無文帯で、胴部に縄文が施文されている。16、18の胴部片も同類である。10～12は口縁部に沈線が施されており、10は沈線以下縄文が施文され、円形の刺突文と曲線文が見られる。11は口縁部に刺突文が施され、胴上部に沈線で不定形の区画文を施し、区画内に浅い短沈線が施文されている。12の口唇部は外削ぎ状で、外側に突出している。13は僅かに波状を呈する口縁部片の波頂部突起で、口縁部内面に沈線が施されている。14は平行沈線で三角形のモチーフが描かれている。15は沈線区画の磨消帯が刺突を施した突起から胴部に施されており、網取式の影響が見られる。17は胴部地文の縄文の上に沈線で文様が描かれ、19には流水状の条線、20は斜格子状の条線、21は沈線による渦巻文、22は半截竹管による浅い条線状の沈線が描かれている。いずれも後期称名寺2式～堀之内1式の範疇の土器である。

所見 本跡は、東側部分が掘り込まれており、炉、柱穴、平面形等不明である。時期は、出土遺物から縄文時代後期称名寺2式期～堀之内1式期にかけてと思われる。

第182号住居跡（第86図）

位置 調査区の北西部、C15e区。

重複関係 本跡は、北側部分を第749号土坑に、中央部東側を第824号土坑に掘り込まれている。また、西側部分は第180号住居跡を掘り込んでいる。本跡の上面からは第98号住居跡が確認されている。

規模と平面形 壁の立ち上がりは一部しかとえられなかったが、長径(5.21)m、短径(4.40)mの楕円形と推

定される。

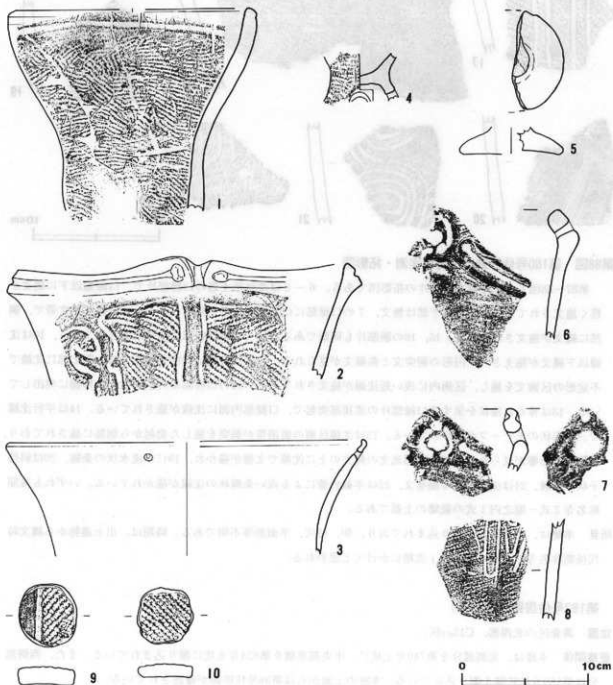
長径方向〔N-7'-E〕

壁 南壁が一部残存しており、壁高10cmほどで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉周辺が踏み固められている。

ピット 18か所。P₁~P₆は長径37~71cm、短径34~61cmの円形あるいは楕円形で、深さ48~64cm。規模にはばらつきはあるが、配列から支柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径100cm、短径98cmの円形で、床を34cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。



第89図 第182号住居跡出土遺物実測・拓影図

伊土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 3 暗褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 4 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物極少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化物極少量
- 8 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック極少量

覆土 2層からなる。暗褐色土主体の自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

遺物 覆土中から縄文土器が出土している。1は中央部から、3は南西部覆土中から、2、6はP₁内からの出土である。他に4の台付土器、5の壺、9、10の土製円板が出土しているが、いずれも覆土中からである。

これらの遺物に混じり、獣骨片も1点出土している。

第182号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 1	漆黒形土器	A(18.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴中位まで直立、上部は外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに内彎する。口縁部直下に沈線を施し、内面ナメ整形。外面に黒線Rの縄文が無作為に施文されている。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙褐色 普通	P80 10% 中央部覆土 (堀之内1か)
	縄文土器	B(16.4)			
2	漆黒形土器	A(28.9)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴上部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。小波状を呈する口縁部で肥厚している。波頂部に破片みの押圧を施し、胸側に凹形文が加えられている。凹形文からは口唇部を二分する沈線が通らされている。胴部には、波頂部から直線的に直下する沈線。あるいは横走した後、蛇行直下する沈線が描かれ、広い範囲内には単線縄文Lが施文されている。	砂粒・パミス・長石 にぶい橙褐色 普通	P81 5% P ₁ 覆土 (堀之内1)
	縄文土器	B(9.2)			
3	漆黒形土器	A(28.4)	口縁部片。ラッパ状に深く口縁部で、口縁部上部を内側に屈曲させ内側に稜を有し、上縁は平坦に作出されている。内・外面とも磨きが施されている。口縁部直下に穿孔を有するが、土器焼成後のものである。	砂粒・長石 沃褐色 普通	P82 5% 南西部覆土 (堀之内2)
	縄文土器	B(9.0)			
4	台付土器	B(4.0)	台部下と胴部欠損。台部は4單位の孔を持つ台形状で、胴部との接合部に「く」の字に屈曲し、胴部に至る。内面ナメ、外面には単線縄文L Rが施文されている。	砂粒・長石 浅黄褐色 普通	P ₁₁ 覆土 (加登利B)
	縄文土器	E(1.6)			
5	壺	A(8.6)	壺の断面は山形で、中央部につまみ状の把手が付けられていた痕跡が残るが、欠損しているため詳細は不明である。	砂粒・パミス・長石・スコリア 橙褐色 普通	P84 40% 南西部覆土 (堀之内1)
	縄文土器	B(2.1)			

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第89図9	土製円板	5.1	4.5	1.5	40.2	100	表面に沈線を沿わせた磨削帯 単線縄文R L	DP32 覆土
10	土製円板	4.5	4.4	1.1	25.0	100	表面に黒線縄文R L R	DP33 覆土

第89図6～8は縄文土器片の拓影図である。6、7は波状を呈する口縁部片で、波頂部の円孔を取り巻くように「C」字状文と円形刺突文が施され、口縁部には沈線が施されている。8は胴下部の破片で、地文の縄文を切る沈線が見られる。

所見 本跡の規模及び平面形は主柱穴の配列から推定した。時期は、出土遺物から縄文時代後期堀之内1式期である。

第183号住居跡 (第90図)

位置 調査区の西部, C15g7区。

重複関係 本跡は, 北側部分を第802号, 803号及び811号土坑に, 南側部分を第850号土坑に掘り込まれている。

また, 南側部分で第801号土坑と重複しているが, 本跡の方が新しい。本跡の上層で第100号住居跡が確認されている。

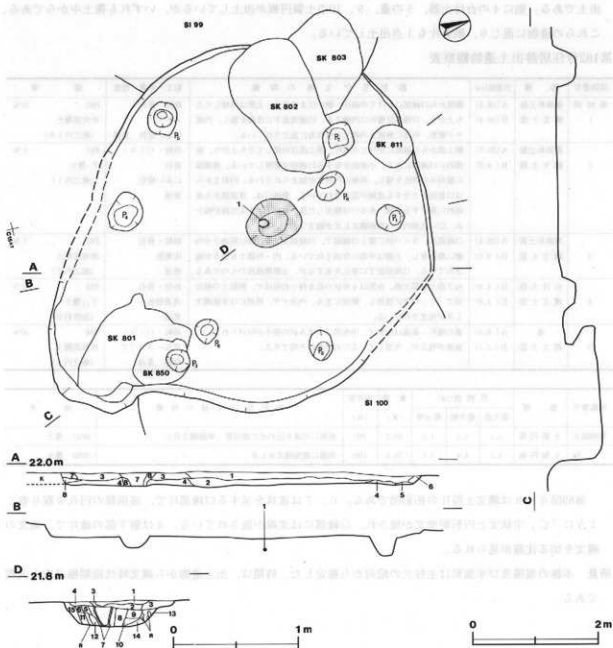
規模と平面形 長径6.88m, 短径5.50mの扇形である。

長径方向 N-40°-W

壁 南西壁と北西壁の一部が不明であるが, 壁高4~20cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉の周辺に, 踏み固められた面が見られる。

ピット 8か所。P₁~P₅, P₇は長径45~64cm, 短径37~49cmの円形あるいは楕円形で, 深さ25~33cm。規



第90図 第183号住居跡実測図

模及び配列から支柱穴と思われる。他は性格不明である。

炉 はほぼ中央に付設されている。長径59cm、短径47cmで、中央部やや南側に、深鉢形土器を設置した土器埋設炉である。

炉土層解説

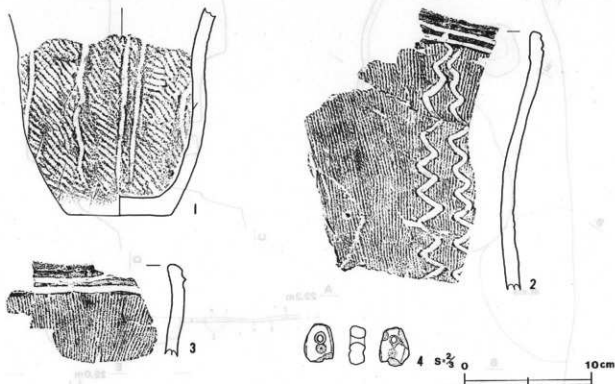
1	暗褐色	炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量
2	暗褐色	焼土小ブロック中量、ローム小ブロック少量、炭化物極少量
3	暗褐色	ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
4	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量
5	暗褐色	炭化粒子・ローム粒子少量
6	暗褐色	ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、焼土中ブロック極少量
7	暗赤褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック少量
8	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
9	暗赤褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック極少量
10	暗赤褐色	ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
11	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子極少量
12	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・ローム中ブロック極少量
13	にぶい褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量
14	褐色	ローム粒子多量、炭化粒子極少量
15	明褐色	ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量

覆土 8層からなり、人為堆積の様相を示している。

土層解説

1	褐色	ローム粒子中量、焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
2	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム中ブロック極少量
4	褐色	炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5	褐色	ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子極少量
6	褐色	ローム粒子多量、炭化物極少量
7	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極少量
8	暗褐色	炭化粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・ローム小ブロック極少量

遺物 覆土中及び床面から縄文土器が極少量出土している。1は炉体土器である。2、3は南西壁寄り床面から、4の垂れ飾りは覆土中から出土している。この他に獣骨片3点が覆土中から出土している。



第91図 第183号住居跡出土遺物実測・拓影図

第183号住居跡出土遺物観察表

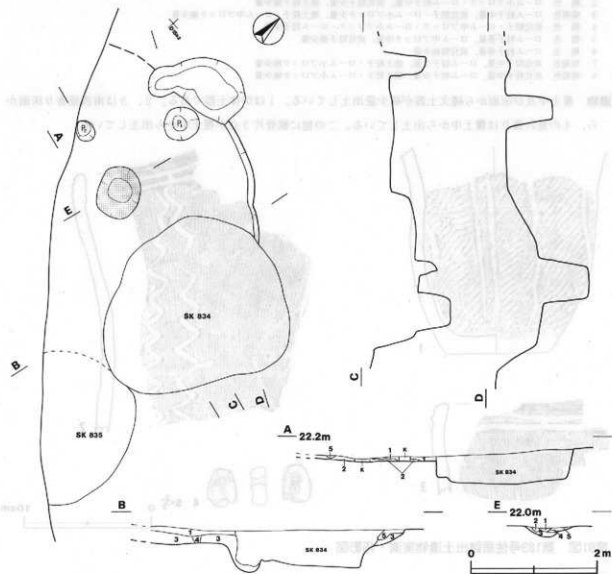
図版番号	器種	直径(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第91図 1	深鉢形土器	B (16.6)	胴上部欠損。平底で、胴部下手に影らみを持ち立ち上がる。影らみ部分の内面に輪様みねを残す。胴部内面ナデ、外面地文に単純縄文R Lが横位面転で施文され、平行沈線、総行沈線を交互に垂下している。胴部下段及び底部外面には磨きが施されている。	粘土・色調・焼成 砂粒・長石・石英・スコリア・雲母 褐色 普通	PMS 40% 伊内 (加曾利E I)
	縄文土器	C 8.3			

第91図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2点とも波状口縁で、口縁部に横走沈線を2段に巡らせ、胴部に無節しの縄文を施文している。2は口縁部の沈線から胴部に鋸歯状の沈線を2本垂下させている。同一個体の可能性も考えられる。

所見 出土遺物は極少量であるが、炉体土器及び床面出土の遺物から、時期は縄文時代中期加曾利E I式期である。

第185号住居跡 (第92図)

位置 調査区の西部, D15b2区。



第92図 第185号住居跡実測図

重複関係 本跡は、東側から南東側部分にかけ第834号、835号土坑に掘り込まれている。
規模と平面形 北西から南東の径が(5.50)m。本跡の南西側が調査区域外に延びており未調査で、東壁も確認できず、他は不明である。

壁 北壁の一部が残存しており、壁高16cmほどで、外傾して立ち上がる。

床 ほほ平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 2か所。P₁は径70cmの円形で、深さ76cm、P₂は長径48cm、短径36cmの楕円形で、深さ56cm。他にピットが確認されていないため、性格等については不明である。P₁の北側に、不定形の浅い掘り込みがあるが、やはり性格は不明である。

炉 やや北側に付設されていると推定される。長径104cm、短径83cmの楕円形で、床を14cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。

炉土層解説

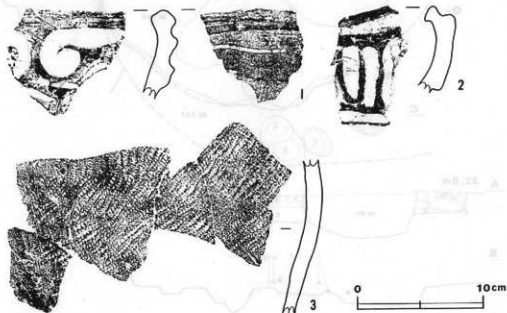
- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック多量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック中量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

覆土 5層からなる。土層2～4を人為的に埋め戻した後、1が堆積したと思われる。5は後世の掘り込みと思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化物極少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 5 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極少量

遺物 覆土中から少量の縄文土器片が出土しているが、床面出土の遺物はない。



第93図 第185号住居跡出土遺物実測・拓影図

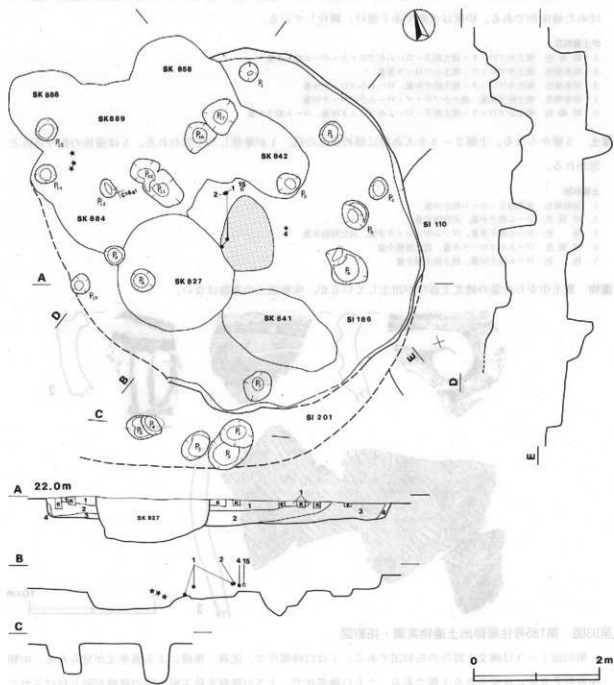
第93図1～3は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、沈線、隆線による渦巻文が見られる。中期加曾利EⅡ式に比定される土器である。2も口縁部片で、上下の隆線を結ぶ縦方向の隆線が貼り付けられている。中期加曾利EⅠ式の土器と思われる。3は胴部片で、単節縄文LⅡRが施文されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少量で床面出土もないため断定はできないが、縄文時代中期加曾利E I～II式期にかけてと思われる。

第186号住居跡 (第94図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C16g1区。

重複関係 本跡は、北側部分と中央部西側部分を第888号、827号土坑に掘り込まれている。さらに、本跡の上層からは第116B号、110号住居跡が確認されている。また、北側部分が第889号、858号及び842号土坑を、南側部分が第841号土坑、第201号住居跡を、西側部分が第884号土坑を掘り込んでいる。



第94図 第186・201号住居跡実測図

規模と平面形 長径6.00m, 短径(5.50)mのほぼ円形と推定される。

壁 西壁の立ち上がりが確認できないが, 他は壁高16cmほどで, 外傾して立ち上がる。

床 土坑と切り合っているため, 全体的なことは判断できないが, 残存している部分はほぼ平坦で, 踏み固められている。

ピット 17か所。P1は長径53cm, 短径44cmの卵形で, 深さ49cm, P2は長径72cm, 短径55cm不整楕円形で, 深さ41cm, P3は長径55cm, 短径46cmで不整円形で, 深さ39cm, P4は径35cmほどの円形で, 深さ40cm。これらは, 径にばらつきが見られるが, 深さがほぼ同じで, 炉を中心として長方形に配置していること等から支柱穴と思われる。P1, P2, P4, P10は径30~35cm, 深さ13~22cmの円形あるいは楕円形で, 補助柱穴と思われる。P5は第827号土坑のピット, P11は第888号土坑のピットである。他は性格不明である。

炉 中央に付設されている。長径120cm, 短径85cmの卵形の地床炉である。覆土は削平され, 火熱で硬化した炉床のみ確認できた。

覆土 4層からなる。壁際に褐色土が流れ込んだ後, 中央部に暗褐色土が自然堆積している。

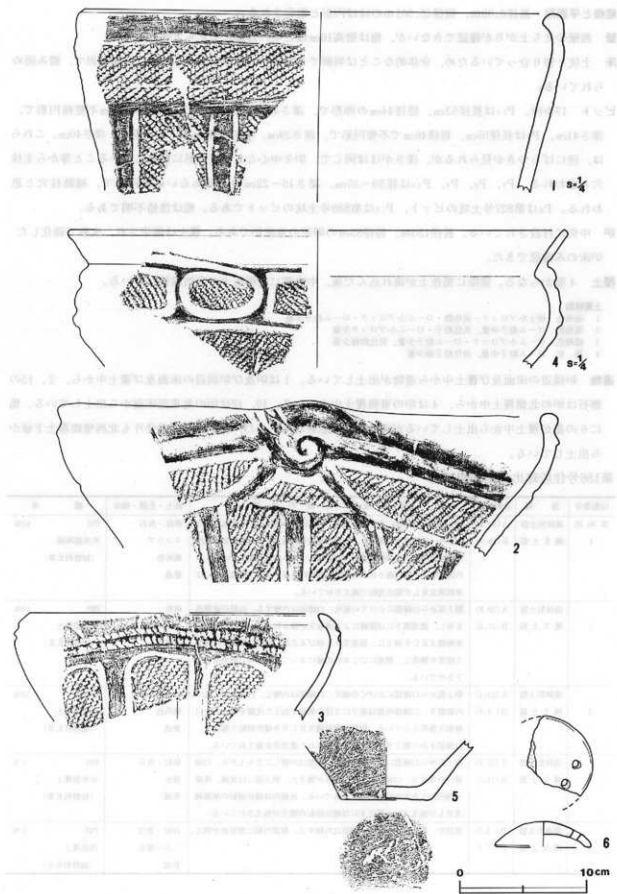
土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化物極少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子極少量

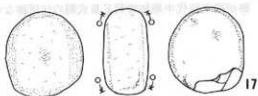
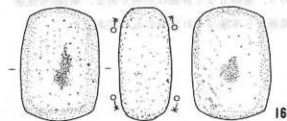
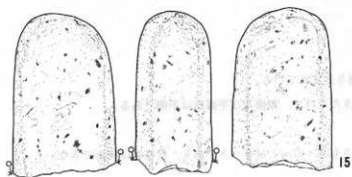
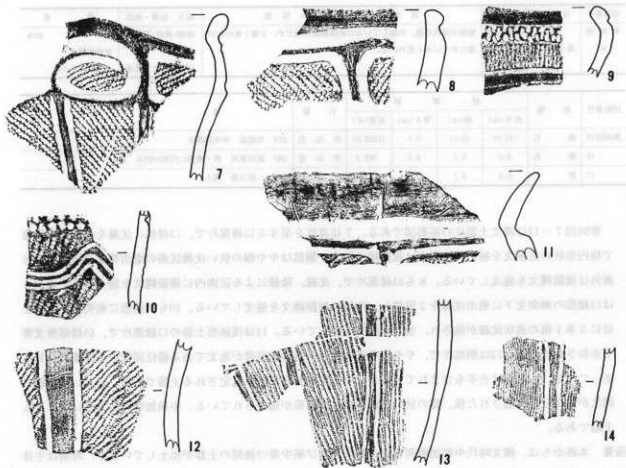
遺物 炉周辺の床面及び覆土中から遺物が出土している。1は炉及び炉周辺の床面及び覆土中から, 2, 15の磨石は炉の北側覆土中から, 4は炉の東側覆土中から, 7, 10, 12は炉の北東部床面から出土している。他に6の蓋が覆土中から出土しているが流れ込みと思われる。また, 鹿, 猪等の獣骨片も北西壁際覆土下層から出土している。

第186号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 95 図 1	深鉢形土器	A (49.2)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部はやや外傾して直線的に立ち上がり, 口縁部は内彎する。上下の沈線で区画された口縁部文様帯内には草筋縄文L Rが縦位回転で充填されている。胴部文様帯は, 2本の沈線によって区画された磨消帯を直線的に垂下させ, 磨消帯内には草筋縄文L Rが縦位回転で施文されている。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P92 10% 中央部床面 (加量利EⅢ)
	縄文土器	B (18.9)			
2	深鉢形土器	A (39.8)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内彎する。山形の波頂部を有し, 波頂部下には隆起による渦巻文が描かれている。縦位回転の草筋縄文L Rを地文に, 渦巻文から伸びる沈線, 横線で枠状の口縁部文様帯を構成し, 胴部には2本の沈線によって区画された磨消帯を垂下させている。	砂粒 にぶい褐色 普通	P93 10% 中央部覆土 (加量利EⅢ)
	縄文土器	B (11.8)			
3	深鉢形土器	A (23.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内彎し, 内側に横を持つ。内面磨き, 口縁部外側は底下に2段の刺突を加えた沈線を暮らし, 口縁部文様帯としている。胴部は複雑縄文L Rを縦位回転で施文し, 口縁部下から胴下部には沈線で区画された磨消帯が施されている。	砂粒・長石 褐色 普通	P95 10% 北西部覆土 (加量利EⅢ)
	縄文土器	B (6.5)			
4	浅鉢形土器	A (52.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり, 口縁部は外反する。口縁部は無文で磨きが施され, 胴上部には沈線, 隆起で楕円形と方形の区画が構成されている。区画内は横位回転の草筋縄文L Rが施文され, 胴下部には縦位回転の縄文が施文されている。	砂粒・長石 褐色 普通	P94 5% 中央部覆土 (加量利EⅢ)
	縄文土器	B (14.3)			
5	深鉢形土器	B (3.8)	底部片。僅かに上げ底で, 胴部は外傾する。胴部内面に整形痕が残る。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P96 5% 西部覆土 (加量利EⅢ)
	縄文土器	C 7.4			



第95図 第186号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第96図 第186号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 95 図 6	壺 縄文土器	径(7.6) 高さ2.0	断面が弧状の壺。欠損しているため詳細は不明だが、2個1組の孔が穿たれていると思われる。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	F97 北西部覆土 (後期前半か)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第96図15	磨 石	(12.9)	(8.2)	6.1	(1189.6)	安 山 岩	Q59 欠損品 中央部覆土
16	磨 石	9.0	6.4	4.2	367.3	安 山 岩	Q60 燧石層用 表・裏面に円形の凹み 覆土
17	磨 石	6.8	6.1	3.7	(217.3)	安 山 岩	Q61 一部欠損 覆土

第96図7～14は縄文土器片の拓影図である。7は波状を呈する口縁部片で、口縁部に沈線を沿わせた隆線で楕円形状の区画文を施し、区画内は複節縄文施文、胴部はやや幅の狭い沈線区画の磨消帯を垂下させ、区画外は複節縄文を施文している。8も口縁部片で、沈線、隆線による区画内に複節縄文を施文している。9は口縁部の刺突文下に横走沈線を2段施し、内部に無節縄文を施文している。10も口縁部に刺突文、胴部上位に3本1組の波状沈線が施され、地文の縄文を切っている。11は浅鉢形土器の口縁部片で、口縁部無文帯で赤彩されている。12は胴部片で、やや幅の広い沈線区画の磨消帯が地文である縦位回転の単節縄文RLを切っている。これらは古手も含まれているが、中期加曾利EⅢ式に比定される土器である。13と14は無節の縄文が地文として施された後、幅の狭い沈線区画の磨消帯が施文されている。中期加曾利EⅡ式に含まれる土器である。

所見 本跡からは、縄文時代中期加曾利EⅡ～Ⅲ式期及び極少量の後期の土器が出土しているが、時期は主体となる遺物から縄文時代加曾利EⅢ式期である。

第201号住居跡 (第94図)

位置 調査区の中央部やや北寄り、C16h区。

重複関係 本跡の大部分は、第186号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡は、南側の一部分が確認できただけで、規模及び平面形は不明である。

床 僅かに踏み固められた面が見られる。

ピット 5か所。長径40～65cmの楕円形で、深さも26～67cmとばらつきがあり、性格等は判断できない。

遺物 本跡から遺物は出土していない。

所見 本跡は、南側が部分的に僅かに残存しているだけであり、遺物もなく詳細は不明である。第186号住居跡が縄文時代中期加曾利EⅢ式期の住居跡なので、重複関係から本跡はそれ以前のものである。

第187号住居跡（第97図）

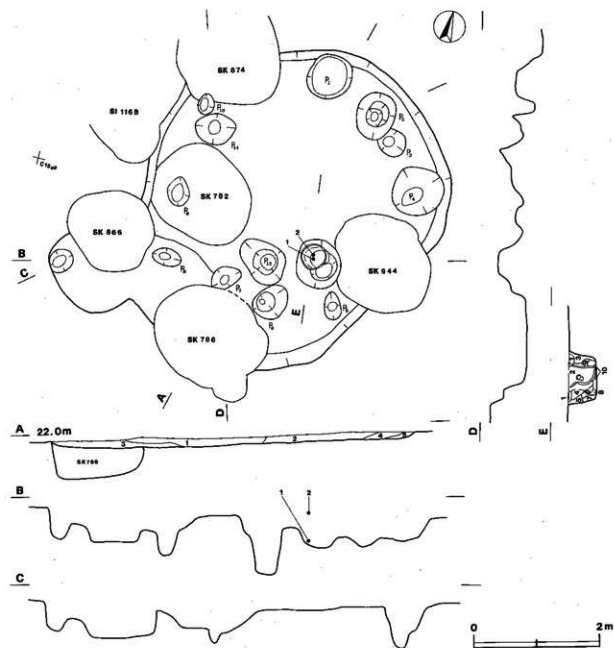
位置 調査区の中央部やや北寄り，C15f₉区。

重複関係 本跡は，北側部分を第874号土坑に，東側部分を第944号土坑に掘り込まれている。上層からは第116A号，116B号及び101号住居跡が確認されている。また，本跡の西側部分で第782号，866号土坑と，南側部分で第786号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径5.44m，短径4.62mの楕円形である。

長径方向 N-30°-E

壁 土坑に掘り込まれて部分的に消失しているが，壁高13cmほどで，緩やかに外傾して立ち上がる。



第97図 第187号住居跡実測図

床 平坦である。中央部にやや踏み固められた面が見られる。本跡の西側に、薄い焼土の広がりがあるが、2か所確認されているが、4ではない。

ピット 12か所。P₁ (径70cmの円形で、深さ43cm)、P₂ (長径76cm、短径60cmの楕円形で、深さ76cm)、P₄ (径80cmの円形で、深さ46cm)、P₅ (長径46cm、短径26cmの楕円形で、深さ16cm)、P₆ (長径60cm、短径48cmの楕円形で、深さ33cm)、P₇ (長径54cm、短径35cmの楕円形で、深さ20cm)、P₈ (長径50cm、短径27cmの楕円形で、深さ42cm)、P₉ (長径48cm、短径39cmの楕円形で、深さ33cm)、P₁₀ (長径34cm、短径29cmの楕円形で、深さ62cm)は、壁際を回るように位置し、壁柱穴と思われる。P₁₁、P₁₂は性格不明である。

埋設土器 本跡の南東側床面から埋設土器が出土している。掘り方は、長径77cm、短径70cmの不整形円で、45cmほど掘り込まれている。掘り方の北西寄りに、深鉢形土器が底面から南西方向にやや傾いて、正位の状態で見られる。埋設土器内の覆土中層から、土器の底部が横位の状態で出土している。

埋設土器土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック極少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 6 暗褐色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック極少量
- 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック極少量
- 8 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 10 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック極少量

覆土 5層からなる。壁際に土層4・5が堆積した後、中央部に1～3が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極少量

遺物 覆土中から縄文土器片が出土しているが、器形の判別できるものは埋設土器のみで、他は細片である。

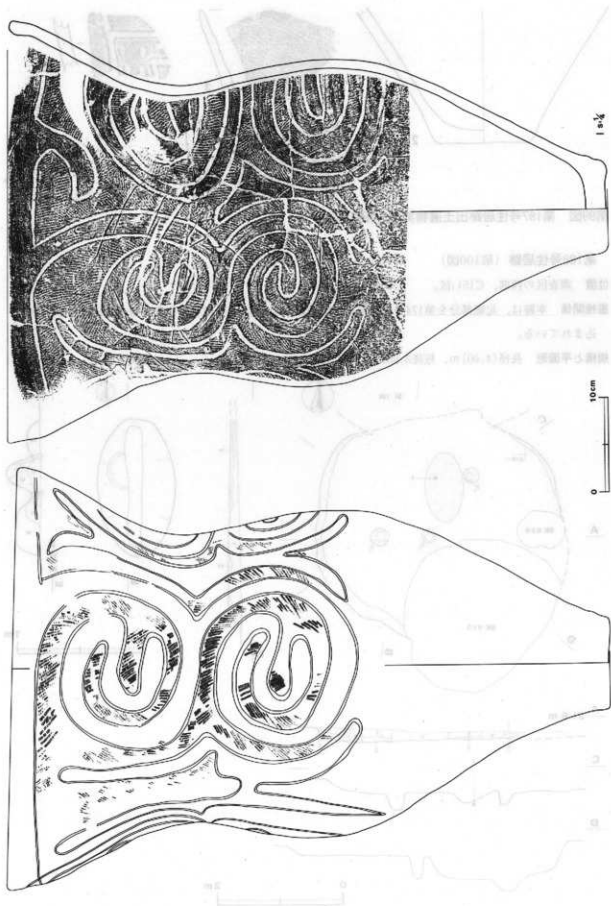
1は南東部の埋設土器、2は1の中から出土している。3～5は東部の覆土中から出土している。本跡の東部からも土器片が出土しているが、時期が多岐で本跡と切り合っている土坑からの出土遺物の可能性が高い。

第187号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第98図 1	深鉢形土器 縄文土器	A 44.9	平縁の大型土器。底部平底。胴部は外傾して立ち上がった後内彎し、	砂粒・スコリア 浅黄褐色 普通	P68 95% 南東部床下 (称名寺1)
		B 64.2	胴上部でくびれ口縁部は大きく開き、肥厚した内側に縁を持つ。此縁		
		C 9.7	で唇状に渦巻文、「J」字文、「H」字文を描き、区画内は磨り消し 区画外は単筋及しの縄文が施されている。削り手は無文である。		
第99図 2	深鉢形土器 縄文土器	B (11.0)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下半外側に縦方向の磨き、	砂粒・スコリア によい褐色 普通	P71 15% 南東部床下 (後期加護)
		C 7.4	底部外面にも磨きが施されている。		

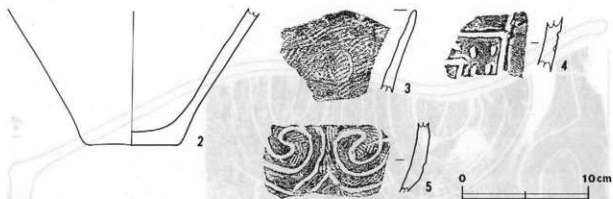
第99図3～5は縄文土器片の拓影図である。3は波状口縁で、縄文が難に施文された後、浅い沈線で直線と曲線を組み合わせた不規則な文様が描かれている。4は胴部片で、沈線区画内に列点文が施されている。5も胴部片で、沈線で渦巻状の文様を描き、区画内を磨り消し、区画外には縄文が施文されている。3点とも後期称名寺式の土器で、4は2式、5は1式に比定される。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期称名寺1式期である。



第98图 第187号住居跡出土遺物実測図(1)

図面資料館蔵 2007年



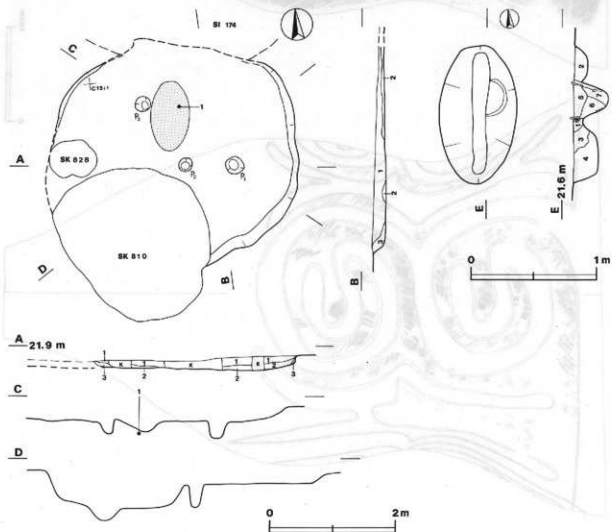
第99図 第187号住居跡出土遺物実測・拓影(図2)

第188号住居跡 (第100図)

位置 調査区の西部, C15i区。

重複関係 本跡は, 北側部分を第174号住居跡に, 西側部分を第828号土坑に, 南側部分を第810号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径(4.00)m, 短径3.95mの円形と推定される。



第100図 第188号住居跡実測図

壁 東壁と西壁の一部が残存している。壁高10~20cmで、外傾して立ち上がる。
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所。P₁は径30cmの円形で、深さ27cm。やや西側に位置している。P₂(径22cmの円形で、深さ40cm)、P₃(径25cmの円形で、深さ28cm)はP₁に近接している。配列に規則性はないが、本跡に係るピットの可能性が考えられる。

炉 やや北側に付設されている。長径110cm、短径62cmの楕円形で、やや北側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。掘り方の断面は、埋設土器の北側が11cm、南側が19cm掘り込まれ、土器の部分も含めると3段階の掘り込みになっている。覆土は、土器の内部、外部とも黒色土で、焼土は少量しか含まれてないが、炉床は硬化している。中央部は、トレンチャーの攪乱を受けている。

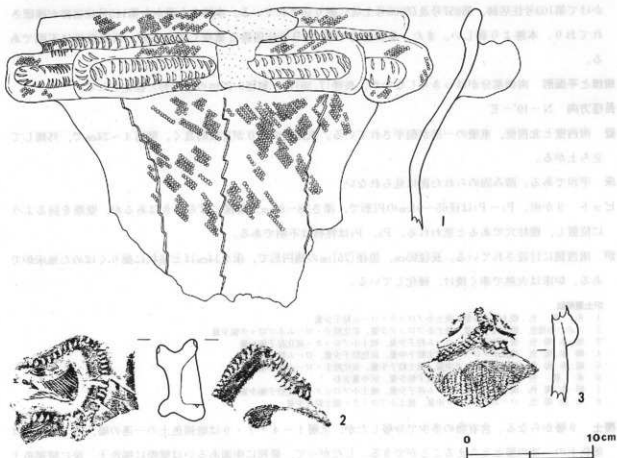
炉土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック少量、焼土粒子・ローム小ブロック極少量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 炭化物・ローム小ブロック少量
- 7 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック極少量

覆土 3層からなる。壁際、床面が褐色土、中央が暗褐色土の自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック極少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物少量



第101図 第188号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 炉及び覆土中から縄文土器が少量出土している。器形の判別できる1の炉体土器以外は細片が多い。

第188号住居跡出土遺物観察表

図取番号	器 種	容積値 (ml)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第101図	深鉢形土器	A (28.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部はやや膨らみを持ち直立した後外傾し、内傾して口縁部に至る。口縁部内側は内側が状で縁を持つ。口縁部外面は幅広い沈線を入れて上部に口唇部隆帯、下部に意状に区画する隆帯を有し、隆帯上には縄文を施文し、沈線及び意状区画内には点形文が施されている。胴部には単筋縄文及び縦位回転で施文され、意状隆帯の連続部下からは幅の狭い結筋縄文が縦位回転で施文されている。	黄母・砂粒・長石	P99 35% 伊内 (阿玉台IV)
1	縄文土器	B (24.6)		にぶい褐色 普通	

第101図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2は口縁部把手片で、把手内・外面の隆帯には連続の刻み、外面の隆帯で区画された内部には区画に沿って沈線が施され、内部に条線状の浅い集合沈線が施文され、口縁部との境に穿孔が見られる。中期中時式の範疇と思われる。3は胴上部の破片で、隆帯で区画文を描き、隆帯上及び隆帯以下には単筋縄文が施文されている。

所見 本跡の時期は、炉体土器から判断して縄文時代中期阿玉台IV式期である。

第189号住居跡 (第102図)

位置 調査区のやや西部, C15j区。

重複関係 本跡は、北東側部分を第230A号住居跡に、中央部分を第807号土坑に、西側部分から北西側部分にかけて第103号住居跡、第857号及び808号土坑に掘り込まれている。本跡の上面から第115号住居跡が確認されており、本跡より新しい。また、北側部分で第230B号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 南側部分のはっきりしないが、長径7.38m、短径5.92mの楕円形と推定される。

長径方向 N-19°-E

壁 南西壁と北西壁、東壁の一部が削平されている。東側壁の残りが比較的良く、壁高4~24cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

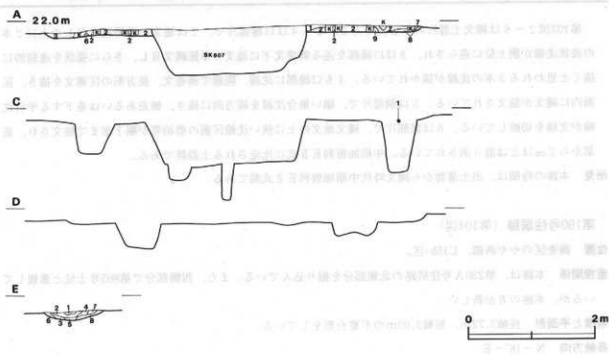
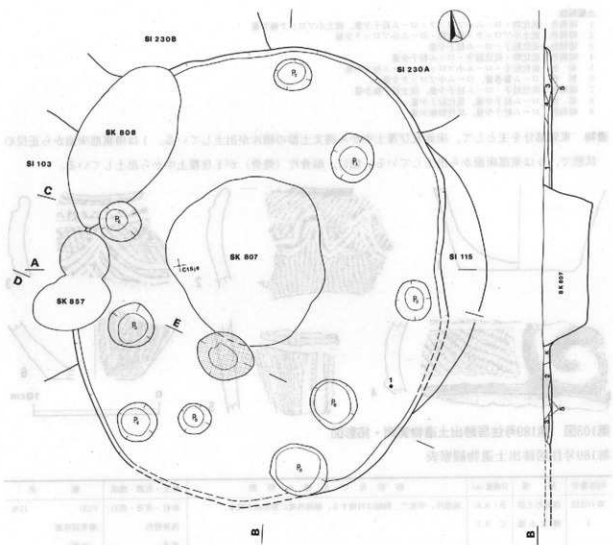
ピット 9か所。P₁~P₇は径65~91cmの円形で、深さ38~88cm。規模にばらつきはあるが、壁際を回るように位置し、壁柱穴であると思われる。P₈, P₉は性格は不明である。

炉 南西側に付設されている。長径95cm、短径75cmの楕円形で、床を14cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け、硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子極少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子極少量
- 6 赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒子極少量、灰中量含む
- 7 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 8 暗赤褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子少量

覆土 9層からなる。含有物の多少で分層したが、土層1~4・7・9は暗褐色土の一連の層、5・6・8は褐色土の一連の層ととらえることができる。したがって、最初に床面あるいは壁際に褐色土、後に暗褐色土が流れ込んだ自然堆積と考えられる。



第102図 第189号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム量多量、ローム中ブロック少量
- 7 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土粒子極少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物極少量

遺物 東側部分を主として、床面及び覆土中から縄文土器の細片が出土している。1は南東部床面から正位の状態で、5は東部床面から出土している。他に、獣骨片（焼骨）が1点覆土中から出土している。



第103図 第189号住居跡出土遺物実測・拓影図

第189号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図	深鉢形土器	B(6.6)	底部片。平底で、胴部は外傾する。胴部外面に整形面が残る。	砂粒・雲母・長石	P100 15%
1	縄文土器	C 9.7		浅黄褐色	南東部床面
				普通	(中期)

第103図2～6は縄文土器片の拓影図である。2～4は口縁部片で、2は地文の単節縄文RLの上に2本の波状沈線が胴上位に巡らされ、3は口縁部を巡る刺突文下に地文の単節縄文RL、さらに弧状を連続的に描くと思われる3本の沈線が描かれている。4も口縁部に沈線、隆線で渦巻文、長方形の区画文を描き、区画内に縄文が施文されている。5は胴部片で、細い集合沈線を縦方向に描き、横走あるいは垂下する平行沈線が文様を切断している。6は底部片で、縄文地文の上に狭い沈線区画の磨消帯が胴下部まで施文され、底部から2cmほどは磨り消されている。中期加曾利EⅡ式に比定される土器群である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅡ式期である。

第190号住居跡（第104図）

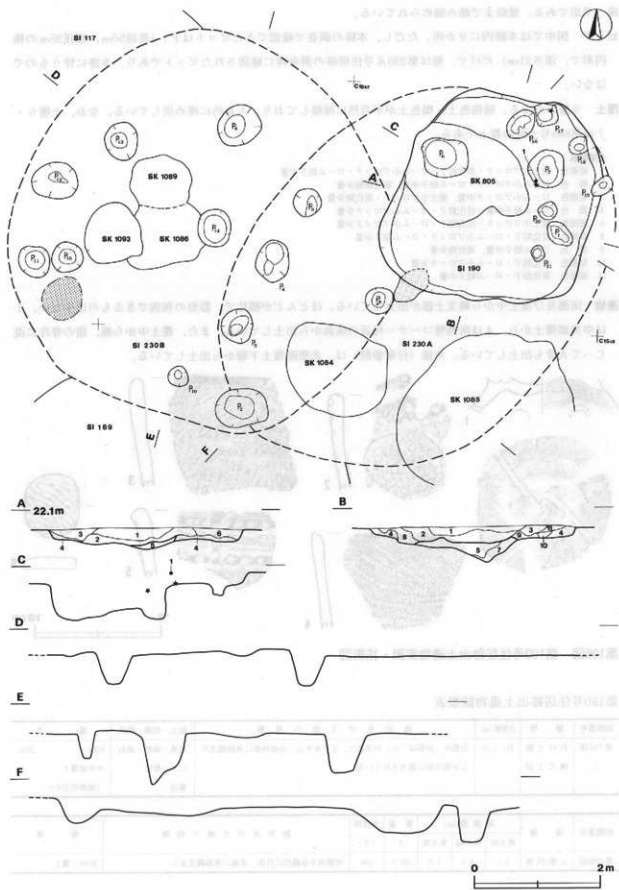
位置 調査区のやや西部、C15h7区。

重複関係 本跡は、第230A号住居跡の北側部分を掘り込んでいる。また、西側部分で第805号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸3.72m、短軸3.03mの不整形台形をしている。

長軸方向 N-16°-E

壁 壁高10-15cmで、外傾して立ち上がる。



第104図 第190・230A・230B号住居跡実測図

床 平坦である。壁際まで踏み固められている。

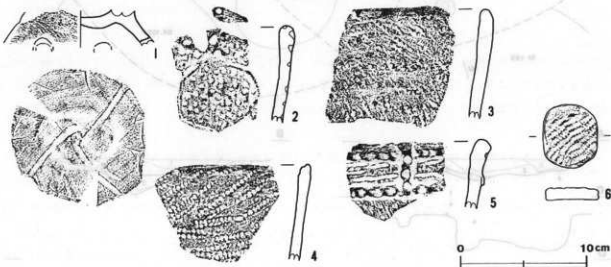
ピット 図中では本跡内に9か所。ただし、本跡の調査で確認できたピットはP₁(長径50cm, 短径35cmの楕円形で、深さ21cm)だけで、他は第230A号住居跡の調査時に確認されたピットであり、本跡に伴うものではない。

覆土 9層からなる。暗褐色土、褐色土が不自然に堆積しており、人為的に埋め戻している。なお、土層5・7は第805号土坑の覆土である。

土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物極少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化物少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 8 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 9 褐色 ローム粒子中量、炭化物少量
- 10 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 11 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量

遺物 床面及び覆土中から縄文土器が出土している。ほとんどが細片で、器形の判別できるものは少ない。1は中央部覆土から、4は南西壁コーナー付近の床面から出土している。また、覆土中から鹿、猪の骨片に混じって人骨も出土している。角鏃(付草参照)は、北壁際覆土下層から出土している。



第105図 第190号住居跡出土遺物実測・拓影図

第190号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第105図 1	土付土器 縄文土器	B(2.9)	台部片。台部は「八」の字状で、孔を有する。台部外面に単節縄文R Lが部分的に施文されている。	石英・砂粒・長石 に濃い褐色 普通	F101 20% 中央部覆土 (加齢粒B少)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第105図6	土製円板	5.1	4.3	1.0	28.0	100	両側面を意図的に作出 表面に単節縄文R L	BF34 覆土

第105図2-5は縄文土器片の拓影図である。2は波状口縁で、波頂部に双耳状の突起、器面には円形の刺突文が施されている。後期称名寺2式期の範疇と思われる。3は器面に反摺の縄文を施文。4は口縁部内側に沈線、器面には部分的に押圧気味の単節縄文を施文している。後期堀之内1式に比定される土器と思われる。5は口縁部と胴上部に押捺を加えた上下2段の粘土紐を貼り付け、縦の粘土紐で上下を結ぶ。区画内には横の短沈線が施文されている。後期加曾利B2式に比定される土器と考えられる。

所見 本跡は小形の住居跡で、ピットを1か所確認できただけで、他の施設は確認されなかった。第230A号住居跡の炉は、本跡の床より下層から確認されている。本跡の出土遺物は、縄文時代後期称名寺2式期から加曾利B2式期のものが混在しており、時期もこの範疇であると思われるが特定は困難である。

第230A号住居跡（第104図）

位置 調査区やや西部、C15h区。

重複関係 本跡は、北側部分を第190号住居跡、第805号土坑に、南側部分を第1084号、1085号土坑に、西側部分を第230B号住居跡に覆り込まれている。

長径方向 [N-33°-E]

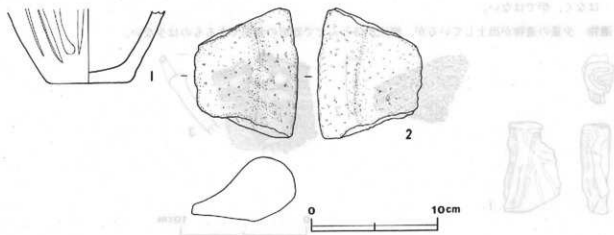
規模と平面形 覆土が削平され、明確にとらえられなかったが、長径(7.52)m、短径(5.00)mの楕円形と推定される。

床 平坦である。第190号住居跡の床よりやや低い。僅かに踏み固められている。

ピット 14か所。P₂-P₇は長径55-70cm、短径46-60cmの円形あるいは楕円形で、深さ41-80cm。炉を囲むように位置する柱穴と考えられる。しかし、P₂、P₅は位置的に第230B号住居跡のピットの可能性もあり、判断は難しい。P₁は第190号住居跡のピット、P₈は第230B号住居跡のピットである。北西側に小規模のピットが数本あるが、性格は不明である。

炉 ほぼ中央に付設されていると思われる。長径67cm、短径38cmの楕円形の地床炉である。第190号住居跡の南西壁の下から確認されている。覆土は削平され、赤変硬化した炉床のみ残存している。

遺物 本跡からの出土遺物は、1の底部片と2の石皿のみである。



第106図 第230A号住居跡出土遺物実測図

第230A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第106図 1	深鉢形土器	B(5.7)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。内面磨き、胴下部外面は沈線	砂粒・スコリア	P150 10%
	縄文土器	C 6.5	が低下している。	にぶい橙色	床面 (加特利EⅢ)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		
第106図2	石皿	(10.3)	(8.3)	5.1	(444.8)	安山岩	479 欠損品 床面

所見 本跡は、壁の立ち上がりや覆土の堆積状況等確認できなかったが、炉を中心として西側部分を反転して東側を推定した。出土遺物は底部片と石皿の2点だけであるが、時期を土器から判断すると縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第230B号住居跡(第104図)

位置 調査区はやや西部, C15h区。

重複関係 本跡は、東側部分が第230A号住居跡を、南側部分が第189号住居跡を掘り込んでいる。また、本跡の南西部分は第1084号土坑に、中央部西側の床は第1086号、1089号及び1093号土坑に掘り込まれている。本跡の西側の上面からは第117号住居跡が確認されている。

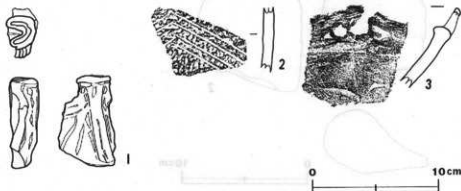
規模と平面形 覆土は削平され、壁の立ち上がりがとらえられなかったが、長径(6.40)m、短径(6.06)mの不整形円形と推定される。

床 平坦である。僅かに踏み固められた面が見られる。

ピット 12か所。P₈~P₁₃は長径35~72cm、短径33~55cmの円形あるいは楕円形で、深さ44~63cm。配列及び深さから本跡に伴うピットと考えられる。P₂、P₅も位置から見ると、本跡に関わるピットの可能性もある。P₁₄は径58cmほどの円形で、ほぼ中央に位置している。P₁₅は性格不明である。

炉 本跡から炉は確認されていない。P₁₅の南側に、焼土が径65cmほどの円形に薄く堆積しているが、硬化面はなく、炉ではない。

遺物 少量の遺物が出土しているが、細片がほとんどで器形の判別できるものは少ない。



第107図 第230B号住居跡出土遺物実測・拓影図

第107図2、3は縄文土器の口縁部片である。2は地文の縄文の上に斜行する平行沈線で文様が描かれている。3は波状を呈する口縁部片で、波頂部に大小2つの凹孔を有し、口縁部内面に稜が施されている。

第230B住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・地味	備考
第107図	把 手	長さ(7.3)	波状口縁の微頂部突起片。頂部に「U」字状のモチーフを沈線で描き、外面直下に沈線を巡らし、内面には「V」字状の押圧を加えている。	砂粒・長石・スコリア	P151 5% 層土 (堀之内)
1	縄文土器	幅(4.4) 厚さ(2.4)	突起頂部から胴部に粘土粒を貼り付けた縲帯を垂下させ、縲帯両側には割突状の縦沈線が連続して施文されている。頂部からは、口縁部土層の中央を走る沈線、胴部を斜行する沈線が施文されている。	にぶい褐色 普通	

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び炉を確認することができなかったが、ビットの配列と遺物の出土状況から規模及び平面形を推定した。時期は、出土遺物から縄文時代後期堀之内式期と思われる。

第191号住居跡 (第108図)

位置 調査区の西部。

D15a4区。

重複関係 本跡は、北側部分が第809号土坑を掘り込んでいる。また、本跡の上面からは第105号住居跡が確認されており、本跡よりも新しい。

規模と平面形 径3.03mほどの円形で、南側に方形の張り出し部が付設されている。

壁 壁高42cmほどで、外傾して立ち上がる。

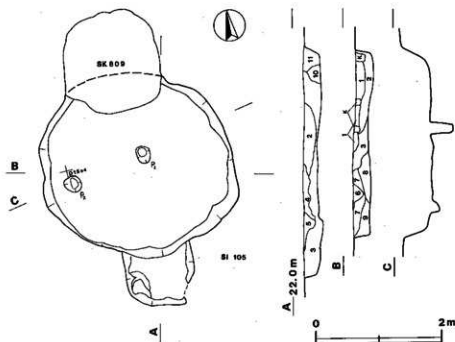
床 やや起伏があり、踏み固められている。

ビット 2か所。P₁は長径29cm、短径22cmの楕円形で、深さ43cm、ほぼ中央に位置する。P₂は径25cmの円形で、深さ14cm、西壁に近接して位置する。P₁は主柱穴、P₂は補助柱穴の可能性も考えられるが断定はできない。

層土 11層からなる。不自然な堆積状況で、人為的に埋め戻していると思われる。土層6は後世の掘り込みと思われる。

土層解説

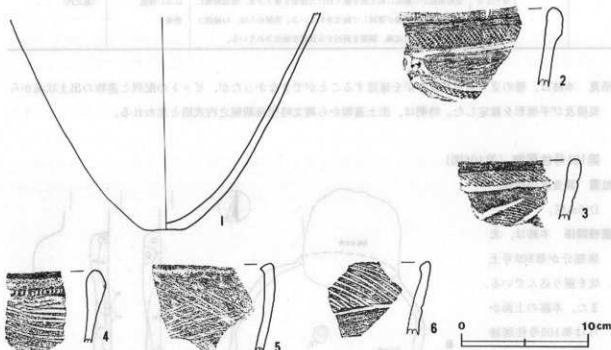
- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 6 黒褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 8 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量



第108図 第191号住居跡実測図

- 9 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子極少量
 10 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
 11 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量

遺物 覆土中から少量の縄文土器が出土している。1は中央部やや北西寄り覆土中から出土している。他に、鹿の歯が覆土中から出土している。



第109図 第191号住居跡出土遺物実測・拓影図

第191号住居跡出土遺物観察表

区画番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109区	深鉢形土器	B (17.0)	底部から斜下部にかけての破片。小形の平底で、胴部は外傾して開く。	砂粒・虫母	P102 20%
1	縄文土器	C 3.2	内面は縦方向の磨り、外面は縦方向の磨きが施されている。	明赤褐色 普通	中央部覆土 (安行)

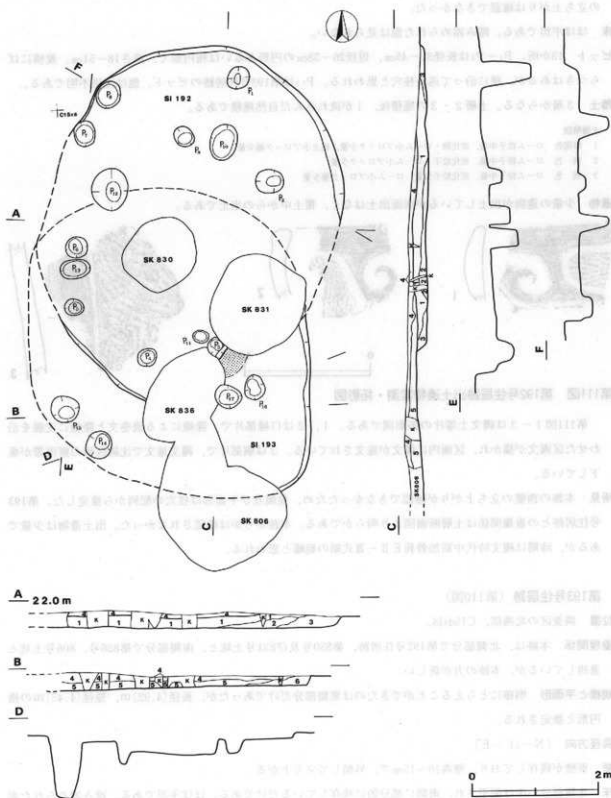
第109図2～6は縄文土器の拓影図である。2～4は後期安行式に比定される土器である。2は波状を呈する口縁部片で、口縁部にやや幅広の隆起帯縄文、以下に幅の狭い弧状の隆起帯縄文の区画に沿って沈線を施し、区画内は磨り消されている。縄文帯の連結部に貼壺を有するが欠損のため形状は不明である。3も口縁部と口縁部以下に沈線区画の縄文帯が見られる。4は口縁部肥厚部に刺突文が廻り、以下はやや弧状の条線が施文されている。5、6は後期加曾利B式期の範疇の土器と思われる。5は口縁部上端が内側に突出気味で、外面に斜行条線状の整形痕、内面は磨きが施されている。6も口縁部上端が内側に突出し内面磨き、口縁部外面は斜行沈線が施されている。

所見 本跡から炉は確認されなかった。縄文時代後期加曾利B式期～安行式期の遺物が出土しているが、出土量の割合から、時期を縄文時代後期安行式期と考えておきたい。

第192号住居跡 (第110図)

位置 調査区の北西部, C15c区。

重複関係 本跡は, 南側部分が第193号住居跡, 第830号土坑に掘り込まれている。また, 中央部から南側にか



第110図 第192・193号住居跡実測図

けて第831号、836号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径5.80m、短径(4.15)mの楕円形と推定される。

長径方向 N-18°-E

壁 壁高は、北側が8cm、東側は22cm、南側は上面が削平されているため10cmで、外傾して立ち上がる。西壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。踏み固められた面は見られない。

ビット 13か所。P₁~P₈は長径31~45cm、短径26~38cmの円形あるいは楕円形で、深さ18~51cm。規模にはらつきはあるが、壁に沿って巡る柱穴と思われる。P₁₃は第193号住居跡のビット。他は性格不明である。

覆土 3層からなる。土層2・3の堆積後、1が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 2 暗色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量

遺物 少量の遺物が出土しているが床面出土はなく、覆土中からの出土である。



第111図 第192号住居跡出土遺物実測・拓影図

第111図1~3は縄文土器片の拓影図である。1、2は口縁部片で、隆線による渦巻文と隆線に沈線に沿わせた区画文が描かれ、区画内に縄文が施文されている。3は胴部片で、縄文地文で沈線区画の磨消帯が垂下している。

所見 本跡の西壁の立ち上がりが確認できなかったため、規模及び平面形は柱穴の配列から推定した。第193号住居跡との重複関係は土層断面図より明らかである。本跡から炉は確認されなかった。出土遺物は少量であるが、時期は縄文時代中期加曾利EⅡ~Ⅲ式期の範疇と思われる。

第193号住居跡 (第110図)

位置 調査区の北西部、C15d区。

重複関係 本跡は、北側部分で第192号住居跡、第830号及び831号土坑と、南側部分で第836号、806号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 明確にとらえることができたのは東側部分だけであったが、長径(4.92)m、短径(4.45)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-11°-E]

壁 東壁が残存しており、壁高10~15cmで、外傾して立ち上がる。

床 北側部分の床は削平され、南側に部分的に残存しているだけである。ほぼ平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 10か所。P₁₃は長径48cm、短径27cmの楕円形で、深さ70cm、P₁₄は長径45cm、短径40cmの円形で、深さ99cm、P₁₅は長径46cm、短径43cmの円形で、深さ83cm。いずれも本跡に関わる柱穴と思われる。P₃～P₆は第192号住居跡のピット。他は性格不明である。

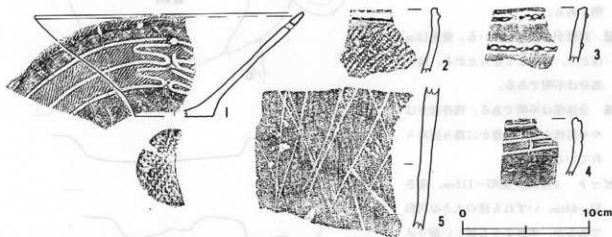
炉 本跡のやや西側に焼土跡が確認されている。焼土粒子の含有量が少なく、焼土ブロックも確認できなかったため、炉と断定するのは難しい。

覆土 土層4～6が本跡の覆土である。6の堆積後、5・4が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- 4 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 床面からの出土遺物はなく、すべて覆土中からの出土である。



第112図 第193号住居跡出土遺物実測・拓影図

第193号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・構成	備考
第112図	鉢形土器	A 21.4	平底で突出尖味。胴部は外傾して直線的に開き、口縁部に至る。口縁部は内側に筋文帯が回り、胴上半には比喩間に縄文帯を横文した縄文帯が2段構成で展開されている。沈線の両端は蛇行して上下を結び、縦区切り効果を持つ。区切り部分の上段の沈線には孔が穿たれている。胴部内面、区画外は丁寧な磨きが施され、底部には網代痕が残されている。	砂粒・長石・スコリア 明黄褐色 普通	P103 70% 覆土 (加替料B1)
1	縄文土器	B 6.3 C (6.1)			

第112図2～5は縄文土器片の拓影図である。2～4は口縁部片で、2は口縁部に沈線、胴部に縄文が施文され、3は外面に押捺を加えた粘土紐が2段貼り付けられ、4は口縁部上端に沈線、胴部上位に施された沈線区画の縄文帯が「ノ」の字状の短沈線で区切られている。5は胴部片で、斜格子状の沈線が器面に見られる。すべて内面には磨きが施されている。

所見 本跡の北側は、床や壁の立ち上りを確認できなかったが、土層断面図で本跡の覆土が第192号住居跡の上に堆積していることから重複関係を判断し、北側部分も本跡の土層の立ち上がりから推定した。時期は、出土遺物から縄文時代後期加替利B1式期である。

第194号住居跡 (第113図)

位置 調査区の西部, D15as区。

重複関係 本跡は, 東側部分を第816号土坑に, 北側部分を第189号住居跡に掘り込まれている。また, 本跡の上面からは第105号住居跡が確認されている。

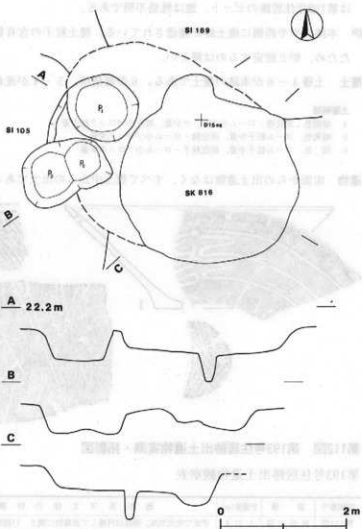
規模と平面形 西側が部分的に残存しているだけで, 規模及び平面形は不明である。

壁 西壁が一部残っている。壁高12cmほどで, 外傾して立ち上がる。他の部分は不明である。

床 全体像は不明である。残存部分はやや起伏があり, 僅かに踏み固められている。

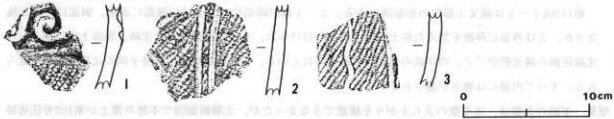
ピット 3か所。径85-115cm, 深さ34-43cm, いずれも径の大きな円形であるが, 本跡よりも新しい掘り込みである。

覆土 2本のベルトを設定したが, 本跡の土層はいずれにも僅かしかかかってこないため, 図面は割愛したが, 炭化粒子とローム粒子を少量含む褐色土が確認されている。堆積状況は不明である。



第113図 第194号住居跡実測図

遺物 覆土中から極少量の遺物が出土している。



第114図 第194号住居跡出土遺物実測・拓影図

第114図1~3は縄文土器片の拓影図である。1は胴上部の破片で, 口縁部文様帯に渦巻文, 胴部に単節縄文R.L.が施文されている。2, 3は胴部片で, 単節縄文R.L.を地文にし, 2は幅の狭い平行沈線が垂下し, 3は僅かに蛇行する単沈線と沈線区画の磨消帯が垂下している。

所見 本跡の残存部分は僅かで、全体像は不明な点が多く、堅穴状遺構の可能性も考えられる。時期は、出土遺物が極少量で床上もないため断定はできないが、縄文時代中期加曾利EⅡ式期と考えておきたい。

第195号住居跡 (第115図)

位置 調査区の北部、C16a区。

重複関係 本跡は、西側部分で第817号土坑を掘り込んでいる。

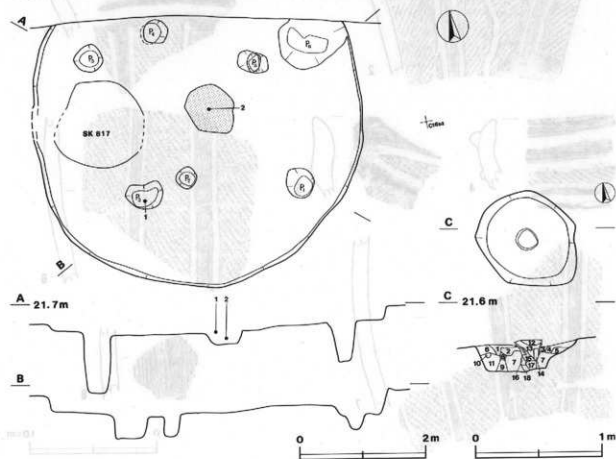
規模と平面形 北側部分は調査区域外にのびているためとらえられなかったが、長径5.21m、短径(5.07)mの円形と推定される。

壁 壁高8~22cmで、やや外傾して立ち上がる。

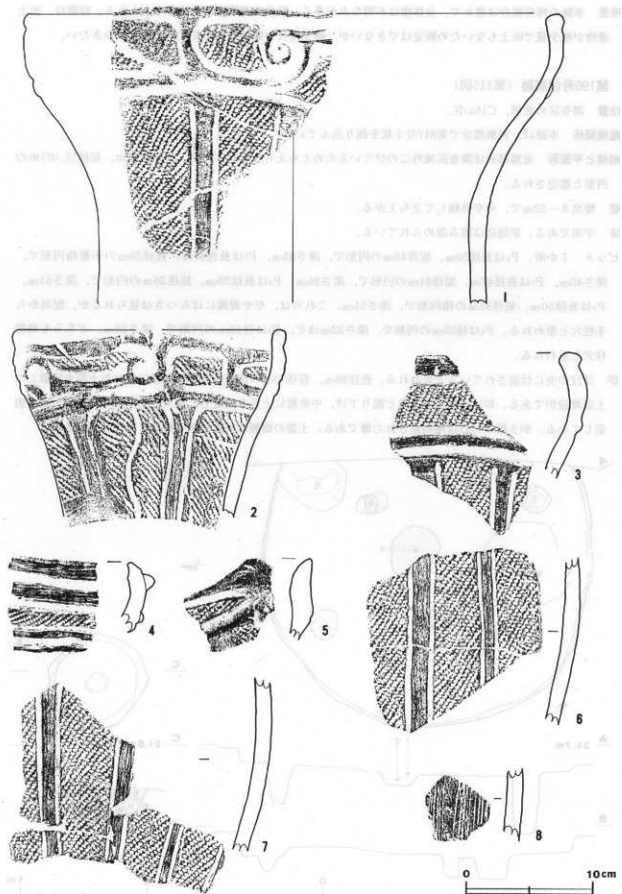
床 平坦である。炉周辺は踏み固められている。

ピット 7か所。P₁は長径50cm、短径45cmの円形で、深さ63cm、P₂は長径57cm、短径38cmの不整楕円形で、深さ40cm、P₃は長径47cm、短径44cmの円形で、深さ94cm、P₄は長径39cm、短径36cmの円形で、深さ51cm、P₅は長径50cm、短径32cmの楕円形で、深さ51cm。これらは、やや規模にばらつきは見られるが、配列から主柱穴と思われる。P₆は径30cmの円形で、深さ32cmほど、P₇は径32cmの円形で、深さ29cm。どちらも補助柱穴と思われる。

炉 ほぼ中央に付設されていると思われる。長径89cm、短径70cmの楕円形で、中央部に深鉢形土器を設置した土器埋設炉である。炉は、床を22cmほど掘り下げ、中央部に土器を設置した後人為的に埋め戻し、土器を固定している。炉土層4~11は埋め戻された層である。土器の周囲は火熱で赤く焼け、硬化している。



第115図 第195号住居跡実測図

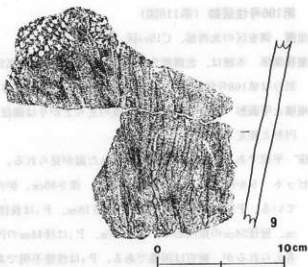


第116図 第195号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

図説実証考古学 図178

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子極少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 7 暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子極少量
- 8 暗赤褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 9 におい赤褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子極少量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極少量
- 11 褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子極少量
- 12 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック極少量
- 13 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子極少量
- 14 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子極少量
- 15 暗褐色 ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック極少量
- 16 におい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 17 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子極少量
- 18 におい赤褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子少量, ローム小ブロック極少量



第117図 第195号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

遺物 炉内, 床面及び覆土中から縄文土器が少量出土している。2は炉内から出土し, 炉体土器として使用されたと思われる。1は炉直上, P₃東側床面及びP₃内の3か所から出土している。8, 9はP₅直上の覆土中から出土している。

第195号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	縄文土器	A(42.0) B(23.0)	胴上半から口縁部にかけての破片。胴部は直立気味に立ち上がった後外傾し, 口縁部は内傾する。口縁部は肥厚し, 沈線, 隆線で溝状あるいは楕円形に区画し, 区画内に単節縄文R Lが縦位回転で施文され口縁部文様帯が構成されている。胴部は沈線区画の磨消帯が垂下し, 磨消帯内は単節縄文R Lが縦位回転で施文されている。	長石・石英・砂粒 におい黄褐色 普通	P105 30% 炉直上及び西側床面 (加藤利三)
2	縄文土器	A(20.5) B(14.9)	底部及び口縁部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり, 口縁部は僅かに内傾する。口縁部は沈線, 隆線で楕円形状あるいは溝状に区画し, 区画内は単節縄文R Lが横位回転で施文され, 口縁部文様帯が構成されている。胴部は沈線区画の磨消帯及び蛇行沈線を垂下させ, 磨消帯内には単節縄文R Lが縦位回転で施文されている。	砂粒・長石・スコリア 褐色 普通	P104 50% 伊内 (加藤利三)

第116-117図3~9は縄文土器片の拓影図である。3~5は口縁部片で, 3は文様帯が沈線, 隆線で区画された口縁部文様帯と沈線区画の直線的磨消帯が垂下する胴部文様帯に分けられ, 区画内及び胴部の磨消帯間には複節縄文が施文されている。4も隆線で口縁部文様帯が区画され, 内部に単節縄文を施文している。5は波状口縁で, 沈線で口縁部に楕円形の区画を施し, 区画内に縄文が施文されている。6, 7は胴部片で, 沈線区画の磨消帯が直線的に垂下し, 間には複節縄文R L Rが施文されている。8は縦方向の条線が施文されている胴部片である。9は胴下部の破片で, 上部に縄文が施文されているが, 底部近くは磨り消されている。いずれも中期加曾利EⅢ式の古い段階に比定される土器である。

所見 本跡の覆土は削平され, 堆積状況は不明である。時期は, 出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第196号住居跡 (第118図)

位置 調査区の北西部, C15e区。

重複関係 本跡は、北側部分を第714号土坑に、東側部分の床を第759号土坑に掘り込まれている。本跡の北側部分は第168号住居跡と、南西側部分は第197号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 覆土が削平され、壁の立ち上がりは確認できなかったが、長径(4.10)m、短径(3.96)mの不整形円形と推定される。

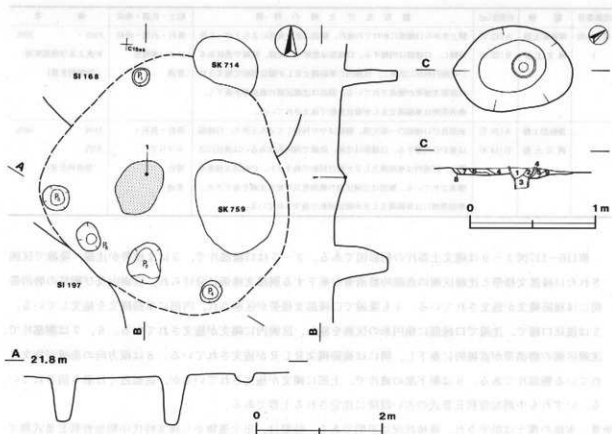
床 平坦である。僅かに踏み固められた面が見られる。

ピット 5か所。P₁は径30cmの円形で、深さ89cm。炉の北側に位置している。P₂~P₅は炉の南側に位置している。P₂は径35cmの円形で、深さ18cm, P₃は長径65cm, 短径55cmの楕円形で、深さ84cm, P₄は長径45cm, 短径34cmの楕円形で、深さ77cm, P₅は径44cmの円形で、深さ81cm。P₁, P₃~P₅は壁柱穴の可能性も考えられるが、断定は困難である。P₂は性格不明である。

炉 中央部やや西寄りに付設されていると思われる。長径95cm, 短径66cmの楕円形で、やや北寄りに深鉢形土器を設置した土器埋設炉である。埋設土器の南側に焼土が多量に堆積し、床面は赤く焼け、硬くなっている。

炉土層解説

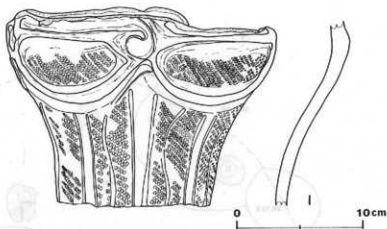
- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子少量, 焼土小ブロック・炭化物極少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子極少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量, ローム小ブロック極少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子多量, 炭化物極少量
- 8 暗赤褐色 炭化粒子少量, 焼土小ブロック極少量
- 9 暗赤褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック極少量



第118図 第196号住居跡実測図

遺物 本跡からは、P106の炉体土器以外は出土していない。

所見 本跡は、覆土が削平され、壁の立ち上がりは確認できなかった。規模及び平面形は、炉を中心として床質及び柱穴の配列からの推定である。時期は、炉体土器から判断して縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。



第119図 第196号住居跡出土遺物実測図

第196号住居跡出土遺物観察表

図版番号	部 種	計測値(m)	形状及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第119図 1	深鉢形土器	A(21.4)	底部及び口縁部の一部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり、口縁部は僅かに内彎する。口縁部文様帯は沈線、隆線で平楕円形の区画及び渦巻文をそれぞれ4単位施し、区画内は単線縄文R.Lが横位回転で施文されている。胴部文様帯は沈線区画の磨消帯と横位沈線を交互に垂下させ、隙間には単線縄文R.Lが縦位回転で施文されている。胴部下半は意識的に打ち欠かされている。	砂粒・長石・雲母 に白い彩色	P106 50% 室内 (加曾利EⅢ)
	縄文土器	B(15.4)		普通	

第197号住居跡(第120図)

位置 調査区の北西部、C15f4区。

重複関係 本跡は、中央部の床が第822号土坑に掘り込まれている。北東側部分で第196号住居跡と、中央部で第823号土坑と、西側部分で第728号、729号及び735号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 覆土が削平されているため、壁の立ち上りをとらえることができなかったが、長径(7.60)m、短径(6.20)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-83°-E]

床 平坦である。特に踏み固められた面は見られない。

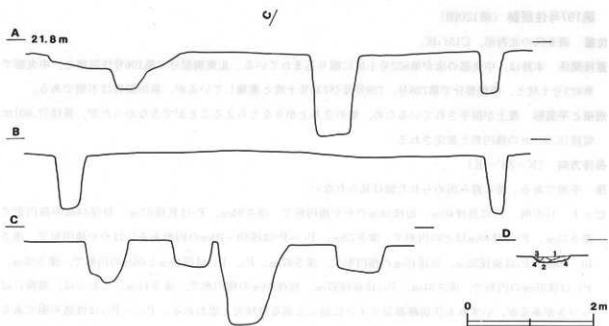
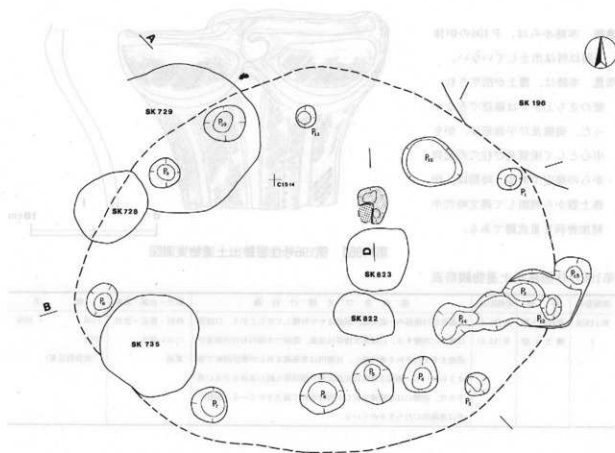
ピット 15か所。P₁は長径40cm、短径34cmのやや楕円形で、深さ94cm、P₂は長径67cm、短径44cmの楕円形で、深さ53cm、P₃は径40cmほどの円形で、深さ73cm、P₄-P₇は径59-70cmの円形あるいはやや楕円形で、深さ40-69cm、P₈は長径55cm、短径45cmの楕円形で、深さ87cm、P₉、P₁₀は径49cmと66cmの円形で、深さ38cm、P₁₁は径35cmの円形で、深さ34cm、P₁₂は長径97cm、短径80cmの楕円形で、深さ41cm。これらは、規模にばらつきがあるが、いずれも住居跡推定ラインに沿って巡る壁柱穴と思われる。P₁₃-P₁₅は性格不明である。

炉 やや北西寄りに付設されている。長軸60cm、短軸46cmの不整長方形で、床を15cmほど掘りくぼめた地床炉である。南側の炉床が火熱で赤く焼け、硬くなっている。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 4 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック少量

遺物 本跡から遺物は出土していない。



第120図 第197号住居跡実測図

所見 本跡の覆土は削平され、壁の立ち上がりや覆土の堆積状況等とらえることができなかったが、柱穴の配列から規模及び平面形を推定した。時期は、出土遺物がなく、土器から時期を特定するのは困難であるが、遺構の形態より縄文時代の住居跡と思われる。

第199号住居跡 (第121図)

位置 調査区の東部, C16f区。

重複関係 本跡は, 中央部南側の床を第957号土坑に, 南東側壁を第1052号土坑に, 南西側壁を第1127号土坑に掘り込まれている。また, 北側部分で第960号土坑と, 南側部分で第942号土坑と, 北西側部分で第958号土坑と重複しているが, 本跡の方が新しい。東側で第200号住居跡と切り合っているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径6.80m, 短径6.06mの楕円形である。

長径方向 N-9°-E

壁 壁高7~15cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 14か所。P₁~P₅は長径50~60cm, 短径40~57cmの円形あるいは楕円形で, 深さ43~67cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₇, P₁₀, P₁₃は主柱穴の間に位置し, 径35~55cmの円形で, 深さ29~36cm。

補助柱穴の可能性が考えられる。他は性格不明である。

炉 はほぼ中央に付設されている。長径59cm, 短径53cmの不整形円で, 中央に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。炉床はそれほど焼けてなく, 硬い部分も見られない。炉の北側に近接して, 長径69cm, 短径56cm, 深さ9~13cmの楕円形の掘り込みの覆土上層に, 焼土が少量含まれているが炉ではない。また東側にも同様の焼土の堆積部分が見られるが炉ではない。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量, 焼土中ブロック極少量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子極少量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量, 焼土小ブロック極少量

覆土 7層からなる。床面に薄くブロック状に土層2が堆積した後, 4・3, 最後に1が流れ込んだ自然堆積である。2と5は分層してあるが, 同質で一連の層である。なお, 6・7はP₁₂の覆土で, 後世の掘り込みと思われる。

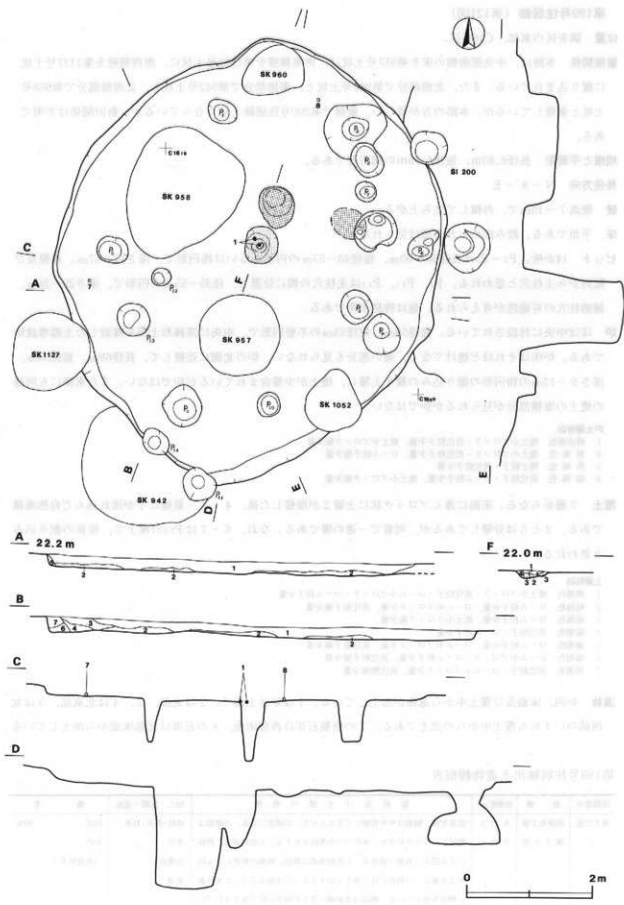
土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土小ブロック極少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子極少量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子極少量
- 7 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量, 炭化物極少量

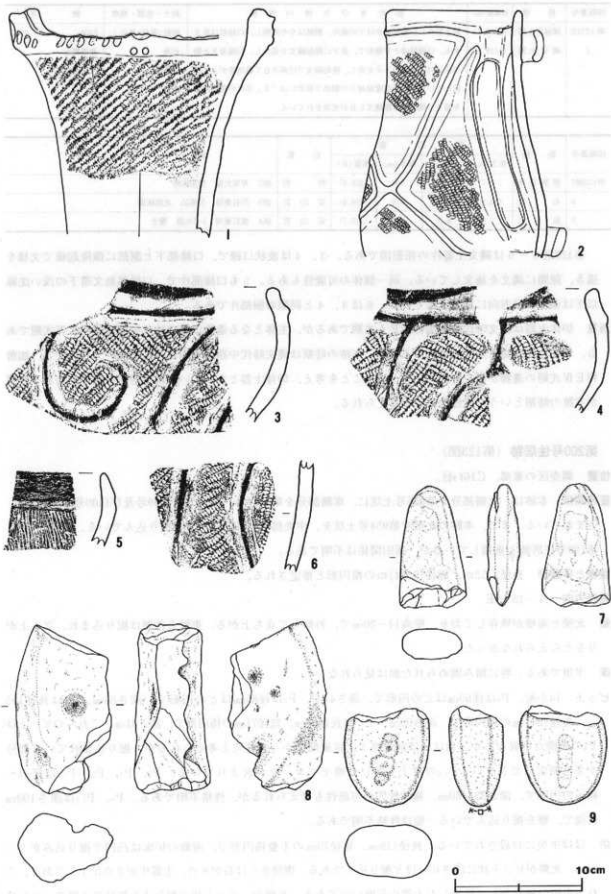
遺物 炉内, 床面及び覆土中から遺物が出土している。1は炉体土器で, 2は北部, 3, 4は北東部, 5は北西部のいずれも覆土中からの出土である。7の磨製石斧は西部床面, 8の石皿は北部床面から出土している。

第199号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第122図	深鉢形土器	A 21.0	底部欠損。胴部はやや外傾して立ち上がり, 口縁部に至る。口縁部は	砂粒・長石・石英	F107 50%
1	縄文土器	B (18.2)	肥厚し, 大小それぞれ2単位づつの突起を有する。大突起頂部に押捺による凹み, 外面に濃褐色文, 小突起頂部に押捺, 外面に斜突による円形文を施し, 口唇部には上縁を2分するように沈線を通らした後外面に押捺を加えている。胴部は単筋縄文Rが縦位回転で施文されている。	黄褐色 普通	伊内 (加藤利E I)



第121图 第199号住居跡実測图



第122图 第199号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第122図 2	深鉢形土器 縄文土器	A(10.7) B(19.6)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部はやや内傾し、口縁部は直立する。口縁部は十字型で、直下に隆起線文を巡らし、口縁部下と胴中央に対応する吊り手を有し、隆起線文で区画されて書割帯が上下を結んでいる。口縁部隆起線下の胴部文様帯には「X」字状の隆起線文を施す。断面に単線縄文LⅡが充填されている。	砂粒・雲母・長石・石英 浅黄褐色 普通	P108 20% 北部覆土 (加納利EⅣ)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第122図7	磨製石斧	(9.7)	(5.4)	2.6	(158.8)	砂 岩	Q62 万那久墳 西部床面
8	石 皿	(13.4)	(7.6)	6.3	(494.6)	安 山 岩	Q63 四石兼用 欠視塚 北部床面
9	磨 石	(7.8)	6.9	4.2	(310.7)	安 山 岩	Q64 磨石兼用 1/2欠視 覆土

第122図3～6は縄文土器片の拓影図である。3, 4は波状口縁で、口縁部下と胴部に隆起線形で文様を抜き、隙間に縄文を施文している。同一個体の可能性もある。5も口縁部片で、口縁部無文帯下の浅い沈線以下は条線が縦方向に施文されている。6は3, 4と同類の胴部片である。

所見 炉体土器は縄文時代中期加曾利EⅠ式期であるが、主体となる遺物は縄文時代中期加曾利EⅣ式期である。炉体土器は廃棄遺物の再利用と考え、本跡の時期は縄文時代中期加曾利EⅣ式期という可能性と、加曾利EⅣ式期の遺物が覆土からの出土ということと考え、炉体土器となっている縄文時代中期加曾利EⅠ式期が本跡の時期という可能性の2つが考えられる。

第200号住居跡 (第123図)

位置 調査区の東部、C16f区。

重複関係 本跡は、北側部分を第955号土坑に、東側部分を第1070号、1111号、1099号及び1100号土坑に掘り込まれている。また、本跡の北部で第954号土坑を、中央部で第1071号土坑を掘り込んでいる。西側部分で第199号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径7.52m、短径(5.84)mの楕円形と推定される。

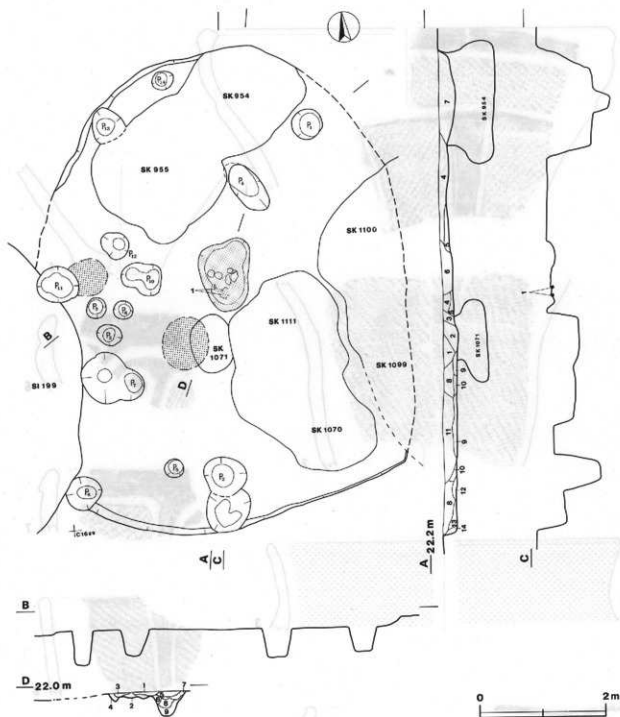
長径方向 N-15°-E

壁 北壁と南壁が残存しており、壁高14～20cmで、外傾して立ち上がる。東壁と西壁は掘り込まれ、立ち上がりをとらえられなかった。

床 平坦である。特に踏み固められた面は見られない。

ピット 14か所。P₁は径60cmほどの円形で、深さ47cm、P₂は径85cmほどの円形で、深さ88cm、P₃は長径105cm、短径90cmの楕円形で、深さ90cm、P₁₁は長径82cm、短径71cmの楕円形で、深さ81cm。これらのピットは、P₁の規模だけ異なるが、他はほぼ同規格で、位置関係から主柱穴と考えられるが、掘り込まれている部分が多く断定はできない。P₁₁の覆土層には焼土ブロックが含まれている。P₅、P₆、P₈、P₁₄は径31～40cmの円形で、深さ32～60cm。補助柱穴の可能性も考えられるが、性格不明である。P₆、P₁₃は深さ100cm前後で、壁を掘り込んでいる。他は性格不明である。

炉 は中央に付設されている。長径119cm、短径79cmの不整楕円形で、南側の炉床は凸凹で掘り込みが9～14cm、北側がピット状に深さ40cmほど掘り込んである。南側からは石が8点、土器片が2点出土しており、これらを炉の施設として使用した土器片石囲い炉である。北側の、ピット状の掘り込み部分の土層7・8には焼土が含まれており、また、北側の立ち上がり部分には焼土ブロックが残存しており、北側部分を最初に炉

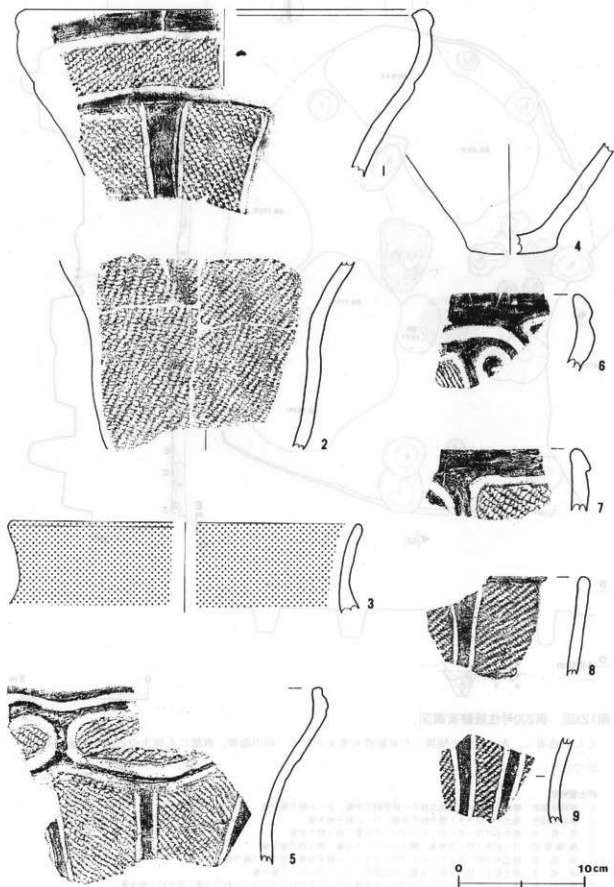


第123図 第200号住居跡実測図

として使用し、次に南側を使用した可能性も考えられる。炉の南側、西側にも焼土の広がりが見られるが、炉ではない。

炉土層解説

- | | |
|---------|---|
| 1 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子極少量 |
| 2 極暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子極少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量 |
| 4 極暗褐色 | ローム中ブロック中量、焼土小ブロック少量、焼土粒子極少量 |
| 5 暗褐色 | 焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 |
| 6 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量 |
| 7 暗褐色 | 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 |
| 8 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 9 暗褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、焼土ブロック立ち上がり部分に多量含む |



第124图 第200号住居跡出土遺物実測・拓影图

覆土 14層からなる。暗褐色土、褐色土が複雑に覆っている人為堆積である。

土層解説

1	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子少量、ローム小ブロック極少量
2	暗褐色	焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化粒子少量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化物少量、焼土小ブロック極少量
4	暗褐色	焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
5	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量
6	暗褐色	焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
7	黒褐色	炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
8	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子極少量
9	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
10	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
11	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量
12	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子極少量
13	褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
14	にぶい褐色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量

遺物 炉内及び覆土中から縄文土器が出土している。床面出土の遺物は少ない。1は土器片囲い炉に使用された破片で、炉の南側よりに1点が正位、他の1点が逆位で設置されていた。6は炉の北端から出土している。3は南西部覆土中、5は南東部覆土中からの出土である。

第200号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第124図 1	深鉢形土器	A(33.0)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内彎し、内側に縦を持つ。沈線、隆線で枠状文の1層部文様帯を構成し、区画内は太さの異なる複数縄文L R Lが順位隔帯で施文されている。胴部にも同じ縄文を縦位隔帯で施文した後、沈線区画でやや傾立の磨消帯が垂下している。	砂粒・スコリア 褐色 普通	F109 10% 炉内 (加勢利EⅢ)
	縄文土器	B(13.4)			
2	深鉢形土器	B(15.0)	胴部片。僅かに内彎した後外傾する。胴部外周には早稲縄文R Lが縦位隔帯で施文されている。	砂粒・灰石・ スコリア 明赤褐色 普通	F110 30% 覆土 (加勢利E)
	縄文土器				
3	鉢形土器	A(28.0)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がる。口唇部外面に縦を持つ。内・外面とも磨きが施され、赤彩されている。	砂粒 赤褐色 普通	F111 5% 南西部覆土 (加勢利E)
	縄文土器	B(7.0)			
4	深鉢形土器	B(8.7)	底部片。やや丸みを帯びた突出気味の底面で、胴部は外縁して開く。	砂粒・灰石・石末・ 雲母 明赤褐色 普通	F112 10% 覆土 (加勢利E)
	縄文土器	C(7.0)	胴下部は割りで整形されている。		

第124図5～9は縄文土器片の拓影図である。5は胴上部から口縁部にかけての破片で、口縁部上端に巡らされた沈線以下に円形及び楕円形の区画文を指頭により作出した隆線で文様帯を構成し、円形文の上部口唇部は突出する。区画内は縄文を施文し、胴部には沈線区画の直線的磨消帯が垂下し、磨消帯間も縄文が施文され突出する。6は口縁部に沈線、隆線で渦巻文、7も沈線、隆線で口縁部文様帯を区画し、区画内には縄文が施文されている。8は縄文文面上に沈線区画の磨消帯が口縁部から胴部に垂下されている。9は胴部片で、縄文文面上に沈線区画の磨消帯が垂下している。

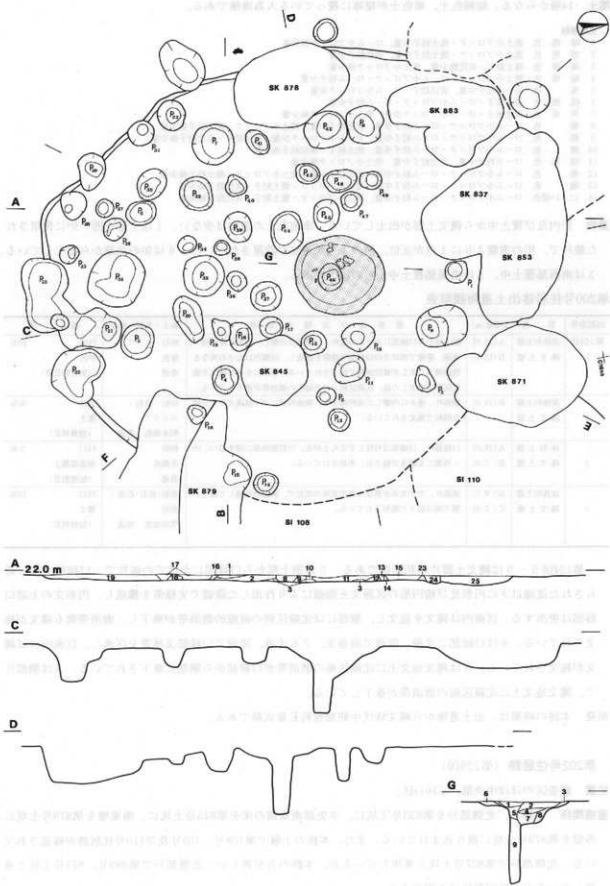
所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期加勢利EⅢ式期である。

第202号住居跡(第125図)

位置 調査区のほぼ中央部、C16i:区。

重複関係 本跡は、北側部分を第853号土坑に、中央部南東側の床を第845号土坑に、南東壁を第879号土坑に、西壁を第878号土坑に掘り込まれている。また、本跡の上層で第108号、109号及び110号住居跡が確認されている。北側部分で第837号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。北側部分で第883号、871号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 壁と覆土の判断が難しく、壁の立ち上がりをとらえることはできなかったが、長径(8.60)m、



第125图 第202号住居跡実測图

短径(7.05)mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-3'-W]

壁 南壁と西壁が残存しており、壁高5~8cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。全体に踏み固められている。

ピット 本跡からは49か所のピットが確認されている。

P₁~P₈は長径36~61cm、短径32~54cmの円形あるいは楕円形で、深さ35~56cm。ピットの覆土の色、配列及び規模から主柱穴と考えられる。位置的に見ると、北側の柱穴が掘り込まれている可能性がある。主柱穴の近くにあるピットは補助柱穴の可能性も考えられるが、性格は不明である。その他、多数のピットが床面を掘り込んでいるが、覆土が黒褐色で後世における掘り込みと思われ、やはり性格は不明である。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径152cm、短径123cmのやや楕円形で、北西側に砂岩質の石を付設した石囲い炉である。土器片も少量使用されている。18cmほど掘りくぼめられ、炉床は火熱で赤く焼け、硬くなっている。中央部はP₄に掘り抜かれている。炉土層1・5・9がその覆土である。

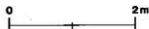
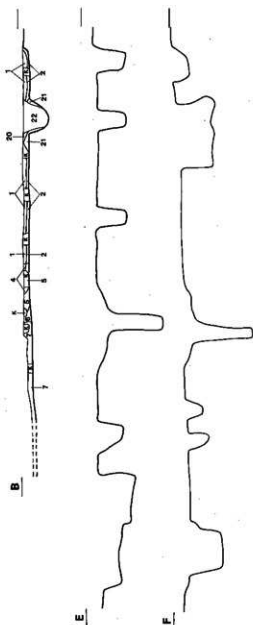
炉土層解説

- 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量、骨片少量含む
- 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量、骨片少量含む
- 暗褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子極少量
- 暗赤褐色 焼土小ブロック・炭化粒子少量、焼土粒子極少量
- にがい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物少量
- 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック・炭化物少量
- 黒褐色 炭化粒子中量、焼土小ブロック極少量

覆土 覆土は薄い、25層と細かく分層され、人為堆積の様相を示している。

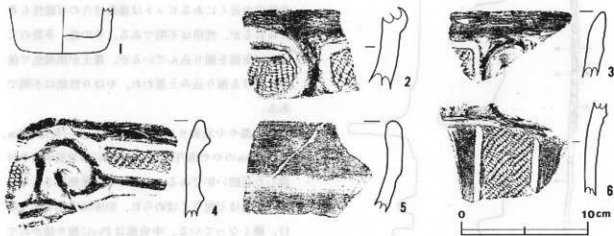
土層解説

- 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
- 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子極少量
- 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・ローム粒子極少量
- 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子極少量
- 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
- 褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 暗褐色 炭化粒子少量、ローム小ブロック極少量



- 12 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子極少量
 13 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
 14 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、焼土小ブロック極少量
 15 黒褐色 炭化粒子少量、焼土粒子極少量
 16 黒褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
 17 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
 18 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
 19 暗褐色 ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量
 20 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子少量
 21 黒色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
 22 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量
 23 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
 24 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック極少量
 25 暗褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子少量、骨少量含む

遺物 炉内及び覆土中から遺物が出土している。炉からは2～5、覆土中からは1が出土している。その他獣骨片が2点出土している。



第126図 第202号住居跡出土遺物実測・拓影図

第202号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	口径(㎝)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図	漆降彩土器	B(3.6)	底部片。丸みを帯びた底部で、中央部に厚みを持つ。胴部は直立気味	砂粒・長石・石英	F113 5%
1	縄文土器	C 6.8	に立ち上がる。胴下部外面縁方向の筋リ線ナゲ整形が施されている。	にぶい褐色	覆土 (加曾利E)
				普通	

第126図2～6は縄文土器片の拓影図である。いずれも中期加曾利EⅢ式に含まれる時期と思われるが、加曾利EⅡ式の手法が残されているものもある。2～5は口縁部片で、2～4は沈線を沿わせた隆線で渦巻文や楕円形状の区画文を描き、区画内には単節縄文が施文されている。5は無文で、口縁部下に扁平な浅い沈線が巡らされている。6は胴部片で、沈線区画の磨消帯が垂下し、磨消帯間は単節縄文R Lが施文されている。

所見 本跡は東側部分が不明瞭であるが、床質及び支柱穴から規模及び平面形を推定した。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期である。

第203号住居跡（第127図）

位置 調査区の北部，C16d区。

重複関係 本跡は，北側部分を第838号，849号土坑に，中央部南東側の床を第863号土坑に，西側部分を第825号，854号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径7.42m，短径7.20mの円形である。

壁 西側から北側にかけて，部分的に土坑によって掘り込まれている。他は壁が巡っており，壁高20～25cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦である。主柱穴の内側がよく踏み固められている。

ピット 12か所。P₁は径38cmほどの円形で，深さ52cm，P₂は長径57cm，短径46cmの楕円形で，深さ69cm，P₃は長径53cm，短径52cmの不定形で，深さ67cm，P₄は径36cmの円形で，深さ48cm，P₅は長径60cm，短径52cmの楕円形で，深さ75cm，P₆は長径46cm，短径44cmの不整形円形で，深さ80cm，P₇は長径78cm，短径56cmの不整形楕円形で，深さ78cm。これらは，規模にややばらつきはあるが，配列から主柱穴と思われる。P₁₀は長径49cm，短径40cmの楕円形で，深さ32cm，P₁₁は長径46cm，短径40cmの楕円形で，深さ49cm。2本ともがに近接した位置にある。他は性格不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径98cm，短径66cmの楕円形で，中央部に深鉢形土器を埋め込んだ土器埋設炉である。炉床は埋設土器の周囲が赤く焼け，硬くなっている。

炉土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子中量，焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化粒子中量，焼土小ブロック・炭化物・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 炭化粒子中量，ローム粒子少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量，焼土粒子極少量
- 5 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量

覆土 14層からなる。ロームブロックを含んだ下層の覆土を人為的に埋め戻した後，土層1・13が流れ込んだと思われる。1と13は含有物により分層した。中央部は第863号土坑で，本跡より新しい掘り込みである。

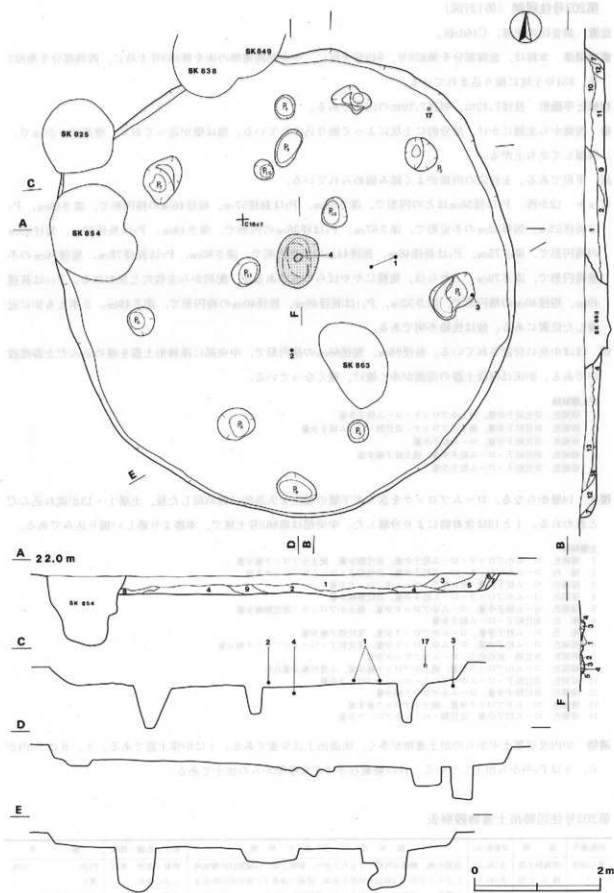
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量，焼土小ブロック極少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子・ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量，炭化物極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土小ブロック・炭化物極少量
- 6 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック少量，炭化粒子極少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック少量，炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 9 暗褐色 炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック中量，焼土小ブロック極少量，小骨片極少量含む
- 11 暗褐色 炭化粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 12 暗褐色 炭化粒子少量，ローム小ブロック極少量
- 13 暗褐色 ローム小ブロック中量，焼土小ブロック極少量
- 14 暗褐色 ローム粒子中量，炭化物・ローム中ブロック少量

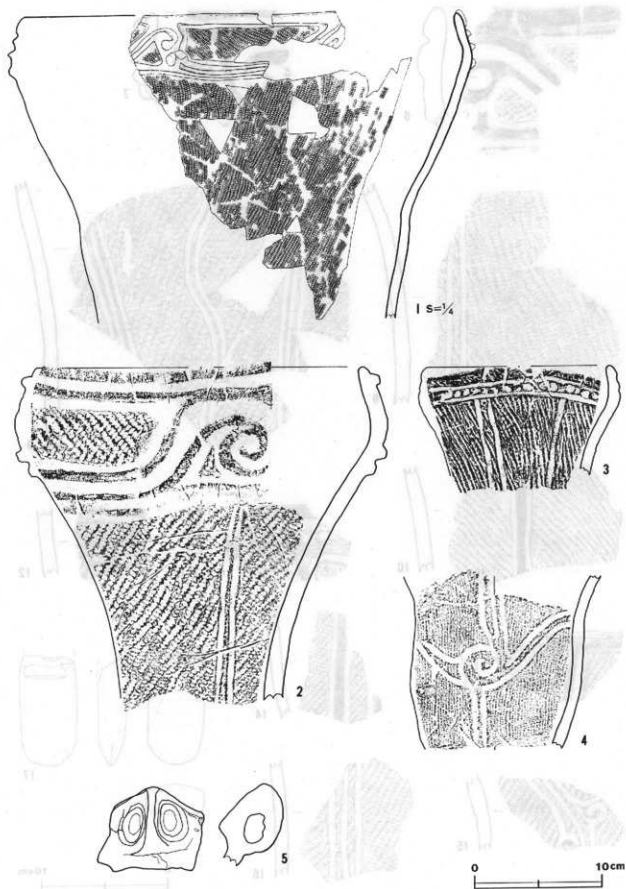
遺物 炉内及び覆土中からの出土遺物が多く，床面出土は少量である。4は炉体土器である。3，8はP₂内から，9はP₂内から出土している。17の磨製石斧は北東壁際からの出土である。

第203号住居跡出土遺物観察表

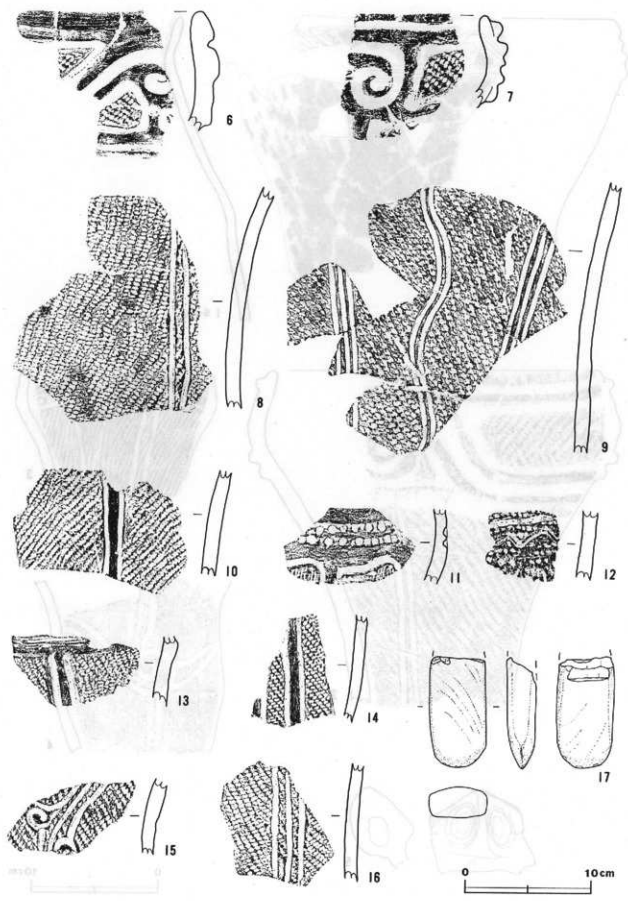
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図	深鉢形土器	A (45.0)	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，胴部上位，口縁部は内彎気味に立ち上がる。口縁部文様帯を流線，連続で渦巻文や楕円形の特殊文で構成し，区画内は単純縄文Lが横位回転で施文されている。胴部は縄文が縦位回転で施文されている。	砂粒・雲母・長石 普通	P116 50% 覆土 (加曽利EⅡ)
1	縄文土器	B (45.6)			



第127图 第203号住居跡実測図



第128图 第203号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第129图 第203号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	漆鉢形土器 縄文土器	A(26.0) B(26.3)	胴上縁から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。口縁部文様帯を沈線、隆線の渦巻文、杵状文で構成し、特内には単筋縄文R Lが横位回転で施文されている。胴部は単筋縄文R Lを縦位回転で施文した後、幅の狭い平行沈線が直線的に垂下している。	砂粒・灰石 にぶい褐色 普通	P117 40% 覆土 (加曾利E II)
3	漆鉢形土器 縄文土器	A(14.4) B(8.7)	小形土器の胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内彎する。口縁部外面に連続爪形文を施し、以下に2本の沈線が施文され、隙間に連続彫刻刺突文を施し、口縁部文様帯が構成されている。胴部は、渦巻縄文を横位回転で施文し、平行沈線、単沈線を直線的に垂下させている。胴部内面は磨きにより整形されている。	砂粒・灰石 褐色 普通	P118 5% P ₁ 内 (加曾利E II)
4	漆鉢形土器 縄文土器	B(13.7)	底部及び口縁部欠損。胴部は緩やかな「S」字状を焼き立ち上がる。胴部には縄巻縄文R Lが横位回転で施文され、2～3本の横沈線、縦沈線を曲線的に走らせ、連結部で渦巻文、刺突文のモチーフを焼き連続している。	砂粒・灰石・長石・ 石英 褐色 普通	P119 40% P ₁ 内 (大木8b)
5	把手 縄文土器	長さ(6.5)	口縁部に付けられた環状把手。把手頂部からは口縁部に近と想われる沈線が施されている。孔は沈線で縁取りされている。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P120 5% 南東部覆土 (中峰)

図版番号	器種	計測値			石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第129図17	磨製石斧	(9.8)	4.8	2.5	(168.7)	緑泥片岩 Q65 定角式 欠損品 北東部覆土

第129図6～16は縄文土器片の拓影図である。6、7は口縁部片で、隆線で渦巻文及び区画文を描き、区画に沿って沈線が施文され、区画内に縄文が施文されている。8～16は胴部片で、8、9、16は地文の単筋縄文の上に2～3本の平行沈線が垂下し、9には蛇行沈線も施されている。10、13、14は幅の狭い沈線区画の磨消帯が垂下されている。11は2段の横走沈線の中に円形の刺突文、以下に不定形の沈線区画が見られ、内部に渦巻文、12は半載竹管による直線及び蛇行する沈線が見られる。15は縄文地文の上に曲線的沈線が施され、連結部に渦巻文が施されている。

所見 本跡の時期は、縄文時代中期加曾利E I 期の土器も見られるが、主体となる遺物から縄文時代中期加曾利E II 期である。

第205号住居跡(第130図)

位置 調査区の北部、C16c区。

重複関係 本跡は、北西側部分を第872号、873号土坑に、東側部分を第877号土坑に、西側部分を第876号、900号土坑に掘り込まれている。

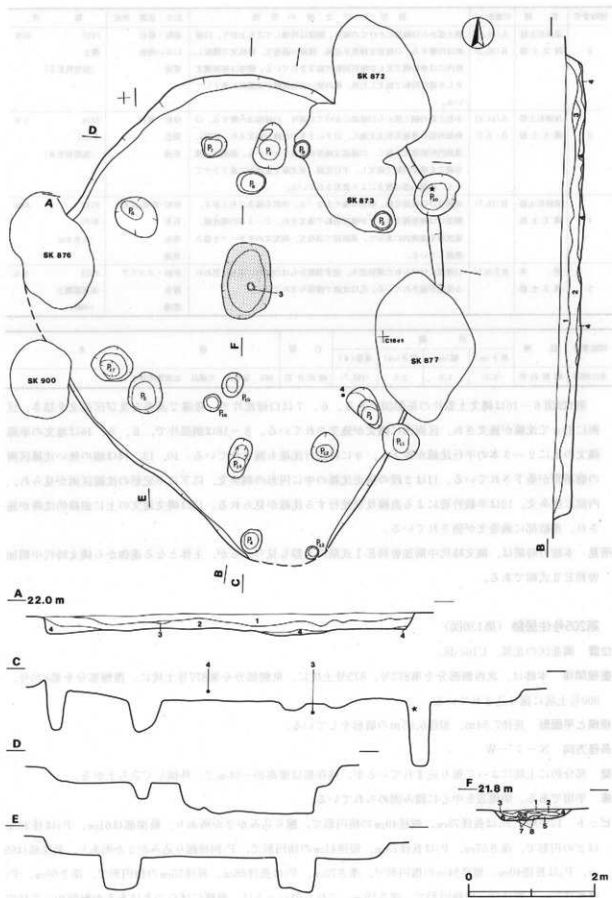
規模と平面形 長径7.54m、短径6.05mの扇形をしている。

長径方向 N-7°-W

壁 部分的に土坑によって掘り込まれているが、残存部は壁高20～24cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉周辺を中心に踏み固められている。

ピット 17か所。P₁は長径73cm、短径49cmの楕円形で、掘り込みが2か所あり、最深部は61cm、P₂は径30cmほどの円形で、深さ57cm、P₃は長径73cm、短径41cmの楕円形で、P₁同様掘り込みが2か所あり、最深部は69cm、P₄は長径40cm、短径34cmの楕円形で、深さ75cm、P₅は長径68cm、短径55cmの楕円形で、深さ60cm、P₆は長径73cm、短径58cmの楕円形で、深さ59cm。これらのピットは、規模にばらつきはあるが配列から主柱穴と思われる。他は、主柱穴の近くにあるピットは補助柱穴の可能性も考えられるが、性格は不明である。

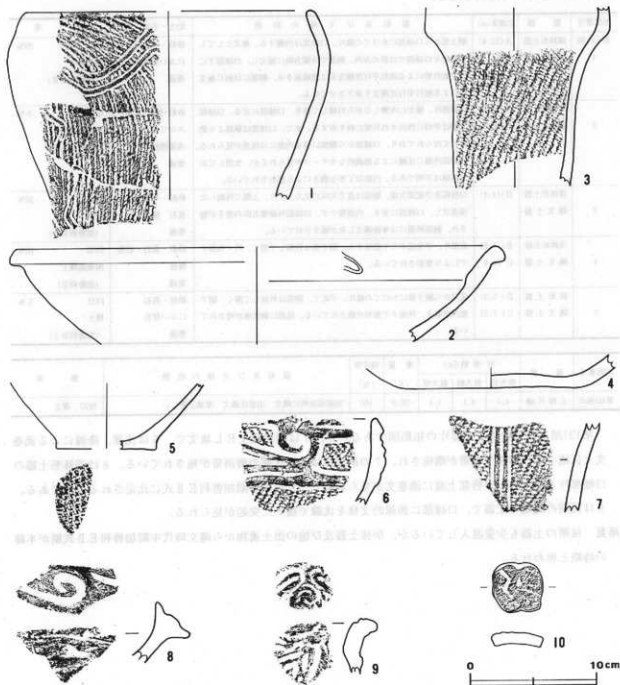


第130图 第205号住居跡実測图

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径121cm、短径78cm、床を16cmほど皿状に掘りくぼめて、中央部やや南側に深鉢形土器を埋設した土器埋設炉である。埋設土器の周囲は、如床が火熱で赤く焼け、硬くなっている。

伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック中量
- 2 赤褐色 焼土粒子多量、焼土中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子極少量
- 4 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 7 赤褐色 焼土粒子多量
- 8 暗赤褐色 炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子少量



第131図 第205号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 4層からなる。床面、壁際に2・4の褐色土が堆積した後、1の暗褐色土が全体を覆った自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 明褐色 ローム粒子多量

遺物 炉及び覆土中から遺物が出土している。3は炉体土器である。4は南東部覆土中から出土している。5、9は流れ込みと思われる。他にP10内から獣骨片が出土している。

第205号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第131図 1	深鉢形土器	A(22.4)	胴上部から口縁部にかけての破片。口縁部は内彎する。施文としてLの帯を口縁部では斜め方向、胴部では縦方向に施文し、口縁部下には半軟竹管による波状平行沈線文を2段横走させ、胴部には同じ施文具による蛇行平行沈線文を垂下させている。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P128 20% 東部覆土 (加曾利EⅡ)
	縄文土器	B(15.0)			
2	浅鉢形土器	A(30.0)	口縁部片。僅かに内彎しながら外傾して閉き、口縁部に至る。口縁部上端は平坦に作出され外傾に接を有する。また、口縁部は胴部より肥厚して作られており、口縁部から胴部に移る内面には段差が見られる。口縁部内面に沈線による曲線的なモチーフが見られるが、欠損しており詳細は不明である。内面は丁寧な磨きにより整形されている。	砂粒・長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P129 5% 北東部覆土 (加曾利EⅡ)
	縄文土器	B(10.0)			
3	深鉢形土器	B(14.4)	口唇部及び底部欠損。胴部は直立気味に立ち上がり、上部で外傾した後直立し、口縁部に至る。内面横ナデ、口縁部外面横方向の磨きが施され、胴部外面には単筋縄文LⅡが施文されている。	砂粒・バミス・長石 褐色 普通	P130 30% 伊内 (加曾利EⅡ)
	縄文土器				
4	浅鉢形土器	E(1.6) C 14.4	底部片。中央部がやや肥厚する。胴下部は外傾して開く。内・外面ナデにより整形されている。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P132 10% 南東部覆土 (加曾利E)
	縄文土器				
5	鉢形土器	B(5.3) C(7.3)	底部から胴下部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して開く。胴下部内面磨き、外面ナデ整形が施されている。底部に網代表が残されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P131 5% 覆土 (加曾利B2)
	縄文土器				

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第131図10	土器片 鉢	4.1	4.1	1.4	22.3	100	表面部分的に縄文 山形沈線文 摩滅が著しい	DP37 覆土

第131図6～9は縄文土器片の拓影図である。6、7は単筋縄文RⅡ地文で、6は沈線、隆線による渦巻文と区画文で口縁部文様が構成され、7の胴部片は沈線区画の磨消帯が施されている。8は浅鉢形土器の口縁部片と思われる、口唇部上端に渦巻文が見られる。これらは中期加曾利EⅡ式に比定される土器である。9は後期の範疇の土器で、口縁部に曲線的な文様を沈線で描いた突起が見られる。所見 後期の土器も少量混入しているが、炉体土器及び他の出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅡ式期が本跡の時期と思われる。

第208号住居跡 (第132図)

位置 調査区の東部, C16g区。

重複関係 本跡は、北側部分を第1147号土坑に、南側部分を第239号住居跡、第1068号土坑に掘り込まれている。また、本跡の西側部分で第210号住居跡、第1092号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長軸4.83m, 短軸4.52mの不整形形をしている。

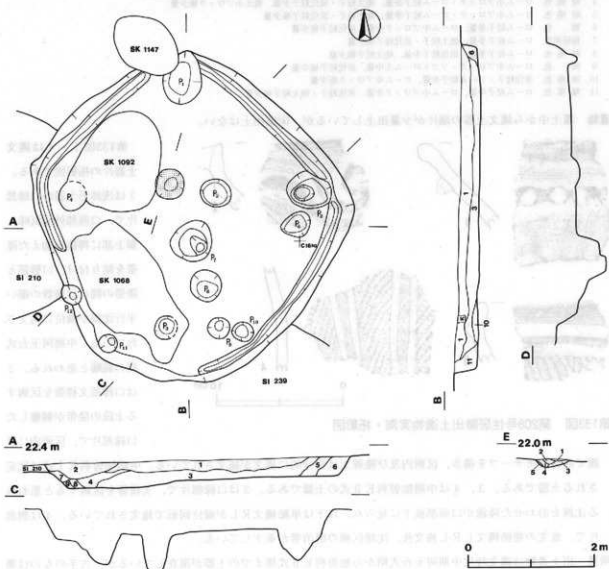
長軸方向 N-44°-W

壁 壁高28~41cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 北側コーナーと南西側を除いた壁下に見られ、上幅15~20cm, 下幅4~10cmで、断面は「U」字状をしている。

床 ほは平坦である。全体に踏み固められている。

ピット 12か所。P₁は長径85cm, 短径62cmの楕円形で、深さ74cm, P₂は長径70cm, 短径60cmの楕円形で、深さ52cm, P₃は径40cmの円形で、深さ53cm, P₄もP₃とほぼ同規模の円形のピット, P₅は径45cmほどの円形で、深さ60cm, これら5本は、いずれもコーナー部分にあり、形態は異なるが位置関係からP₁, P₂, P₄とP₃



第132図 第208号住居跡実測図

あるいはP₉のうちいずれかが主柱穴になると思われる。P₈、P₁₀は補助柱穴の可能性が考えられる。P₇は本跡のほぼ中央に位置し、径63cmほどの円形で、深さ53cm。P₈、P₉は床を、P₁₁、P₁₂は壁を掘り込んである円形のピットであるが、性格は不明である。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。径48cmのやや方形に近い不整形円形で、床を13cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱をうけ、硬くなっている。

伊土層解説

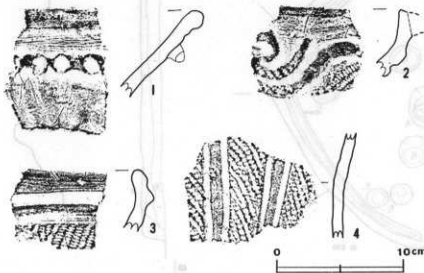
- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、焼土中ブロック・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗赤褐色 ローム小ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子極少量
- 3 暗赤褐色 ローム小ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子中量、焼土中ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子極少量

覆土 11層からなる。分層してあるが、1・2は同質の暗褐色土で、下層の3・4も同質である。住居廃絶後、壁際に6・9の褐色土が堆積した後、暗褐色土が流れ込んだ自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子・ローム中ブロック極少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 6 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック中量、炭化粒子極少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子極少量
- 9 褐色 ローム中ブロック・ソフトローム土中量、炭化粒子極少量
- 10 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子・焼土粒子極少量

遺物 覆土中から縄文土器の細片が少量出土しているが、床面出土はない。



第133図 第208号住居跡出土遺物実測・拓影図

第133図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は浅鉢形土器の口縁部片で、口唇部外反気味、胴上部に押捺を加えた隆帯を貼り付け、口唇部と隆帯の間には複数の細い平行沈線が横位に施文されている。中期阿玉台式期の範疇と思われる。2は口縁部文様帯を区画する上段の隆帯が斜織した口縁部片で、区内に隆

帯で曲線のモチーフを描き、区内及び隆線上は部分的に縄文が施文されている。中期加曾利EⅠ式に比定される土器である。3、4は中期加曾利EⅡ式の土器である。3は口縁部片で、文様帯を区画すると思われる沈線を沿わせた隆帯が口唇部直下に見られ、以下は単節縄文RⅠが縦位回転で施文されている。4は胴部片で、地文の複節縄文LⅠRⅠ施文後、沈線区画の磨消帯が垂下している。

所見 出土遺物は縄文時代中期阿玉台式期から加曾利EⅡ式期までの土器が混在しているが、古手のものは第1092号土坑との関連が考えられるので、本跡の時期は縄文時代中期加曾利EⅡ式期と思われる。

第210号住居跡 (第134図)

位置 調査区の東部, C16g区。

重複関係 本跡は, 東側部分を第208号住居跡に, 南西側部分を第940号土坑に掘り込まれている。本跡の中央部の床は第1061号土坑の上面に貼ってあり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 東側部分が掘り込まれ, 壁の立ち上がりは確認できなかったが, 長径(4.45)m, 短径3.28mの楕円形と推定される。

長径方向 N-68°-E

壁 東壁が掘り込まれて残存していないが, 他は壁高3~8cmで, 緩やかに外傾して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。僅かに踏み固められている。

炉 やや東寄りに付設されている。長径85cm, 短径73cmの楕円形で, 床を10cmほど皿状に掘りくぼめた床炉である。炉床は火熱を受けているが, 赤変はしていない。

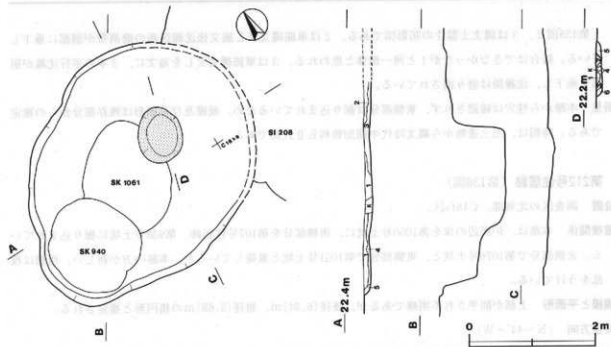
伊土層解説

- 1 にぶい褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム粒子・灰少量
- 2 黒褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量
- 3 にぶい赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック少量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土大ブロック・焼土中ブロック中量
- 5 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 6 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量

覆土 5層からなる。下層にロームブロックを含む褐色土を人為的に埋め戻した後, 上層にローム粒子を含む暗褐色土が流れ込んでいる。東側の覆土は第208号住居跡に掘り込まれ, 確認できなかった。

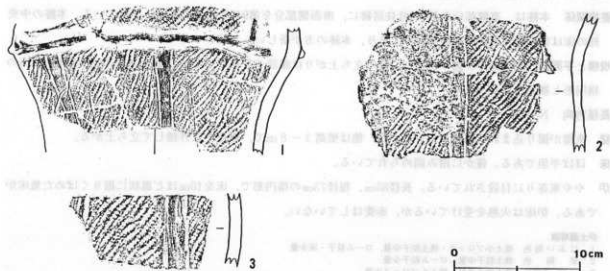
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子・ローム小ブロック少量, 焼土小ブロック・炭化粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量, 焼土小ブロック・焼土粒子極少量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子極少量
- 5 にぶい褐色 ローム中ブロック中量, 炭化粒子極少量



第134図 第210号住居跡実測図

遺物 炉及び覆土中から少量の遺物が出土している。1, 3は埴体土器で、2は埴の東端の上層から出土している。



第135図 第210号住居跡出土遺物実測・拓影図

第210号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	目録値(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第135図	深鉢形土器	B(10.2)	胴上部片。外傾した後内彎気味に立ち上がる。口縁部文様帯を隆起で区画するが、口縁部欠損のためモチーフは不明である。区画内には単節縄文R Lが施文されている。胴部には2本の浅い沈線を垂下させ、沈線間には磨り消されている。磨消帯間は単節縄文R Lが充満されている。	砂粒・長石 に白い橙色 普通	P136 25% 即内 (加曾利E II)

第135図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2は単節縄文R L施文後沈線区画の磨消帯が胴部に垂下している。接合はできなかつたが1と同一個体と思われる。3は単節縄文R Lを地文に、3本の平行沈線が胴部を垂下し、沈線間には磨り消されている。

所見 本跡から柱穴は確認されず、東側部分は掘り込まれているため、規模及び平面形は残存部分からの推定である。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利E II式期である。

第212号住居跡 (第136図)

位置 調査区の北東部, C16f区。

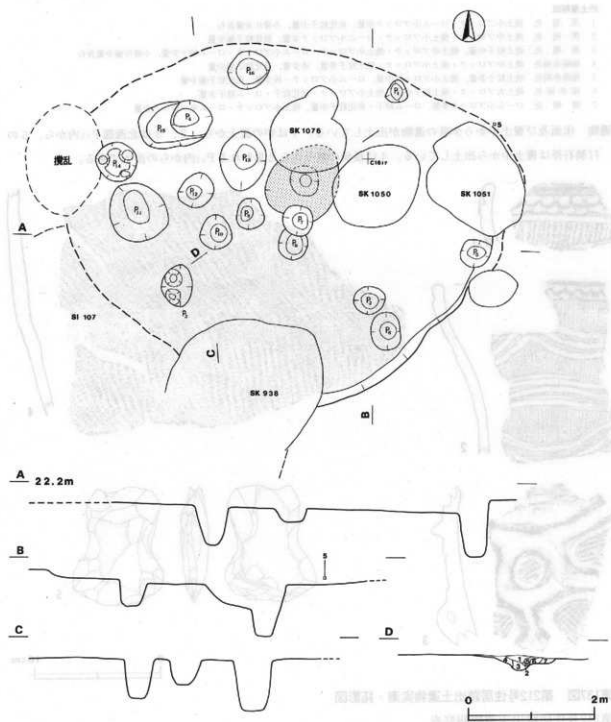
重複関係 本跡は、炉周辺の床を第1050号土坑に、南側部分を第107号住居跡、第938号土坑に掘り込まれている。北側部分で第1076号土坑と、東側部分で第1051号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。西側は攪乱をうけている。

規模と平面形 上部が削平され不明確であるが、長径[6.24]m、短径[5.68]mの楕円形と推定される。

長径方向 [N-44°-W]

壁 南東壁が残存しており、壁高10cmほどで、緩やかに外傾して立ち上がる。他は立ち上がり確認できなかった。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。



第136図 第212号住居跡実測図

ビツト 16カ所。P₁は長径36cm, 短径33cmの卵形で, 深さ39cm, P₂は長径51cm, 短径45cmの楕円形で, 深さ39cm, P₃は長径69cm, 短径48cmの楕円形で, 中に小ビツトを2カ所有する。北側が径30cmほどの円形で, 深さ52cm, 南側は径25cmほどの円形で, 深さ35cm, P₄は長径67cm, 短径59cmの楕円形で, 深さ80cm。これらのビツトは, 規模にばらつきはあるが, 配列から主柱穴と思われる。その他のビツトは性格不明である。

炉 中央部やや北寄りに付設されている。長径131cm, 短径109cmの楕円形と推定される地床炉である。炉は2段掘り込みになっており, 最深部は23cm。炉床は火熱を受けて赤く焼け, 硬化している。土層7は第1076号土坑の覆土である。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量, 小骨片少量含む
- 2 黒褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック少量, 炭化粒子極少量
- 3 黒褐色 焼土粒子中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量, 小骨片極少量含む
- 4 暗暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量, 灰少量, 炭化粒子極少量
- 5 暗暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック・灰少量, 炭化粒子極少量
- 6 暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土粒子中量, 焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子・炭化粒子中量, 焼土小ブロック・ローム中ブロック少量

遺物 床面及び覆土中から少量の遺物が出土している。1は炉の直上から, 2, 3は北西部P15内から, 5の打製石斧は覆土中から出土している。4は後世の掘り込みと思われるP12内からの出土である。



第137図 第212号住居跡出土遺物実測・拓影図

第212号住居跡出土遺物観察表

図版番号	部 種	計 測 値			石 質	備 考
		長さ(m)	幅(cm)	厚さ(cm)		
第137図5	打製石斧	(9.3)	7.3	2.3	(143.1)	砂 岩 Q73 分梨形 一部欠損 覆土

第137図1~4は縄文土器片の拓影図である。1は口縁部に2段の列点文を施し, 下段が先に施文されている。沈線を挟んで胴部に無節Rの縄文が施文されている。2は口縁部を渡る2段の沈線の中に列点文を施し, 胴部には地文に条線文を施文し, 連弧文が上下に配されている。3は胴部片で, 沈線で曲線的区画文が施され, 区画内に縄文を施文し, 区画外は丁寧な磨り消しで, 舌状の突起と橋状把手状の小突起が上下に見られる。いずれも中期加曾利EⅢ式並行で, 3は大木9式の影響が見られる。4は後期堀之内式の胴下部の

破片で、縄文地文で細い沈線が直線的に垂下している。

所見 本跡の上部は削平され、覆土の堆積状況は不明である。また、壁も部分的に残存しているだけで、規模及び平面形は床質及び主柱穴の配列からの推定である。縄文時代後期掘之内式期の土器が1点出土しているが、新しいピット状の掘り込みからの出土で本跡に伴うものではない。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EⅢ式期と思われる。

第213号住居跡 (第138図)

位置 調査区の東部、C16js区。

重複関係 本跡は、東側部分を第1091号土坑に、南西側部分を第1066号、1154号土坑に掘り込まれている。また、北西側から北側部分にかけて第1079号、952号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径5.64m、短径(4.78)mの楕円形と推定される。

長径方向 N-16°-W

壁 北東壁と南西壁が掘り込まれて確認できなかった部分があるが、他は壁高25~40cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。僅かに踏み固められている。

ピット 10か所。P₁は長径78cm、短径49cmの不整楕円形で、深さ40cm、P₂は長径78cm、短径70cmの楕円形で、深さ53cm、P₃は径46cmほどの円形で、深さ39cm。これらのピットは、規模及び形状にばらつきはあるが、位置関係から、主柱穴の可能性が考えられる。これらを主柱穴と仮定すると、位置的に第1154号土坑により主柱穴が1か所掘り込まれている可能性もある。P₇は炉を掘り込んでおり、後世の掘り込みである。P₁₀は南東壁を掘り込んでいる。P₃、P₅、P₆は性格不明である。

炉 はほぼ中央に付設されている。長径65cm、短径54cmの楕円形で、東側を石で囲んだ、石囲い炉である。掘り込みの際に覆土は削平され、火熱を受け硬化した炉床だけが確認できた。

覆土 5層からなる。土層1・2はP₇の覆土で本跡を掘り込んでいる。暗褐色土主体の自然堆積である。

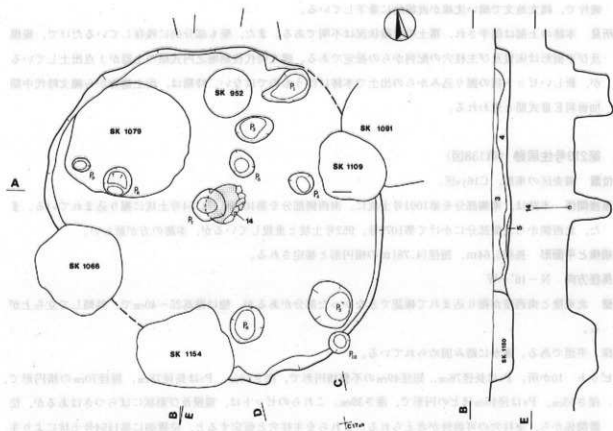
土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化物少量、小骨片極少量含む
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量、炭化物極少量
- 5 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック極少量

遺物 遺物は炉石を除いてすべて覆土中からの出土で、床面出土はない。14は石囲い炉に使用された石皿である。15の磨製石斧、17の独鈷石及び3点の獣骨片が覆土中から出土している。

第213号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計量値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第138図 1	浅鉢形土器 縄文土器	B (15.2)	大形の土器胴部片。胴下部は外傾して立ち上がり、上部で強く内彎する。口縁部と胴部の境に浅い沈線が通らされている。内・外面とも横方向の磨きで整形されている。	砂粒・長石 褐色 普通	F141 15% 覆土 (加曾利B2)
2	鉢形土器 縄文土器	A (28.5) B (8.7)	胴上部から口縁部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。横やかな波状口縁で、口縁部下に3段の沈線を通らし胴上部文様帯としている。上段の沈線間は狭く、下段は幅広い隆成をとり、区画内やや右下がりの浅い短沈線が施文され、波頂部及び波底部には「〇」状の沈線文を連続で縦方向に描き、文様帯が切斷されている。内面及び外面無文帯は横方向の磨きが施されている。	砂粒・長石・ スコリア にぶい褐色 普通	F142 10% 北西部覆土 (加曾利B2)



A 22.4m

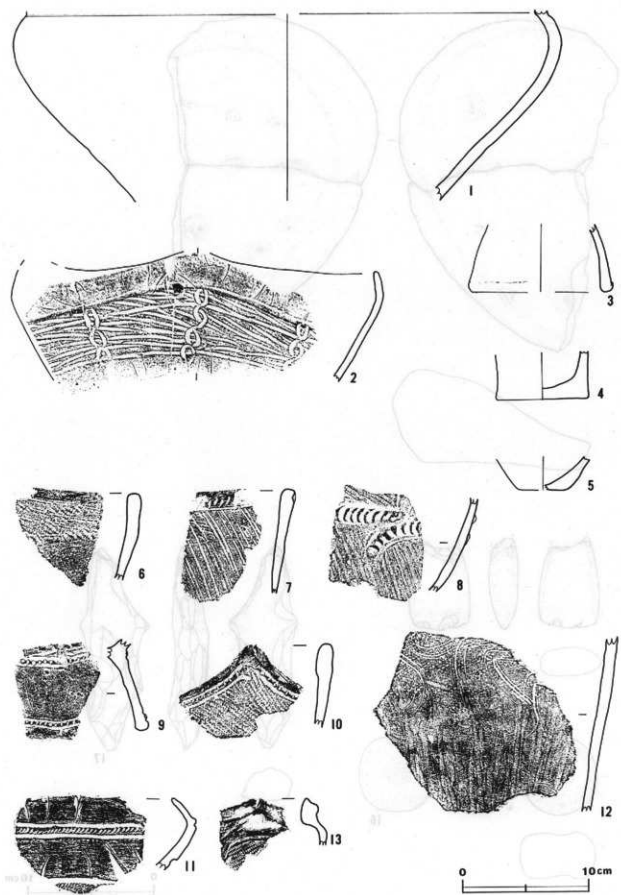
C

D

0 2m

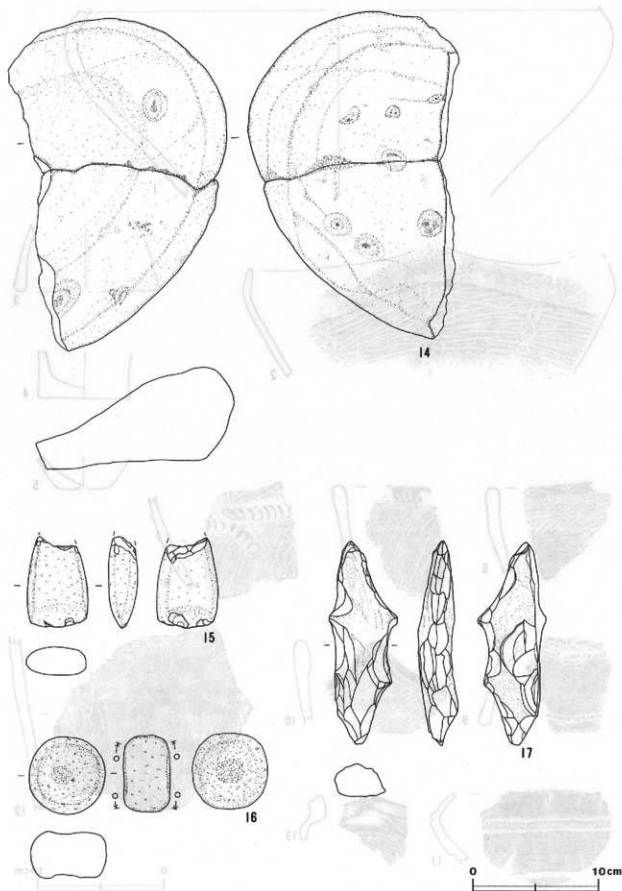
第138図 第213号住居跡実測図

図版番号	部 種	計測値(cm)	部 形 及 ビ 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第139図 3	台付土器	D(11.6)	台部片。断面は「八」字状で、底部には折り返し痕が残されている。	砂粒・長石・スコリア	P138 北西部覆土
	縄文土器	E(5.4)	作りは雄である。	にぶい棕色 普通	
4	深鉢形土器	B(3.8)	底部片。やや突出気味の平底。胴下部は直立気味に立ち上がる。胴部内面横方向のナデ、外面縦方向の磨きが施されている。底部は折り出して整形されている。	砂粒・雲母・長石 棕色 普通	P139 北西部覆土 (加曽利B)
	縄文土器	C(7.3)			
5	鉢形土器	B(2.7)	底部片。平底で、胴下部は外傾して開く。内面ナデ、外面縦方向の磨きが施されている。	砂粒・長石・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P140 覆土
	縄文土器	C(4.0)			



第139图 第213号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

三原集英館蔵出土資料部所蔵(1) 図29-17



第140图 第213号住居跡出土石製品実測图(2)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第140図14	石 皿	(26.5)	(17.2)	7.6	(2806.1)	安 山 岩	Q74 凹石家用 欠損品 炉内
15	磨製石芥	(7.2)	4.9	2.3	(120.7)	閃 緑 岩	Q75 定角式 一部欠損 覆土
16	磨 石	6.0	5.9	3.6	222.2	安 山 岩	Q76 凹石家用 覆土
17	板 鈔 石	16.1	5.2	2.6	242.0	おんツブミス	Q77 打製 覆土

第139図6～13は縄文土器片の拓影図である。6～9は後期安行I式に比定される土器である。6は波状口縁で、やや斜行する沈線を施文した上に部分的に縄文を施文している。7は粗製土器の口縁部片で、口縁部に沈線区画の刻文帯を巡らせ、以下は右下がりの条線が施文されている。8は粗製土器胴部片で、頭部に押捺気味の爪形文を加えた粘土紐が貼りつけられている。9は台部片で、上下に沈線区画の刺突文が巡らされている。10は後期加曾利B3式に比定される土器である。波状口縁で、口縁部外面に沈線区画の連続刺突文を施し、以下は縄文が施文されている。11も後期加曾利B2～3式の範疇の浅鉢形土器で、口縁部下の屈曲部に沈線区画の連続刻文、胴部下位の沈線以下に縄文が施文されている。12は後期壺之内式の土器で、胴下部に竹管による曲線的文様が描かれている。13は中期加曾利EIV式に比定される小形鉢形土器の波状を呈する口縁部片で、微隆起線により曲線的な文様が描かれ、隙間に縄文を施文し、頂頂部に小突起が設けられている。

所見 本跡は縄文時代後期壺之内式期～安行I式期までの土器が混在しており、中期加曾利EIV式期の土器も少量流れ込んでいる。時期の特定は困難であるが、縄文時代後期加曾利B式期～安行I式期が本跡時期の範疇であると思われる。

第215号住居跡 (第141図)

位置 調査区のやや東部、C16i区。

重複関係 本跡は、北側部分を第1136号、1056号土坑に、南側部分を第1055号、1057号及び1075号土坑に掘り込まれている。また、北側部分で第1117号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径(4.59)m、短径3.83mの楕円形と推定される。

長径方向 N-0°

壁 壁高10cmほどで、外傾して立ち上がる。北側と南側の壁は、土坑によって部分的に掘り込まれ、残存していない。

床 平坦である。全体に踏み固められている。

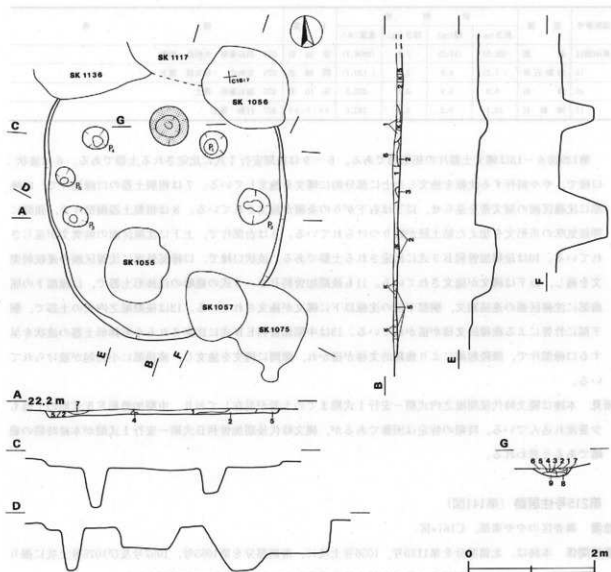
ピット 5か所。P₁は径45cmの円形で、深さ40cm、P₂は長径58cm、短径51cmのやや楕円形で、深さ52cm、P₃は長径41cm、短径34cmの楕円形で、深さ63cm、P₄は長径43cm、短径35cmの楕円形で、深さ62cm。これらのピットは、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₅は径30cmほどの円形で、補助柱穴と思われる。

炉 北側に寄って付設されている。長径65cm、短径62cmの円形で、床を14cmほど掘りくぼめた地床炉である。

炉床は硬化しているが、赤くはなっていない。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 | 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量 |
| 2 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 7 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 | 8 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、焼土小ブロック極少量 |
| 4 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子極少量 | 9 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・ローム小ブロック少量 |
| 5 黒褐色 炭化粒子少量、焼土小ブロック極少量 | |



第141図 第215号住居跡実測図

覆土 7層からなる。褐色土と黒褐色土が不自然に堆積しており、人為的に埋戻している。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------------|-------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子極少量 | 5 明褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子極少量 | 6 黒色 | ローム粒子極少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子・ローム粒子少量、炭化粒子極少量 | 7 褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 明褐色 | ローム粒子多量 | | |

遺物 覆土中から縄文土器片が少量出土しているが、細片がほとんどである。



第142図 第215号住居跡出土遺物実測・拓影図

第142図1～3は縄文土器片の拓影図である。1, 2は口縁部片で、沈線を沿わせた隆線で文様帯を区画し、内部には縄文が施文されている。3は胴部片で、沈線区画の磨消帯が単節縄文RL地文に垂下している。

所見 出土遺物はほとんどが縄文時代中期加曾利EⅡ式期から加曾利EⅢ式期のもので、本跡の時期もこの範囲であると思われる。

第216号住居跡 (第143図)

位置 調査区をやや東部、C16js区。

重複関係 本跡は、中央部を第1074号土坑に、南側部分を第1073号土坑に掘り込まれている。北西側部分で第1080号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径4.08m、短径3.48mの不整形楕円形である。

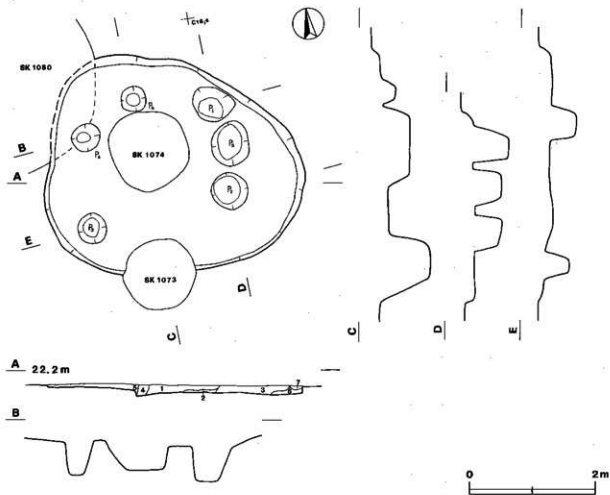
長径方向 N-77°-W

壁 壁高13-18cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。南壁の一部と北西壁の立ち上がりが確認できなかった。

床 西側の床が高く、東側に傾斜している。僅かに踏み固められている。

ピット 6か所。P₁は長径68cm、短径52cmの楕円形で、深さ57cm、P₂は径55-58cmの円形で、深さ42cm、P₃は径45-48cmの円形で、深さ43cm、P₄は長径48cm、短径41cmの楕円形で、深さ56cm。これらは、規模及び配列から支柱穴と考えられる。P₅、P₆は性格不明である。

覆土 7層からなる。土層1は第1074号土坑の覆土で、本跡を掘り込んでいる。土層3・5が主体を占めるが、ローム土を含んでおり人為堆積と思われる。



第143図 第216号住居跡実測図

土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子極少量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子極少量
- 4 褐色 ローム土の実
- 5 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 6 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

遺物 覆土中から縄文土器が少量出土している。2は中央部覆土中からの出土である。



第144図 第216号住居跡出土遺物実測・拓影図

第216号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第144図	器台形土器	E(3.4)	台部片。幅5.9cmの足が何単位か付くとと思われる。胴部と底面に磨き、	砂粒・スコリア	P143 5%
1	縄文土器		台部外面に縄文が施文されている。	褐色	南東部覆土
				青濁	

第144図2, 3は縄文土器片の拓影図である。2は浅鉢形土器の口縁部片で、口唇部上端に指頭による沈線と押塗が見られる。中期加曾利E式前半の時期と思われる。3は中期加曾利EⅢ式に比定される土器の胴部片で、単節縄文の上に幅広い磨消帯が垂下している。

所見 本跡の中央部は第1074号土坑に掘り込まれており、炉の有無は確認できなかった。遺物が少量で、時期も様々なため特定は困難である。

第217号住居跡 (第145図)

位置 調査区の北東部、C16ds区。

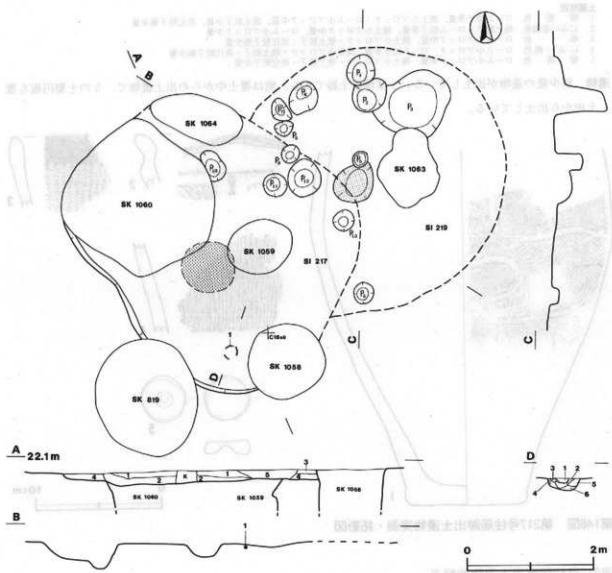
重複関係 本跡は、北側部分を第1064号土坑に、南側部分を第819号、1058号土坑に掘り込まれている。また、中央部分は第1059号土坑で、東側部分は第219号住居跡を、北西側部分は第1060号土坑を掘り込んでいる。規模と平面形 壁の立ち上がりを確認できなかった部分が多いが、長径[4.66]m、短径[3.70]mの不整楕円形と推定される。

長径方向 [N-36°-W]

壁 南東壁が部分的に残存しており、壁高6cmほどで、外傾して立ち上がる。他は立ち上がりが確認できなかった。

床 平坦である。僅かに踏み固められている。

ピット 5か所。P₉は長径32cm、短径26cmの楕円形で、深さ30cm、P₁₀は長径53cm、短径36cmの楕円形で、深さ44cm、P₁₁は長径41cm、短径35cmの楕円形で、深さ35cm、P₁₂は長径60cm、短径53cmの楕円形で、深さ26cm、P₁₃は径32cmの円形で、深さ20cm。これらのピットのうち、P₁₁は位置的に第219号住居跡のピットの可能性も考えられるが、他のピットは規模や配列に規則性がなく、性格については不明である。



第145図 第217・219号住居跡実測図

炉 中央部やや南西寄りに、長径84cm・短径80cmの円形の焼土の広がりが見られる。火熱で硬化した面は確認できなかったが、炉の可能性も考えられる。

埋設土器 本跡の南壁から、0.45mほど中央に寄った地点に埋設土器1が出土している。掘り方は径51cmほどの円形で、19cmほど掘り込まれている。出土状況は、正位で掘り方の底面から10cmほど上層に底部が設置されている。胴部から上半分は欠損しており、土器の中から遺物等は出土していない。

埋設土器土層解説

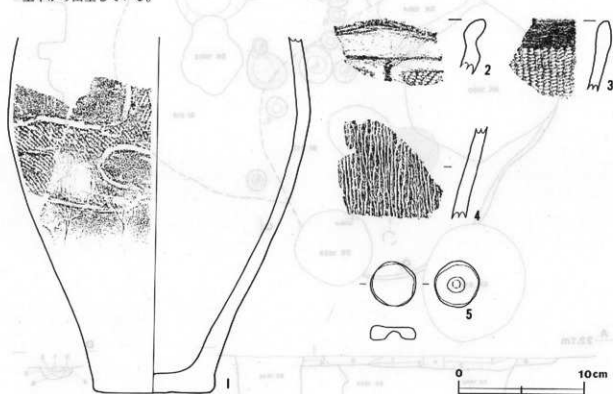
- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 3 褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 6 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

覆土 5層からなる。土層3・4は褐色土。中央部の1・2は焼土を多量に含むが、炭化材が出土していないため詳細は不明だが、住居廃絶後、中央部で火を焚いたか、あるいは消失家屋の可能性も否定できない。堆積状況については、明確な判断は難しい。なお、5は後世の掘り込みと思われる。

土層解説

- 1 暗 紺 色 ローム粒子多量、焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子極少量
 2 にぶい赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量、焼土小ブロック中量、ローム小ブロック少量
 3 暗 色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
 4 にぶい褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子極少量
 5 暗 紺 色 ローム小ブロック多量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

遺物 極少量の遺物が出土している。1は埋設土器である。他は覆土中からの出土遺物で、5の土製円板も覆土中から出土している。



第146図 第217号住居跡出土遺物実測・拓影図

第217号住居跡出土遺物観察表

区画番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼度	備考
第146区	深鉢形土器	B (28.3)	胴上部から口縁部欠損。底部は僅かに突出気味の平底。胴部は外傾して立ち上がり、胴中位で内彎する。胴中位は曲線の文様が沈線で横に展開され、区画内は単節縄文RLが充填されている。胴下部は無文でナゲ壺形が施されている。	砂粒 にぶい褐色 青濁	P144 由東部床下 (大木9)
1	縄文土器	C 9.6			

区画番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第146区	土製円板	3.7	3.6	1.1	14.1	100	表面に微隆起線裏面に未貫穿孔	DP38 覆土

第146図2～4は縄文土器片の拓影図である。2は波状を呈する口縁部片で、無文の口縁部下に微隆起線による文様が描かれている。胴部には単節縄文RLが施文されている。3も口縁部片で、無文の口縁部と胴部縄文の境に僅かに微隆起線が見られる。4は胴部片で、燃承文が施文されている。
 所見 本跡は、西側の壁の立ち上がりがはっきりととらえられず、支柱穴も判別できなかった。本跡の規模と平面形は、東側の床が第219号住居跡の床より僅かに低くなっている点と、床質より推定している。時期は、出土遺物から縄文時代中期加曾利EIV式期である。

第219号住居跡（第145図）

位置 調査区の北東部，C16d区。

重複関係 本跡は，西側部分を第217号住居跡に掘り込まれている。また，中央部で第1063号土坑と，西側部分で第1059号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形 南北の径は〔4.20〕mと推定されるが，西側が掘り込まれており，平面形及び東西の径は不明である。

床 平坦である。僅かに踏み固められている。

ピット 8か所。P₁～P₃は本跡の北側に位置し，3本が接している。P₁は径46cmほどの円形で，深さ13cm，P₂は径55cmの円形で，深さ86cm，P₃は長径120cm，短径95cmの不定形で，深さ20cm，P₄は径33cmほどの円形で，深さ19cm，南寄りに位置する。P₅～P₈は北西側に位置し，P₅は長径32cm，短径24cmの楕円形で，深さ28cm，P₆は長径41cm，短径25cmの楕円形で，深さ46cm，P₇は長径53cm，短径44cmの楕円形で，深さ110cm，P₈は径26cmの円形で，深さ38cm，炉を掘り抜いている。いずれのピットも規模や配列に規則性がなく，性格は不明である。第217号住居跡内のP₁₁も位置的に本跡に伴うピットである可能性も考えられる。

炉 本跡のほぼ中央に付設されていると思われる。長径73cm，短径60cmの楕円形の地床炉である。第217号住居跡の東端の床下より確認されている。断面は緩やかな「U」字をしており，炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

遺物 本跡から遺物は出土していない。

所見 本跡は，西側部分が第217号住居跡に掘り込まれて残存せず，上部の覆土が薄いため覆土の堆積状況及び東側の壁の立ち上がりもとらえられなかった。床質から東側部分を推定した。出土遺物がなく，時期は第217号住居跡との重複関係からの推定で，縄文時代中期加曾利EⅣ式期以前である。

第218号住居跡（第147図）

位置 調査区の東部，C17g区。

重複関係 本跡は，北側部分で第233号住居跡と，中央部東側部分で第1098号土坑と，南側部分で第232号住居跡，第1124号土坑と，西側部分で第1146号土坑と重複しているが，本跡の方が新しい。

規模と平面形 平面形は明瞭でないが，長径〔5.61〕m，短径〔4.76〕mの楕円形と推定される。

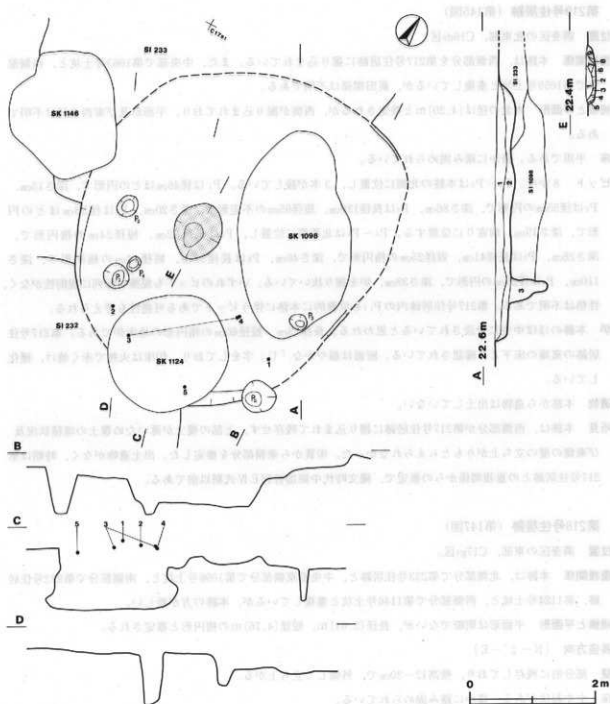
長径方向〔N-2'-E〕

壁 部分的に残存しており，壁高12～20cmで，外傾して立ち上がる。

床 やや起伏がある。僅かに踏み固められている。

ピット 5か所。P₁は長径48cm，短径40cmの楕円形で，深さ76cm，P₂は長径39cm，短径28cmの楕円形で，深さ38cm，P₃は長径32cm，短径26cmの楕円形で，深さ64cm，P₄は長径25cm，短径20cmの楕円形で，深さ74cm。P₁，P₂，P₄は南西部に，P₃は東部に位置している。P₅は南東壁を掘り抜いている。配列に規則性がなく，性格は不明である。

炉 中央部やや南西寄りに付設されている。長径94cm，短径77cmで，床を16cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床は火熱で赤く焼け，硬化している。

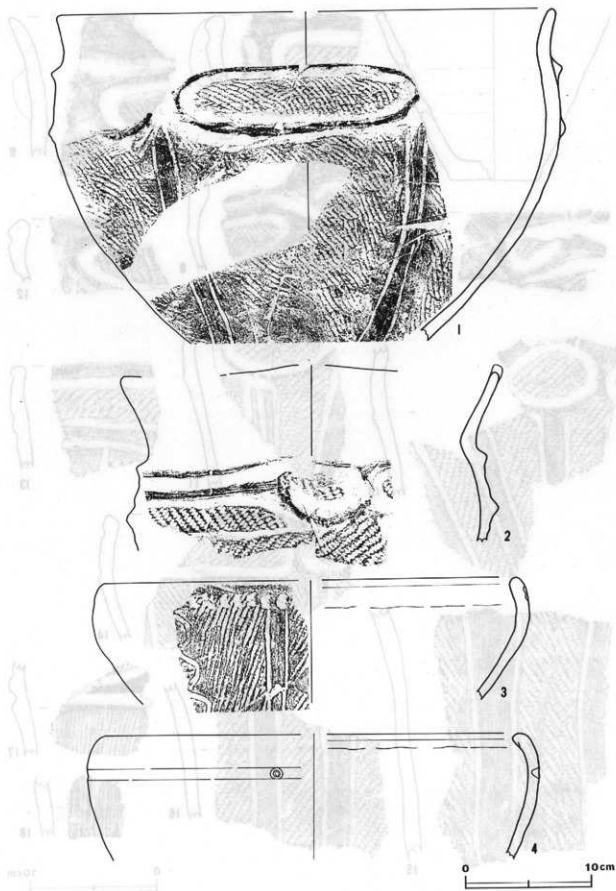


第147図 第218号住居跡実測図

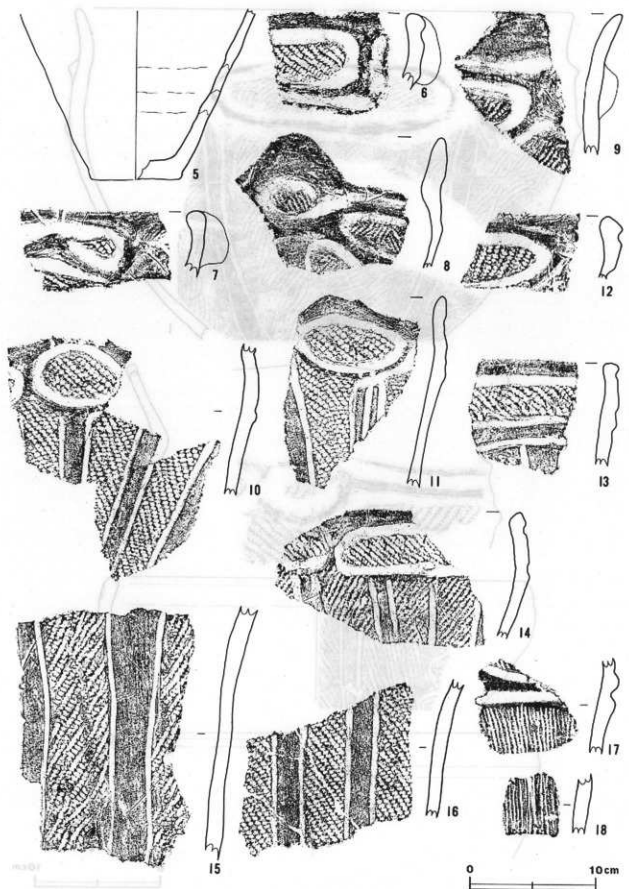
伊土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 焼土大ブロック多量、焼土中ブロック・焼土小ブロック中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化小ブロック少量、ローム粒子極少量
- 4 暗褐色 焼土小ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子多量、焼土小ブロック中量、炭化粒子・ローム小ブロック極少量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 8 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、ローム中ブロック極少量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

覆土 3層からなる。土層3はP₃の覆土である。2が流れ込んだ後、1が上部を覆う自然堆積である。



第148图 第218号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)



第149图 第218号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)